

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■



1975・3

奇譚クラブ



1975・3



THE KITAN CLUB

Published Monthly by
Akatsuki Shuppan
Osaka Japan

3

¥600

定価六〇〇円

3
A
M

瞠目のサディズム小説の
総集篇、決定版
全一冊正、続篇総収録

昭和37年8月号より連載を開始
博し続けた月連載の小説「花と竜」を
には奇く8カ年間に亘る集積をこ
に堂々八百三十有余部が多大冊
ありて完成しました。この「残部が多少
作を未見の方には、紙資源枯渇の
お求め下さる大冊を手で売切ら
困難と思われ、御注文願います
ならぬうち、御注文願います」

第7473727170696867666553525150494847464544434241403938373635343332313029282726
有产

美優女熱肉ニお新甘桔華淫珍地惡羞愛低激生交小深人清蓋あ対華汚す淫落惡逃屈惡飼
 女雅盛気体ニくし美末なきし雲下魔恥弟脳しれ性夜窓身純取國こ時々水さら花鬼走の野育さ
 となりを帯悪フキないななきしを室たち屈を男か色子の御な絵いすまにまに美無の恐の悪
 と野馬の帯悪フキないななきしを室たち屈を男か色子の御な絵いすまにまに美無の恐の悪
 獣馬妖に魔ニ汚牲問責し代陳汚辱映日笑本辱令合タス師の少の嫌の展昇陪美美いシの修忍と凶
 の斗人美に魅ニイすににめし劇辱辱令教夫スの教女令の屈開美女れたシの調羅不失絵
 争の肉マせの泣来え結末展し夫人本令結訓京調べ
 崩体競る鯛育る
 壊演る

定價一〇〇〇円

辻村 隆
塚本 鉄三

柔肌に喰ひ込む麻紐(前田真知子)
グラビティに喰ひ込む女体緊縛の華(シラケニール)
金髪打眼の美女(関谷富佐子)
管打眼の痛苦曲(関谷富佐子)
魚甲縛の美肌(左近麻里津子)
貴細縛の白肌(照花河恵子)
沖細縛の白肌(座間明子)
刺き玉の白裸縛(佐々木真弓)
狂毛の白人縛(川路むら子)
紅老の白人縛(シラケニール)
海老の白人縛(川路むら子)
鞭打ちの白人縛(関谷富佐子)
難妻の白人縛(座間明子)
非情の白人縛(金原加奈子)
処女縛の白人縛(中河恵子)
麻紐縛の白人縛(三浦純子)
盗視するSの白人縛(中河恵子)
緊縛するSの白人縛(佐々木真弓)
両手縛の白人縛(川路むら子)
柱縛の白人縛(長井葉津子)
後手縛の白人縛(中河恵子)
鞭の法に喰ひ込む(佐々木真弓)
柱縛の法に喰ひ込む(関谷富佐子)
花と蛇の白人縛(渡部好美)
針責の白人縛(長井葉津子)
二つ折の白人縛(中河恵子)
日本縛の白人縛(シラケニール)
マゾの女に喰ひ込む(関谷富佐子)
柱縛に喰ひ込む(金原加奈子)

夫婦ブレイの艶姿（渡部好美）
豊満なノインを誇る（愛川悦子）
美女が今も縛られる（梨花悠紀子）
折檻の目にも汚れる（前田真知子）
責めの目もある（絹川文代）
猫の目もある（中河恵子）
足吊りの媚態（中河恵子）
M女二輪の花（渡部好美）
開股縛りの幻想（前田真知子）
鏡の前での放恣（前田真知子）
愉悅のひとつとき（川路真知子）
ハリツケ晒し（左近麻里子）
美しき吊り責め（関谷富佐子）
苦痛か又悦楽か（関谷富佐子）
一筋の縄の魔術（中河恵子）
逆エビの縛り入る（三浦純子）
愛撫の羞恥（渡部好美）
責めの羞恥（前田真知子）
黒髪と白肌（中河恵子）
身動きと白肌（中河恵子）
ポリウムを縛る（座間明子）
浮上りの縄（金原加子）
汚辱の縄（中河恵子）
高小手（金原加子）
責めの陶酔（川路真知子）
失神の彼方（関谷富佐子）
荒縄の海老貴（中河恵子）
なすれ狼（三浦純子）
はがす目の天女（梨花悠紀子）
美と縛りの女神（前田真知子）
海老縛りの妙味（川路真知子）

……その他多数……

◎御注文は映出版株式会社へ前金にて、お申込み願います。

本誌愛読の女性の方々へ

○本誌創刊以來二十数年、多くの女性愛読者の数多々の告白の投稿やモデルの応募によつて、献誌としての純粋な金文字塔を打ち立ててまいりました。眞摯で研究熱心な本誌読者の方々の期待にこたへて、写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか御遠慮なく勇気を出して御応募下さるようお願いいたします。し

○本誌愛読の女性の方で、お待ちたちら、国籍、未婚の別、年齢など一切問いませんから、遠近に拘らずお申込み願ひます。採用させて頂きたい方には、謝礼金としてお払い致します。以上拾万円までは、即金にてお払い致します。

○応募された方々の個人的な秘密の漏洩は、御本人の許しがない限り絶対致しません。故、御安心の上、御応募の絶対秘密の故、お書き下さった方は、別に原稿料、告白文を提出下さった方には、謝礼を併せて、お支払を致します。尚、お申込みの節、お好みの傾向などを出来るだけ詳しくお書き添え下さい。幸甚に存じます。

○撮影いたしました写真は、誌上掲載を原則としておりましたが、若し御都合によつて発表を望まれな場合は、その旨添記下さい。改訂と打ち合ひの出演、若しと思ひます。助手や介添えとしての出演、若しと思ひます。資料作成したいと思ひます。その際の報酬は、改めて個々に御相談にのりたいと思ひます。

○御応募に際しては、年齢、職業、身長、体重などは必ずお書き添え願ひます。写真があれば同封下さい。好都合ですが、お手元に適当なものがなければ結構です。

。申込先。大阪市住吉区大領町四の六八
晩出版株式会社 編集部

▽賞金△

一、本誌は昭和二十二年創刊以来、終始同じ奇蹟クラブという題号のもとに発行を続け、ここに三百号の多きを数えるに至りしもの多き間、風俗雑誌のイオニアとしての幾多の辛酸を具に嘗めながら、読者の皆様の温かい御支援によつて、二十数年の厳しい星霜をよく耐えて今日に至りました。

一、本誌は異色ある風俗文藝誌として生長してまいりましたが、今まで読者の方々の投稿による数多くの傑作や力作が春の花のように咲き乱れ、S.M.文藝誌と参りました。この三百年の刊行を記念されて、更に一層の内容の充実に清新化を計りたく、皆様の作品に期待して、原稿募集を企画しました。

一、内容は本誌に発表するものでも結構ですが、例を挙げれば、サイエンスにも関連したもの、各種マゾヒズムに関連したもの、同性愛、切腹嗜好、種々、女斗美、女相撲、変装、生首狂、崇拝、妖嬈、見世物、変態、風俗、奇聞珍奇、異色風俗、特異風俗、習俗紹介、アブノーマル、テクニクなど、古今東西を問わず異色文藝に属するものを取り上げて下さい。

▽内 容△

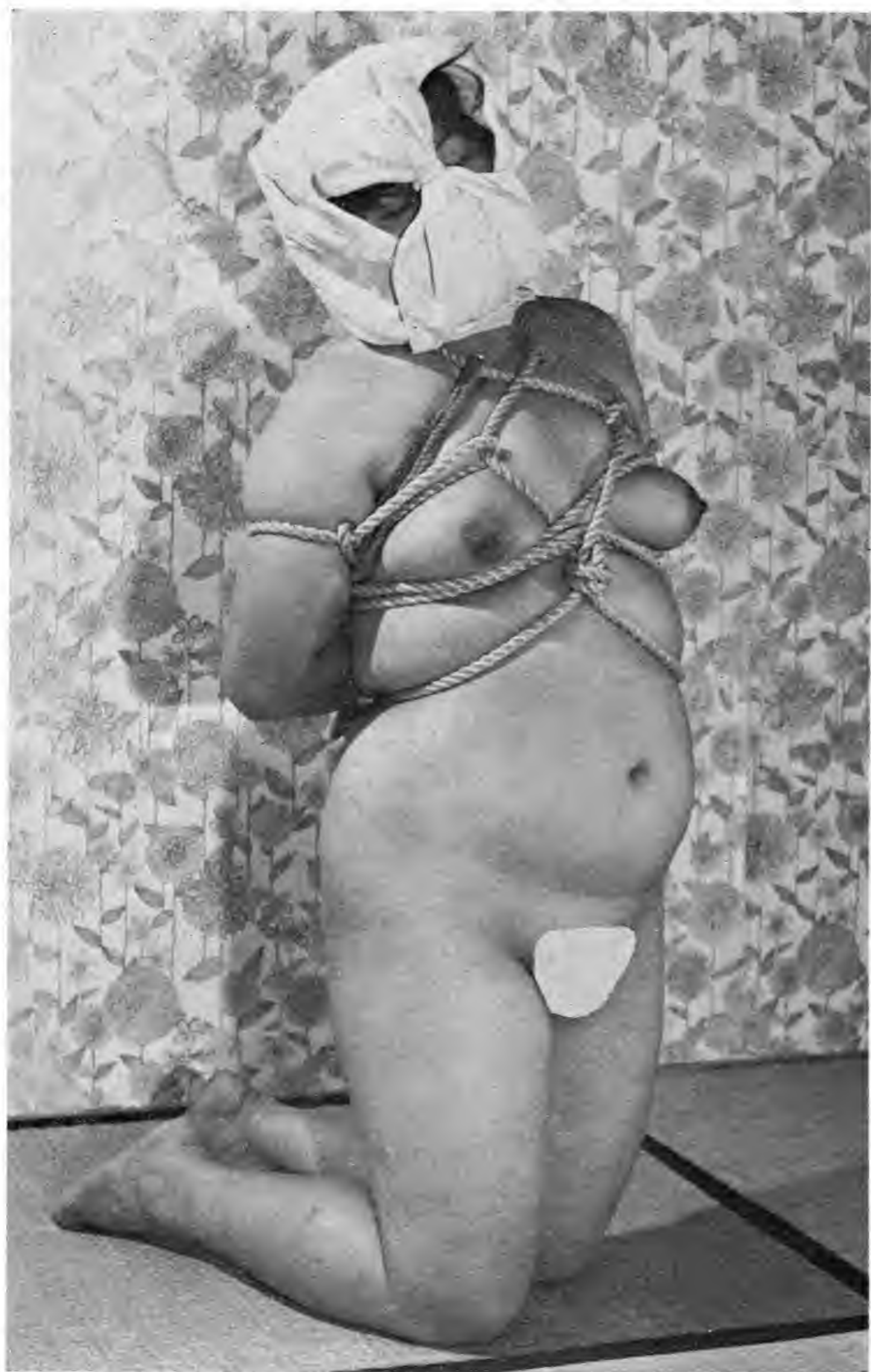
入選作品 第一席	二十萬円	1 篇
入選作品 第二席	十萬円	1 篇
入選作品 第三席	五萬円	3 篇
入選作品 第四席	三萬円	5 篇
入選作品 第五席	二萬円	10 篇
佳作優秀作品	一萬円	15 篇
選外佳作作品	五千円	10 篇

一、形式は、小説、創作、読物などのフ

[illegible]

『感じるうゝ娘の白豚教育』

塚本鉄三・撮影



オシメカバーの覆面

△山口艶子▽

昭和五十年

三月号目次

〔第二十九卷 第三号〕
〔通刊第三百二十五号〕

フォト「華麗なものの中の哀愁」

△モデル・長野良子▽……………林 繁三……………(29)

「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△山口艶子の巻▽

『ク感じるウク娘の白豚教育』……………塚本 鉄三……………(30)

論評 さるぐつわ (5)……………新川 裕夫……………(68)

手記 あるS・Mアベックの報告と呼びかけ……………紫 四季……………(77)

連載・時代S小説『紫蘭の門』……………風流極道軒……………(82)

論稿 女相撲ノート (3)……………雄松比良彦……………(96)

手記 真知子がたどったMへの軌跡……………長谷田亀治……………(100)

M小説 牝犬城の虜……………水江 伸……………(108)

手記 悩ましいゴム合羽……………梅川 幸子……………(115)

連載小説『大 噴 火』……………千葉 青鬼……………(120)

緊縛撮影記 由紀の敏感な部分……………柚 真男……………(128)

まりこのメモ セックス・ドレイ心得帖……………北川まりこ……………(140)

連載・M派交友録『カジノの女王』……………鬼山 絢策……………(150)

紀代よりの便り 縛りと浣腸に憧れた私……………西条 紀代……………(166)

マゾヒスチック・ストーリー 甘美な罌……………森本 愛造……………(170)

読者通信……………編集部……………(260)



「椅子に向う羞恥」堀貴代子☆「豊かな足指の表情」猪吊りの女体・吊られてゆく美女」前田真知子☆「開脚縛りに呻く白豚・ケモノスタイルの待機・白豚の荷造り」山口艶子☆「足挙げ羞恥責め」高村浩子☆「股間縛り猿ぐつわ」矢島靖子☆「M女の責められ様」渡部好美☆「衆人環視の辱かしさ」三浦純子☆「柔肌の条痕」玉木章子

感じるうゝ娘の白豚教育（塚本鉄三・撮影）

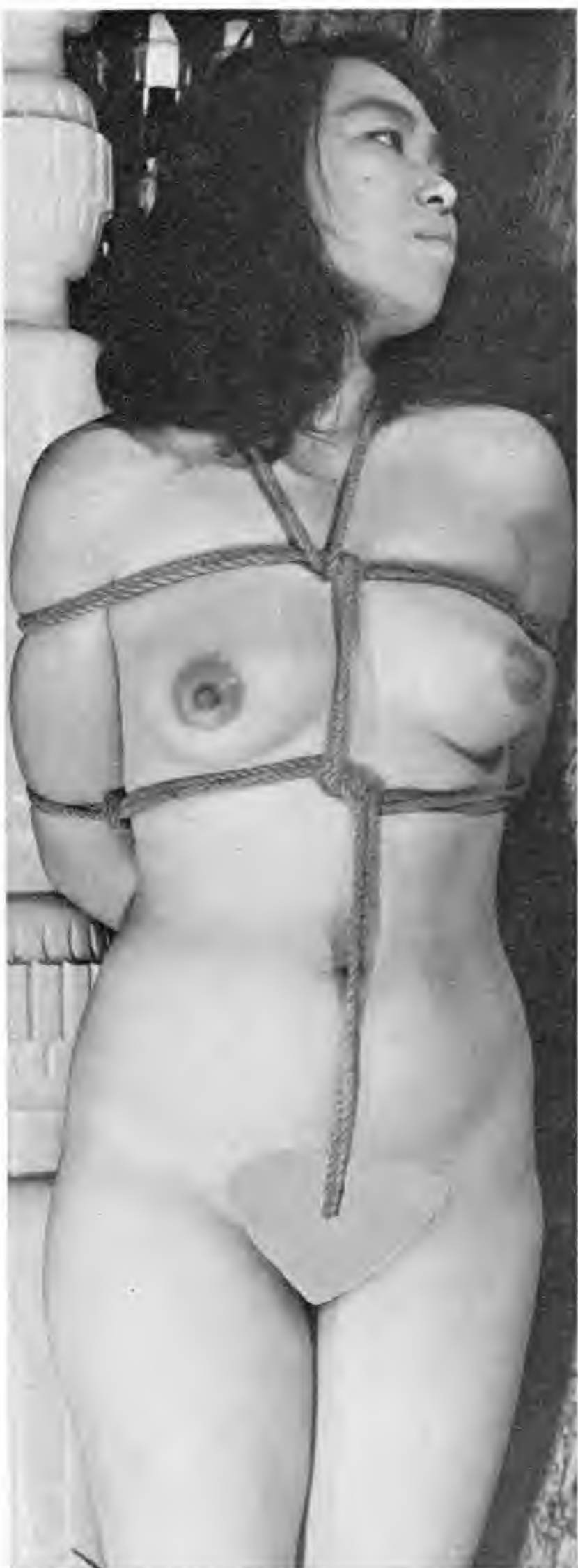
「オシメカバーの覆面・ケモノへのいたぶり・白豚艶子水筆責め・ケモノをセメテ・乳枷乳房責め」山口艶子☆「開脚の強制」高村浩子☆「身にしむ縄の味」笠井奈保子☆「典雅な縛り・衆目に晒す裸身」前田真知子☆「蛙腹を晒して」木戸悦子☆「縄に恋した女・白肌と麻ロープ」中河恵子☆「烙印・畜生」の羞恥」渡部好美☆「磔の陶酔・座敷からの転落」松本たえ☆「ムチ打ちに耐える表情」関谷富佐子☆「イルリ浣腸の果て」長井葉津子☆「諦観のひととき」座間明子

目次フォト

深田 菊子・左近麻里子

イメージギャラリー

「槍で突くのは後にして・恥辱の窓」水江伸☆「玉座にはべる、光栄の敷物」岡たかし☆「課長サンはお馬がお好き・女王様のお遊び・味はいかが、重ね餅・昼はOL、夜は女王様、アッ君は秘書のS子サン・お前にはやらないよッ」春日田春夫



奇 ク サ ロ ン

(184)

奇ク愛読十年目の感想……奇本英寿夫
「モデルになりたい」私の願い……浜田 紀子
M女通信に魅せられて……中島鎖奴治
郷愁と憧憬の谷山久美子……ヘン・佐藤
SMの写真を写してみたい……奇齊 一瞬
夢幻の世界に遊ぶ心持……山本 五郎
覗きの醍醐味……山川 澄夫
正當な「奇ク」の評価……平井 守
青木順一氏に逢うの記……弾 六夫
最近の浣腸雑感……竹迫 誠也
肥満女性にいじめられた男……笠間 飲男
鼻苛めについて佐藤様へ……大橋美代子
お腰に憑かれた私……赤井 尾越
Tさんとの出合……望月百合子
千恵子の四穴猥姦攻め……甲斐千恵子
愛の証しの緊縛……久保田 栄
浣腸ブレイ・私のSM妄想記……山本加寿男
代理妻、みさ子の近況……佐藤みさ子
腰巻きを締めた女……月丘 沙織
刺環の魅力について……山本 武男
妊婦児玉昌子の想い出……瀬戸内 勇
美しい客の鼻……木村 四郎

女性のオシッコについて……橘 内男
希みー女にとって……島崎 麻耶
畜生奴郁子とのSM生活……早坂 信治
光本洋子さんへこんなの如何？……水江 伸
SMプレブッショナル論……大月吐志夫
山部俊子さんに……窪田 旭
よく見ればナズナ花咲く垣根……林 繁三
「振袖花嫁」衣裳責め……高橋 英樹
「縛り」と「アヌス」に関心……森田 美子
学生時代の物語……毛利 雪男
妻の妊娠……藤浦 与吉
撮影被虐への願い……小杉 千恵
S研主催カクテルパーティの夢……塚本 鉄三
私は浣腸マニアです……美和島 実
M男風流夢譚へんなたわごと……須蛸 良夫
グラビア写真についての感想……嵐 竜児
妻を「S研」の祭壇に……木場 利之
被虐の映像(5)……高原 三佳
鏡台の中の被虐日記……藤田 明子
運命のM女・平川泉子様……門守 貧婪
道代との浣腸ブレイのこと……名古屋 誠
続・跨がる女性……上田 光一



開脚の強制

＜高村浩子＞

ケモノへのいたぶり

＜山口艶子＞





身にしむ縄の味

〈笠井奈保子〉



典雅な縛り

＜前田真知子＞



白豚艶子水筆責め

＜山口 艶子＞



ケモノをセメテ

＜山口 艶子＞

蛙腹を晒して



〈木戸悦子〉



縄に恋した女

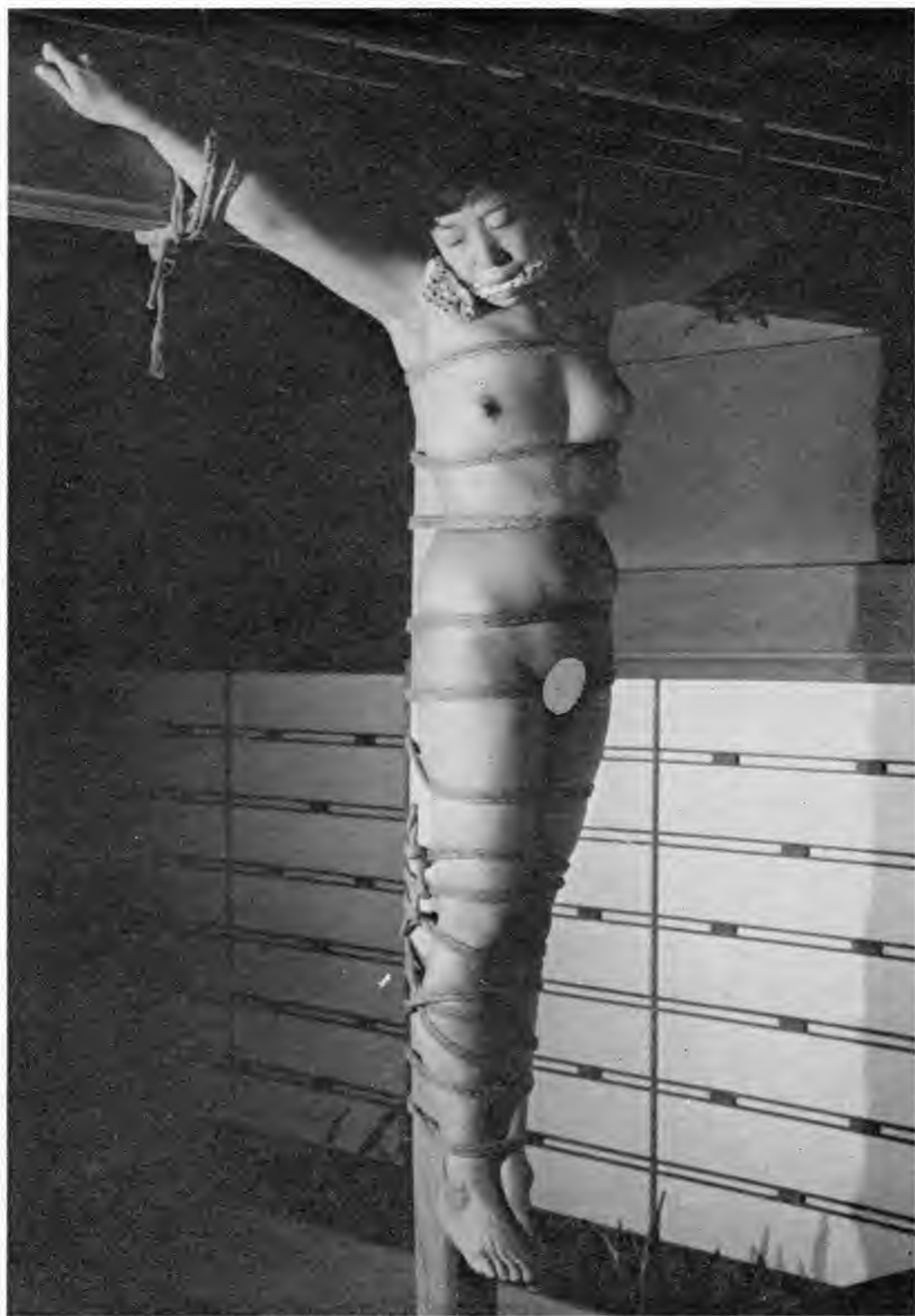
＜中河恵子＞



烙印「畜生」の羞恥

＜渡部好美＞





酔 陶 の 磔

＜松 本 た え＞



乳枷乳房責め

△山口艶子▽

座敷からの転落

△松本たえ▽



白肌と麻ロープ

＜中河恵子＞



衆目に晒す裸身

△前田真知子▽

ムチ打ちに耐える表情

△関谷富佐子▽

イルリ浣腸の果て

△長井葉津子▽





ときとひとの観諦

＜座間明子＞

















奇

譚

ク

ラ

ブ

1975

3月号

<第29巻第3号・通刊第325号>

華麗なものの中の哀愁

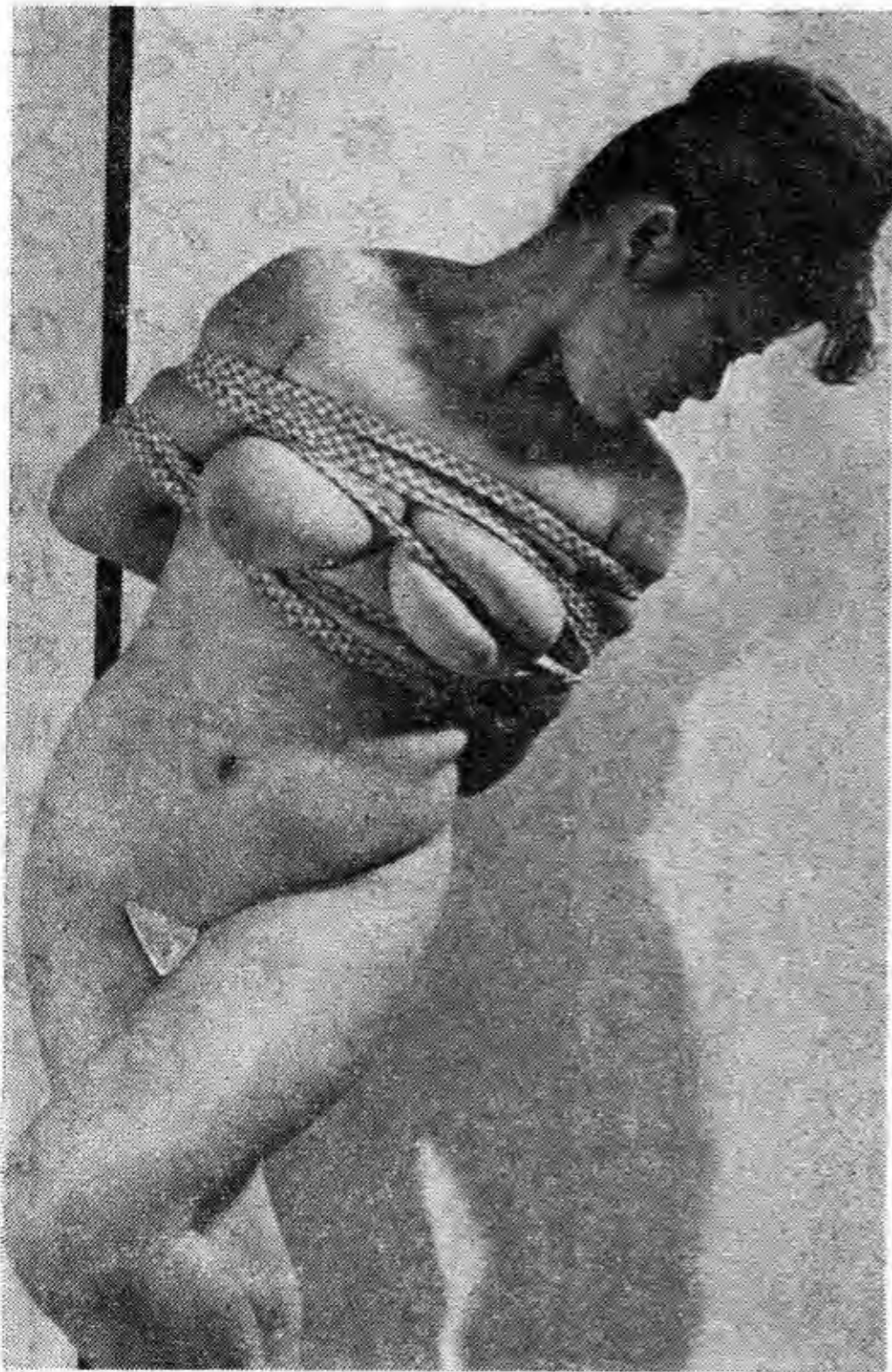
……モデル……長野 良子……

この世の中にマゾ女なんて、そうザラに
 るもんか、と嘆く人もいるし、又、女なんか
 一寸積極的に出さえすれば、簡単に縛らせる
 もんだよ、と嘯く人もいる。その、いずれも
 が、一応、正鵠を得ていると、私は思う。

女性の、あの、たおやかな肢体の中に、強
 靱なマゾ精神が、どのようにして、巣喰って
 いるか、私は知らないが、やはり、男性にと

っては、謎多き憧れの女性が、時に依っては
 無条件で身体を投げだして、縛らせてくれる
 ものだという夢を持ちたいものだ。

男性というものは、そうした他愛もない伝
 説的な夢を、いついつ迄も持ち続けているも
 のなのだ。そして、奇クにカメラ・ルポが載
 っているのを見て、なんとはなしに、私はホ
 ツとするのである。(林繁三・記)



「カメラ」と「ペン」のS M ルポルタージュ 感じるうゝ娘の白豚教育

△晩秋の明日香路を訪ねて▽

〓古都奈良〓斑鳩の里〓での一夜〓

塚^{つか} 本^{もと} 鉄^{てつ} 三^{ぞう}

山口艶子の縄を弾きかえさんばかりに張りきった女体を念頭に思い浮かべると、私は忽ちにして、全身に漲る精気を覚えた。縄に対しての、緊縛に対しての、あの異常なばかりに激しい彼女の反応を考えると、私は彼女の肉体のなかに、とつぷりと没入している自分を戦慄的に追体験せざるを得なかった。山口艶子こそ、無限の体力とスタミナを以て男の心と体を完全に狂わしてしまう典型的なM女なのだ。この動物的なM女は、男のS心を誘惑、挑発した挙句、その精気という精気を吸い取ってしまう妖姫なのだ。

☆

「ブルーデイの休日」で、大阪を訪れた山口艶子が、別れ際に、「十月下旬か十一月上旬に奈良を訪ねたいと思いますので、その節はよろしく、お願いします」と言い残して帰っていったのは九月六日のことだった。

それから二十日ほどして、九月下旬に彼女から久々に便りがきた。

「十一月三日、四日の連休を利用して行きたいのですが、都合はどうですか。切符を準備しなければならぬので折返し、お返事下さ



い」という要旨だったが、折悪く、その両日私は他に既に予定を組んでいた。

その夜、私は早速、彼女に電話した。そして、結局、十一月二十三、二十四日の連休の日に、きめたのだった。

☆

十一月二十三日。勤労感謝の日。

この日は、日本海側で気圧の谷が通過するというので、余り芳しい気象の予報ではなかった。雲が多くて下り坂の天気で晩くには雨になるということだった。

山口艶子からの、その後の連絡では、京都駅午前六時四十三分着の急行「きたぐに」で行くから、迎えにきてほしいということだったので、私は朝五時に起床した。

寒くはないが、まだ外は真っ暗だった。

冷たい牛乳二本、生卵二個、大きな林檎一個を平らげてから、チーズを肴に生野菜をポリポリ食べると、それで朝食は終りである。起きてから車のエンジンをかけるまで、三十分とは、かからなかった。

名神高速道路は連休の初日であるためか、朝っぱらから車が多い。暗闇の中をライトの光芒をふりまきながら上りも下りも、やたらと多い車が疾走している。

午前六時、まだ真っ暗だ。

十五分あたりから、東の空が、ほんのりと薄ネズミ色に明るくなってきた。

京都南インターチェンジから一般道路へと出る。一昨日、二十一日に、アメリカのフォード大統領が京都を訪れたときは、この辺は警戒厳重で、京都入りする車輛は厳しい一斉検問を受けたということだが、大統領が昨十二日に韓国へ向けて出発してからは、今朝

は嘘のような静けさである。

東寺の前に来た頃は、あたりは徐々に明るくなった。しかし、雲は厚くて陽がさす気配は、さらさらない。

京都駅前に着く。朝が早いので、駐車場はガラガラだ。人影もまばら。外へ出ると、さすがに、冷んやりとした寒気が迫ってくる。

駅の構内へ足を踏み入れてから程なく、ざわざわという人々の会話と足音の入り混じっ



た雑音と共に、その一団の中に山口艶子の大柄な姿が見えた。ローヒールの靴を穿いて、裾長のスカートを、蹴るようにして活発に、手にした紙袋を大きく振りながら、近づいてきた。

「私、おトイレに行ってくる……」

彼女は、私の顔を見るなり、「お早よう」とも言わずに、紙袋とハンドバッグを私に手渡して、あたふたと走りだした。

そのさまが、まるで幼稚園の子供のように無邪気なので、思わず苦笑させられた。

私は彼女を待っている間、売店で朝刊の見出しだけを見ていた。フォード大統領の京都での二条城、金閣寺の観光の記事、それに、金脈問題で辞任する田中首相のことが、大きく報道されていた。

駅前から曉闇をついて、竹田街道へ入る。

伏見、烏羽、深草と過ぎて、国道24号線を奈良へ向って車を走らせた。

いつもは饒舌な彼女なのだが、今日は、ひっそりと膝の上に地図や旅行案内書を拡げて一心に見ているのである。

「どうしたの？ 夜行で疲れたの？」

私は、やさしく声をかけた。

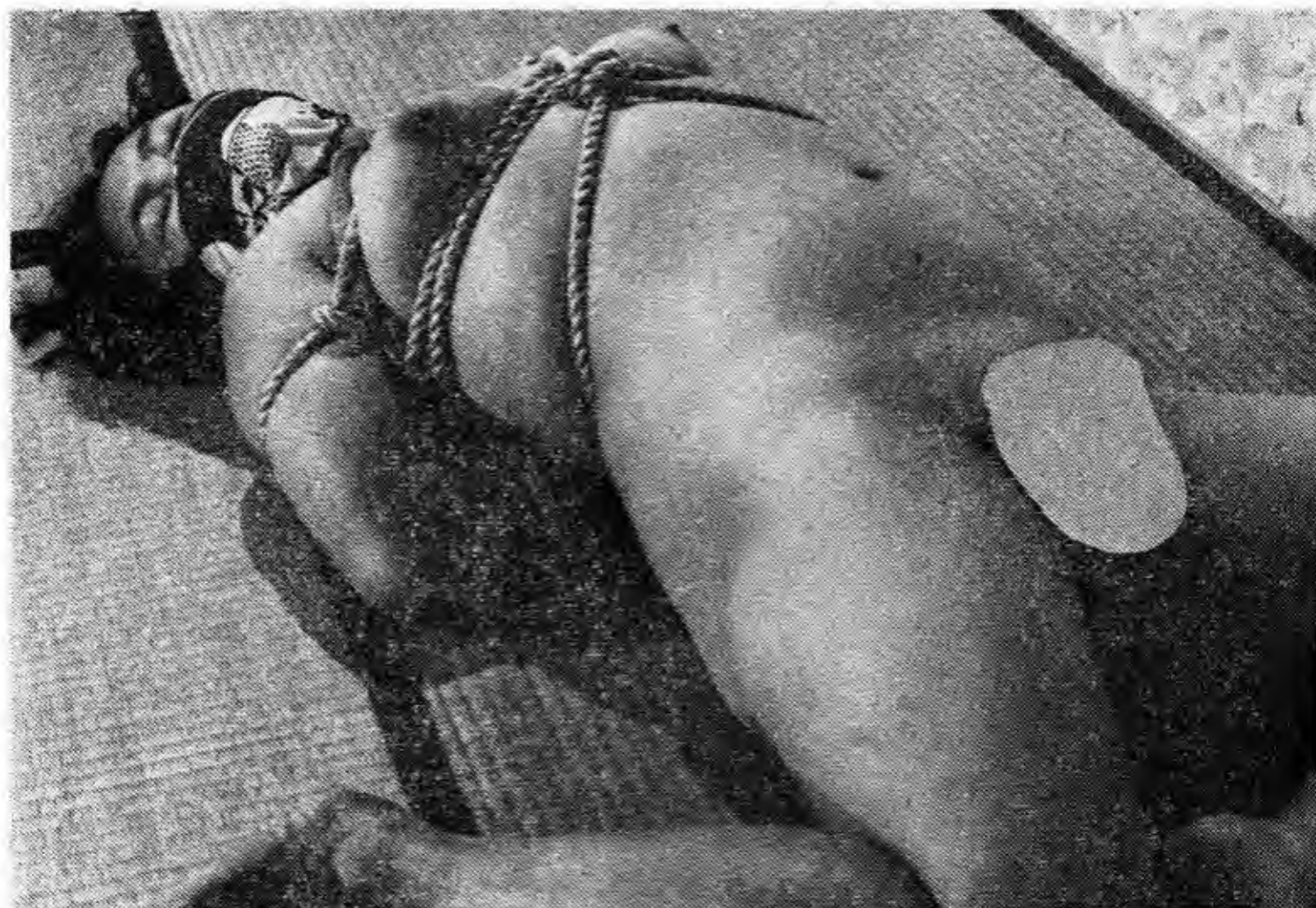
二度に亘る激しいSMプレイを通じて、彼

女の身体の隅々まで知ったばかりか、前後を忘れた狂態までを見てしまった私は、わざわざ数百キロの彼方からやってきた彼女に対して、一入いとしさが増してくるのであった。

「いいえそうじゃないのよ。私、これから行く奈良って、生まれて初めてでしょ。だから、どんなところかと思っずっと考えていたのよ。あらそうそう。電車の中で一緒になった人、九州へ行くとか言ってたわ。凄い荷物なの。私ね、奈良へ行くのだって、言ったら、奈良の話、してくれただわ。それがおかしいのよ。三十年前に行ったんだって。私まだ生まれていないじゃないの。ウフフフ、そんな昔のときの話、参考になって？」

彼女は早口で喋って腹を抱えて笑った。

全く屈托のない娘だ。





彼女の話は、それから、次から次へと際限なく続いた。

会社のこと、家のこと。そして、昨夜からの夜行列車の中でのこと。しかし、やはり、なんと言っても、これから向う「咲く花の匂

うがごとく」と謳われた千年の昔の都、奈良のことを思うと、胸が弾むらしかった。

盛んに地図や案内書を私に示して、説明を求めるのだが、制限時速ギリギリの高速運転をしている私に、そちらへ視線を向ける余裕

はない。彼女の言っているところを総合すると、『春の坂道』で有名になった柳生の里へ、行けたら行きたい。そして、どうしても行きたいのが、大仏の東大寺と、法隆寺、飛鳥の石舞台から談山神社ということのようだった。

そこで私は言った。

「一カ所重点主義で行くんだったら、法隆寺だけでもたっぷり一日はかかってしまふ。ただ、奈良へ始めて来たのだから、出来る限り沢山、見るだけ見たいと言うんなら、まだ、その他に若草山から猿沢池、春日大社、薬師寺に唐招提寺と回ってあげてもいいよ。ガソ

リンは60リットル満タンにしてきたし、更に20リットルの補助タンクを積んできたから、奈良近辺を走りまくってもいいんだぜ」

「だったら、柳生へ連れてって欲しいワ」

「うん、柳生か、それもいいナ。あそこは春の坂道ブームのときは、何万人も押しかけてひどかったそうだが、今は静かだろうなあ。それはそうと、艶子は奇譚クラブは毎号読みたいけれど、自分のことが載った雑誌だけは買わないって言ってたが、十二月号と一月号は読んだの？」

「いいや、見ていませんわ」

「なんだ、そうかい。僕は見てると思った。

艶子のことを、カメラ・ルポで詳しく写真入りで載せているんだよ」

「そうなの。私、怖くて、見たくないわ」

「雑誌は持って来なかったが、印画紙に焼付けた写真は、少しばかり持ってきたから、あとで見せてあげよう」

「いやいや、見せないで、見せないで……」

私が口で言うだけで、彼女はかぶりを振って、イヤイヤをする。

「もう、そんな話はしないで……。私、あのときのこと思い出しても、何故、自分が、あんなになったのかと、怖気おそけふるってるの。昼



の間は、そんな話、一切しないで頂戴」

「ふんふん、そうかい。それだったら、夜まで、お預けて、いうわけだナ」

「ええ、そうして頂けたら助かるわ。その代り、私、夜になったら、思いっきり、燃えるわ。今は、そのこと、忘れたいの」

「よし、わかったわかった。だったら、春の坂道から、行くとするか」

宇治川を越すと、担々とした奈良街道が、京都から奈良へ向けて通じている。古来、幾多の軍勢が往来した重要な街道である。

朝が早いので車の数は少ない。うす陽が、ときたま射す程度で雲は依然として厚い。

木津川の堤防の上へ出て視界が急に左右に一度にひらけて、見晴しがよくなった。「これが木津川だよ」

私は片手をハンドルから放して指さす。

彼女は伸び上って蛇のようにうねる川の流れてを眺めてから、手元の地図に目をやる。

「もうすぐ、橋があるわね」

「うん、その橋を渡らずに、川に沿って左へ曲るんだ。そうしたら、後醍醐天皇の行在所のあった笠置^{かささぎ}へ行けるんだ。笠置から柳生までは、もう、すぐだからね」

木津川に沿った断崖、溪流岩を噛んで、景觀は、すこぶる良い。快適な川沿いのドライブウェイだ。紅葉して美しい桜並木のトンネルの中を通過する。柳生の里を一渡り見てから、とって返して奈良市内へ入る。

般若寺の荒廃した寺の中の石仏も見たかったが、そこはあっさり通過して、若草山ドライブウェイを通過して、十国峠展望台にきた。

奈良平野が一望のもとに見下ろすことが出来た。紅葉している桜、檜や櫟の雑木の林が美しかった。樺か漆か、真っ赤に色づいた樹の葉が混じっているのが目もさめるようだ。

若草山の山頂までは歩いて行かねばならないが、時間が惜しいので奥山周遊道路の原生林の中を走って春日大社の前へ出る。

そこから、東大寺の大仏殿、ここは歩いて行かないと駄目だ。鹿の前に立っている山口

艶子のスナップを、彼女のカメラで撮ってやる。連休の初日だから、ようやく、見物人も人影を増してきた。

「あの、正倉院は、どう行ったら、いいんですか？」

雑誌の地図を手に、一人旅の若いスラックス姿の女性が近づいてきた。正倉院——今は御物の拝観はさせていないが、と思ったが、道順だけ丁寧に教えてやる。

二月堂、三月堂を見てから、猿沢池の前へ車を回し、ここで興福寺の塔を背景に、池の水面と柳の木を入れて彼女の上半身だけをスナップで撮ってやる。といっても彼女の持っているコニカC35であるが——。

転害門から佐保路へ入った。というのは、奈良公園の方は、漸く人出が多くなってきたからだ。西進して関西本線の踏切を二度越すと、目の前に不退寺があった。

静寂で人影もなかった。寺の前に車を三台ぐらい置けるスペースがある。



古墳の石を手水鉢にして、鎌などを砥いだという跡が珍しくて眺めていると、上品な婦人が出てきて、お茶を出してくれた。

「一寸、お待ち下さい」と言うので、何のことか分からないが幅の狭い濡れ縁に腰を下して庭を眺めていると、服装を改めた住職が出てきた。「さあ、どうぞ」と、案内されたの

が、重要文化財とかいう本堂だ。「在原業平の、なんとか、かんとか」長々と説明が続いたが、私には、一向に覚えることは出来なかった。

それよりも私は一つの妄想に耽っていた。この前、若い女と二人で、古寺の本堂を訪れたときのことだ。その女は、板の間へ上るのに、ストッキングをするすると薄皮を剥ぐように脱いだ。真っ白い素足で、数百年を経て黒光りする板の上を、ペタペタと歩いていった。

うす暗い本堂の中で、彼女の白い足だけが輝くように鮮やかに浮んでいた。

私は、それを見て欲情した。金ピカの御本尊の仏様の前だったが、私は、その女を、その場で犯したいと思った。

ペタペタペタ。

女の白い素足が黒光りする板の間を静かに歩いている。

「どうぞ、ごゆっくり……」

私が、ぼんやりと物思いに耽っているので、余程の研究家と

見たのか、住職はひとわたり説明し終ると、私たち二人を本堂に置いて出ていってしまった。

うす陽がさしている外は明るく、本堂の中は、鼻を摘まれてもわからぬくらい暗い。△在原業平か。うーん、彼は当代随一のプレイボーイだったからナ▽

ここには座布団もある。彼だったら、多分怒らないだろうなあ——と不遜なことを考えながら、本堂の外へ出る。

さっきの婦人に、「拝観料は？」と尋ねると、「お志だけで結構です」と言うので、五百円札一枚を渡して車上の人となる。

ついでなので、法華寺、西大寺、秋篠寺と回ったら、思ったより時間が経ってしまった、朝が早かったので空腹を覚えてきた。

荒池に臨んだレストラン菊水の駐車場へ車を乗り入れた。池を隔てて目の前に奈良ホテルの立派な建物が樹立の中に見える。屋根の



両端の鶏尾^{しび}が、折柄さしてきた陽に映えて、きらきらと光っている。

「あれが奈良ホテルだよ。なかなか立派な建物だろう。あの鶏尾が奇麗だね」

「ほんと、奈良って、素晴らしいわ。私が本を読んで考えていたイメージと、すっかり交っていて、こう、なんだか、夢みたい……」

「今はね、晩秋だから、そう感ずるんじゃないのかな。秋は、しっとりと落着いて一番よい気候だものね。午後は、ずっと南の方、多武峰から飛鳥へ行ってみようかね。奈良公園なんかよりは、うんと静まった感じだよ。それに紅葉なんか、美しいだろうなあ」

「私、夢の国へ来てるみたいで、なんだか、ぼおうと、してしまいましたわ。アラ、この寒いのに、ボートに乗ってるワ」

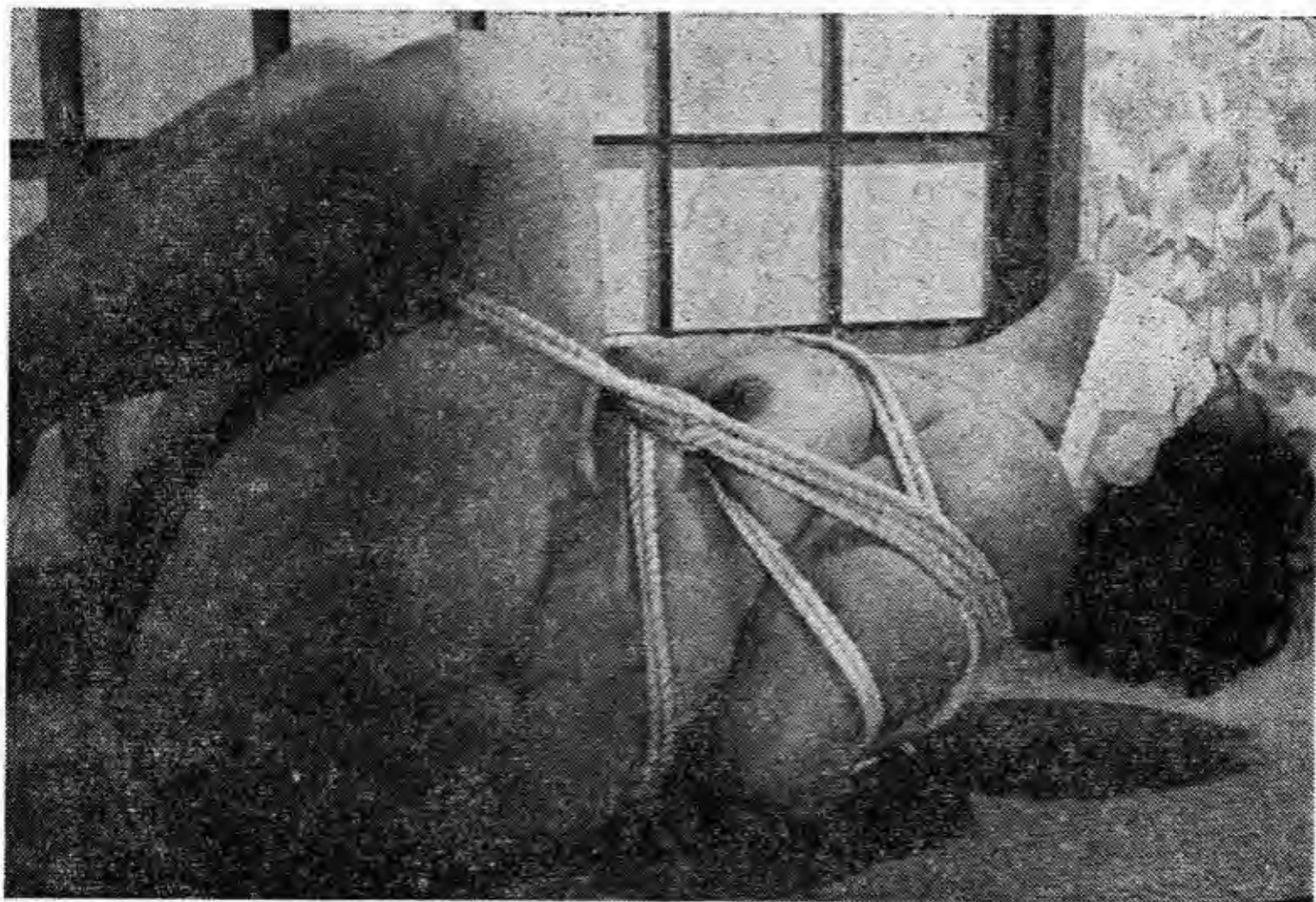
「アベックだから、きっと寒くはないんだろう。そう言え

ば、ここも随分、暖かいね」

南側が磨きの一枚硝子のドアなので、雲のとぎれから陽が射し込んで、そのため室内はムツとしている。

私は上衣を脱いで椅子に掛けた。

ここは大衆的なレストランでないので至って空いてはいたが、ナプキンを持ってきてポタージュから初まって、コーヒに至るまで、たっぷり食事に小一時間はかかった。



腹ごしらえが出来ると京終きようはてから奈良市街に訣別を告げて天理市から桜井市に入る。

明日香あすか有料道路を通して、関西の日光と言われる多武峰の談山神社へと向う。

途中、つづら折りの細い坂道だが、川に沿った楓の紅葉ぶりは凄く美しかった。ハイキング姿の若人が多い。談山神社の石段を駆け登ってかぐろはき脛を痛くし、紅葉の波のなかを十三重の塔を見上げてから、あわただしく、次の飛鳥へと向う。日が短い、釣籠落しの晩秋のことだから、ゆっくりはしておれない。

太っている山口艶子も、案外、歩くのは早い。数十段の石段も一気に登ってくる。

一旦、桜井へ戻ってから大回りをして飛鳥路へ。先ず飛鳥あす坐神社の前に車を停めて、例の「性神」の話をしてから時間がないので直ちに飛鳥大

仏。ここで少し附近を見る。見たい所は一杯ある。でも、ここで余り時間を潰しているわけにはいかない。勿々に、目的の石舞台へ向う。飛鳥大仏、石舞台も、有料の駐車場があるから助かる。

橘寺、川原寺址などを見て、あとは飛鳥川に沿って、下車することなく、車窓から眺めながら、行ったり見たりした所は彼女持参の地図に赤丸をつけて、そのまま、畝傍山へ。混雑する国道24号にイライラしながら、郡山で25号線に入り、法隆寺前の駐車場に着いたのが午後四時半すぎだった。

あたり一面、黄昏の靄が立ちこめて、既に帰仕度の人たちが、ゾロゾロと仁王門から出てくるところだった。南大門を入ってから、法隆寺五重塔をバックに彼女の写真をとる。もう、自然光ではギリギリの光線だ。

金堂、夢殿とめぐって中宮寺まで来たときは、晩秋の日は既に暮れて閉門されていた。刻一刻、次第次第に暗さの増してくる道を戻ってくると、築地塀の近くに柿の実が朱く熟れて、残のこんの夕陽に、そこだけが明るく白らんでいようだ。

柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺
という句が、思わず口について出る風景だ

が、こう、日が暮れるのが早くては、どうにもならない。

嘗て、エンタシスの柱のふくらみと、連子れんじ窓の美しさに魅せられて、三日間も法陸寺に通ったときのことが懐かしく思いだされる。

あわただしいの一語に尽きる一日だった。

駐車場に置いてある車に戻る。

ドアを開けるとパツと明るくルームライトが点いた。顧ると、食堂や売店なんかに電灯がついて、その先の松並木が黒々と空間に浮かび上がったように見えている。

陽が、すっかり落ちてしまったのだ。

私はホッとして座席に腰をおろす。

「素晴しかったわ。奈良って。私、まだ、う

っとりとしてるみたい」

彼女は思い余ったように、両手で顔を掩っている。感受性に富んだ多感な乙女心なんだろう。私はエンジンをかけて点灯した。

「出来るだけ、多くの名所を走ったつもりだが、法隆寺なんかは、もっと、時間がほしかったね。それにしても、日が短かすぎるよ」斑鳩いかるがの里は、とつぷりと黒い幕とばりに包まれてしまっている。私は食事をするために、国道に沿って車を走らせていた。

☆ケモノ同士 の倒錯劇

昼の部は終わったのだ――

という気持が、私の心をして、SMプレイの方へと駆り立てていった。そうなって見ると、不思議なものでこの傍にいる山口艶子の衣服が、忽ちにして取り去られて、むくむくと見事に肥満した白豚の姿に変身してしまうのだ。

早く、モーターを探して落着きたいという気がしきりにした。先日、森田芙美子と奈良へ来たとき、彼女の案内で山に添ったモーターへ入ったが、きつと、この附近にも格好の場所が有るに違いないと思って車を走らせる。もっとも、いくら走らせても国道沿いには、そうしたホテルはない。昼間は、少しも目につかない、そうしたケバケバしく見える看板に点灯して、あちこちに



見えるのも、脇道へ入る案内標識のようなものだ。

食事が終って、今、午後七時少し前だ。今朝、京都で山口艶子を迎えてから、丁度十二時間経っている。普通だったら、やれや



れ、これで一日の奈良見物も終わった——ということでもテレビでも見ながら休息というところだろうが、塚本鉄三の場合は、そういうわけには参らない。

これから、夜を徹して、生ぐさいケモノとケモノの倒錯劇を展開せずばなるまい。

例の案内標識めいたモーターの看板に誘われて横道へそれた。舗装のない地道だ。

その道がまた、いやに遠い。道が間違ったのかと思ったところで、また看板があった。矢の印だ。こんな細い道を車が通れるのか、と思えるほどの、急な山道だ。

右側に川の流れのような水音が聞える。うねうねと曲りくねった急坂を行くと目の前にネオンの青、赤が

暗さに馴れた目に、まぶしく映った。

三軒のモーターが、かたまっていて、少し平らな広場になっている。私とその広場に車を乗り入れると、手前の二軒から、人影が二つ飛び出してきて、互いに手招きする。奥の一軒にはクラウンが入ってゆくところだ。

私は、やはり女性の案内人が手招きした方へ車を寄せていった。車を駐めると、その直ぐ前が部屋になっている。あたりが真っ暗なので、ここが何処なのか、どんな所なのか、さっぱりわからない。しかし、静かなことはとても静かだ。来るときに聞いた川の音も、ここでは、もう少しも耳に入らない。

ふと、隣の部屋へ目をやった。入口の土の上に、男物と女物の靴が、きちんと仲良く揃えて脱いだである。外でだ。雨でも降ったら、どうするのか、と思った。でも、私は、その戸外に脱いだあるアベックの靴を見て、何となく、ほほえましく思った。

ドアを開けて、その謎は解けた。入った所が靴脱ぎも下駄箱もなく、すぐにカーペットを敷いた洋間になっているからだ。これだったら、外で靴を脱ぎたくなるのも当然だ。私たちは土足のままで部屋へ入った。

ベニヤ板にクロスを貼りめぐらした安普請



の建物だ。まあ、いい。これでも、彼女と二人なれば、一夜の竜宮城ともなろう。

運んできた二個の靴をテーブルの上に置き靴をスリッパに置き替えた。

椅子に腰を下して煙草に火をつけ、さて、これから、この「白豚」を、どのようにして料理してやろうか、と、思案する。

障子の向うは和室になっている。こちらの洋間は、ベッド、ステレオ、テレビ、冷蔵庫という風に、ゴタゴタと一杯、置いてある。へよし、こちらは、荷物置場とするか。

私は、ふと、山口艶子の方を見た。

彼女は大きな身体を小さくして、ちょこんと椅子に坐って膝の上に手をやり、無言のま

ま、眼をとろんと宙に据えたままにいる。

八月の末、初めてホテルへ連れ込んだときの、あの、息づまるような緊張感はないものの、やはり、これから、どんなことをされるかわからない——という未知なものに対する恐怖が、自然と全身をこわばらせているのだろう。今は、いつもの饒舌もない。

最初のときは、自分の荷物を整理すること、心の動揺を押し静め、かくそうとしていたが、三回目の今日は、ぼうと放心状態で、うつろな目をしている。

「艶子、どうしたんだい？」

「ええっ、私？ ああ、あの、さっき歩いた談山神社や法隆寺のこと、考えていたの。なんだか、遠い遠い昔、行ったような気がしてそのことを、うっとり考えていたの。変でしょ、私の魂だけが抜けてしまっ……」

「昔だといって、艶子は、まだ、二十五才なんだろ。何年前のことになるんだい？」

「そんな、はっきりした印象じゃないのよ。こう、ぼんやりと霞んだような。ああ、あの春日大社の朱塗りの廊下、きれいだったわ。でも余り沢山、一遍に行ったので、どこがどこやら、こんがらがってしまって、わからないけど……」

「来たい来たいと言ってた奈良へ来て、よかったね。今日は大急ぎで、一日中、回れる所を回ったって感じだが、次に来たときは、気に入った場所を、一個所か二個所、ゆっくりと訪ねることだね。まだ今日、行った他に女人高野の室生寺なんか、行ってみたかったのだが、コースから離れすぎていて行けなかったのは残念だった」

「私、今日一日、幸せだったわ」

「うん、幸せなのは、よかったが、とにかく風呂に湯を入れてきなよ」

「まあ、あなたって、現実派なのね。ロマンチックなムードって、わかんないの。私の、今の、この気持、こわさないで……」

「よしよし、わかった、わかった。艶子の憧れの、この奈良の地で、これから充分に、ロマンチックなSMムードに浸らせてやるよ。僕にも、はっきりしたことは、真っ暗だったのでわからないが、多分、このあたりは、法隆寺から、そう遠く離れていない、紅葉の名所の竜田川の近くだと思うな。千早ふる神代もきかず竜田川、唐紅に水くくるとは——という、あの竜田川だよ」

「あら、スイッチ、わからないわ」

「とにかく、スイッチというスイッチ、全部

つけてしまいなヨ。それから、その洋服ダンスの中に、多分、タオルと浴衣があるだろうから、それを出して、僕の目の前で素っ裸になっ
着替えてごらん」

「いやよ、いやよ。そんなの……」

私は山口艶子のむくむくと、よく育った真っ白い肉体を頭の中に思い浮かべると、急激に自分の下半身が充実してくるのを覚えた。

そして、自分の手で、彼女の衣服をむしり取ってしまいたいという気がしきりにした。

そんなことをしたら、彼女のからだから、きつと私の手の甲に爪を立てることだろう。

それでも、私は、無理矢理、彼女の衣服を自分の手で脱がしてみたかった。

ベッドの上に仰向けになり、サイドテーブルのスタ



ンドを点灯して彼女の方へ向けた。

「早く洋服を脱いで、僕の目の前で、素っ裸

になって立ってごらん」

「いやー、恥かしいっ」

彼女は浴衣を羽織ってから私の方に背を向け、スカートから脱ぎはじめた。私はベッドの上で手早く、洋服から下着まで全部、脱いで全裸の上に浴衣だけを纏った。

山口艶子のことだ。ぎゅうぎゅうに縛っておいてから、ゆっくり撮影の準備にかかったって晩くはない。縛ったままで放っておく間に、女体が充分に練れるというものだ。

私は鞆の中から白いロープ一本だけを取り出して右手に持ち、浴衣を羽織った彼女の背後から、羽交絞めに抱きしめた。

「やめて！ お風呂へ入るんだから……」

彼女は私の両腕をふりほどこうともがく。

一筋縄ではいかないっていう面構えだ。

私は二筋縄にして、先ず彼女の手首を制しようとしたが手首は、するりと縄の輪から逃げていった。隙があれば、鋭い爪が私の手の甲やお腹の皮に、つき刺ってきそうだから、油断も隙もない。

第一回目の時は、全身で脅えたようにガタガタしていたが、第二回目で大分、慣れて抵抗するようになった。それが、今度で三回目だから、下手に掛かってゆくと引っ搔かれた

り、噛みつかれたりしないとも限らない。

この女、どうも、そんな誘発的な狂暴性を持っているのだ。ひょっとしたら、幾分S性も持っているのではなからうか。

このデッカイ尻の下敷きにされたら、きっとM男なら、感涙にむせぶのではなからうか。

山口艶子にM男を責めさせる――。

これは、面白い思いつきだ。

今まで、何回となく、そうした場面を経験してきたが、春日ルミ、山原清子、絹川文代のように、M性の他に多分に強いS性を持っている女性には、自ら積極的にM男性を責めたてた。男を責めることに依って彼女たち自身も物凄く燃えた。殊に「舐淫」の奉仕をさ





せた後なんかは、それは凄いものだった。

いわば、それが彼女たちと私の前戯のような格好になった。私は別に男性を責めることに興味はなかったが、彼女たちが男性を責めることに依ってエキサイトするのを見るのは好きだった。そして、その後の彼女たちとの抱擁が、また飛びきり素晴しかった。

いずれも積極的且ダイナミックな躍動で私に迫ってきた。顔をベトベトにしたM男性の目の前で、彼らからは女王様と仰がれる美女を自分の思いのままにするというのは、私にとっては、たまらない快感だった。

絹川文代がオルガスムスに達するとき、私は素っ裸になっていたお蔭で、背中に彼女の

真っ紅にマニキュアした尖った爪を立てられて、息もつまるような激痛の瞬間を味わったことがあった。

山原清子は、その際、噛みついてくるので怖かった。普通は「愛咬」といって、柔らかく歯を当てるほどなのが絶妙のテクニックなのだが、彼女の場合、喰いちぎらんばかりに真剣に噛みつくので恐ろしかった。

彼女が一旦、狂暴性を発揮すると、M男が血だらけになればなるほど、益々ハッスルするという有様で、私が制止しないと、どこまでエスカレートするか知れなかった。

その代り、そのように炎のように燃えあがった彼女の肉体って絶品といってよいほど素晴しかった。小柄な身体全体が「名器」になってしまったかのように、動物的な咆哮を口から吠えつづけて狂いまわった。

春日ルミは、M男をネチネチと、いたぶるように責める代りに、私には人男性を責めることによって燃えた肉体Vをゆだねて、情の深いところを示した。M男を下敷きにして、三者一体という楽しみの趣向が、彼女の最も得意とするところのラーゲだった。

中河恵子は美人だったが、M一辺倒でS性は一かけらも持ち合わせていなかった。



私の、たつての強要にも拘らず「男の方を責めさせるのだけは許して。それ以外のことでしたら、どんなことでもしますから……」と哀願していたが、無理矢理、縛った男に馬

ろうか。S・Mに興味と関心を持っている女性なのだから、男性の側からの誘導如何によつては、どちらにも派生するかも知れない。「いやったら、イヤよ」

乗りにさせてしまった。結局、男の口がむしゃぶりついて、舐淫の奉仕を始めたことで、彼女の顔がイキイキと輝き出した。

全裸で縛った男を傍にころがしておいて、羞らいに消え入りたげにしている彼女に挑んでいったとき、私は言うに言われない快感に全身が身ぶるいしたものだ

った。
今、この目の前の山口艶子は、果して、どんなタイプのM性S性の持主なのだろうか。

彼女が爪を立てたり、噛みついたりすることが好きなどところを見ると、M性以外に多分にS性も持ち合わせてくるのでは、ないのだろうか。

そう言うなり、彼女の口が私の右腕にかぶりついてきた。上膊と手首の間、そこは皮膚が厚いので、歯を立てたって、そう余り痛くない。私は彼女の顔を抱え込むようにして、腕を口に押しつけた。

「さあ、噛みたいんなら、好きなだけ、噛んでごらん」

鼻を押されて彼女はパッと口を放した。

「縛るのは、お風呂へ入ってからにして。そうしないと、私、縛られてしまったら、身体が、くたくたになってしまうもの……」

「私の腕をふりほどくと、下着だけを、その場にするりと足下に落して、浴衣のまま浴室へ逃げ込むように走り去った。」

☆

私は鞆からカメラや照明用具をとり出して撮影の準備にとりかかった。

今になって気がついたのだが、室温が調節されているのか浴衣一枚になっていても、一向に寒くは感じない。

ライティング完了してから、私はキャビネに伸ばした彼女の緊縛写真を入れた袋、偉大なポインを締めつける乳枷、それに広面積の白肌に悪戯書きをするための絵筆と絵具などをテーブルの上に並べた。

今日で、山口艶子を責めるのは三回目になる。一人のM女の生態を、とことんまで追求してゆくことは、M女全般の謎を探検すること、つながっているものだと思う。だから一人のM女を深く掘り下げてゆくということは、大変、有意義なことではないだろうか。

前二回の倒錯プレイ劇によって、私は彼女の内臓の奥まで暴いたような気がしたが、考えてみれば、その謎の極く一部を、ひと撫でしたに過ぎないのだ。まだまだ、未知の部分の方が多すぎる――。

浴室から出てきた山口艶子は、三面鏡の前に坐って顔の手入れを did した。

「ねえ、こっちへ来ないかい。君の写真を十枚ばかり大きくしたのを持ってきたから見てみないか？」

私は彼女の後姿へ声をかけた。

「私の写真？ 裸で縛られたのでしょ。そんなの、見せるの、イヤよ、イヤよ。見せないで……。しまっておいてよ」

苗木陽子や笠井奈保子、それに藤田明子なんかは、自分の緊縛写真を見たがった。殊に苗木陽子は、それをマスターベーションの際の幻想の資にしていると、はっきり告白しているのだ。

私の見ている前で、その実演をやらせたときの光景を、今でも、私は、はっきりと覚えている。「このことだけは、絶対に雑誌には書かないで……」と言っていた苗木陽子のオナニーの有様は、それは凄いものだった。

彼女自身の全裸で縛られた写真を目の前にして、次第に目がギラギラと輝いてきたが、私が「やってみろ」と強要しても、なかなか実行に移ろうとはしなかった。しかし、私が一旦、火付け役のオマジナイをやった途端、辛抱できずに、彼女の指が激しく動いた。

それは、凄いばかりの、指の動きようだった。

私が目の前で眺めているのも忘れたような激しい溺れ込みようだった。全くケモノになってしまったような狂いようだった。いや、むしろ、私が見ているからこそ、そのように狂わんばかりに没頭したのかも知れない。

それは執拗で、指の動きの速さは一層、増してきたようにみえた。

全身で溺れ、耽っている狂態は、全く凄いものだった。私も、そんな光景を直接、



見るのは初めての経験だった。幾度も山が訪れたすえ、彼女は放心状態になって、並べてあった自分の写真の上に、うつ伏した。

それなのに、この山口艶子は、自分の緊縛写真を見るのは嫌だと言う。イヤだ、イヤだと言え、一層、見せなくなるのが、男性の人情だ。私は、しつこく彼女を誘った。

「私って、ちっとも美人じゃないでしょ。それに、こんなにブクブク肥っていてスタイルだって最低だし、写真を撮られたって、本当に利用価値があるの？ 私のこと、可愛いって、言ってお下さるのは、あなただけだわ。ねえ、本当に、こんな私でもいいの？」

「そりゃ、人は好き好きだから、ファッションモデルのような骨と皮のギスギスしたのがいいって言う人も多いけど、艶子のようなボリニームの女体がいいって言う人も、案外、多いんだよ。私は一概に、どっちがいいって断定はしないけれど、そういう好き好きがあるからこそ、世の中が面白いんじゃないのかなあ。僕は、そう思うよ」

「だったら、こんな私でも、いいの？」
「いいとも、いいとも。こんな素晴らしい肉づきの女性って、そうザラにはいないもの。稀少価値からいっても、大したものだよ。中肉

中背、十人並の器量の女なんて、バーやキャバレーへ行ってごらん。ゴロゴロしてるよ。そんなのを口説いて、裸にして縛ったっていいんだよ。だが、艶子は違うよね。口説かれて、無理に來たんじゃないもの。文字通り、自発的にやってきたズブの素人だもんなあ。そんな、器量やスタイルのこと、考える必要なんて、さらさらないよ」

「そうかしら。そんなに言ってお下さったら、有難いけど、自分の写真を見せられたら一層、自分がみじめな感じがして……」

「よし、そうかい。そんなに嫌なら、無理に見なくてもいいが、その替り、うんときつく縛って、艶子の倒錯的な美しさを最高に発揮させてやろうなあ」

私は、つと、彼女に近づ





いて、浴衣の襟から手を挿し入れた。

豊かな乳房だ。掌には掴みきれないほどの
凄じ量感を持った豊満なポインだ。

彼女は素直に、私のするがままに肌ぬぎに
なった。湯気の立ちのぼるような福々しい素
肌で電光の下で、まぶしく輝いた。

備えつけの浴衣では前が充分に合わさるな

いくらだから、肌ぬぎになって、だらりと
両袖をたらしたら、彼女は下に何もつけてい
ないことが、はっきりとわかった。

私は彼女の太い右腕を背後に捻じ曲げ、続
いて左手も、その上に重ねて縄を掛けていっ
た。どんなに乱暴に取扱っても頑丈で、絶対
にこわれない玩具おもちゃといった感じだ。

初めて山口艶子を縛ったときは、忽ちにし
て、激しい反応が現われて、上半身がゆらゆ
らと、大揺れに揺れて、私の方に倒れかかっ
てきたものだ。そして腕のなかに倒れ込んで
きた彼女の、その部分を手で探ってみて、そ
の余りの湿潤ぶりに一驚したものだ。

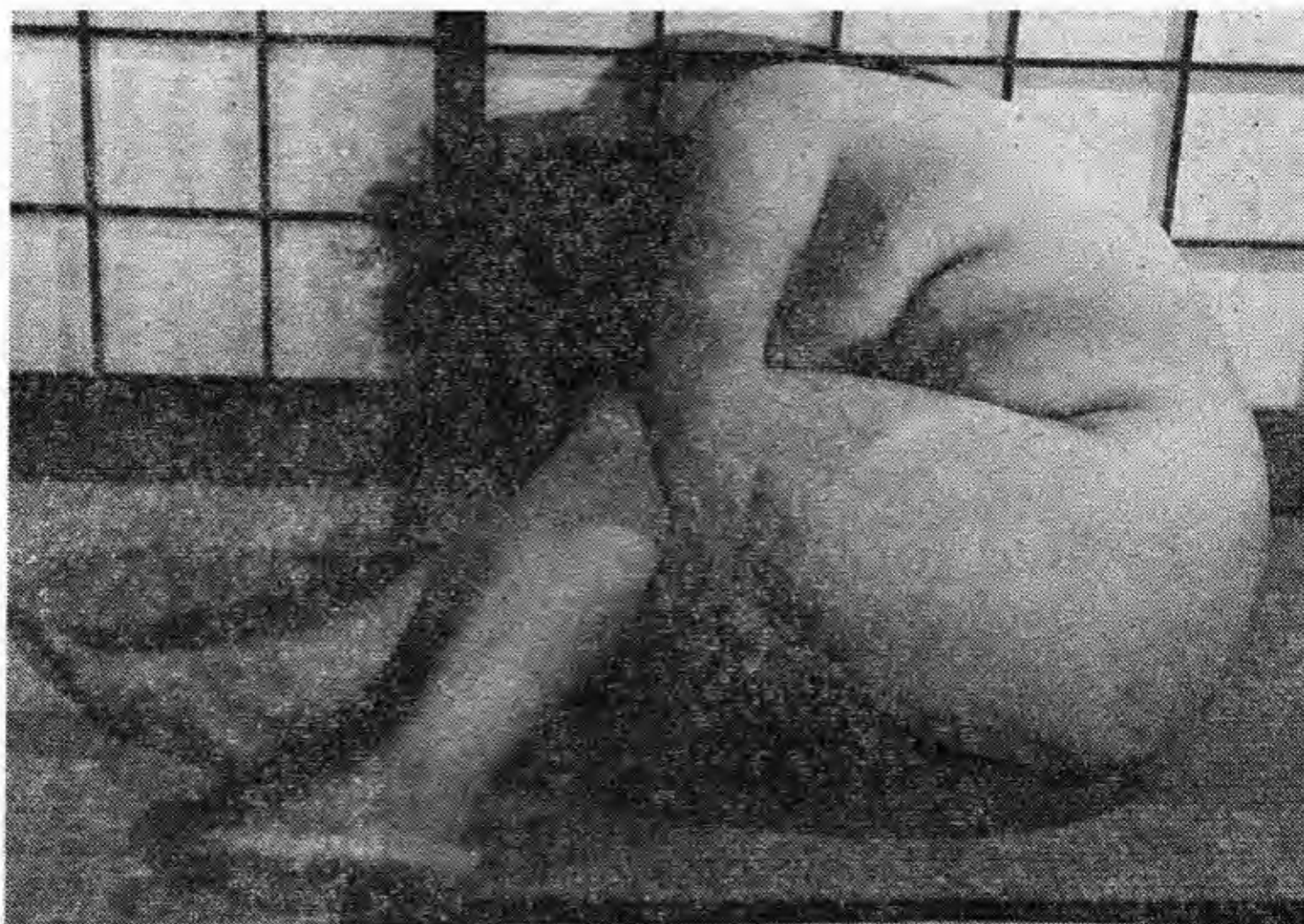
第二回目のときは、私の手の甲に爪を立て
て血をにじませたり、お腹に引っ掻き傷をつ
くったりしたが、今度は一体、どんな反応を
示すことだろう。

そういえば、九月五日六日の両日から、も
う早いもので八十日近くも経っているのだ。
そんなことを考えながら、私は入念に縄掛
けしていった。彼女の両手首さえ縄で制して
しまえば、あとは自由に、どんな縛りでも、
堪能するほど楽しめた。少々、乱暴に力一杯
縄を締めつけたって、むちむちとした、この
弾力性のある肌は、縄をはじき返すほどの勢
いがあった。

腰紐をほどこいて、パタリと彼女の足下に落
ちた浴衣を隣の部屋へ投げすてる。

ボリュームのある素晴らしい肉体だ。

盛り上った肩から胸、腹部、そして二本の
白い円柱のような太股。私は前に回って、目
で見るだけでなしに、手で撫でさすって、そ



の感触を楽しんだ。

「ああ、素晴らしい、肉体だな。どうだ、この肌ざわりのいいこと。真っ白で、ムチムチしていて、それに、掌のなかで、こんなにゴムのように弾んでくるじゃないか」

「擦ったいから、ヤメテ。ああ、あーあ」

引臼のようなお尻から内股へかけて、手を這わしたとき、彼女の大きな身体がゆらゆらと揺れて、私の胸の間に倒れかかってきた。

その重いこと重いこと。

私は、すくい上げるようにして、彼女を抱えて、その場に寝かした。

山口艶子は、もう完全に倒錯プレイの渦中に、とっぷりと全身を溺れさせていた。両眼を、しっかりと閉じ、甘酸っぱいものを含んだときのような、うっとり

とした表情だ。

S Mのムードに浸りきっている。

私は、わざと入浴しなかったのは、一つの魂胆があったのだ。今日一日中、動き回り、歩き回って、汗ばみ汚れた足の指や裏を、この女に舐めさせてやろうと思っていたのだ。

そう、入浴しないで、汚れたままのヤツを彼女の口で、舌で舐めさせてやるのだ。

或マゾ女は、私に、わざわざ大便に行かせて、その後始末を自分の口で舐めとって、凄く興奮していたが、相手が望まぬ限り、私はそこまでは、やりたいとは思わない。だが、自分の臀部を、ぴったりと彼女の顔面に騎乗させて、アヌスに対する巨従の奉仕だけは、入浴する前にさせてみたい。

先日も、新年号のルポを読んだというS研の会員から訊ねられた。足の拇指を吸わせたことは詳しく書いてあったが、アッチの方はやらなかったのか——と。

そう、彼女が一番、好むモノへの奉仕。頬ずりするようにして、いとしいものへのオシヤブリ。それなくして、何のS Mプレイぞ、と言いたところだが、何しろ、今の日本では、そんなこと、詳細に描写できる状態ではない。だから、足の拇指だけで、お茶を濁し

ておいたのだ——と返事しておいた。

二人きりの密室での「SM談義」では、そりゃ、どんなキワドイことを話し合ったって公然性はないのだから、構わない、ということとで、思いつきり卑猥なことを、話し合ったけれど、その内容を、ここには書けないという不自由さは厳然としてある。

さて、縄で縛られることによって、催眠術にかかったような山口艶子は、全裸のまま畳の上に横たわっている。

私は、ちよつと、加減見に、どの程度、エキサイトしているか、前を探ってみた。凄。まさに凄。

こんなに感受性に富んでいるとは驚きだ。だが、私は、それ以上、深入りしてタッチしなかった。山口艶子の底知れぬ貪婪なスタミナを知っているから、君子危きに近寄らずと、検身だけに止めておいた。

「ふふん、これなら、どんな責め方をしたって、責め甲斐があるというもんだ」

私は舌をペロツと出して内心ほくそ笑む。「さあ、舐めてみんか」

汚れた指を彼女の口へ押し込む。ペロペロと舐めさせておいてから、汗ばんで塩辛い足の指と交替させる。

「洗っていない足だ。いい味がするだろう」

指から足の裏、踵に至るまで、たっぷりと靴下と靴でむれた素足を舐めさせてやる。

よく唾液がなくなってしまうわいなあ、と思うほど、ペロペロと舐めまわす。指と指の股の間を舐めさせてから、

拇指を、すぼっと口にくわえさせる。

ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ

——と、あたかも赤児が乳首を吸うように、拇指の根元まで、口いっぱいも含んでおいて、吸いまくる。

よく動く舌が、やわらかく指のまわりを、敏捷に匂いまわって吸いつくので、私は、もう、たまらなくなってきた。

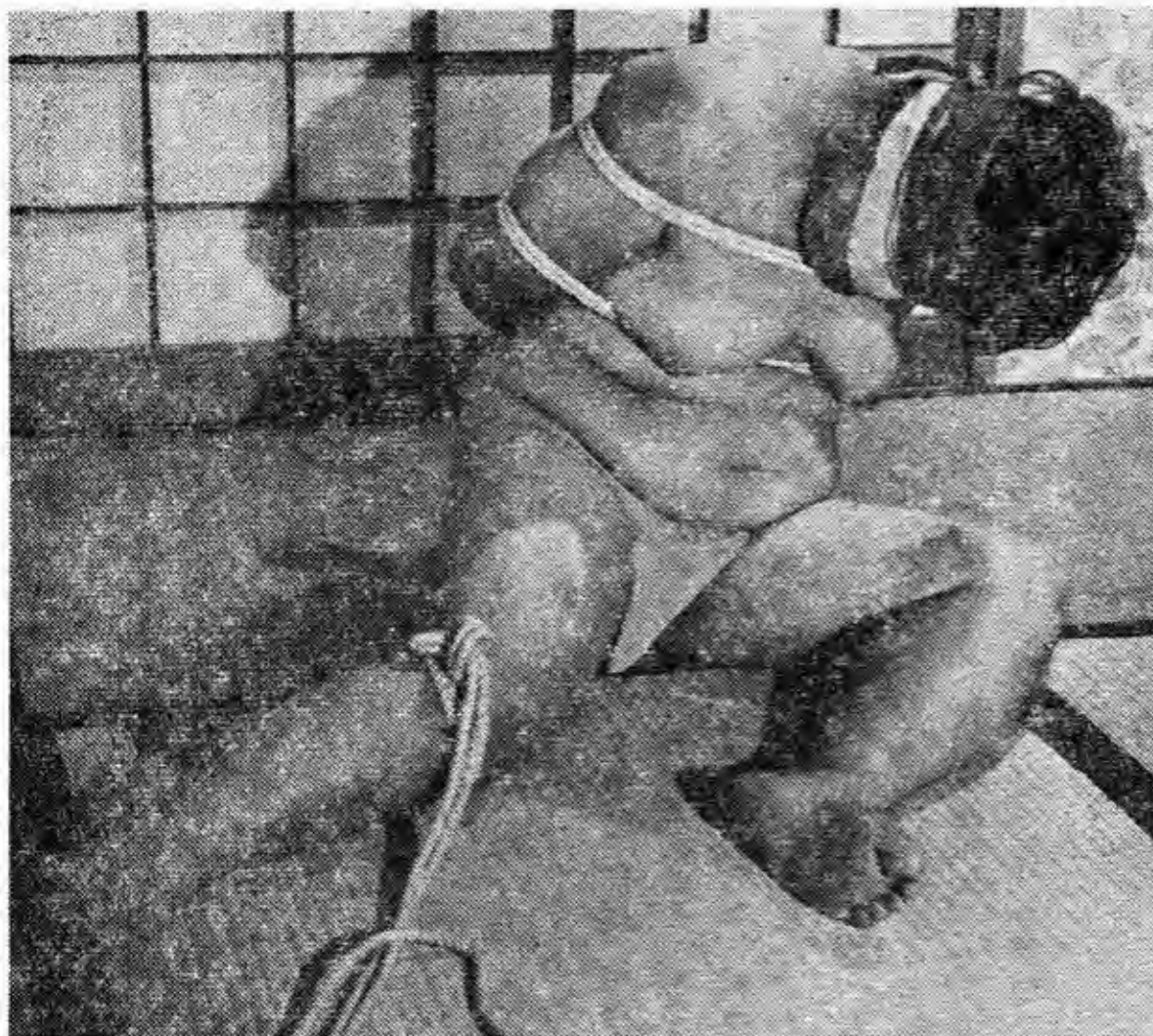
次は臀部の番だ。

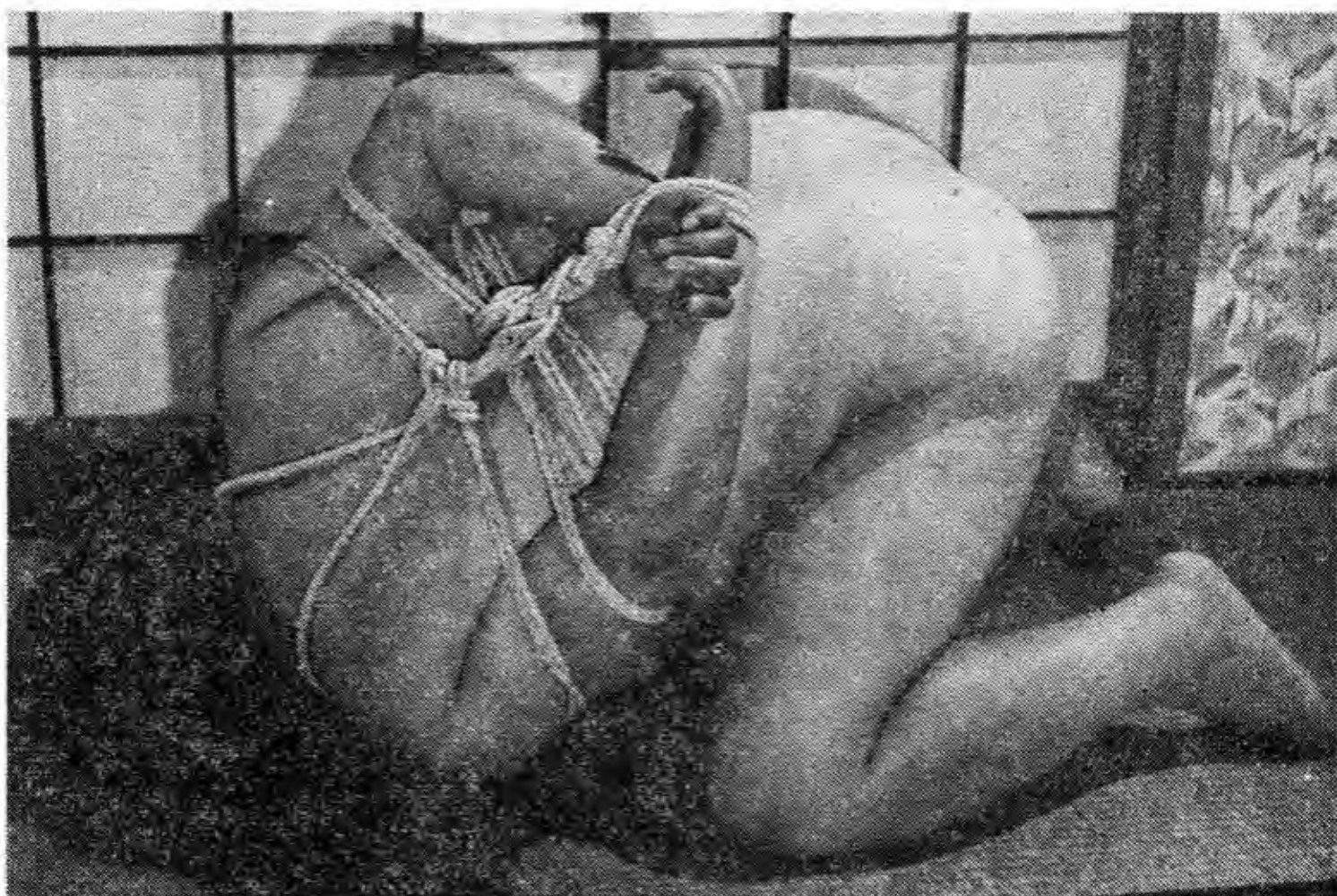
アヌスが丁度、彼女の口の上になるように脱糞するときのような格好で顔面に跨がる。

ナメクジが匍うような舌の先が、チロチロと生温か

く伸びてくる。擦ったような妙な気分。私は忽ちにしてエキサイトした。

普通では、誰もやらないことを強要していることに、倒錯的な強い刺激を覚えた。全身が、ガクガクとした。





為すべからざることをさせている。

為すべからざることをしている。

それは、ありきたりのセックスでは、到底味わうことの出来ない強烈で、異色ある快感だった。いつもとは違う部分に、違う味覚が痺れるように幾度となく襲ってきた。

あたりは静かだったが、静かなだけに、竹の葉と葉とが擦れ合うような音が、しきりに窓の外でしたような気がした。

深い陶酔が、そこにあった。これが「倒錯」というものののだろうか。

その次に、私は、やはり彼女の欲し求めるものを、彼女の口に与えねばならなかった。

私もまた、そうした直接的な刺激を求めずにはおれない心境に追い込まれていた。

☆

私は山口艶子を縛ったままで

放っておいて風呂へ入った。

風呂へ入ると疲れるという人があるが、私は入浴すると、新しいファイトが、もりもりと湧いてくるから不思議だ。一回の入浴は百米を全力疾走する位のエネルギーを消費するそうだが、人間はナマ身だから、入浴や放出でロスしたエネルギーなんか、直ちに補給すればいいのだ——と考えている。

汗を流して、さっぱりした。

元氣は再び旺盛してきた。

バスタオルを腰に巻いただけで部屋に飛び込む。全裸で縛ったまま放ってある山口艶子という玩具が、どんなになっているか、待ちきれなくて、身体も充分、拭かずに来た。

彼女は唇のまわりを光らせたまま、眠ったように、静かに横たわっていた。

私は足を挙げて彼女を揺り起した。

「私を縛ったままで放っておいて、お風呂へ入ってきたの」

「そうさ。その方が艶子が喜ぶと思ってネ」
彼女を起しておいて、さっと右太股に手にした縄を掛け、背後からグイグイ引っ張る。
「そんなことしないで。恥かしいから……」
「こんなに、されるのが好きなんだろう？」
うしろから掩いかぶさるようにして、彼女

の耳もとで囁く。彼女は、それに答えず、ただ身をもがいて、太股を開かせまいとする。

私は更に余った縄を左の太股にも掛けて、引き絞り、両脚を八の字に押し開く。

「おおお、やめて、やめて……」

幾許かの抵抗は示しても、やがて、両太股に掛かった縄が背後で引き詰められると、諦めたかのように、ジリジリと彼女の両足は左右に大きく押し広げられてゆく。

「ねえ、ねえ。私、おととい、机の角で足を打ったの。だからそこが痛い。ほら、見て頂戴アザがあるでしょう」

私は縄止めておいてから、彼女の示す足の部分を見る。たしかに、紫色に変色した打ち身のアザが残っている。足のアザを見るふりをして、正面に回った。思い切り縄で左右に引っ張られた太股を手で押し広げる。

「見ないで、見ないで。私、肥っているから股ズレがして、色が変わっているの。だから、見ないで、見ないで頂戴！」



彼女が言う通り、歩きたびに、その部分の皮膚が擦れて股ズレを起し、それが永年に亘って、色素の沈着をきたしているのだ。

彼女が言わなければ、私は特別に、その部分を念入りに見る筈じゃなかったが、わざわざ言われてみれば、些細に観察して見る気になった。こんな縛り方にしなかったら、こん

なところを、こんなに、あからさまに空気に触れさせることも絶対に出来ない相談だ。

私は腹這いになって、目を近々と寄せて、彼女のその部分を凝視しつづける。

太股のツケ根、普通、肥った女が股ズレを起す肌の部分が、殊にメラニン色素が、うんと沈着して濃褐色を呈している。他の部分の肌の色が飛切り白いだけに、その部分の変色が殊に、よく目立つのだ。

「ねえ、色が変わってるでしょう」

私の目が、そこを凝視していることを意識して、彼女は「恥かしい、恥かしい」と言いながら、すべてを、さらけ出してしまふ。

その部分の皮膚の色が暗褐色に変っているというだけでスベスベしていることには他の部分の肌とは変りはない。私は掌でなでさすってみる。ねっとり、なんとなく、粘膜のような湿り気が、返ってくる。

「見られている、すっかり見られているV
そういう思いが、開股縛りの彼女の心に妖
しい動揺として兆しているのだろう。」

私の眼にも、はっきり、ソレとわかる顕著
な変動が、刻々と読みとれるのだった。

やがて、私が何もしないのに、彼女の腹部
が大きく波打ちはじめてきた。

肉づきのよい腹部が、お臍を中心にして、
ぐぐつと凹んだかと思うと、忽ちにして、絞
りだすように盛り上ってくるのだ。

発作だ。

彼女の激しい発作が、また始まったのだ。

第一回目のときは、その目ざましいばかり
の興奮状態を目にして、私も忽ちにして行動
を開始したのだが、私は今、冷ややかに、そ
んな彼女の喘ぎ様を一部始終、何から何まで
見逃すまいと、じっと眺めていた。

無理に縄に依って押し拡げられた部分の変
化も、細大洩らさずに見た。

伸ばした脚が、ブルブルと痙攣している。

私は足の爪先から太股のつけ根に至るまで
ウブ毛の一本一本に至るまで観察し終ってか
ら、やおらカメラを取り上げた。

「艶子。これから、その見事なポーズを、写
真に撮ってやるからな」

彼女は物^う懶い目を一旦、う
っすらと開けたが、観念した
ように再び目を閉じた。

「ねえ、写すのはいいけど、
目隠しだけは、して頂戴ね」
呟くように言う。

私は律気に手拭を持って近
づいた。

「どうか。これで、もう目は
見えないな。この太筆で、僕
が、どんな意地悪い責めをす
るか、もう何も見えないんだ
ぜ」

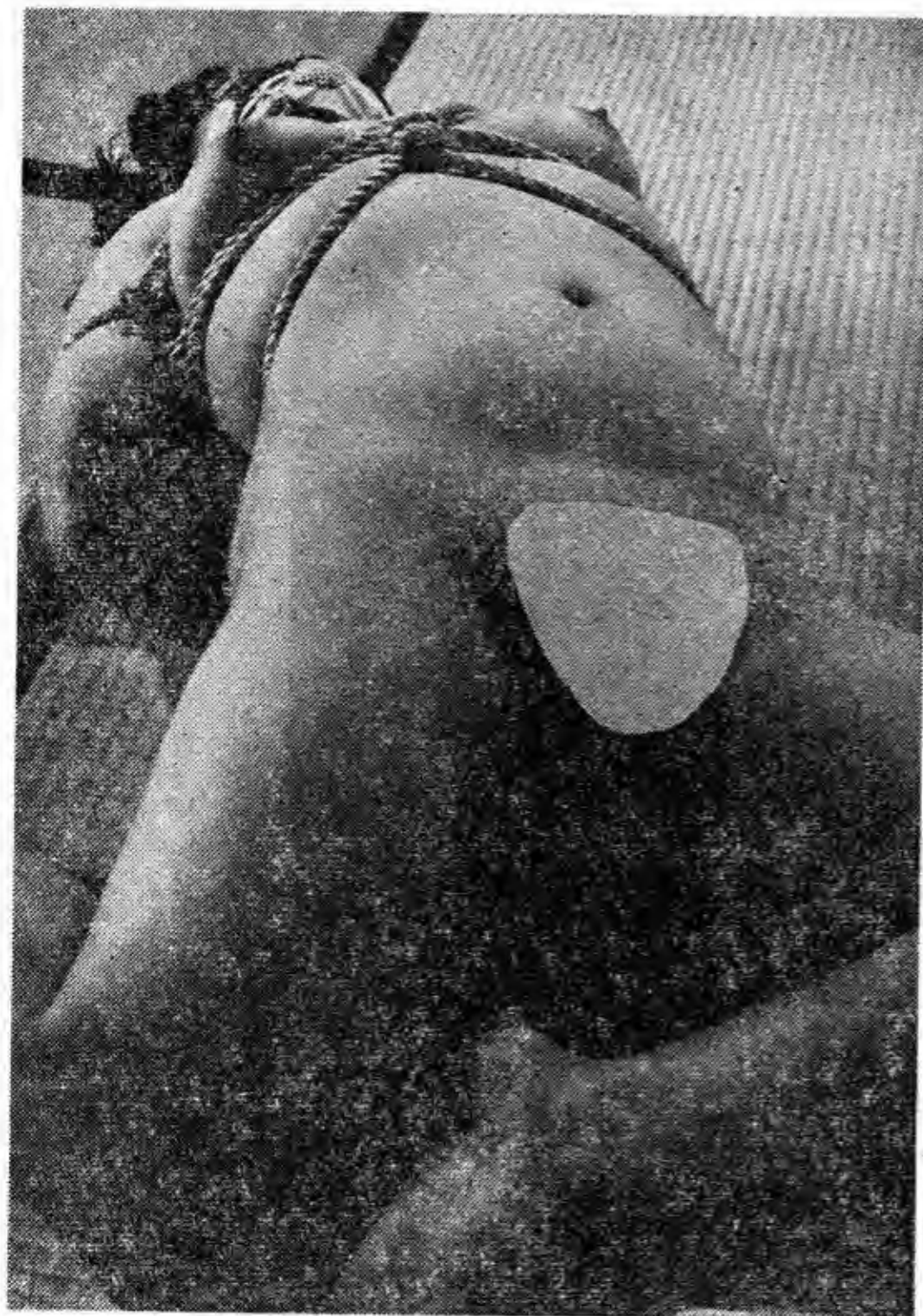
私は狸の毛の太筆で、さっ
と、彼女の足の裏を一撫です
る。五本の足の指が、くしゃ
くしゃと、擦ったさをこらえ
て蠢く。

「やめて、やめて。私の嫌な
ことは、しないで。写真を撮
るって、言ったんでしょ」

「だから、如何にも責められ
てるっていう、素晴らしいポー
ズにしようと思って、今、苦勞してるところ
じゃないか。ホラ、ここが好きなのか、ここ



が嫌いなのか、どっちなんだ。さあ、そのと
きの感じを言ってごらん？」



「いやよ、いやよ。ああ、手が痺れてきたのよ。ほどいて、ほどいて頂戴。お願い！ 手が痺れて、痺れて、痛いほどのなの」

「そんなことを言って、僕を瞞すんじゃないだろうなあ。折角、これから、いいところになるというところなんだよ。この素晴らしいポーズも写真に撮っておきたいしネ」

「ネエー、嘘じゃないのよ。そんなにいじめないで一度だけ、ほどいて。手の痺れが直ったら、すぐに、また縛られるから……」

「解きたくはないが、艶子が、そんなにまで言うんだったら、本当だろうなあ」

私は背後へ回ってみた。

たしかに、肘から先が充血したように色が

変っている。そして逆に指の方が白く貧血しているようなのだ。

私は、あわてて縄を解いた。彼女は縄を解いても、急に手がきかないらしく、だらんとしたままだ。私は浴衣を着せかけてやる。

縄の掛け方、縛り方に依っては、見た目は余り厳しく縛っていないように見えていても腕の血行を止めるような縛り方をすると、凄く手が痺れてしまうことがある。

「うわあ、痺れが戻ってくるよときの気持ちってチクチクと痛くって、気持ちわるいわ」

そりゃそうだろう。私が入浴している間もずっと縛ったままにしておいたんだから、こんなに痺れるのも当然かも知れない。

私は洋間のソファアーに腰を下して、煙草を一本つける。

と、そのときだ。私の耳に、ベニヤ板で仕切った（と思われる）あの戸外へ仲良く靴を並べて脱いだ若いアベックの隣室から、猫の鳴くような声が洩れ聞えてきたのだ。

「はてな」

私は耳をすました。断続的に聞えてくる壁越しの隣室の物音に、神経を集中した。

それは、どうやら、女の声のようだ。

赤ン坊の泣くような声になり、その声音は



幸福そうな響きがあった。

壁を隔てているので、更に一層、悩ましく

私の妄想を、いたく刺戟するのだった。

細く、長く、そのすすり泣くような女の声

は、いつまでも続いていた。

☆ 水筆責め

私は鞆から新しい縄を取りだすと、彼女のいる部屋へ入っていった。

「この前、約束した通り、

艶子の大好きな水筆責めを

してやろうかな」

「ええ、水筆責めって、なになの？」

「ほら、この前、ホテルのテレビで見ただろう？ 筆で、くすぐるヤツさ」

「ああ、やめて、やめて。

あんなの、私、とても辛抱できそうにないわ」

「フフン、そんなこと言って、実際は、やってほしいんだらう。そう顔に書いてあるよ」

「いやよ、いやよ。ソレ、なになの？」

彼女は私の手にした紙袋を見て、脅えたように、尻込みをする。

私は、その隙を狙って両手首を捻じ上げて縄を掛け、縄尻を胸に回して、がっちり縛った両の手首を背中に固定してしまった。

「でっかい、お尻だな。どうだ、この瑞々しくて色の白いこと。ここへ、フフフ、いたずら書きを、やったら、面白いだろうなあ」

「妙なことしないで……」

彼女の身体が大揺れに揺れて、畳の上に、どうっと倒れた。

私は紙袋から三本の絵筆と水彩絵具を取り出して並べた。コップがパレット代りで、先ず、赤と茶と青の絵具を混ぜ合せて溶かす。

それを、たっぷり絵筆につけて、でっかいお尻へ筆下ろしをした。

「ああ、あ、何してるのよ」

「ケ」「モ」「ノ」と書こうとするが、なにしろ、脂ぎった皮下脂肪の厚い白肌が、とても一筆では書けない。脂の浮いた肌が、水をはじき返すのだ。

私は何度も、何度も、水筆を撫でる。

「ああ、感じるーう、感じるわア」

彼女は俄然、激しく悶えはじめた。

期せずして、艶子の一番の性感帯であるお尻と腰の境界線あたりに、絵具を含んだ水筆が何度も何度も、撫でたのだから、彼女にと

っても、たまらないことだろう。

私は、狂うように、のたうち回る彼女の裸身の動きを面白がって、絵筆を、その真っ白い肌の上を走らせた。

ケモノ——。

片仮名の三字が、白肌の上に大きく書かれていった。

彼女は全身を波打たせて大きく喘ぐ。

「なにをしたのよお。ねえ、おしえて……」

「ただ、この筆で字を書いただけさ」

「やめて、そんな、字を書くんだなんて。ねえ、私、もう、たまらないわ」

「お尻だけじゃなしに、今度は、ホラ、背中に書いてやろう」

背中には、「ド」「レ」「イ」の三字。

水をはじくので、何度も何度も、同じところを撫でて、書き上げる。

「なにをしてるの？ 変なこと、しないで」

「うん、背中を書き上げたから、残っている

右側のお尻にも、書いてやろうね」

「アア、そこはダメなの。私、そこは、感じちゃうのよ。そこだけは勘忍して……」

彼女の哀願もののかは、私は再び絵筆に、たっぷりと絵具を含ませた。

セ、メ、テ——と、片仮名の三字を、遅し

く膨れあがった右の臀部へ書きはじめた。

「ああ、そこは感じるう、感じるのよお」

大きな声を思いつき張り上げる。

さっき、隣の部屋から、女の泣声みたいなものが聞えてきたが、向うから聞えるものはこちらの物音も向うに聞える筈だ。

私は、彼女には何も言わなかった。しかし、そのことについて、私はひとり、露悪的な興味にそそられていた。

そうだ、そうだ。思いつき、大きな声を立てればいい。隣の部屋で、アベック二人が、耳を澄まして聞いているに違いないのだ。

私は絵筆で何度も同じところを撫でる。

彼女の挙げる声を楽しむためだ。

「セ」の字を撫でる。

「わあー、感じるう、感じるったら」

その次には、「メ」の字

だ。幾度も同じ個所を撫でながら、絵筆を走らせた。

「やめて、やめてったら、感じるのよおう」

いや、面白い。面白くて仕方がないのだ。ただの水筆責めじゃない。字を書くのだ。私



は、ただ字を書いているのだ。

「テ」を、特に念入りに書いた。

「感じる、感じるう！ たまらないわ」

セメテ——と書いてから、ご丁寧にも、その周囲を、くるりと丸で囲む。絵具を吸った筆が、お尻の肉の上を這うたびに、彼女は感極まった奇声を発した。

それは断末魔の女の悲鳴にも似ていた。

私は面白がって、水筆を走らせる。

これこそ、まさに「水筆責め」なのだ。

背中には、「ドレイ」そして、臀の双丘には、「ケモノ」と「セメテ」の文字。

いやはや、女を、こんなに侮辱した言葉って、ちょっと、ないだろう。しかも、山口艶子には、その字を読むことが出来ないのだ。

字が乾くのを待って、私は彼女を仰向けにする。転がすとき、肘がこすれて痛みが、仰向けになったとき、手首が背中の下敷きになって痛がったが、私は、この文字書きの興味に憑かれたようになっていた。

仰向けになった新しいキャンバスに、再び絵筆を揮えると思うと、わくわくした。

大きくて深い洞窟のような脐窩を中心に、面積の広い腹部の空間に、「白豚艶子」の四文字を書いた。

両腕を背後で、がっちり縛られて身動きも出来ず仰向けになって晒している前面の白肌に、絵筆が、もぞもぞと走って、おどましい文字が、書き連ねられてゆくのを、自分では、どうすることも出来ないのだ。

「ねえねえ、なんて書いたの？」

「自分で見てみたら、どうだい」

私は彼女を抱き起して見せてやる。

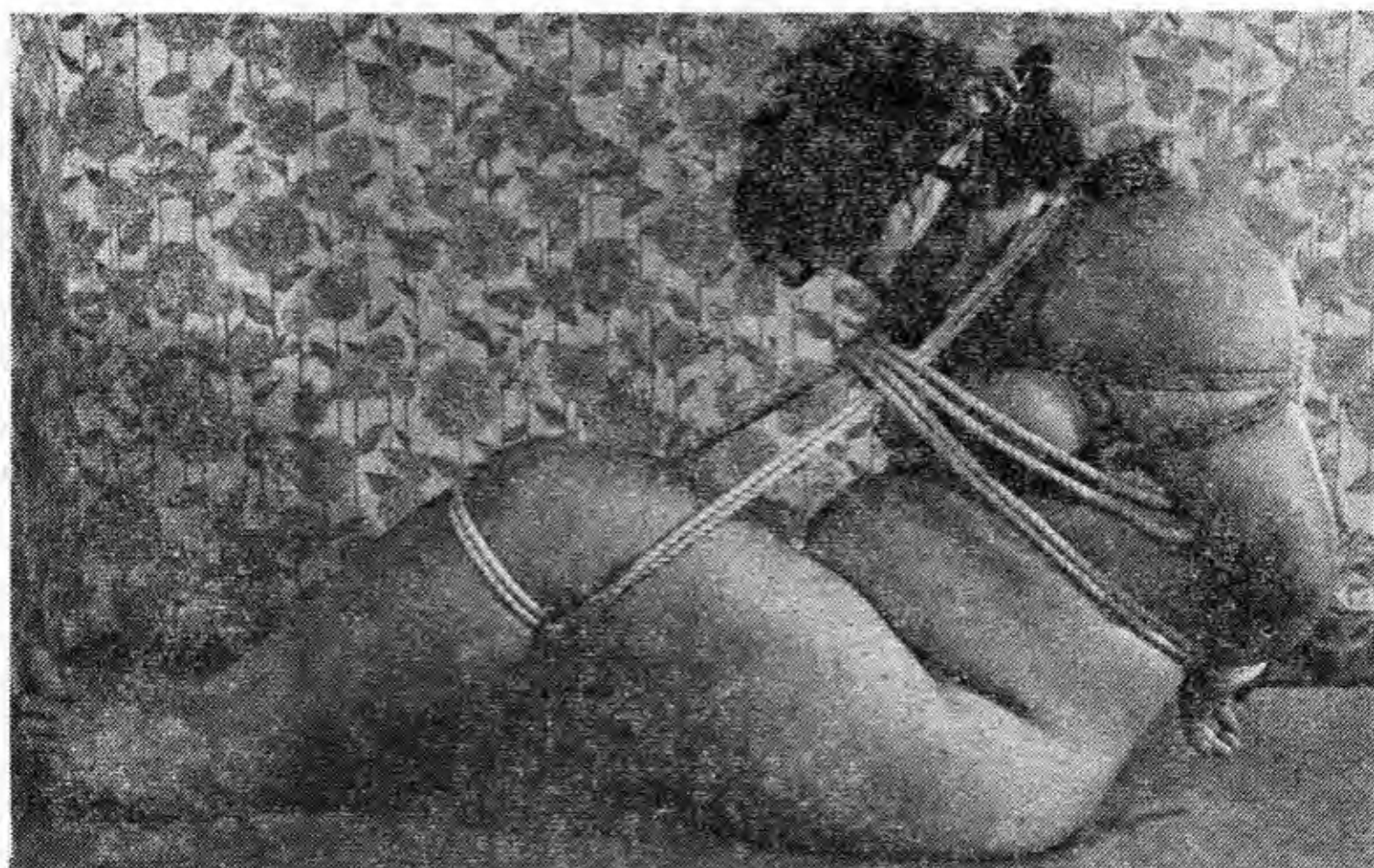
「まあ！」

彼女は一目、自分の腹部を見て絶句し、そして、直ちに目をそらしてしまう。

「どうだ、読んだかい。白豚——艶子だ。ハハハ、嬉しいだろう。自分の肌に、こんな字を書いてもらって。さあ、嬉しいですよ」と言っでござらん

彼女は無言のままだ。

「「白豚艶子と、書いて頂いて嬉しいですよ」と言っでござらん。言わないナ。言わないと、身体中を、絵具で塗りつぶすゾ」





「言います、言います。あの、嬉しいです」
「なんだか、簡単だな。だが、まあ、いいだろう。そんなに嬉しいんだったら、もう一つ白豚って、いうところに丸をつけるか」

「ああ、やめて、もう、勘忍して……」

「新年号の奇クサロンでは、仕上太郎って言う人が、私のSMプレイは、まさしく、△愛

姦△ではありませんでしたって言うんだよ。どうだ、艶子。ここらあたりで、縛ったままその「愛姦」とか言うヤツをやってみるか」
「愛姦って、私には、何のことだか、わかりませんけど、もう、どうでもいいんです。あなたのお好きなようになさって……」

全身が性感帯のような山口艶子だ。

縄が裸身に掛かると忽ちにして燃え上る。そして、この絵筆に依る文字書きだ。

私は「豚子」の太い足に手をかけた。

「もう、どうでもして頂戴」

彼女の全身はメロメロだ。だが、流石に、彼女は、そのとき、痛がった。

「痛いけど、私、辛抱するう」

これが、「愛姦」というのだろうか。

それは、人間というより獣じみていた。

ケモノになりたい——という女が相手だから、自然と、そうなってしまうのか。

それとも、私自身、生来、そんなエキセントリックな行為が大好きなためなのか。

そこに展開されたメスとオスの斗争は、筆にすることさえ憚られる内容だった。

例えば、汚れたままの洗わないものを、彼女の口で清掃させる行為だって、お互いに、昂揚していかないときだったら、とても出来ないことだった。苗木陽子が、始めて、ソレを行ったとき、私は思わず、「それは汚いぞ」と叫んでいた。それが、どうだろう。彼女とのSMプレイでは、それが日常茶飯事になり更に、大山啓介氏夫人とのプレイでは、それが重要なプレイ事項になってしまっていた。

今、この山口艶子とは、上下の口の往復



があたり前のことになり、私自身も初め抱いていた汚穢感が、すっかり、なくなっていた。

執拗で、しかも貪婪に、お互いをむさぼり合ったが、胸にコブを作った縛り方では、胸を合すと私自身の胸も痛かった。

縄を解いてから、私は言った。

「背中と、お尻に、何と書いてあるか、風呂で洗い流す前に、姿見にうつして、よく見てくるんだナ」

☆乳枷責め

「お湯をかけたら、字は、すぐにとれたわ。でも、縄のアトが、ほら、こんなに……」

二の腕には、むごたらしいほどの縄目が、くっきりと残っている。手を当てると、縄の目そのままの肌の窪みが感

じとれる。

「ねえ、ここもよ。ほら……」

乳房の脇の胸のところだ。彼女は、そんなにして、湯上りの自分の身体の各部を私の目の前に晒す。縄のアトに、こと寄せて、肌をさらしているとは思えない。

私も、胸の縄目のアトを見るふりをして、乳房に触れ、乳首にタッチする。愛撫という積極的な形式ではなしに、他の目的で、なにげなしにタッチされるのが、女性の坎どころを、いたく擦るものなのだ。だから私は、縄を掛けているときでも、それとなく、わざとらしくなく、つとめて乳首に触るようにしているのだ。触れるか、触れないかのソフトタッチで、軽い刺戟を加えるのを忘れない。

山口艶子も、乳房、乳首には敏感だ。

それで私は、この前に彼女を責めた経験からして、わざわざ、このデッカイ乳房を責めるための手製の乳枷を作ってきたのだ。

乳枷といったって、特別のものではない。動力線の針金を抜いたビニールを乳房の大きさに輪にただけのものだ。その輪を、左右二つの乳房に連なるよう眼鏡のように連繋させたという二つ輪に過ぎない。

私は先ず、彼女の鋭い爪の攻撃をさけるた

めに、両手首だけを背後で括った。

そして、前面に洋梨のように、大きくぶらさがっている乳房に、すうっと乳枷を嵌めて根本まで押し込む。ただでさえ大きな乳房がまるでお椀を伏せたように、むっくり立って見事に盛りあがってきた。

乳枷の両端に縄を掛けて左右に引き絞り、上端を肩越しに縄で引きつめる。これで眼鏡のような二つ輪の乳枷は、ぴったりと乳房に密着してしまったのだ。

まん丸い、なんという豊醇な乳房なんだろう。その二つの円球が、まるでそこだけが別の生き物のように息づいているのだ。

乳枷で上へ引き揚げられているから一段と乳房が上を向いて大きく見えるのだ。

私は、さっきの絵筆をコップの水で洗ってから、その濡れたままの筆先でピンと突き出たように立っている乳頭の平らになったところを、くるくると丸の字を書いた。

「ああ、許して……」

敏感な乳房だ。

乳枷で飛びだした乳首を筆先で責め



られたって、両手が使えないのだから、はねのけるわけにもいかない。無防備に、前面に突き出ている乳房は防ぎようも、隠しようもない。

畳の上を転げまわって逃げようとする。

私の手にした濡れた絵筆は、執拗に逃げまわる乳房を追ひ、乳首を襲ってゆく。

ハアハアと彼女の荒い息。波打つ腹部。動けば動くほど、乳枷は締めまり、乳房は、むっくりと、でっかくなるばかりだ。

「ああ、ああ、やめて、やめて……」

彼女は喘ぎながら逃げまわる。

絵筆は、意地悪く、どこまでも追っかけていって、乳首を撫でまわす。

もう、逃げても逃げても、逃げきれない。

全身が汗ばんでヌメヌメと脂ぎっている。

飛び出している大きな乳房。それは乳枷によって強調され、もう、どうにも隠しようがない。乳首も益々大きくなってきた。

ネチネチと粘っこい乳房責めだ。

「今日は、犬の首輪とゴムのベルトは持ってきていないから、その方は許してやるから、この絵筆の味を充分、噛みしめるんだナ」

「おお、私、もう、辛抱できない。

おおお、許して頂戴。身体中が痺れてしまっ、辛抱できないのよ。おお、許してエ……」

彼女は遂に泣声を出し初めた。

この密室にもムンムンした熱気が漂ってきた。お腹が大きく波を打って、深く窪んだ臍窩が彼女の喘ぎにつれて、広くなったり狭くなったりしている。

そんなのを見るのは、私は初めてだった。

見ていて、私も凄く興奮してきた。

男として興奮するな——という方が無理というものだろう。

私は飛びかかるようにして手拭で、目隠しをした。これで、もう彼女の目は見えない。

女の目が見えないということ、は、私が、彼女の身体の上に、どんなハレンチなことか、エッチなことをやったらって構わない

ということだ。なにしろ、山口艶子は全裸で縛られて転がされ、しかも、さんざん、乳房責めで、揉みに揉まれた挙句の果てなのだ。

仕上太郎氏の言っている『愛姦』に、走るとしようか。私にしても、こうまで、彼女に悶えられると、辛抱できなくなるのだ。我ながら、何度も何度も、気がひけるが、猫の



目の前の鯉節で、こたえられないのだ。

二人、三人の女と同時に接したり、また、一人の女とでも、この艶子のように、夜を徹して休みなく相手にする際は、やはり、接して洩らさず、燃えても狂わずという鉄則を守る必要がある。そうしないと、いくら私でも最後の最後まで、おつき合いしかねる。

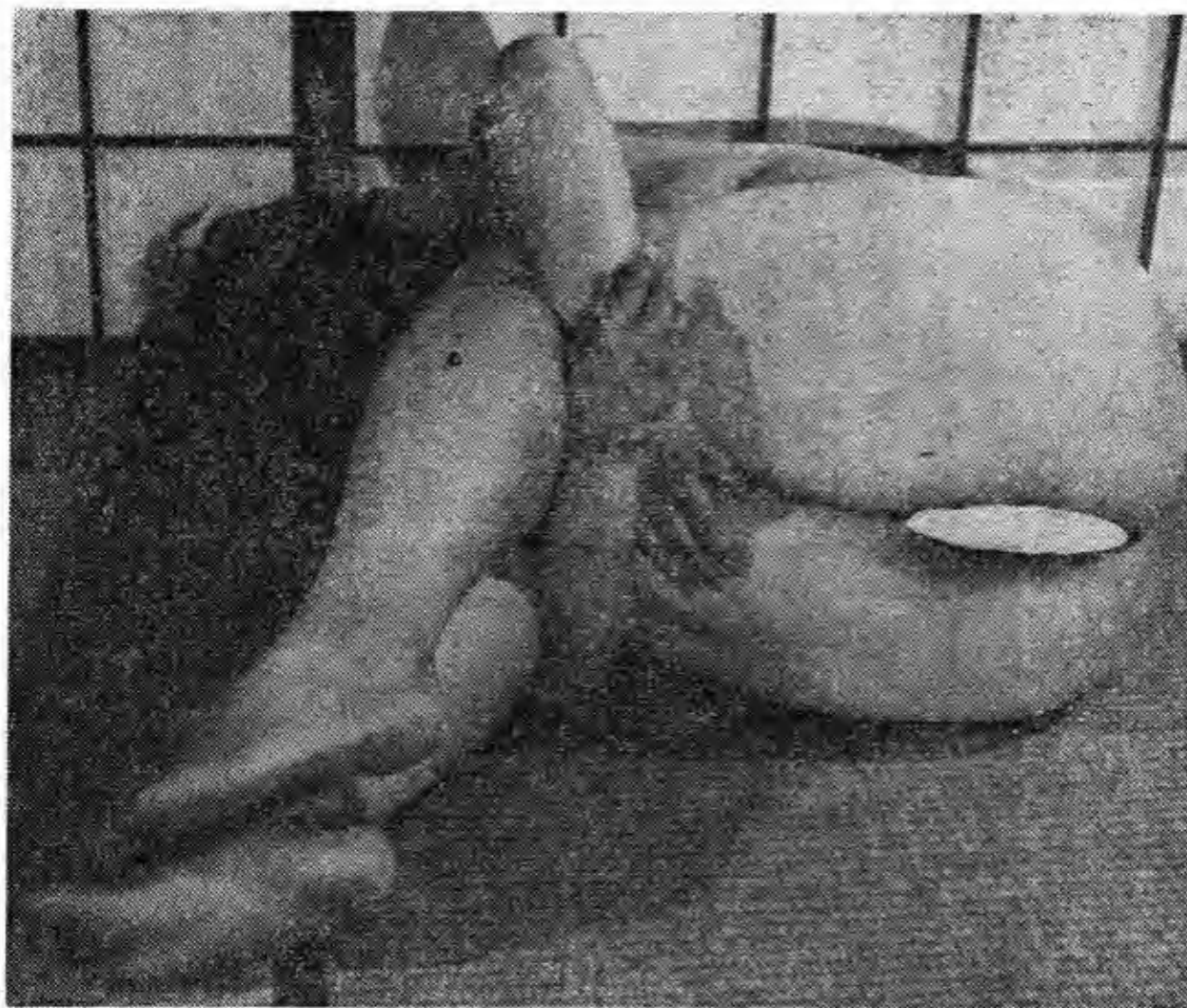
例によって私は、そのときの彼女の顔の表情の変化を中心にして、身体の端々の表情の変化に至るまで、具さに観察した。

いつまでも没入し、貫いていたい私。そしてこのまま死んでしまいたいと願う彼女。

「乱暴に、乱暴にして……」
囁言のように、そんな言葉を咬いていた艶子も、遂に、「オルガスムスにさせて」と叫ぶまでになった。何から何まで、相手の男性にして貰うなんて、虫が良すぎる。

所詮、M女なんて、そんなものかも知れない。いや、この山口艶子は、Sの気も多分にあるかも知れない。もし、この引白のように、でっかい豊臀の下敷にされたいと願うM男性が、彼女とSMプレイをやったとしたら同じこと、叫んでいたかもしれない。

そのとき、シンと静まり返っていた戸外で急に激しい雨音がした。風を混じえて何の前ぶれも予告もなしに、降ってきたように、私



には思えた。しかし、ひよっとしたら、私たちが倒錯劇に夢中になっている間に、既に、その頃から降り出していたのかも知れない。沛然と、車軸を流すような雨が、このポツ

ンと建ったモーターを、押し流さんばかりの勢いで、轟然と音を立てていた。降り坂だ、降り坂だと言っていたが、とうとう雨になったか。この調子だったら、明日

一日は雨だナ——と、考えた。そして、ふと、戸外へ仲良く揃えて脱いでいた隣のアベックの靴、あの二足の靴が、この豪雨で、どうなったかな——と思った。

私は腕時計を見た。午前四時、少し前だ。

なんだ、明日は雨だ、と思ったが、もう今日になっているわけだ。

見れば、彼女は深い昏迷のなかにいた。

私は、このまま、もっともっと、溺れたかった。爛れたような肉欲の世界の彼岸を、貪るように見極めたいと思った。

☆肉感的な女体の魅力

ベッドは一向に使われないうまま、荷物置場のような格好になっていた。

私は乱雑に取りちらかした小道具類を片寄せて、掛布団の上に仰向けになった。身体を横たえたと、突如として睡魔が襲ってきた。眠ってはいけない、眠ってはいけない。

そう思いつつ、私は余りにも快い睡魔の誘惑に負けて、とろとろと、まどろんでしまった。

「ねえ、もうしないの？」

私の傍で、胸から下をバスタオルで巻いた山口艶子が立っていた。こんなに近々と寄り添っているところを見ると、私を揺り起したのだろう。

「寝た子を起す」ということは、文字通り、このことを言うのだ。五分か、三分か、寝入っていた時間は、覚めたばかりの私には、わからない。

だが、起されてみると、頭が冴えていることは確かだった。このまま、この女をベッドへ引きずり込んで、彼女の言う「乱暴」な行為に移るか、或はまた、もう一度、類稀なボ

リニームのある彼女の肉体を厳しく縛り上げて、縄に依って、どのようにメロメロになるかを見てやろうか。

私は後者を選んだ。

「よし、写真を撮るゾ」

跳ね起きて浴衣を裸身にまといぶ厚いカーテンを一寸めくって硝子窓から外を見た。

戸外は、依然として真っ暗だ。

「さあ、こっちへ、おいで」

私の誘いに、彼女は、いそいそと、寄ってきた。何かを期待したような媚を含んだ身のこなしようだ。この女、一体、睡くはないのだろうか。疲れたとか、睡いとかいった気配を、いささかも見せないのだ。

「ねえ、あなたお一人じゃなしに、何人もの方に、責めて頂けるかしら？」

「そりゃ、艶子のようなタフな女を、とことんまで責めてみたいっていう男は、ゴマンといるよ。なんだったら、S研の仲間で、腕自慢のベテランを集めようか」

「私、こんなこと言うの、とっても、恥かし



いんだけど、何人もの男の方に、同時に輪姦されてみたいの。なんとはなしに……」

「一番最初の経験が忘れられないって、わけか。苗木陽子も森田美美子も、そんなことを言っていたが、女って、潜在的に、輪姦願望っていうヤツを持っているんかナ」

「もし、私、縛られたままで、四人も、五人

もの男の人たちに、そんなにされたら、私の身体がどんなになるか試してみたいの。きっと、最高だと思うわ」

「目隠しをするか、顔を隠すかすれば、どんなことをされてもいいって言うんだろう」

「ああ、それ、何なの？ なにをするのよ」

「顔を隠してほしって、言っただろう。だから、このオシメカバーをかぶせてやるんだよ。そら、嬉しいだろう。この股のところから目を出して、すっぱり顔は隠してやる」

猫に紙包をかぶせると、完全に手足の自由を奪ってしまうことが出来る。目が見えないから、何も

出来ないのだ。

山口艶子はオシメカバーをかぶせられて、身の自由を奪われていた。人間の身分を剝奪されてケモノの境遇に転落したのだ。

私は、この猥らなまでに肥え太った白豚のような女体に対して、情容赦なく、むごたらしいまでの縄を掛けていった。

見事だ。全く見事という外はない。
縄で拘束された、この豊かな肉体は、ムクムク、モリモリ、逞しく盛り上っている。

このデッカイお尻は、どうだろう。真っ白でシミ一つなく、輝くように脂ぎっている。

太股、そして脛（ふくらはぎ）共に、なんとまあ、太いことだろう。だが、太いことは太いのだが、やはり若い女の肉体の一部だから、なんともいえない色気があるのだ。

ガブッと、かぶりつきたいような瑞々しさなのだ。こんな素晴らしいポリウムのある女体って、そうザラにはないだろう。

☆

この前、そうだ。△ブルーデイの休日Vで私を訪ねてきた山口艶子には、あの、タンポンのお蔭で、私は彼女の『秘境探検』は意のままにならなかったのだ。

今日こそ、これから、ゆっくりと、小口こぐちの狭隘なところ、所謂、処女膜痕跡の謎を極めたいと思った。

その度毎に、「痛いけど、辛抱する……」と言う彼女。たしかに、その言や、マゾ女としての絶叫のように聞える。しかし、その際の私としては、勝手がよくないのだ。

そのところが、一体、どんなになってい

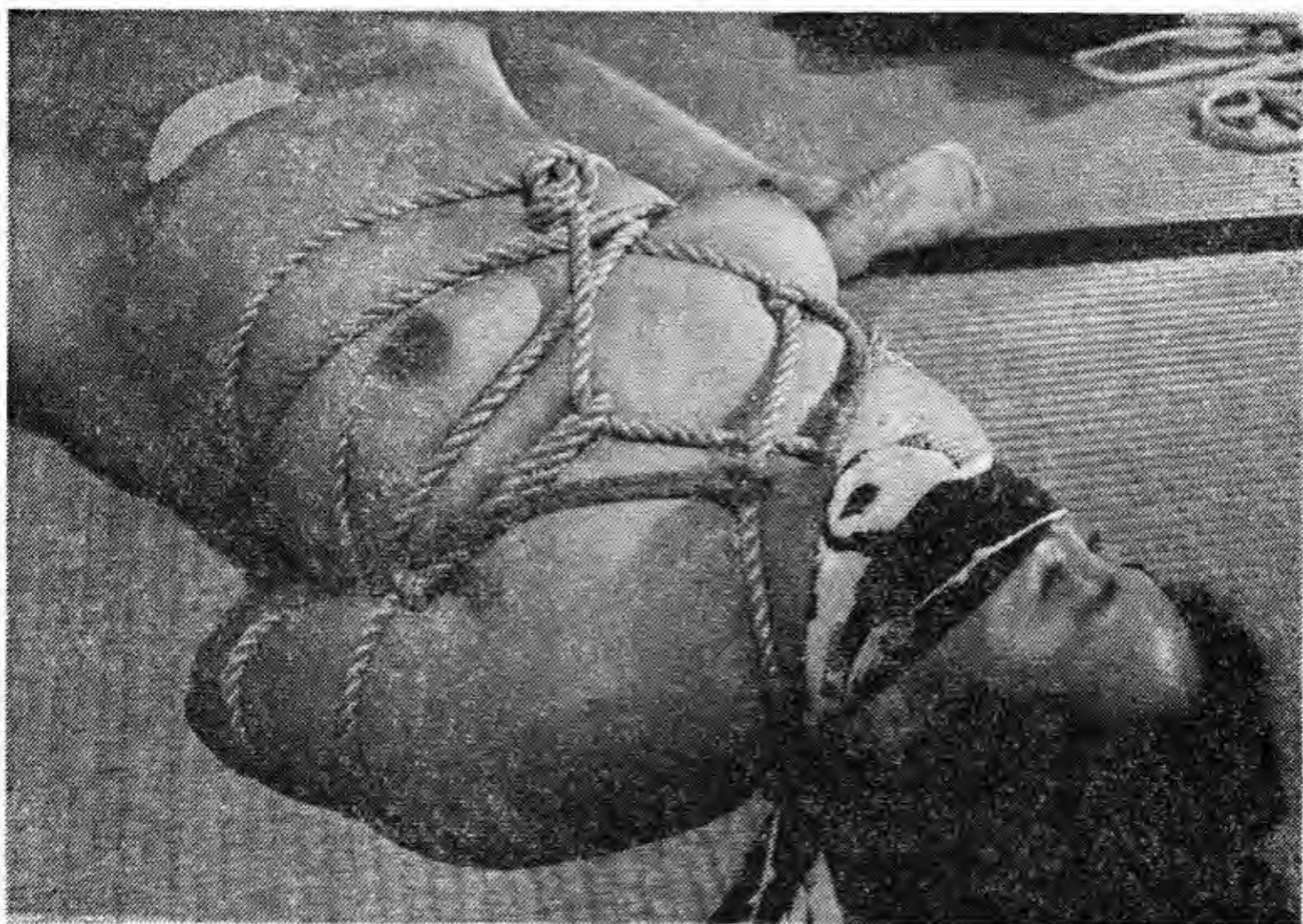
るのか、そこが知りたかった。目の前に、無理矢理さらけだしたかった。

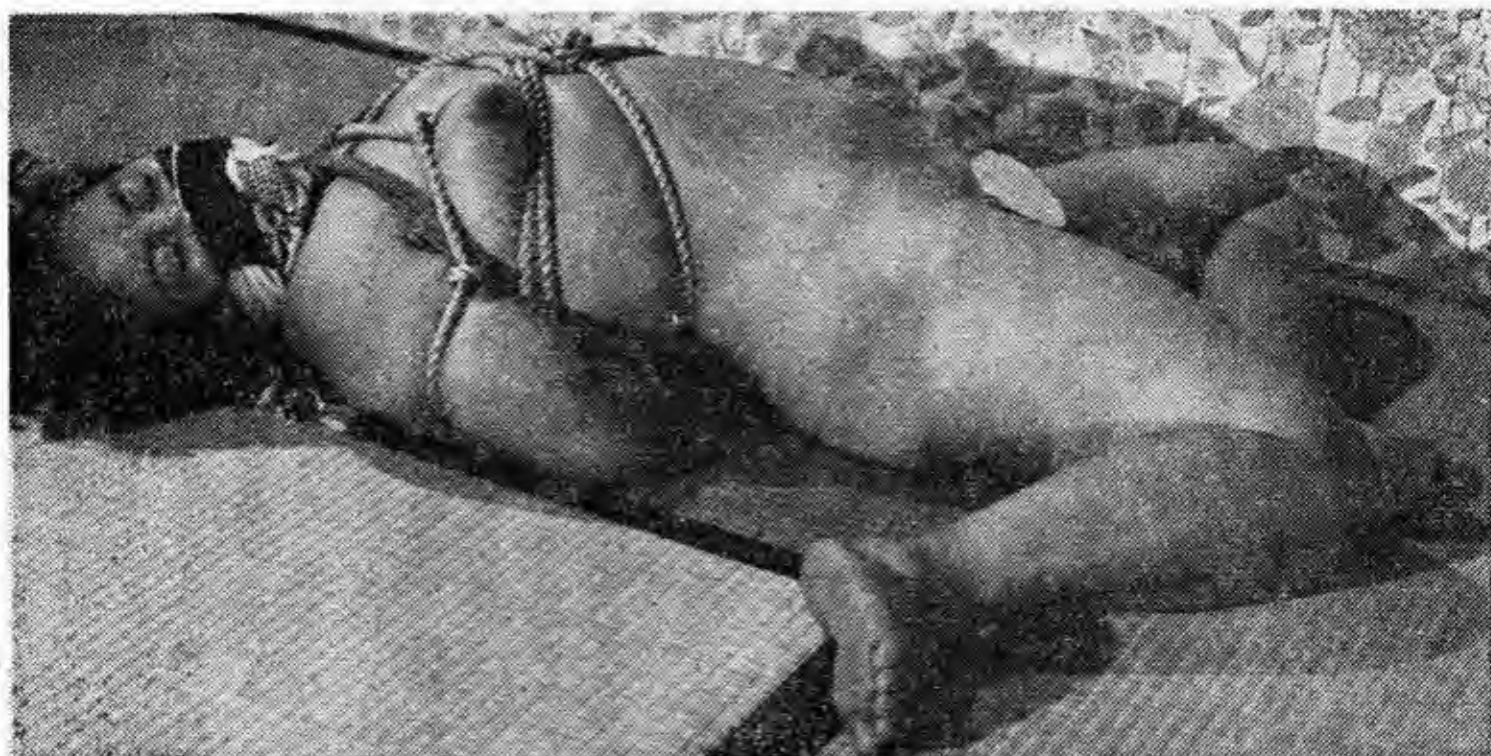
何十人も違う女を見ても、何度眺めても、飽きることはなかった。やはり私としても、正直いって、それを見たくて仕方がなかった。そこが、どんな構造になっているか、どんなに違っているか、見くらべたかった。

見たい——見れる——と思うと、胸が高鳴り、身体中が熱くなった。

そこで、私の縛り直した縛り方は、ケモノスタイルの臀部強調縛りだ。といって、特別に変った縛り方でもない。お尻丸出しにさせて、両手首を両膝の下で括るのだ。

私の目の前で、でっかいお尻が、小山のように盛り上っている。そして、その





双丘の奥に、大きいお尻に比較して、チンマリと澄ましたアヌスが息づいていた。

きゅっと、オチョボ口を固くつむって、放射線状に褐色の皺を走らせた可愛い菊の蕾が、私に微笑みかけている。

人差し指にタップリ唾をつけて、菊花に近づけていった。私の大好きな指浣腸だ。いわばアヌスに対する触診のようなものだ。

絹のようなアヌスの、とろけるような触感が、途端に、私の指をすっかり銜え込む。

粘膜の柔らかさと、括約筋の絞めつけとが交互に、指をまろやかに、まるめるのだ。

その絞めつけの度毎に、臀部の中央の尻えくぼが、かすかにケイレンした。いや、ケイレンの度毎に私の指が絞めつけられた。

指浣腸――。

それを繰り返していると、その前の方が次第に変化してきた。

この縛り方は、特に苦痛を与えるといった縛り方ではない。だけれども、お尻を、すっかり、むきだしに晒してしまうので、女にとっては、とても羞かしい縛り方なのだ。殊にこの山口艶子のような豊満な臀部の持主にとっては、責手に背後に回られると、何をされるやら、死角になって、さっぱり見えないの

で、不安感是一段と増すことになる。

それからの私は、あるだけの縄を持ち出してきて、逆エビ縛り、片足の逆エビ縛り、仰向けの開股縛り、臀部突出しのケモノ縛り、などを、次々とやっていった。

縛っては解き、解いては縛り、いろんな縄が次々と、豊満な白豚の肌を、擦り、締めつけ、縊っていった。

全身これ性感帯という山口艶子の肉体が、これによって暴発されない筈はなかった。

何度目かの縄を解いたとき、縄が解かれるのを待っていたかのように、彼女の太い腕が私の首に巻きついてきた。

「ねえ、私、もう、写真撮られるのはイヤ。縛ったり、解いたりだけしてるのって、たまらないワ。ねえ、この身体、どうにかして頂戴。このままに、しておかないで……」

中腰になったり、腹這いになったり、膝をついたりして、緊縛と撮影とをやっていた私は、いい加減、腰や太股、胫が痛くなっていたので、彼女の七十六キロの体重をモロに寄せかけられて、よろよろと、よろめいた。

よろめきながらも、さっと、右手を伸ばして、彼女の前を素早く探ってみた。
あっ、凄い！

もう、溢れきっているのだ。

私はバックドロップの格好で、彼女諸共、仰向けに倒れ込むなり、開いた雑誌を閉じるように、豊かなクッションの上に、重なっていた。耳^{たぶ}孕を前歯で軽く噛んでから、彼女の耳もとで、そっと囁いた。

「もう写真を撮られるのは嫌って言ったね。だが、二人で仲良くしているところを、バッチリ撮ってみないかい？ 僕と艶子と二人で共演するんだったら、それは凄い写真が撮れると思うよ。それにネ……」

私は、そのアト、極端に卑猥な言葉で、彼女の好き心をあふらたてた。普通だったら、女性として耳を掩いたくなるような猥雑な俗語を並べた。だが、場合が場合だけに、彼女は、じっと身を硬くして聞いていた。

激しい胸の動悸が、私の方に、じかに伝わってくるのを見ると、効果は充分にあったようだ。あの上品な苗木陽子に強要して、自分の口から、「私は今、××××を塚本様にさせています」と、俗語で喋らせたときの感激を今でも忘れることが出来ない。

私はニヤリと、ほくそ笑んだ。

「どうだい。写してみようか？」

「だって、そんなお写真、なんにも、利用価

値って、ないんでしょ？」

「そりや、そうさ。人に見せるわけにもいかないしね。もっともポルノ解禁にでもなれば別だが、日本の現状では絶望だからね、利用価値なんて零^{ゼロ}さ。でも、艶子と僕と二人で見分には、差し支えないだろう」

「いやヨ、いやヨ。そんな自分の写真を見せ

られるなんて、絶対にいやヨ。それよりも、ねえ、あなた、ホラ、あそこにある大鏡、あれに映して、二人で見ましょーよ」

このメス豚奴、さて、どのように料理してやろうか。私は羽織っていた浴衣を脱ぎすてて全裸になっていた。

今では、どこのラブホテル、モーターでも



こうした鏡を備付けるのが常識になっているが、それだけアベックから受けるのだろう。襖を開けると一面の大鏡というのなんか、ザラにある。以心伝心、二人は、少しでも離れるのがイヤという風に、ひつついたままで鏡の前に、いざっていった。

鏡の向うには何があるのだろうか。こちらの部屋の有様が、左右対照に、逆になってそのまま、向うにも存在しているのだ。

どちらが実で、どちらが虚なのか。

それは、もう、今の私には、わからない。

「ケダモノの格好にさせて……」

山口艶子が本音を吐いた。

よくよく、獣になりたがる女だ。

目の前に紫色のベールが幾重にもかさなり合って、それが縋れあいながら、どこまでも連なっていた。それはもう、全身が宙に浮かびあがったような快感の連続だった。

どこまでも、どこまでも、それは途絶えることなく、深く、奥深く、続いていた。

この世の中に、このように素晴らしい快感がまたとあるものだろうか。

深淵に溺れながら、私は徐々に意識を失ってしまっていた。

☆

「あなた軽い寝息を立ててよく眠っていらしたわ」

彼女の身うごきで、私は目を覚ました。

「艶子は眠らなかったのかい？」

「う、ふふふ、どうでしょうかしら」

彼女は眠ったとも、眠らないとも、はっきり言わない。どうも、それが薄気味わるい。

カーテンの隙間から眩しいような朝日が、縞模様射し込んでいる。

朝だ。しかも、快晴の朝だ。雨も、すっかり上っている。私は跳ね起きようとした。

あっ、親父は眠っていたのに、坊やの方は元気に起きていたのだ。こんなことって、一体、あるだろうか。彼女の方が、なにか、仕掛けをやったのではないだろうか。

「もう、お起きなるの？ ねえ……」



彼女の方は、まだ離れそうにない。

ああ、そうだ。ケモノスタイルから始めて、あれから、どれだけ、彼女に嬌声を挙げさせたことか。そのことが、私の脳髓の奥底で、甘酸っぱく反芻させられた。



適度の反省と甘美な快感とが入り混じって私を複雑な気持ちにさせたが、朝が来た——という気分一新が、私の全身に力を漲らせた。

「もう、これが最後だゾ」

「ええ、わかってるワ」

軒をつたう雨だれの音が間遠うにしているのを数えながら、私は朝風呂前のひとときを快適に過ごしていた。

連休の二日目。物凄く良いお天気だ。

朝風呂に浸りながら、窓をいっぱいに開けた。着いたときは日が暮れていたもので、わからなかったが、裏は一面の深い竹林だ。

身仕度を整えて表へ出ると、車のボンネットとフェンダーに吹き降りの雨がかかって、びし濡れになっている。

空を仰ぐと、雲一つない青空だ。

周囲を見まわすと、三軒のモーター以外に人家もなく、ただ鬱蒼とした雑木が取り囲ん

でいて、一条の細道だけが、うねうねと、この丘の麓の方へ続いているのが見えた。

私は荷物をトランクに投げ込んでから、エンジンかけた。道の両側の樹々の枝は、まだ夜半の雨に濡れそぼっていて、車が通るとフロントガラスに水滴を、ちらばめた。

その水玉が朝日を受けて宝石のように輝いている。昨日一日の曇り空が嘘のような雨上りの、からりとした晴れわたりようだ。

「まあ、きれい。目がさめるようだよ。それに、あんなに小鳥が鳴いている。私、奈良へ来て、ほんとうに良かったわ。昨日から今日にかけて、まだ、夢みてるみたい……」

舗装していたが一車線強の急坂をローで、ぐいぐい登って信貴山へ向った。山頂から生駒山へ向って、信貴生駒スカイラインが通じている。大阪平野が目の下に一望のもとに見渡すことが出来る。連休、そして雨上り、今日は、いつものスモッグも見当らない。

「私、幸せ。奈良へ来て良かったわ。是非、また来たいわ。今年はもう駄目だけれど、来年の春には、ゆっくりと来るわ」

そう言って、山口艶子は、うっとりとした表情で宙を見つめていた。

——（おわり）——

さるぐつわ

(第五回)

—この美しきものの詩と真実—

—新 川 裕 夫—

十二 曲亭馬琴

いよいよ曲亭馬琴を読むことにしよう。

実は私は今回に大いに期待するところがあつた。というのは、博覧強記、その上にたつての考証癖のある馬琴のことだから、猿轡について何か有益な証言が得られはしないかと思つたからである。果たしてこの私の期待が満たされるか否か、これから一緒に馬琴を読むことにより、おのずから分明とならう。

『朝夷巡嶋記』

ここにある毒殺未遂事件が、おこつた。その責任を感じて且見姫という美しき女は自害をすべく、刀を咽喉へ突き立てようとする。

「危い」とばかり家来の薬二郎は、その刀を打ち落としたが、姫の必死の覚悟を彼女の美しい表情から見てとつた彼は、遂に非常手段に訴へんことを決意する。

即ち——

腰に着たる三尺帯を、手ばやく解て口もて引裂き、繋合して且見姫の、腕を背へ振揚れば、声うち立て泣給ふ。口に手拭衡しつ、緋々と縛て、出居の柱へからまいてというのである。

「口に手拭衡」せたのであるから、女の口を割り、手拭をくわえさせて、後頭部で縛つた

型式であらう。

女は、その時、声を出して泣いていたのであるから、口もあき加減であり、後ろから手拭をくわえさせるのにも好都合であつた。この型式は防声上からみると、容易のわりに、かなり効果的であると考えられる。家来の薬二郎は主人の姫をさらおうというのでなく、しばらく黙らせておくのが主眼であつたから口中に、つめ物をし、その上を手拭で掩う本格的猿轡は、この場合、考えもつかず、また必要でもなかつたのである。故に防声上、次善の処置であらうが、くわえさせる猿轡を採用したのであらう。

しかし薬二郎は、姫の後手を「緋々」と縛つた如く、猿轡においても少しも容赦しなかつたのである。

それは少し後での姫の描写、物をいはれず手の働ねば、軋つ軋びつ身を悶て、乱れくるしき黒髪の、千行の涙も人の死も、禁かねてぞ泣給ふ。

という所から充分、想像がつくのである。と、薬二郎は主人である姫に猿轡をはませ、柱に縛りつけると、その前に、うやうやしく手をついたのである。そして、姫にかわつて

毒殺未遂事件のあかしを立てるために「ここで死なずば後の日何の面目ありて殿に見参すべき」というのである。

忠臣の自殺を目のあたりにしても姫は、どうすることも出来ず、そこで先に引用したような状態となる。

「お前、いけません。死んでは、だめ！」姫は、きつとそういったであろうが、聞こえるのは、ただ「う、う、む、む……」と、うめく声のみ……。それを耳にして一瞬、薬二郎



は、自分のした猿轡の效果の万全性に満足の笑みを漏らしたかもしれない。

ここで一寸、話はそれるが、薬二郎という男、それから姫に、いろいろ自分の心中を語り「われは素より村落なる、瘦百姓の子にあれば腹切るすべも知らねども、美も悪も身を劈きて、死するに難き事やはある」と、

やはり切腹してしまうのである。

そしてやよけん、かくやせましと意中に工夫の（私註、切腹のやり方）眼を閉て、霎時念ずる六字の番号、又短刀を取なほして、単衣の袖に巻簞つつ、余す刀尖五六寸夏なほ寒き豊城の、霜乎氷乎、明晃々たる刃の光り今さらに、眼を射られ、膚撓みてもおもはずも惆悵たる、志を励して、力を究めて両手をかけたる、目誠は左の脇腹へ、刀尖貫刺と突立れば、迸と瀆る鮮血と共に

霎時も得堪ず苦と叫びて、仰面倒れて苦む随に、（中略）薬二郎は羞たりけん、苦痛を忍びて左手をつき立、膝折回して起直る。半身既に血に塗れて、瘡口より頭れ出たる、大腸小腸膝を掩ふて、松に垂たる秋薦、岩に掛りし海藻に似たり。以上は、特に奇クの切腹マニヤに対するサービス。あまり凄くなかったかな。お粗末でした。

閑話休題。

さて、笹鶴という、もと白拍子。今は出世して数人の侍女を使う身分。山の端出ずる名月夜、おぼろにかすむ、その有様に浮かれて広い築山のおあたりを、そぞろ歩きをしていたその時だ――

頭はれ出たる大漢士、飛かかって笹鶴が衿を掴むとする端に、しっかと食せし猿轡。（中略）

笹鶴はただ仰天して、敢て兎角の事も覚えず、生たる心地もなきまでに恐れ惑ひて身は戦慄れ、叫ばんとすれど声はたたず。

これは、もう明らかだ。「食せし」猿轡であるから、女の口を割り、手拭をくわえさせて、後頭部で縛った型式である。

それも「しっか」と引きしぼって後ろで結

んだ猿轡なのである。きっと女のふっくらした頬はキュッと、くびれて、SM味が充分であつたろう。「叫ばんとすれど声はたたず」は、たんに「ああ、あたしは可哀想に今、猿轡をされているの。だから声は全然、出ないんだわ」という女性の悦虐心理のなせる、わざのみならず、この場合は、「しっか」と、はめた技術的な要素の比重が大であると見るべきだ。

話は変わる。ここに磐手^{いわて}という女刺客がいる。彼女は朝夷三郎を殺すべく、その屋敷に侵入したが、翌日になつても、もどって来ない。そこで「磐手を敵の手から助けるための会」のグループが、ひそかに、しのび込んであっちこち探すと――、

果してここなる袋戸の、裡に何やら物ありけり。此処なんめりと押開くに、磐手は手足を縛られて、口には布もて猿轡を、かけられて蹲み^{つぐみ}をる。

のを発見したのである。急いで彼女を、ひき出し、

猿轡を外し^{はず}

てあげる。

さて、この女のされていた猿轡は、一体、どんな型式であらうか。最初、私は一寸、迷

つたのだが……。

「外^{はず}」すという表現は、手拭をくわえさせる型式の猿轡でも、口の上を掩うそれでも、要するに、その猿轡を取り去る場合に、使用する。故にこの段階では、いずれの型式とも決定し難いが、少し後で磐手が彼女自身、語るところを聞けば、何か解く鍵がありそうだ。自分のされていた猿轡であるから、彼女はその型式を一番よく知っている筈ではないか。

この女はいう。

後の穿議の種なれば、と縛り揚て彼処へ入れ、猿轡さへ懸られたれば、物いふこともならずして、はや頓死^{とんし}ねよと思ふても、夫^{それ}すら己^{おの}がままならず。

磐手にしてあつた猿轡は、彼女をして第一にしゃべることを得せしめず、第二に早く死ぬのうと思つても、それを実行不可能にするという効果を、もたらしたのである。

特に重要なのは、この第二の点であらう。

この女は早く死ぬのうと思つたのだ。しかし縛られているのだから、そのためには舌をかみ切る以外にはない。しかし猿轡によって、

「夫^{それ}すら己^{おの}がままならず」なのである。故に

この場合、猿轡は舌をかむことが出来ない型式、つまり、口中に、つめ物をするか、手拭

をかませるかの、いずれかの型式が使用されていたと考えねばならない。そして、この女を助けた曲者の行動を、ただ簡単に「猿轡を外し」と叙しているところからみて、後者の猿轡、即ち女の口を割って手拭をかませた型式であることは明らかである。磐手の猿轡はこれであつた。

『新累解脱物語』

玉芝という美女が密夫と、かけ落ちする。必死になつて追手を逃げ、とある古寺に身をかくすべく、疲れた足を引きずり引きずり、やつて来る。この姿が、何で土地のゴロツキどもの目にとまらぬ訳があるう。密夫は悪漢の一撃で忽ち昇天。

玉芝これを見るに悲しく、こは何とせん／＼と泣叫ぶを、又一人の荒男つとよりて手拭はませ、腰に著たる列卒^{せきそ}縄もて、くる／＼と縛め、

玉芝を引き立てて走り去るのである。

猿轡をされ、縛られ、さらわれ、つまり玉芝は、女として、もつとも、ふさわしい姿となつたわけである。

さて、玉芝のされている猿轡は「手拭はませ」であるから、手拭を細くしごき、女の口を開かせ割るようにかませた型式である。こ

れは既に何度もみてきた如く、男が女をさらう時、最もよく使用される猿轡の型式であった。

さて、これは私の猿轡分類第八にあたる変型猿轡であるが、この物語に極めて興味深い描写が出て来るのである。

累という貞実な女が、あやまって良人に殺されてしまうところがある。

累ははやく声聞しりて、喃わが良人、といはせもやらず、砂をはませ鎌とりなほしやがて吭を掻断たり。

男は累に声を立てさせぬため猿轡をする必要に迫られたが、手拭、あるいは、それに類する布切れを所持していなかったたので、とっさに女の口中に砂をつかんで一杯に押し込んだのである。つまり、砂を「はませ」たのである。

女のやわらかい口中に砂とは、私のようなロマン派の一人を自認する者にとっては唾棄すべき事で、決して、とらないものである。

砂の猿轡は美しくない。醜悪とさえ、いふべきであろう。そんな目に女を会わせる、この男を憎む。ロマン派の総帥ロマン派生氏を見給え。氏は女囚みさ子の口中に脱脂綿を、つめこんでおられるのだ。

では何故、私がこれを取りあげたかという
と、「はませ」という表現が、如何なる意味において馬琴に（広く江戸文学の作者達に、
といつても、よからう）使用されているか、
一番、正確、且つ明瞭に分かるからである。

砂であるから、女の口の上にかぶせるように塗り付けても、すぐ落ちて防声の役をなさない。だからこの場合は、どうしても女の口中に砂を一杯、つめねばならぬ。故に「はませ」とは、口中に何か物をつめた状態をいうことが、これで明らかである。猿轡にあつては、口中につめ物をし、その上から手拭で被う型式、または手拭を口にくわえさせるものの二種が、すぐ考えつくが、厳密に言えば前者の型式こそ、この表現にあたらう。

しかし手拭を口にくわえさせる型式でも、つめ物よりは口中に空間があるが、やはり口中に、つめ物をする、の型式であることに間違いない。よって江戸文学において猿轡を「はませ」とあつたならば、特別に作者の説明がないかぎり、上述の二型式の猿轡中、完璧性を加味した迅速性の評価から、後者の型式、つまり口にくわえさせるものと読んで、さしつかえなく、いや、そう読むべきであろう。

私は、このエッセイにおいて「はませ」をずっと、そう解釈してきたが、今、この物語において尊敬する馬琴から、その正当性を立証されたことを喜ぶものである。

『阿旬殿兵衛実々記』

お旬という、やさしく美しい女が、領主の怒りを買って、捕手に追いかけられている。そして、母や兄たちと散り散りになってしまふ。とみるや、お旬についていた悪い叔父がやにわに彼女を引き立てようとして、左のよな行動に及ぶ。

足を飛して撲地と蹴倒し、噫と叫ぶその口へ、手拭を楚と呷し、矢庭に縛、

この場合の猿轡も口を割り、かます型式であると思う。

というのは、馬琴が用いた「呷」の字には「ふくむ」とか「くわえる」とか、いう意味がある。馬琴程の作家は一字たりとも、ゆるがせに字は使用しないであろうから「呷」の字を選んだ時の彼の胸中には、少なくとも手拭をかます、つまり字句に拘泥すれば「くわえさせる」型式の猿轡があつた筈である。

そしてこの悪叔父は、急ぎの場合であるため、女の口中に一々、つめ物をしている余裕はあるまい。故に、くわえさせる猿轡が一そ

うの有効性を帯びてくるのであり、それだからこそ、手拭をしっかり「脚」したという字と表現が生きてくるのである。

また「楚」と、はませてある、その「楚」に注目せねばならぬ。この悪叔父が目的としている防声は、先ずこれで完全に、その目的を果たしているのである。

よく作家たちが、縛る表現の場合に、「しか」とか「きびしく」とか、という言葉を使うが、猿轡の時には、その緊固度が、とかく軽視されがちであった。故にこの如く、猿轡に特に「しか」とある場合は、読者の側でも自分の口が、しびれる位の感覚を、ともなって読むべきである。

『青砥藤綱模稜案』

お丑という女が、忘れ物をとり帰った良人を待って一人、川原に座って夜風にあたっているところから異様な男女が、もつれながらやって来る。われわれもお丑と一緒にこっそりそれが何者だか、うかがってみよう。

荒男とおぼしきが、手拭もて面を裏み、善悪は楚とわかねども、一個の女子に、猿轡を銜せつつ、河原を南へ引摺来て、砂の上へ撲地と推居、成程、男が女をさらって来たのだ。

曲者は女に対して、「俺様はこのところバクチでスッテンテン。そこで、お前をさらってきたんだ。一寸、女のさかりは過ぎた年だが、三年年期の女郎には売れよう。さっさと歩きやがれ」とかなんとか、毒づく。

かひなや人を呼んにも、もの得いはれぬ猿轡、

さらわれた女の心中は如何ばかりか。

不幸にもお丑は、この曲者に、すぐ見つかってしまう。われわれは急いでかくれよう。「顔は定かに見えねども、身長はすなりと色白し」こいつは高く売れるわい、と曲者は大喜び。しかし、お丑は猿轡をされていないので、「もの得いはれぬ」状態でない。大声で助けをよぶ。声をききつけ、急ぎ良人が立ちもどり、曲者と刀を抜いて、わたりあう。そして誤って、さらわれた女の肩先を五、六寸斬り倒せば――

云とも得いはぬ果期の一句、今ぞこの世をさる鑑、かけたる随に呼吸絶たり。

さて、先程から、しばしば出て来た、さらわれた女が、されている猿轡の「鑑」という字は、辞書によると、馬のくつばみの両端についている金具のことである。故にこれがヒントになって、この女がどんな型式の猿轡を

されていたか、わかりそうだ。

馬は、くつばみをくわえる形で、とりつけられている。その状態の時、両端の金具は口もとにつくのである。そこで鑑の字を使用した「さるぐつわ」も、くつばみ同様の型、即ち、手拭をくわえさせるようにしてあると考えて相違なからう。私は、そう解釈する。

しかし、ここに一つの問題がある。それは猿轡を「かけた随」の「かけた」という表現である。読者諸兄姉の中には、「お前は三回目のエッセイで、かける」という動作を、口を掩うようにして後ろで縛った猿轡のようにいつている。それならば、このさらわれた女がされているのは「かけた」というのだから、くわえさせる型式でなく、口の上を、ぐつと被った型の猿轡と考えるべきではないか。それを今回のみ「くわえさせる」としたのは矛盾してはいないか」といわれる方もあるかもしれない。

幸い馬琴はその疑問に答えてくれている。即ち、少し後の文章で、さらわれた女の話が再び出て、そこには、

悪棍に勾引され、猿轡を被られし、と、あるのだ。

馬琴は「かける」に「被」の字を使ってい

危難の場。

長良は「面色艶きたるに、其被物さへ今様にて、鄙に稀なる美女」である。さらおうとする男は、その名を十六郎という。女を取ろうという洒落か。

さて十六郎は思案する。見たところ四、五人の女どもが、長良と同じ部屋に寝ているのだが、さて、どうやろう。この「衆を結果けて、後に少女を搔擾」おうか。いや、待てよ。それは一見、簡単のようだが、もし間違つて大事な「貨物」に怪我でもさせては「後悔何ぞ及ぶべき」そして、やっと結論に、たつした。

先那後手を抓出して、布囊を銜せ、両手を縛りて、次の間に退け在らせて、あとは用のない女どもを颯にし（勿体ないね）、ゆっくり長良を、さらおうというのである。

そして女どもの寝室に入るのだが、ここで十六郎は勘違いをする。目的は長良だが、その前に援手を捕えておくのが彼の計画であった。そのため、先ず援手を縛るべく行動に移ったのであるが、実はその女こそ、長良だったのだ。何だか、ややこしくなったが、そんな事は、どうでもいいではないか。要するに

美しい女が縛られ、猿轡をされようとしているのである。こんな素晴らしい事はない。

臥たる長良の胸前を、搔抓み曳寄れば、驚き、驚き、驚きと叫ぶを、声立させず布囊を銜せて、

さらうて行く。

この猿轡は、絶対に口中に、つめ物をし、手拭で覆った、本格的な型式のものである。それは、もう少し読んでいくと、よくわかるのだ。

十六郎は、武力すぐれた女の一人に、だらしなくも、つかまうてしまい、長良は救われる。その描写――

長良は口に銜られたる、布囊を左右して、抜出した云々と、ありつる事の趣を、告げて腮を撫摩れば、

長良は自分で猿轡を、はずしている。彼女は「口に銜られたる」「布囊」を「抜出」している、というのであるから、これは明らかに、自分の口中につめられた布を、引っ張り出してゐるのである。しかも、ぐいぐいと固く、女の口中につめたらしく、スラリと出なかつたらしい。それ故にこそ「左右」して引き出したという動作である。あれこれ、やったのである。この「左右」という表現がい

い。実に、きいてゐる。

まず、口の上から頤にかけて覆い、後ろで固く縛った手拭を、とき去り、それから口一杯の、つめ物を取るものであるから、なかなか簡単には、いかなないのである。そればかりでない。口中の、つめ物を取った後、女は「腮を撫摩」つてさえ、ゐるのだ。さぞかし、口を大きく頤が、はずれんばかりに開かせられて、つめ物をされていたのであろう。つめ物を取った後も、しばらくは頤が疲れて無感覚な状態であつたのだらう。彼女は無意識のうちにも、なでさすつてゐる。

長良という女の、一つ一つの何気ない動作は、すべて「十六郎のした猿轡が、如何にきびしい本格的なものであつたかを示して、あます所がない。

「南総里見八犬伝」

馬琴の最後は、有名な、この物語で、しめくくろ。

八犬士の一人、犬塚信乃に恋している浜路という女は、親のいいつけで結婚させられる相手を嫌って自殺しようとする。それを知つた悪党の左母二郎は、浜路をさらう事を決意。男に追いつめられて浜路は、はたと泣き沈む。すると左母二郎は――

鈍しや。と襟上を搔摺み引立て、手拭銜する猿轡。小腋に楚と搔込だる、

女は、まさに「木兎に捉らるる夜の蟬、声だになくて哀れなり」という有様である。

この猿轡は『鑢』だし『銜』せだから、手拭をくわえさせる型式のものである。「えいもどかしい」とばかりに、はめた猿轡であるから、どうしても、そうでなくてはならない。ともかく、声だになくて哀れな女の、そして美しい女の表情が、出来上がったのである。その完成度においては、まさに完璧である。

左母二郎は、以上のように浜路を猿轡姿にし、まんまと、さらい出しに成功逃走する。いくら昔とはいえ、猿轡をし、縛り上げた女を連れての道中は、むずかしい。一体この男いかなる方法により、道中したのであろうか？ 彼を恐迫する轎夫は、次のように、そのからくりを、あばいている。

竊に二百三百の、働銭を取らんとて、夜行をはるばるここへ来ず。いと艶妖なる臍物を、縛からげて猿轡。狂女ななどと偽りても、いひ暗めても挑灯の、火光で疾視し眼は違はず、

「やい、勾引男。おめえ一人ばかり、好い

事するな」と、いうのである。

この「狂女」で思い起こす。

大分、前の『奇ク』にのっていた古川裕子さんの告白に、裕子さんの御主人が、彼女を縛り上げて、つめ物をした口に、大きなマスクをかけさせ、白昼の汽車に乗せたというのがあった。勿論、周囲の乗客は、ジロジロ見る。驚いて車掌は飛んで来る。裕子さんの御主人は、それら怪しむ人々に平然と、気違いの女を護送中のだと説明する。裕子さんも御主人に調子をあわせて、せいぜい目をうつろにしたりして、お芝居をしたという記事である。さぞ、裕子さんと御主人にとってスリルがあり、楽しいことであつたろう。私にはよくわかる。でも、果たしてこの私が、やって成功するかどうか？

さて南弥六という男が夜道を歩いていけると横道から、いきなり走って来る者があつた。

彼は驚いて、すかし眺めれば――

怪しむべし一個の女僧、いと美麗しき少女に、布囊を銜せしを、絃腋に楚と抱き

をり。

馬琴は「さるぐつわ」に対して「布囊」、それをする事には「銜す」という表現が好きらしい。ここでも、そう使用している。

この少女がされている猿轡も、今までの馬琴の用字法から考察して、手拭をかます型式のそれであろう、と実は私は思ったのであるが、どうもそうでないらしいのだ。山口とき子さん好みの待望の本格的猿轡らしいのだ。

この少女が、浜路である。（それにしてもこの美少女は随分、猿轡をされるネ。なんて可愛い女なのだろう）彼女は、やがて助けられて自分の危難を物語る。即ち、

昨宵真夜半時候なりけん。奴家は熟睡したりしに、母君の御声にて、連りに喚せ給ひしかば、覺るともなく応をしつつ、遽しく身を起して、建たる屏風の外面に、立出て見れば、一個の女僧あり。思ひがけなき事なれば、吐嗟と叫ぶ程しもあらせず、矢庭に奴家を引よせて、楚と銜する布囊に、息さへ簞りて声立ざりしを、

浜路は猿轡をはまされて「息さへ簞りて声立ざりし」と言っている。ここが、重大なのだ。息が簞ったのであるから、絶対に彼女の鼻の上を、つまり鼻孔を出さず手拭で覆っている状態である。布切れで鼻孔がおおわれているからこそ「息さへこもった」のである。その上「声立ざりし」だ。これは女の口につめ物がしてあつた証拠である。ただ、手拭

で鼻の上から口を包むようにおおい、後ろで結んだだけでは、「声立ざりし」には至らぬであろう。なお、くわしくは、このエッセイの真実篇で考察するが、要するに、この女は口の中に、つめ物。そして鼻の上から口、頤と、手拭でおおった本格的第一級猿轡をされていたのである。私の猿轡分類第二が、これにあたる。

それにしても尼さん、なかなかやるねエ。もっとも、女が女をイジメる時の方が、容赦しないと巷間、伝えているが……。

今度は雪吹姫、さらわれの図。

さらいます男は悪僧徳用。

含笑ながら、雪吹姫の、臥たる身辺にう

ち入れば、雪吹姫驚覚て、声を立んとし給

るを、徳用透さず掴み得して、手早く準備

の布囊を、銜せ結紐て、脇腹に抱きて、

これは極く普通に、手拭をくわえさせた猿

轡、と読んでよからう。

ただ、この悪僧、ちゃんと猿轡を用意してきたところがニクイ。或はこの男、一カ月位前からフンドシを、はき続けることによって猿轡を用意したのかもしれない。とすると、何と益々ニクイ男なのだ、徳用は——。

さて徳用は山中の庚申堂で一寸、一休みを

する。彼は担いできた櫃の中から両手で雪吹姫を持ち上げて出し、やおら推しこめる。

雪吹姫は悲しさと、又朽惜さと苦しさに涙玉成す、不測の窮厄。ものもいはれぬ狙、鑢、屠所の羊に異ならぬ、身は背手に結紐られし、膝に額を推当て、

只、泣きいるばかりであった。

よく時代小説の挿絵に、後手に縛られ猿轡をされた女が、膝を立て、そこに顔を伏せるようにしている構図のものがあがるが、それはこういう所に源流があるのだらう。

なお「狙轡」の狙は、猿のことである。故に「狙轡」は「猿轡」としてもよく、全く同じことである。

徳用は後ろから抱き起こし姫をのけぞらせ「髯蓬げなる頬楊しつつ、言舌甘く慰」めるのである。

悪僧が、いかに、しつっこく姫の体を、まさぐっても大丈夫。「ものもいはれぬ狙轡」だ。まず、はじめにこの男、姫のどこを探る気だらう。ああ薄幸の美女の運命や如何に。

* * *

さて、私はこの回の冒頭で、何か猿轡について博学の馬琴から教えられることが、ありはしないかと述べた。私が馬琴の項で、とり

あげた作品は、僅かに六篇。これをもって、馬琴が全部、わかったなどと、大それた事を言うつもりは毛頭ないが、上記六篇のみでいえば、猿轡の考証を聞きたいという私の望みは、かなえられなかったといえよう。

馬琴の読者には、これは周知の事なのだが彼の物語には、よく筋とは関係なしに突然、地名などの考証が展開されるところがあるのである。それが又、面白い。故に、猿轡について、「そもそも、猿轡とは……」とか、何とか、該博なる馬琴の解説が聞けるのではないかと期待していたのであったが……。

もっと馬琴を読みつづける事によって何か得るところがあったら、いずれ改めて報告しよう。(つづく)

○

ここで一寸、愛読者諸姉へお願いがある。

猿轡をされることに興味と関心のあるM女性の中で、どなたか私の猿轡研究に協力して下さい方は、おられないだろうか？ 勿論、貴女は、猿轡をされるばかりでなく、縛られて色々イジメられるのだが——。

尊敬するロマン派生氏にならって私も、ここにお願いする次第である。

手記

あるS・Mアベックの報告と呼びかけ

紫 四 季

早いものでもう師走に入った。F・M放送がポール・モーリアのハホワイト・クリスマスVを流している。そのうち又、京都の町にもクリスマスメロディが、あふれるだろう。

灯りを消した暗い室内で、真っ赤に燃えるストーブの炎を見つめながら今、別れてきたばかりの女の白い肢体を思い浮かべている。

知りあって、初めて抱いて、女の飲びをわからせるまで三カ月。絶頂の瞬間に乳首を噛み、その痛さを快感と感じさせるまでに更に二カ月。それから後は早かった。縄で縛られることの喜びを教え、軽い笞打ちなら自分で要求するように教えた。

ある日、自分で犬の首輪を買って来て「今

日、ホテルに行ったら、これを嵌めて」と頬を染めながら恥ずかしそうにささやいた表情が思い浮かぶ。あの時、初めて両足首を縄で縛ってギリギリまで開脚させ、その濡れた花苑をアップで撮影したものだ。

「いや、写すのだけは、いや！」と涙を流して抗議しながら、自分の買ってきた首輪を鴨居にくくりつけたロープに、つり下げられ身動き出来なくて、写されてしまった皮肉。一発目のフラッシュが光った途端に、おとなしくなってしまう、あとは言う通りのポーズを全身を染めながら演じたものだ。

写真を撮られることに慣れると、いやが上にも羞恥をおおるような姿態を要求するよう

になった。上の唇にも下の唇にも特大のバナナをくわえさせ（勿論、立ったままである）四肢を大の字に開かせて「どっちも、しっかりくわえてろ。落としたら、本当に流腸するぞ」と、脅しながら撮影した。その頃、流腸だけは「絶対にイヤ」と言って、許さなかった。だから「流腸するぞ」の一言は脅しの文句として、はなはだ効果的であった。締まりがいいため、何をくわえさせても落とさないのには、喜ばしくもあり、残念なようでもある、複雑な気持であった。一番、細いのは銀製のパイロット・エリート。これは軸にチェックの細い線が刻まれており、つるつるではない代りに、相当重い万年筆である。その他

には電池式の直径三センチ程のバイブレーター。これはスイッチを入れたまま四分の三程挿入して撮影した。電池が弱っていたため、そう強くない震動であったが、写している間から失神寸前の状態で、写し終わったと告げると同時に、バイブレーターをはきだし、「早く来て」と催促する。必死の面持ちだった。こちらは落ちついたもので、この時とばかり、いつも持っているイチジク浣腸を、とり出し「これを入れさせたらネ」と散々に、じらす。とうとう「もうどうにでもしてちょうだい」と武者ぶりついてきた。こうなればしめたもので、アヌスは、あふれた愛液のため、イチジク位、訳もない。すばやく二本、注入して、「早く……」期待に込めてやる。気が狂いそうに悶えているから、たちまち昇天。その間にも薬液は休みなく効果を発揮しているはずだ。間もなく気づいた女が焦点の定まらない目で私を見ていたが、急にその瞳が、おどおどと、しだした。

「ふふふ、効いてきたな。どうだ、初めての浣腸の味は」

「いや、恥ずかしい。アア……もう駄目、いかせて。トイレへ行かせて。ネ、ネ」

「何言ってる。まだ注入してから十分も経っ

てないぞ。それに君は昇天したけど、僕はまだですよ」

「そんな……。あなたは昇天したくないと思っただけで、一時間でも二時間でも持つんだもん。意地悪言わないで早く。浣腸、二本したでしよう。初めてで、これだけ持つてるのが奇跡みたいなものよ。早く、早くウー」

我慢の限界らしい。ヨシと許可してやると途中で坐りこみそうになりながらトイレへ入っていった。

すぐに熱い湯でタオルを二本、固く絞り、トイレのドアを、いきなり開けた（御存知かと思うが、ラブ・ホテルのバスやトイレには必ずと言っていい程、鍵はついていないものだ）。

「あっ、いや」と言って顔はおおったものの排泄は薬の力によるものだ。途中で止めるわけにも、立ち上がるわけにもゆかぬ。

洋式トイレのため、こちらを向いて座っているのが都合が良い。

「さあ、熱いタオルを持って来てやったぞ」顔をおおった両手を外して顔をふいてやる。その間、女は後のノブで一生懸命、水を流している。

「よし、顔はきれいになったナ。それでは、

そのままの姿勢で僕のをくわえて奉仕しろ。昇天してない僕を置いて、トイレに来た罰だ。返事は？」

「ハイ……」

「それだけか」

「ハイ、くわえさせていただきます」

「よろしい。両手は？」

「……」

「両手は、どうするのか、ちゃんと言え」

「ハイ。両手は……乳房をもちでいます」

最初の激しい段階は過ぎたものの、まだ、お腹はシクシクしているらしい。口と舌で奉仕し、両手は自らの乳房を觸りながら、腰をモゾモゾと動かしている。

しばらく時が経って、少し肌寒くなってきた。何しろ二人とも素っ裸である。

「ヨシ。口のサービスは、それでよろしい。ところで、ちょっと寒いな。風呂に、はいろ。すぐ来いヨ」

熱い湯につかっていると、消え入るように恥ずかしそうな顔をして、のぞいている。

「何してる。風邪をひくぞ」

「もう、いやネ。恥ずかしい。とうとう浣腸されちゃった」

「でも満更でもなさそうな顔だぞ。プツプツ

言わないで、四つんばいになれ」

「エエ？」

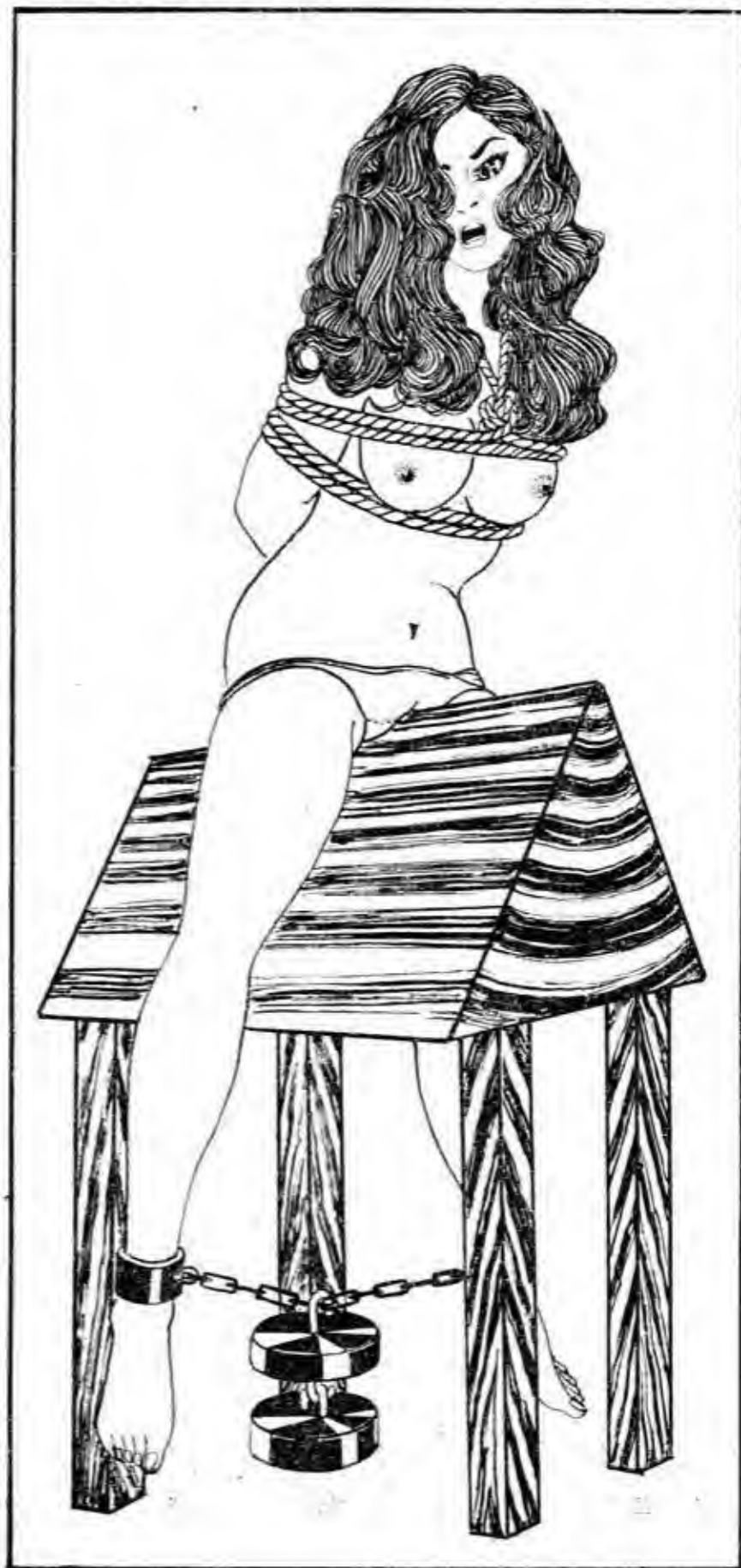
「エエってことは、ないだろう。何のために、こうしてシャワーを調節して思う。アヌスを、きれいに洗うためだ」

有無を言わず首を押えて四つんばいにさせ、シャワーの湯を、アヌスと花苑に向ける。シャワーの湯は注意しないと突然、熱湯になったりするから、絶えず自分の指にもかかるような持ち方をしながら洗う。洗うとは言うものの、女にとってはこれは強烈な愛撫であり、拷問でもあった。

うつむいた口から耐えきれなくなって、うめき声もれ、ひざがふるえて、今にもくずれ落ちそうになる。

くずれそうになる瞬間、シャワーを、ふっと外してやる。二、三回くり返すと、いきなり、こちら向きにひざまずいた。

「コラ、許可も得ないで何だ」「だって……」



「だって、へちまもない。ちゃんと言え」「ウーン、いや。わかってるくせに」

真っ赤になりながら小さい声で言う。やがて又、二人して目くるめく世界へ……。湯があふれ、僕の下にいる女の髪が生き物のように流れの中で、ゆらめいていた。

あれが浣腸の味を覚えさせた最初の時だった。以来、イチジク浣腸は常に彼女のハンドバッグの中に、大阪で買った五十ccの注射器型浣腸器は僕の車のトランクに常備され、プ

レイの度に一回につき十―十五本の割で石鹼液を注入されるようになった。

あれから、もう半年余り、経つ。

ストーブの火は赤々と燃えている。一杯の水割りで顔が火然っている。酒の弱い僕は、雰囲気が好きで飲んでいる事が多い。いやいや、酒の話は関係ない。少々酔った頭で正直な思いを書こう。

それにしても僕は二重人格なのだろうか？と悩んだ事もあったなあ。普段は自分で言う

のもおかしいけれど、礼儀正しい好青年と思われるに、中学生の頃から奇クを読み耽り、SMに魅入られていた男とは誰も知らないだろう。

恵子、お前を除いては……。そしてやがて数カ月して、お前が日本を離れアメリカで新しい家庭を持つと、又、僕のまわりには僕の性癖を知るものは、誰もいなくなってしまうだろう。それで良いのかもしれない。お互い別々の人生を歩み始めてから知りあった二人だ。お互いの人生の邪魔はすまい。だが残された、わずかな時間、精一杯、満喫しよう。

恵子。お前は、この頃「あなたに抱かれながら他の女の乳を吸ってもらいたい」と、よく言っているな。「私も女の人に流腸してみたい」とも言っているな。だが、これだけは相手のいることなので、如何ともしがたい。僕のガール・フレンドが何人かいることは御承知の通りだが、残念ながら彼女たちは単なるガール・フレンドではないんだ。SMプレイの相手にならないのは、肌を合わせた僕が一番よく、わかっている。

恵子。お前は、僕の大学の後輩で人妻の道代が一番、気に入っているようだが、彼女はノーマル過ぎる。それに家庭を持っていたら、

これ以上、深みに誘ってはいけないだろう。

O・Lの順子は不感症に近い。僕が余り熱心でないからかもしれないが。小柄で引きしまっていて、乳房など恵子より、きれいなのに。誰が見ても風吹ジュンみたいな、あの顔とスタイルでは、まさか不感症のようだとは思えないが……。

女子大生の智子。彼女は燃えるくせに何故かあのことだけは余り好きではないと言う。男の子たちと遊んでいる方が、いいんだそう。だ。ボーイッシュな娘だから、外でとびまわっていたらしい。

去年、ミス着物に入賞したという美人O・Lの幸世も、同じようなものだ。SMプレイの相手をとというのは本当に難しいものだ。やはり奇クにお願いして呼びかけてみよう。僕だって奇クに登場する数々の女性たちと、どんなにプレイしたいと思っていることか。

恵子。お前は十一月号に掲載された八広田玲子Vさんに、ぜひ分、魅力を感じたらしいな。しかし彼女が良かれと思って下さるとしても、住所もわからないし、遠方なら不可能かもしれないぞ。彼女が、もし承知してくれれば、流腸が大好きという女、「玲子」だ。お前の流腸も受けてくれるだろう。そして、

お前も同性の手で嬲りものにされる羞恥を味わえるだろう。

お前も僕も、大のファンである八前田真知子Vさん。いつか「こんなきれいな足を貴男引き裂きたいでしょう。そしたら私が横で写したげる」と言っていたな。でも彼女は、今や奇クの大スターだ。無理だろうな。京都の町が好きだという彼女。いつか京都に来られた時、二人で案内してあげたいね。そしてプレイが出来れば最高だ。縛られながら必ずレンズに目を向けている彼女。どこか冷たく眺めているような、少女の面影を残した真知子嬢を羞恥に悶えさせたものだ。

京都といえば、八堀貴代子Vさんも確か京都の人だったね。東山・知恩院界隈といえは、いつでも車で走りまわっているのに。人の縁というものは、結びつきたいと意識しても、なかなか、うまくいかないものだ。そうかと思うと全くの偶然で、いともあっさりと深い縁を結ぶこともあるものだ。恵子、ちょうど、お前と僕のように。そういえば、お前と初めて出会ったのは、円山公園の中にある長楽館という、昔の洋館をそのまま改造もせず営業している喫茶店だった。ひよっとすると堀さんも、あそこに行ったことがあるかも

しれない。貴代子嬢の、あの挑むような目の光を見ると、僕は無性に苛めてみたくなる。お前は、あの豊かな乳房を「ギョッと、つかみあげてみたい」と言ったが。同性にさえ嗜虐欲を起こさせる何かが、彼女にはあるのかもしれない。

京都といえ以前、読者通信を投稿されておられた北村茂子さん、綾小路咲子さんも、京都のマゾ女性だった。求めあう者同士、会えたら、どんなに楽しいだろう。

△藤田明子Vさん。恵子が「何だか、私みたい」と彼女の記事が出るたびに自分のことのように興奮して読みふけていた女性。名器の持ち主であるという点でも、より淫らな性癖の持ち主であるという点でも、全くよく似ているものだ。彼女を僕が責める。お前が縛られたまま、横でそれを見る。きつとお前は自分が責めさいなまれているような錯覚におちいるだろう。

△長谷田真知子Vさん。亀治氏という理想の

新発足 懸賞△告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

夫を得て、理想的に調教されている女性。恵子。お前を、ここまで調教するには、余りに時間は短かすぎる。何故、十年前、二十才の頃に知りあえなかったのだろう。悔いても、せん方ないことだけれど……。そうすれば僕たちも、長谷田御夫妻のような二人になれたかもしれないのに。

☆

ストーブの火は赤々と燃えている。日頃、思っていることの種々を書き綴ってみた。

この手記が掲載され、もしM女のアナタが目を通して下さったならば。もし、あなたがこんな私たち二人とプレイしてみようという気に、あるいは会ってみようという気になられたならば、編集部を通してお便り下さい。当方が二人というのが、いやであれば、最初は、どちらか一人を指名して下さい。結構です。編集部の皆さん、本当に御多忙のこととしますが、そのような便りがあれば、お知らせいただければ幸いです。

最後になりましたが、名古屋のロマン派生さん、三重の本居さん。拙文をもって近況報告に代えます。いずれ又、機会がありましたら、何かと、お便りを書かせて頂こうと思えます。その節はよろしく……。

連載・S時代小説

紫

蘭

の

門

(43)

女ほど愚劣なものは無いと知りながら

いそいそ帰るSMの道

——男とは、所詮、嗚呼！

女、悦ばす小道具に過ぎざるか、孔仲尼よ

マホメッドよ、そして釈迦牟尼仏よ！

風 流 極 道 軒

カット・春日田春夫



竹 馬 遊 び

竹馬は、ふつう男の児の遊びである。

その竹馬に、女、しかも三十に近い爛熟しきった肉体の持主である朱房のお銀が、友禅縮緬の湯文字ひとつで乗らねばならぬ。

意外な元禄屋の申し出にチラッと当惑の眉をひそめたものの「縛られ屋」の手前、ためらうことは許されなかった。

ニヤッと笑った青蛇が正座しているお銀の前に足をかける場所が二尺くらいのところにある高い竹馬を揃え、

「乗りな」

意地悪そうに青白い頬を歪めた。

いくらか厚めの唇をキューッとひきしめたお銀は、二本の青竹を

拾うとスウィーツと立ちあがり、

「始めてだからね、うまく乗れるかどうか」

「フッフッフ、いつでも手助けしてやらあな、黒馬、白豚。竹を支えてあげな」

「合点、承知」

と二人が五尺も離して青竹を立てたから、

「広すぎるじゃありませんか、これじゃあ足が乗りやあしないよ」

「ヘッヘッヘッ……まったくだ」

次第に間隔を縮めて一尺ほどにしたもののこの二人、何やら意味ありげに笑っている。

「気味の悪い笑いかたをするじゃあないの。なにか、こんたんがあるんだろうね」

「いやあ、なんにも。さあ、乗ったり、乗ったり」

せかされたお銀、足をかけようとしたものの二尺の高さでは、まず左足をあげるのすら

前号まで——しばらく鳴りをひそめていた怪盗徳夜叉がついに出現、所もあるうに江戸城内・振天府前で老中首座・水野出羽の首級をあげた。代ってその地位についた領田下野を元禄屋は麻布別邸に招待して、豊香と千登世を責めながら祝宴をはる。そこへ、朱房のお銀が「縛られ屋」として登場して——。

難かしい。

「あ、拳がらないよ、高すぎて」

「だから云ったろ、助けてやるって！」

ムンズとのびた青蛇の手が細い足首をつかんだかとみると「ほれ、こうしたら、うまく乗るじゃあないか」

グイッと持ちあげられて、

「な、なにをするのよう、ひとりで乗るったら……」

嬌声をあげたが、結局は、左足首だけが足台にかかって片足吊りと同じ恰好になり、大きくまくれた友禅縮緬の湯文字のあいだからむっちり肉の凝った太腿があらわれた。

白豚や斑猿が、

「眩いばかりじゃあねえか、お銀さん」

野次をとばしたが、「もう少しだ、ほれ」

と青蛇に双臀を押されてどうにか乗るには乗った。だが、二尺と云えば約六十糎、女の身で果たしてうまく歩けるかどうか。

「な、なんだか、奇妙な感じだねえ」

十二畳の部屋——

領田と元禄屋が正面に坐り、豊香、千登世和泉の三人が全裸緊縛の姿で片隅にひきすえられて見おろしたお銀は、足もとの不安定さに、つい自分をとりかこんでいる男

たちに声をかけるのだった。

「手を離すぜ。上手に歩いてみな」

「ち、ちよっと、ちよっと待ってよう！」

いま赤狐と黒馬の支えを失ったら、立っていられるかどうか危まれる。

「三つ数える間だけ待ってやろう」

くそっ！ お銀は齒を喰いしばった。

縛られ屋として縛られにきたものを、縛りもしないで、こんなハレンチな真似をさせるなんて——。

「一……二……」

よおし、こうなったら歩いてやるとも、必ず歩いてみせるとも。

浅草弁天町で岡っ引きをしていた夫の伊平

治をなくして以来、奇妙な商売をはじめているものの、湯文字を締める白綸子の紐だけは絶対に解かないことを心に誓い、それを守り

つづけている勝気なお銀であった。

「さあ、お離し。朱房のお銀、こうなりやあ

意地でも歩いて見せるよ」

呼吸をととのえて叫んだとたん「三！」と声があがって黒馬と赤狐が二歩、後退した。

瞬間、豊満な乳房がブルブルと震えて、

——コトツ……

右の青竹が前へ出た。

「うめえじゃあねえか」

つづいて左が前へでた。

「うめえ、うめえ。その調子だ！」

離されたものの竹馬の上のお銀は気が気でなかった。必死で駄の均衡をとりながら右足の親指と人さし指で、はさんだ青竹を、上へもちあげ、さらに一步を、すすめた。

竹と竹との間は二尺も離れているであろうか。ふだんは二寸か三寸、開くだけでポオーツと頬があからんでくるはずの両膝が、青竹の間隔、つまり二尺は開いて、湯文字が、はだけ、内股が露出し、下から振り仰いでいるはずの男たちの目には、その奥までが見えるに違いなかった。

その突きさすような視線を感じて、

「結構な趣好でございますこと。女を竹馬にのせて下から……」

——コトツ、コトツ……

みごとに歩きながら、

「下から眺めて楽しむなんて……」

よくとおった鼻筋に、晩春の落日がカアツと照りつけて、お銀の端麗な顔を、いっそうきわだたせる。さらに数歩、部屋の半分を占める畳のあげられた床の部分歩いた。

「面白いのはこれからですぜ、お銀姐さん」

白豚が親切ごかしに言った。

「多分、そうだと思つてますよ。これくらいのこと、すましてくれる鞭兵衛親分じゃありませんでしょうからねえ」

初対面の男たちではあったが、お銀は羅卒一家六人の名は、老中のでまえ、かしこまつて坐っている工頭から聞かされていた。

「おつぎは何がでてくるのやら……このお銀縛られ、罵られに、きたのですもの、たんと責められますことよ」

と、足の指が青竹を挟みこもうとして、すべった。とたん、

「おとととと……」

手助けするふりを見せて近よった黒馬が、さあつと右足首を足台に皮紐で縛りつけた。

「ホッホッホッ、始まったようですわね。どうか御存分に！」

嬌声をあげるあいだに左足も赤狐の皮紐で括りつけられてしまつては、もう竹馬から降りることができなくなった。

「お銀、いくぜ！」

ここでぴたりと呼吸をあわせた二人は、竹馬の竹を、それぞれ握むと、力にまかせて左右へと間隔を開かせていく。

二尺余ひらいていたものが三尺になり、四

尺となった。

「ア、アレッ！ あぶないじゃあ、ないの。お、おこちてしまふわよ」

「落っこちちゃあ、いいさ。竹馬に逆さ吊りになるつてもおつなものだぜ」

「な、なにを……おっしやるの、アッ」

足を固定されて飛びおりることのできないまま、お銀は、しっかりと手で青竹を握りしめているのだが、下肢が次第に開かれていく惨めさに唇を噛んだ。

「七尺は大丈夫だろう。な、赤狐」

「それは、ちょっと無理でしょうが……」

さらに一尺、一尺五寸、六寸、と、ものの五尺四、五寸も青竹が、ひらいてしまったであらうか——。

「お、お止めなさいよう……こ、これじゃあまるで」

「股裂きになるといいてえんだろうが、股が裂けるだけじゃあねえ、駄ごとと右と左にバリバリと唐竹割りになつちまう。ヘッヘッヘッどうでえ、お銀、いい心持ちだろう」

なにが いい心持ちさ！ お銀の心に憎悪がめばえた。「縛られ屋」を招待した以上は、緊縛術を楽しむのが本場で、いやしくも「縛られ屋」の肉体に苦痛を与えるなどというの

は下の下の客というべきなのだ。

「お、およしよ、こんな野蠻なやりかたは」

「どこがいったい野蠻でござんすかね。これくらいのことでは音をあげるようじゃあ朱房のお銀さまの名が泣こうてもんで」

「音をあげてやあしないさ。ただ、これじゃあ、あんまり……」

言葉を探しているお銀の目のまえにニユーと、つき出されたものがあつた。

「な、なんだい、こ、これは」

「わからないはずはなからう。キュウリさ」

こともなげに青蛇が、いい放つ。

六尺棒のさきに槍の穂先のように括りつけられているのは、たしかに胡瓜であつた。がなんと荒縄で、くるくると巻かれていてではないか。

「江戸中の青物市場を、かけ廻ってさ、やっ」と神田でみつけてきたのさ。どうしても、お銀さんに喰ってもらおうと思つてね。ほら、いくらでもあるぜ」

いつのまに持ち出したのか真新しいカゴのなかには大小とりまぜて数十本の胡瓜が入っていたが、いずれも荒縄で緑の肌を、ぐるぐる巻きに縛り上げられていた。

「草加の宿外れに奇特定の百姓がいてさ。少し

でも早く夏場の野菜を市場へ出せば儲かると苦心して、つくり出した、しろものよ。普通より一カ月は早い初物だから値は、はったがなにせ、ヘッヘッヘッ、お銀さんに喰つて頂くためにさ」

今度は、喰つてという言葉に特別なアクセントをつける青蛇であつた。

「うめえぜ。お大名でも、まだ召し上がることでできねえというのに、今年いの一番にキュウリを、お銀さん、あんたが、食うのさ」

目のまえの胡瓜が消えたかと思うと、大きく開かれた股間に、異様な感触を覚えてお銀が、たまらず悲鳴をあげた。

「まだ早からうぜ、哭くのは」

「な、なにをいうのさ。こ、こんなことをするなんて、そ、それこそ……は、はやすぎやあしないかい。ア、アッ！」

「女を泣かせるに早いも遅いもねえものだ。ほれ、ほれ。まずは、こうずうーとおさずりを加えて……」

竹馬の上、二本の青竹の間で「大」の字なりに開かれていた女体が、つき出されてくるキュウリを避けようとして右、左に揺れた。

「ふくらはぎを、こう撫でて、膝の内側がこと、それから、ここが内股、ここがへそ」

「兄貴。内股とへそとの間が、ひとつ、とんでやあしませんか」

白豚が茶々を入れた。

「バカ野郎。まだはええからよ」

「なにが早いんで。女を泣かせるのにはええもおせえもねえと……」

カゴの中の胡瓜をつかんだ白豚、六尺棒のさきに、てぎわよく括りつけると、

「お銀姐さん。青蛇の兄貴には教えなくていいから、俺にだけ、ここ、この呼び名を」

「ナ、ナニ、ナニ！ ナニをスノサア！」

短兵急につきあげられたお銀の唇から甲高い声があがり、豊満な腰が、くねった。

「いいじゃあないのさ。ねえ、姐さん」

「なおも六尺棒に、ひねりを加えながら、

「おみおつけ——って知ってるかい」

「突、突然、なにをいいだすのかえ。や、やめなよ。おやめってば」

今朝、結いあげたばかりの髷が崩れて、後毛がサアーツと富士額にかかったが、そこには、うっすらと、すでに汗が滲んでいた。

「漢字でかくとねえ……おみおつけを漢字でかくと……」

ひねり廻されていた六尺棒が回転をやめた。とたん、（しめた）という表情が白豚の面に

うかび、お銀の裸身が、

——ムウッ

と、のけぞる。

「へっへっへっ……これからが本番、ゆっく
りと、上へ……」

下唇を舐めながら白豚は、お銀の羞恥にゆ
がむ顔を見上げ、

「御汁——御つけ——つまり飯につくからつ
けというのが、そもそもだってねえ」

この白豚、五人の子分たちのなかではもっ
とも間抜けな男であるが、ちよいちよい奇妙
な学問を披露しては兄貴分たちをアッと云わ
せる特技がある。

「そ、それが、ど、どうだったのさ！ お、
お離しよ。はなしてちょうだいったらア！」

胡瓜を股間から離せというのを、話して頂
戴——と、とったのか白豚は、

「聞いて下さるんで、有難え！ なあにバカ
みてえな話なのですがね」

六尺棒をしずかに、お銀の表情と見較べて
繰り出していきながら、

「つけだけでよかったものがおという敬語が
ついて御つけになった。それに、さらに御が
ついて御御つけ——でミオツケとよませ、も
ひとつついて御御御つけ、つまりおみおつけ

ってまあ、こんなわけなんだ」

「バカ野郎、なんでそんなくだらねえことを
こんなところでしゃべりやがる！」

責め役を、いつのまにやら交替させられた
恰好の青蛇が叱りつけたが、白豚は

「これからが肝腎なのでしてねえ、姐さん」
あわてるふうもなく繰り込んだ六尺棒の握
りに唾きを加え、

「お銀姐さん、さあ、行くぜ。ちとばかり手
荒な責めだが……」

言ったかと思うとグイッと、ひねりを加
えて、それを、ともに引いたものだから、
「ヒ、ヒアアア……」

お銀の唇から我を忘れた絶叫が上がった。
「だから俺、言ったのさ。胡瓜だけでいい、

大根や人蔘とちがってイボイボがあるのだか
ら胡瓜だけでいい、といったんだけど、兄貴
たちがイボだけではたりねえ。お銀ほどの女
には荒縄で巻いておかねえと効果がねえ——

との一点ばり。とうとう、こ、こんな……」
胡瓜だけでも刺戟があるのに米俵や炭俵を

くるのに用いる毛羽の多い荒縄を巻きつけ
られているのだから、お銀の受けた衝撃は激
しかったに違いない。

グイッと青竹を握りしめて苦痛を耐えしの

んでいるのだが、その悶えの表情は、いつの
世でも男心を刺戟することに変わりはない。

「今度は俺だ！」

斑猿が白豚の手から六尺棒をひったくり、
斜め上へと繰り出そうとしたが、

「アレッアレッ……折れてやがらあ」
「どれ、どれ」

たしかに胡瓜は二つに折れていた。
「こ、これは……」

折れたのはそれとして、巻いている荒縄が
しつとりと濡れているのに気付いた赤狐が、
「胡瓜の水分にしちゃあ、ねばっこすぎるよ
うじゃあねえか」

「まったくでさ。さあて何でしょうね、どこ
からしみてたお水さまでござんしょうかね」

「へえへえッヘッ……」
知ってるくせに口にすることを、はばかりて

いる兄貴分たちを尻目に、
「御女子でさあ」

白豚が、こともなげに言った。
「なんだって、おんじょし……」

「そのとおり。ただし、読みがちがいやす。
御御御つけのんで、お読みあそばしませ。
ホッホッホッホ……」

白豚が女形をきどった図など、みられたざ

まではないが、言うことは当たっている。古事記・万葉集の昔、日本人は女性を「女子」とよんだもの。実に何でもない単語なのだが、使いかたによって、時と場所によって、また聞く人の教養？ の有無によって優雅にもな

り、隠語ともなり、猥褻にも、ひびく。このあたりが日本語の面白いところででもあろうか。



イメージギャラリー

『槍で突くのは後にして』

水江

伸

五匹の蛇

やっと苦痛を押えたお銀が、

「は、はやすぎるじゃあないのさ。こ、こんな遊びは、あとにしておくれよう！」

怒りをふくんだ声をあげた。

「ほう、すると、どうすりゃあ、いいのさ」

二本目の胡瓜を鼻さきにつきつけられて、

「妾じゃ、縛られ屋だよ。縄をかけられにきたのだよ。こ、こんなものを」

目の前の胡瓜が五本になっていた。

「おやめったら！ 妾じゃあ承知しないよ」

「面白え、ど、承知しねえてんだ！」

斑猿が、やにわに六尺棒を股間にねじこもうとしたとき、

「こうするのさ！」

しっかりと握りしめていた左手の青竹をパアッと抛ったお銀は、その反動を利用して床に降り立とうとした。いや、湯文字が腰までめくれはしたがどうにか左膝が床についた。

——ガチャ、ガチャ……ガチャ……

横倒しになった竹馬が鋭い響きをあげた。

奇妙なねじれたようになってしまった体勢を一瞬、立て直したお銀が、縛りつけられた足

を足台から外そうとして皮紐に手をかけた。

そのとき――

なまぬるい部屋の空氣のなかを、スル、スルッ、スル――と五匹の蛇が舞いこんだ。

蛇のことをくちなわ――朽縄とよぶが、まさしく五人の子分たちが、いっせいに繰り出した五本の縄は、蛇のように生きていた。

真紅な縄が、いましも皮紐にかかった右手首に絡まり、黒縄が左手首に、白縄が左足首に、そして、まだらまだらの斑縄は、右足首に、がっちり巻きついた。そして、

「アッ！」

虚空をつかんで起きあがろうとする首頸を青蛇の放った青色の縄が締めつけると、あとはもう、お銀の身に自由はなかった。

「みごとじゃ！」

部屋すみで神妙に、ことの成り行きを見守ってきた工頭監物が、思わず嘆賞の叫びを発した。彼とても方円流の達者。なみたいていこのことで、他人を賞めようはずはない。

チラッと振り返った鞭兵衛は、

「お賞めいただくのは、これからでして」

とは云ったものの、子分たちをほめられては悪い気はしないらしく「さあ、どうぞ」と酒をすすめる。

「な、なにをするのさ。こ、こんな緊縛作法が、いったい、ど、どこにあるのさ！」

手首、足首と、首頸、このほかには縄一筋かかっているのだから、まさしくこれは、どんな流派の捕縄術にもなかった。

だが――

「穴沢流・蜘蛛の巣！」

青蛇は高らかに、その名を告げた。

「く、くもの巣だって……こ、これがかい。」

妾は始めてだよう

円陣をつくった五人の男にかこまれたお銀は、「大」の字なりの仰向けのまま、右、左へと顔を振った。さっき転げたときに元結がされたのか、黒髪はもう乱れに乱れてしまっていた。

「おめえのような女には、これが、まずびつたりということさ」

青蛇が青縄をひくと首頸が抜けるように痛くて、どうしても両脚を、いぎたなく開いてそちらのほうにひきずられていく。が、すぐ「あわてるなって、お銀！」

黒縄をピンとはりつめられ右手が、まっすぐ伸ばされて五本の指が、おもわず開く。

「フッフッフ……お銀姐さん」

足もとから、きこえてきた声は白豚。

「もっと股倉、おっぴろげてあげようか」と今度は、白縄が床と平行して、うごめき左足首が、どうしようもなく左へ割れる。

「こっちもだ！」

右側で斑狼が叫んだかと思うと、赤狐が、「蜘蛛の巣の責めは、はれ、こうして！」

と赤縄を、ちらつかせてお銀の四肢を、いやがうえにも、ひらかせていくのであった。

一本の縄であやつられても裸ではどうしようもないのに、五本の縄で五人の男に、まるで操り人形のように女体を、かきまわされながら、お銀は歯を喰いしばって耐えた。

湯文字は、もう何の役にも立っていない。大理石のように、すべすべした太腿が黴い床の上で妖しく、くねり、下腹の贅りがチラリチラッと夕陽に映えた。

「行くぜ！ いいな！」

青蛇の叫びが頭上でして、

「おう！」

まわりで男たちが吼えた。何を……この上しようというのか……。

キューッと胸乳のあたりに力を入れて身構えたとき、五人の顔が二歩三歩、後退したかと思うと躰が、ふんわりと床を離れた。

四肢にひどい痛みを覚えて、なにやらわめ

いたのは記憶にあるが、あとは、くるくると天井が舞いはじめて、意識を失わないための努力が、せいっぱい——廻ってる、いや、くるくると廻らされている。

ア、アッ！ 痛……痛い！ ア、アアアッ……ヒ、ヒアアアアッ！

ときどき双臀が床に触れる、後頭部もゴツン、ゴツンと、ぶちあたる——が、まがうかたもなくお銀は円降をつくった男たちが、はりめぐらした五本の縄によって、ぐるぐるぐるぐると回転させられつづけていた。

「ア、アッ、や、やめ、イ、イタッ！ ひ、ひどい！ ひどいったら、ヒ、ヒイイ！ いたいといってる……キ、キヤア！」

右廻りに、あるいは左廻りに何十回、回転させられたのか皆目わからなかった。

「お、おみごと、鞭兵衛！」

工頭監物が声高らかにいうのが耳に入ったときには、もう、ここがどこかわからないほど意識が、もうろうとしてしまっていた。

「領田さま」

酒をくみかわしていた元禄屋が、やおら声をかけた。

「ともかくも、まず、お抱きなされませ」

「フッフッフ……やるとするか」

衆人環視のなか、いささかためらいの色を見せたものの領田は、献上博多の袴をぬぎずると白足袋を床におろした。

真下に見おろすお銀の姿は、領田ならずとも男心をときめかせるものであった。

竹馬の青竹のうち一本は外れていたが、左足首にからまったほうは、まだ残っており、女体を斜めに一条の青い線で彩っていた。その青竹の青とうす桃色にそまった胸乳のあたり、さらには、わずかに腰にまつわりついているだけの友禅縮緬の湯文字の色彩の妙が、領田の目を細めさせる。

「可愛い女じゃ、お銀。いつもより、いっそう、あでやかじゃぞ、この、この汗」

つと伸びた指がへそから脇腹へと、したたりおちる玉のような水滴をうけた。

「では、参ろうかの」

身をかがめた領田が、ぐったりとしている女体におおいかぶさろうとしたとき、

「アッ……イヤア！」

お銀が鋭い叫びをあげた。

もう抵抗する体力も意志もないと思っただけに領田の頬がピリッと慄えた。

お銀の右手が動いて、その頬を打とうとした、いや、打った——と、そのとき、黒縄が

躍って右手は空しく床に、はりつけられ、「この阿魔！ まだ降参しねえってのか」黒馬の怒声が、とんだのであった。

「妾、妾しゃ、抱、抱かれにきたのじゃあない。縛られに、縛られに來ただけだっていったじゃあないのさ」

「この場になっても商売の道を守ろうとするのは、けなげなことじゃがの」

領田は、左右の肘のあたりを押しつけながら、

「ものごとには妥協ということも必要じゃ。の、お銀。今日は、よいであろうが」

「お、お殿さま。イ、イヤでございまする。お銀は、イヤ！」

と、左足首と右足首がズルズルと左、右に押しひらかれてしまったのは、白豚と斑猿がそれぞれの縄をひきしぼったせいである。

「ダメ、ダメ、や、やめてよう！ 妾しゃ、いやだよう！」

悲鳴の途中で、首領がしまり、

「お銀。御老中さまのご寵愛をうけるのだ。有難いと思いなよ」

「イヤだったら、イヤだよう！」

身悶えするたびに、

——コト、コトツ

と青竹が床を打つ音が、もの悲しかった。
「フッフッフッ、御老中さま。さあ、私どもが、ほれ、このように」

グイと縄をちぎめて前進してきた青蛇が、お銀の耳元で、

「イヤだイヤだといっちゃあいるが、内心はそうじゃねえくせに。お銀、凶星だろ！」

「な、なにをいうのさ！」

といったとき、領田が体をのり出した。

「ア、アウ！」

お銀の裸身が弓なりに反った。

「イヤ、アアア……ダ、ダメダッてば！」

「おとなしくしねえか、お銀！」

青蛇だけではなかった。白豚も斑猿も黒馬も赤狐も周囲から、それぞれの縄を、のぼしたり縮めたりしながら領田に協力する。

身動きできぬほど縛られていれば、手足をしっかりと押えつけられてしまえば、女というものは適当なところで抵抗をやめてしまうものである。ところがいま、お銀、なかば自由であった。縛られているのでもなく、四肢を押えつけられてもいない。手首も膝も、肘も足首も動かそうと思えば自由になった。がいったん行動にうつしたとたん、縄で妨害されてしまうという言わばなま殺しの状態なの

だ。

読者諸賢よ、御令閨になり、恋人なりに、たずねてみられるがよい。緊縛されていたほう（或は手足を押えつけられていたほう）がよいか自由がよいか、それとも、いまのお銀のように、なかば自由で、なかば、どうにもならない状態がよいかと――。

自由のままがよいという答がかえってきたら、まだ御調教のたりないせいで、大方は緊縛されるのがステキと仰言るにちがいないがそこで一步、つっこんでごらんさい。なかば自由、なかばどうにもならない状態であるのも面白そうね、という答が返ってくるはず。そして、それを実行してごらんになるのも一興。多分――なんだか、じれったくてジリジリしてきて、ほんとに騷りものにされていくようで、とっても刺激的。それに、あなたって、とても、ながくながく私を楽しませていただくのだもの、私、なま殺しの状態でジワジワされるのがスキ。ね、もう一度……ね、いいでしょう――と瞳をうるませて、おっしゃるにちがいない。そこで、

「騷りものになるのがスキなのかい」と優しく囁く。

「え、えっ……私、騷られるのがスキ、だっ

てとってもステキなもの」

必ず、こんなことをおっしゃって、汗ばんだ裸身をすりよせていらっしやることは、まづ間違いのないところであろう。

さて――

領田は上からお銀は下、そのまわりをかこんだ五人の男たちの手にした赤、白、青、斑、黒と五色の縄が夕映えに輝いた。

工頭監物は、もちろん、鞭兵衛も、そして春田和泉までが、その光景を眺めていた。高小手手に縛りあげられて正座させられている豊香と千登世も例外ではなかった。

豊香にしてみれば「女体燭台」から解放してもらった恩人。千登世にとっては、大股開きで、かつての恋人新五郎に「嗅がね、舐められ、吸われる」寸前に、救われた恩ある女であったはず。にも拘わらず、その大恩あるお銀が、騷られているというのに、乳房を上向かせ、息をはずませ、ときどきは、うっとりしたように領田に抱かれて、のたうっている姿を、かいま見ているというのは、いったい、どんな女心であろうか。

火照った（記紀・万葉集では、御女子をなげか「ほと」という）――豊香たちよりも、もっとはてっているのは朱房のお銀。白い蝶

が、極彩色の蜘蛛の巣にかかったように妖しくも悶えつづけていた。

醍醐液 寄合

「これは千登世のものじゃろう」

ことをおえた領田が愉しそうに盃をあげたのは小半刻ほどのちであつたらうか。

ギヤマンの透きとおつた盃であつた。その盃のそこにはほんの少したまっているのは、処女の血を思わせる南蛮紅毛の酒でもなければ琥珀色に燦めく日本の酒でもなかった。

「オランダの女も、メリケンの女も結局は同じものだ」とヘンドリック・ファン・メルデルフォールトは申しておりました。

「たしかにのう」

元禄屋の言葉に頷きながら領田は、こちらに背中だけを見せて並んでいる三人の女を眺めた。

「右はしが豊香、つづいて千登世、そしてお銀。これはすぐにわかるが、こればかりは」

「わからぬと申されますかの」

同じギヤマンの盃のなかの乳白色の液体をちよびつと舐めた元禄屋は、

「これは千登世ではございませぬ。このよう

な舌触りは……」

もう一度、舌端で極上酒のようにまろばせて、

「お銀殿でござる。間違いはござりませぬ」

「お銀だと。これが、お銀の醍醐液だと」

「いかにも」

元禄屋は、自信をもって、

「鞭兵衛、どうじゃな」

と尋ねた。

陽は、すでに、とつぷりと暮れて、部屋の八方から花蠟燭が、あかあかと高手小手に縛りあげられた三人の女を照らしていた。

お銀を抱いて一息いれた領田が次に所望したのは「醍醐液寄合」であつた。

何人かの女の醍醐液をのみ較べて、はたして誰のものであるかを適中させるという茶寄合や連歌寄合、川柳寄合に似たものだったが「醍醐液寄合」とは、鞭兵衛たちの想像も及ばぬ、その道の「通」の遊戯であつた。

「旦那さま、仰言るとおりで。それは、お銀のものでございます」

「負けた、負けた。では、次を所望」

高らかに笑つた領田は、

「今度は余があててみましょうぞ。ハッハッハッハ、三人に一人、三つに一つの確率じゃ。」

富籤よりもはるかに有望じゃ。のう、青蛇」

じかに名をよばれた青蛇が恐縮して、ギヤマンの瓶を、とりおとすところであつた。

「よいよい」

ことのほか、機嫌の麗しい領田の口は軽かつた。

「青蛇よ、早う採れ。ほれ、早うくみとつてみい。その象牙の匙でよ」

象牙の匙——長さ一尺の何の変哲もない匙であるが、手もとの凸部を押すと先端、掘いあげる部分の凹部が、より深くなるうえに伸縮出来るという領田愛用の匙である。

うなずいた青蛇が正座している三人のまえに廻つて、その匙を、こちらに見せ、ニヤツと笑うと鞭兵衛に。鞭兵衛がお銀の前にかがみこんで、さも醍醐液を採取するような素振りを見せているが、ほんとかどうかは、わからない。つぎに、領田たちに見えないように黒馬に渡された匙は、千登世のそれを掬いつているように見える。そして青蛇が豊香の股間へと恭々しく蹲みこんでいく。

女たち三人のかげにかくれているうえに、三人の女が、いずれも羞恥に、たえきれないように喘ぎ悶えるので、やがてさし出されたギヤマンの盃のなかのものが誰のものなのか

は、背中をみている領田たちには、わからない。舌先で味わって、あてるほかはない。

「これは豊香の白酒であろうが」

「残念でございます。千登世の保津でございます」

「チィ！ また外れたか」

グイとのみ干した領田から盃をうけとった青蛇は、ふたたび、同じ動作を繰り返しはじめた。

「縛られた女は、後から見ても興の尽きぬものじゃのう」

高手小手に縛りあげられた三人のうち、お銀の両肘は、もうこれ以上、あがらぬところまで、たかだかと締めあげられているし、肉づきのいい豊香のそれは水平から、いくらか上に持ちあげられているだけだが、これが限度なのである。痛々しいのは千登世の腕であった。十八才の縄をかけるのも可哀そうな白い腕が、いまにも折れそうなくらいに黒縄で握めとられているうえに、いまでも鞭兵衛が象牙の匙を繰り出すと、必死になって身悶え顫える。

「おめえ、これを何というか、知らねえだろ。う。まだ、こどもだからな」

右手を股間に、左手で、ほっそりした千登

イメージギャラリー 『恥辱の窓』 水江 伸



世の右肩を抱きながら鞭兵衛が、からかう。「ふのりというのさ。生麩ともいい、ところ天ともな」

「ア、アッ……」

実際に採取されているのか所作だけなのか

——いずれにしても若い女にとってその屈辱は同じようなものである。しかも黒馬が、「しなたりともいいますぜ、親分。そのほか水、汗、溜り水に淫ら汁、契りの水に白水、池水、溜り水。淫水香とも、いいまさあ」

4折

「露ともいうぜ、夜露、朝露、情の露——な
んたたって男にとっちゃあ回春の秘薬さ」
「フッフッフ……さあ、今度は、お銀、て
めえの番だ。たっぷりと掬いにとってやるから
な」

「な、なにをす、するのさ！ い、いつまで
こんな遊びをつづけるといふのだよう！」

「おめえの醍醐液が、なくなるまでさ。まあ
なくなっただって、すぐにコンコンと湧き出
てくるから世話はねえが」

「お、お、おやめよ、恥、恥知らず！ こ、
こんなことを、す、するものじゃあないよ。
ア、アッ、イ、イヤだって！ アアレッ！」

蛤汁に山芋、黄菊漬けと今夜のために特別
に調理させた精力料理をまえに領田たちは、
眼のまえで揺れうごく、女たちの背や双臀の
くねりを、心ゆくまで楽しむのであった。

と、部屋の隅で目をギラつかせて坐ってい
る新五郎に目をとめた白豚が、

「新五郎。この千登世と、お見合いしたこと
があるのかい」

意地悪そうに尋ねて、がっくりと肩をおと
している千登世と見較べた。

「見合いなど……しておりません」

「千登世さんは、どうかい。新五郎とは惚れ

あった仲だったそうだが、ほかの男と見合い
したことがあるんじゃないのかい」

象牙の匙は、豊香の股間と戯れていた。

みじめな養母の姿を見まいと、しっかりと
瞳を閉ざしたままの千登世には、白豚の声な
ど聞えようはずがなかった。だのに、何度も
「何回、お見合いをしたかい」

と尋ねる執念深さに、よこから、お銀が、

「日本橋小町と評判だったお方だよ。お見合
いの三度や四度はしてましようよ。むろん相
手がお前さんのような男たちばかりでね、そ
の日のうちに、ことわっちまったけど」

「へえ、お銀さんが話に、のってくれるのか
い。じゃあ、お銀さんは何回やった」

「忘れっちまったよ。もう昔のことさ！」

ここで自分が、恥かしがったりしては
いけないとお銀、けなげにも胸をはり、
「何度か、教えてくれよ。いいだろう」
という問いに、

「うるさいわねえ。七度だよ、七度」

「なくなった伊平治さんのところへ嫁へ行く
前に七度もねえ、ヘエッ！ おったまげた」

「な、なにが驚くことがあるのだい。女が見
合いて、おかしいとでもいうのかい」

匙からギヤマンの盃へと移された醍醐液が

領田のまえに運ばれてくる。

今度こそ当ててやるぞ——と、まず鼻をつ
けて嗅いだ領田は、小指のさきに少し掬いあ
げると、舌のなかほどにのせて、じいっと味
わってみた。今度、適中させることができな
かったら「寄合」を提唱した沽券にかかわる
とでも考えているらしい。

一方では、

「おかしいねえ。よくもよくも嫁入りまえに
七回も男に抱かれたものだ」

「な、なんだって！ 嫁入りまえに男に抱か
れたって、この妾が！」

白鳩が二羽、巣ごもりしているような美し
い乳房が縄目の間でヒクヒクッと揺れて、

「こうみえても妾は貞操堅固な女さ。嫁入り
まえに男に抱かれるような不見転女じゃあな
いよ。変ないいがかりは、よしておくれ」

「だって、いま七度、お見合いしたと、いっ
たじゃあないか」

「言ったとも、たしかにお見合いはしたさ。
だが云々とくけどね、単なるお見合いだよ、
お見合い」

蛤汁を、ひといきに啜った白豚がニヤツと
笑った。どうやら赤狐や斑猿たちも面白そう
にこのやりとりを聞きいつているのを知って

「お銀姐御。学がねえなあ」

と見得をきり、

「お見合いというのはね、やること、やられることなのさ」

「嘘だわ！ そ、そんなこと、お見合いの席で、どうして……」

あとは顔をあからめて口を嚙むのを、

「だから学がねえといってるのさ。見合いというのは美合いと、かくのが、ほんとうで、美く合うかどうかを試すものだけ」

「ば、ばからしいこと、お言いでないよ」

「聞きなよ。日本書紀という古い書物には、

「交合」と書いて「ミアハシ」とよませている。交合とは、美合い——つまり、やられたりやったりするのが、ほんとの姿。ヘッヘッヘッヘッ、ヘッヘッ」

また始めやがったと青蛇は、どこか講釈師にでもきいてきたらしい「学」を披露する白豚をジロリッと睨んだが、そのブヨブヨに肥った愚鈍な姿恰好に、おもわず吹き出し、

「ヘエ！ 白豚、見合いするってのは、そこまで、ほんとにやることなのかねえ」

「そうですとも、青蛇の兄貴。だから、しばらく仲人も両親も席を外すでしょう。そのときに見合う、つまり、あそことあそこを」

いいながら、自分のものを取り出し、
「こうして、こちらのものと、千登世さんのこと」

膝を二尺すすめれば、そこに二人の女が全裸で並んでいた。まんなかの千登世のあぐらに組まれた内股のあいだに手をのばし、

「こことここを、よく見合わせて……」

うなだれていた千登世の肩がピクッと動き

「ア、アッ！」熱い喘ぎが洩れた。

「見合わせて気に入ったら、こうして」

ひと膝、さらにすすめた白豚が、

「美合いさせるのがふつうのことなので！」

と割りこもうとしたとき、

「今度は間違いない、絶対に！」

領田が突如、大声をあげた。

白豚の話を聞いて聞いていた元禄屋が、

「誰のものでござりましょうかの、老中様。

今度、はずれますと……」

ニヤリと笑い、

「ひとつ、同時にあてて見ましょうか」

「よからう。では、一、二……三！」

一同の耳に、

「お銀じゃ！」「お銀さん！」

と二人の声が同時に、とびこんできた。

ひとときわ、高まる笑い声のなかで、お銀は

じいっ——と唇の端を噛みしめるのであった。
縛られ屋商売も楽じゃあない！

だが、縛られ、罵られていま、このとき、足の爪先から乳房へとツウーンと、こみあげてくる熱いものは何であろうか。

まったく役には立たなくなっているが、まだ腰のまわりにまつわりついている紅地友禅の湯文字の紐を見つめるお銀の耳に、

「これから本格的に責めて見とう存じまするが、かまいませんか」

鞭兵衛の声がきこえ、

「許す。思う存分に、いたぶってやれい！」

領田が楽しそうにいった。と、そのとき

——ゴクッ——と誰かが生唾をのんだ。

あれは工頭の旦那にちがいない——これから拷問にかけられるというのに、お銀は、なんだか、それがまるで他人事のように感じられるのであった。

そのまわりで子分たちの動きが、はげしくなる。なかでも「さっきのお見合いの話、よく知っておったの。ご立派、ご立派」と元禄屋に賞められた白豚は、

「お銀さん。今度こそ、いい音色で囁いてもらいいますぜ、ヘッヘッヘッ。春三つ、夏は六ばん、秋ひとつ、冬は女の囁りもなし——と

は、こりやあまた、何とお淋しう……」

これまた、意味がわかるようでわからない
「春三夏六秋一無冬」をうたいこんだ端唄を
口ずさみながら幅二尺、長さは一間ほどの黒
塗りの板——板といっても彎曲したのもあり、半円のものもまじっている——の継目をつぎつぎと継ぎたしていく。

なんだろう——これは！

しだいにできあがっていく大がかりな責め
場をまえにして、お銀は胸を動悸うたせた。

四角い部屋に丸く、まず大きな円を描いて
置かれた黒塗りの板は、その一部を、なかに
まげて、もう一つの円をつくり、さらにもう
一つとあわせて、三重の渦巻を形成した。こ

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投
稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会に
は一切応じておりません故、御安心の上
御送稿下さるようお願い致します。尚手
紙の転送なども原則としては取り扱いは
致しておりません故御諒承下さい。
○如何なる理由に拘らず直接発行所への
訪問や電話は固くお断り致します。御用
件はすべて書面にてお寄せ願います。
○編集者に面会を求められる方は、住所
氏名職業を明記の上、用件を附してお申
込み下されば、電話番号、連絡場所など
を御返事申し上げます。予告なしに突然
方問されてもお逢、致しかねます。

れだけでも何のためかわからないのに、幅二
尺の板のところどころに高低とりまぜて一尺
近いのから一寸くらいのもので奇態なかた
ちの棒が植えてまわっているのも妙であった。

「な、なにをしようというのさ」

千登世と豊香が部屋の隅へ引ったてられた
あと一人、高手小手縛りで正座しながら、お
銀は不信に駆られた。

「さあてねえ、ここを働かしたら、すぐわか
ろうじゃあねえか」

斑猿が自分の小さな頭を指さした。

「醍醐液を掬いとられたあとだ。少しは滑り
をよくしておかねえと、いくらお銀さんでも
かなわねえだろう、ヘッヘッヘッ、これでも
まだわからねえか、この棒。ね、お銀さん。
こいつにゃあ、たっぷり山芋の汁を塗りこ
めておいてやらあな」

「じゃあ、俺はこいつに七味唐辛子をくつつ
けておくか」

「唐辛子は、ひでえや。俺は惚れ薬」

「俺は地黄丸」

「バカ、地黄丸は男の薬よ。女には四つ目屋
の、いもりの黒焼」

俺は女喜丹だ、やれ山椒だ、えのこづちの
根だの歓悦丹だのと、五人の子分たちが、て

んでに媚薬の名をあげて、奇態な形——いや
いまはもう、はっきりとそれが何を型どった
ものであるかが、わかったが——の棒に細工
を、ほどこしていく。それをみて、

「お、おやめよう！ おやめたらー！」

我を忘れて、お銀は叫んでしまった。

どうやら、この黒塗りの板の上を、ごろご
ろと回転させられるらしい！

「バ、バカな真似は、おやめたらー！ 妾し
ゃあ縛られ屋だよ。縛られにきたので、賜り
ものになるためにきたのじゃあないよ！」

「どうやら、のみこめたらしいな、お銀。お
めえのような女にゃあ、これがお似合いさ」

青白い顔を歪めて立ち上がった青蛇が
「親分、準備できやした」

と鞭兵衛に指示を求めるのであった。

鞭兵衛が元禄屋を仰ぐ。元禄屋が領田とう
なずき合う。工頭監物と新五郎が、グイッと
上半身を、まえに、かがめる——緊迫した一
瞬、一瞬がすぎて、

「穴沢流女体車輪！」

青蛇の声が、陰気に、ひびきわたったかと
おもうと、十本の毛むくじゃらの腕が、ムン
ムンと薫る、お銀の女盛りの裸身に、わらわ
らと、よりたかっていった。——つづく——

女 相 撲 ノ ー ト

(3)

雄 松 比 良 彦 文 と 画

女 郎 花

男より勝色ありや女郎花

梧 英

御存知の通り「俳諧時津風」(延享三年、武江年表は同二年春とあり)の女角力の句である。

この句を詳しく調べるとさまざまな問題が出てくるのだが、此処ではまず「女郎花」についてのみ述べよう。「女郎花」「柳」「ひさご」の三つは女相撲・座頭相撲に関連する植物なのだが、柳はまだよく判らず、ひさごは古代以来の関連事項が膨大で、まとめにくい。いずれ又別にのべてみたい。

おみなえしは大昔からわれわれの祖先と一緒にこの島国でくらしている秋の花。「古今集」の僧正遍照が落馬した横に、はえていた一本などは、口どめをされたことで有名になり、江戸庶民文芸にもさかんに出る。この僧正の歌でも、女郎花は女の寓意なのだともされているように、かなり古くから女性の意味をもっており、江戸期は女郎の意味もあつたたとえば文政三年「紀玉川」の

ほれてゐる人に妻あり女郎花

など。(川柳雑俳については鈴木忠勝氏の「雑俳用語辞典」をはじめ諸著を参照させていただくが多いので、いちいち挙げない)

この「時津風」の句も従来の説明者は「女郎花」は単に女、つまり女力士という意味と

されている。「勝色」(かちいろとよむ。シヨウシヨクでない)は各辞典にあるように、勝負の勝目のある気配。「男より」というのはあまり良い起句とは思えぬが、この際、観賞批判はやめて、とにかく「男より女の方が勝目があるだろうか」というと平板だが、まあそういう句意。この句意から、これは男女相撲の句だ、女と女の相撲ではない、表題の「女角力」も女力士の事で、女相撲そのものを意味していない——という見方が出て来たわけ(朝倉無声氏?)だが、この問題は女相撲史の方で重要なので、別に項を設けて江戸女相撲史の従来説を詳しく検討するので此処では省く。「勝色」の色から「女郎花」の花をみちびいたのである。一方、やはり「女角力」の表題は女力士ではなく、句意も(女の相撲は)男のそれよりもはなばなしい色っぽい取組といえようか、との意味だとする見方もあるが、わたくしはこれは「勝色」の用法として少々無理な解釈と思う。

さて本項の目的はこの句の典拠を示すことにある。結論をいうと、この「女郎花」はただ単に女を意味するものとして用いてあるのではない。例の句集「東土産」では、女力士は「ひさご」になっている。女のたとえには

いろいろ、おそらく無数にあらう、桜でも椿でもよくそのひとつとしての女郎花である、というわけではないということである。江戸時代の俳人たちは、現代の子規・虚子の「写生」の洗礼をうけたわれわれのセンスよりもはるかに故事や典拠を重んじた。川柳なども故事風俗のもじりの乱舞とも見られ、当時の



宗匠にすら何を云ったのか判らなかつたのも多い。この「時津風」の句でも表題と挿図がなかったら何のことか判らず、おそらく遊里の一景ぐらいに解されるところだろう。又いろいろ故事をひっかけもじる巧みさは今日の比ではない。先文の、太平記の青砥藤綱の小銭拾いを「玉磨青砥銭」とした京伝のウィットなど代表的である。さて、「後拾遺和歌集・四・秋」に

題しらず

秋風にをれじとすまふを
みなめしいくたびのべに
おきふしぬらむ

前律師慶暹

の一首がある。これが「男より」の句の典拠とみて、まず間違いはない。「すまひ」と「をみなめし」のむすびつきである。いうまでもないがこの「すまふ」は「相撲ふ」ではない。「争ふ」または「抗ふ」である。べつに女郎花が秋風と相撲うという意味ではない

(秋風に何か意味をつけて女闘美的に解釈すると面白いが)のであって、「すまふ」のかかる用例は周知である。源氏・伊勢にもあり芭蕉あたりにもある。そもそも「相撲ふ」から変った動詞なのか、又はその反対か(折口信夫氏ら)というエチモロジ―は興味があるがやめておく。

この和歌にしても、ひとつの寓意的なもので、やはり女郎花は女をあらわしているとされ、「国歌大系」の頭注にも「をれじとすまふ」は「ままになるまいとして抗ふこと」となっている。ある種の女の生き方を詠んだと見てもいいし、又男に挑まれる女のように想う人もあらう。

いずれ別にのべたいがこの句は「男より」と直接なのに、他では「柳より」とか「なでるやうなる柳かな」とか、育人力士が柳であらわされている(らしい)ことから、延享二年(以前)の江戸両国のは育人でなく並の男と取組んだともいえるが、これは喜多村信節の育人説など、別の所で取上げたい。

なお、相撲そのものと女郎花の関係には、「後撰和歌集・六・秋」に

すまひのかへりあるじの暮つかたをみな
へしををりて敦慶の御子のかざしにさす

とて

三条右大臣

をみなへし花の名ならぬものならば何かは
君がかざしにもせん

とある。又根岸川柳氏によれば「秋風」は江戸庶民文芸では「鮑風」となり

秋風の胸ぐらとって女郎花

という句を引き、男の胸倉をとる女郎としているが、この句にしても上記「後拾遺集」をふまえている事は当然知りおくべきである。

折口信夫氏のいう「恋い」と相撲の手「乞い」は全く同じとか、節会のかざしの花とか相撲には単なる格闘でない色っぽい雰囲気があり、女闘美はその一面の発露であるから、こうした面もノートに取りあげた。ついでに記すと「相撲ぐさ」「相撲取草」はいろいろな植物にあてられているが、稀にヒルガオを意味することが「赤染衛門集」にもあってすまふ草倒るる方になりぬるか心こはしと且は見えつつ

とあり、これなども解釈の仕方によってはなかなか面白いものである。

岡山県下の雨乞い女相撲

ノート(1)(2)では民俗女相撲は東北と九州に

しか知られていない、とのべてそれについて考察した。岡山県下に一例知られているのを知ってはいたが除外しておいたのは理由があるのだが、ひとこと「某県下にもあるがこれは別個に考える」ぐらいのべておくべきだったと思う。今ここではっきり岡山県下とのべて取りあげるのは、既に公刊物に公表紹介されたからである。「別冊実話読物」の四十九年十一月号に「ポルノ風土記・岡山」という無署名の記事が載り、この中に、この雨乞い「フリボボ相撲」が紹介された。ここで、今まで伏せていた理由、またこれを除外してノート(2)のような考察をしても差支ないと考え、理由をのべさせていただく。

まずこの「ポルノ風土記」であるが、これにはネタ本がある（そうは書いてないが）。わたくしがこの「フリボボ相撲」を知っていたのはこの原本の方によってである。昭和三十九年に岡山の民俗研究団体が同県下の性風俗を調査し、集成報告され、非売品として研究者にのみ配布された本があり、その補遺が昭和四十一年に出ていて、これも、同様である。この後者の方に上記雨乞い「フリボボ相撲」が報告されていることは、以前から承知していた。

各地の性風俗や性的風習については、好色的、興味本位に誇大・歪曲してとりあげられ、いじくりまわされることを特に地元の人々は嫌われるものであり、上記書（書名は伏せておく、特志の方にはすぐ判るだろう）なども、とくにその点に神経を使われている様子と考え、慎重にしていたが、すでに大衆娯楽雑誌に出たのだからもうよいだろうと考える。女相撲の民俗の調べ・公表などはいくつか微妙な問題もあるので、だからといって曲論をたてているわけではない。興行女相撲などにしても、それぞれの時代の社会相があり、社会的に不遇の人びとが女力士に投じているケースが多いから、その取扱いは表現共十分の理解を以て慎重に考えることが大切である。拙著「雑考」に「過去のそれはグロテスクで醜悪な見世物が多かった」と云ったのも江戸期の盲人とかさ、かき女の取組など、客観的にそういわざるをえない点を云ったのであって、とりわけ明治以後の興行女相撲などもグロテスクで醜悪な見世物だとはひと言も云っていないから、誤解なきようにねがいたい。民俗女相撲が各公的機関の調査に姿をあらわしていないのは、こうした微妙な心理の反映もあると見られる面もある。

さて「フリボボ相撲」という名称だが、これは上記三十九年の本の方に雨乞いに男衆が変装して踊ったという「フリマラ踊り」が紹介されており（別の土地だが）、これとの対比で呼ばれているものと思われ、そう深い意味はないと思われる。ボボはフリようがないわけだが、俗語ではフリマラ（男の全裸）からフリボボ（女の全裸）といういい方が流布している。この「フリマラ踊り」が古い昔の伎楽行道行列のあわれな道化「崑崙」のしぐさを伝えていたとわたくしには思われて興味深い（他の各地民俗にも類例がある）が、此処にはフリマラの方は関係ないからフリボボ相撲の方を続けよう。

これはK郡K町のTという地方に大分以前に行われた事がある（語り手の記憶にない大分前、また表現では一回きりか、少なくともそうしばしば行われたものではないと、とれる）という事で、注目されるのは例の昭和七年報告の「扇田」の事例とあまりにもひどく酷似していることである。ちなみに、この「フリボボ相撲」は信頼すべき報告であって決して興味本位の虚造などの出る文献ではない。更に西へつながる九州佐賀県下のものが何ほどかヴァラエティをもち「扇田」のもの

と異なっている点、特に注目されるわけだ。

ちがうのは山に上ったりしない点でこれは地形上のこともあるかもしれない。女人禁制的な聖山意識と修験道の関係が雨乞いに持込まれていたりなかったりするのには地域差があり、九州でも全然平地でもある。とにかくこの「フリボボ相撲」は、男にみせない——全裸（褌もなし）——いわゆる相撲技でなくレスリングのようで相手が弱るまで痛めつける——酒を飲んでやる——雌雄の竜を作ったま——という風に「扇田」そのままなのである。又地域的にも近在に取材が全くなく、行事としての年代的ひろがりもなく、とにかく記録として時空共に孤立している点、東北や九州が地域的にも、時間的にもひろがりをもっているのと異質である。従って此処の起源は、ノート(2)でも述べたような、明治以後（？）の職業女相撲団の巡業が、興行売込みのために江戸期の俗説を援用して「女相撲は雨乞いにも効く」と云ってまわった（であろう）というのがわたくしの想像である。これについては一般の起源説を再論するときに又のべる。こういうことは往時の興行に關与された方々にうかがえばかわるのだが、うまくゆかない。小沢昭一氏ら、その方面に熟達の方

々が「雨乞い売込み」の角度からも調べて下さればよいのだが）ことの名残りのようでもある。岡山県下にもそういった興行物が賑った所は多々ある。しかしわたくしの考えでは別になる。昭和七年——昭和四十一年の三十四年の開き（じっさいあったのはもっと前としても）を見ると、扇田の風俗がここに云い伝えて来られて、それが試みられた、という現代民俗学報告を媒介とした第二次伝播なる近代的現象がすでに起っている、という可能性の高さを捨てられない。これがこの事例を一応特例視し、除外して東北・九州のみで論じてよいとする第二の理由である。いずれにせよノート(2)でも断定はしていない（出来る筈もない）ので、今後このように各地に見つかってブランクがうずまってゆくことは、女闘愛好者としてむしろ大いに楽しみにしたいのだが、そしてそうなると大体伝播者も職業女相撲団自身だったろうという方向になってもつとはっきりするのだが、現在のところはノート(2)で、のべた通りである。

なお、この項の地名は略称を用いた。特志の方のみ、お調べねがいたい。

[手記]

真知子がたどった
Mへの軌跡

長谷田 亀治

月日の経つのは早いもので、真知子と結婚以来、13回目の正月を迎えました。

仕事のあい間の時間つぶしに、ある百貨店の宣伝部へ遊びに行き、たまたま催されていた女性下着の「着付けショー」をのぞいたのが真知子との最初の出会いでした。

真知子はメーカーから派遣されたモデルの一人で、網タイツに、股ぐりの深い黒いレオタードを、ぴったりと身につけ、仮設のステージに立って、ブラジャーやガードル、あるいはオールインワンなど、いろんな下着の付け方を、演じていました。真知子自身は意識していなくても、黒いレオタードと、その上に付けられた白い下着のコントラストが、なんともセクシーで、わたしは一目で魅了されてしまいました。

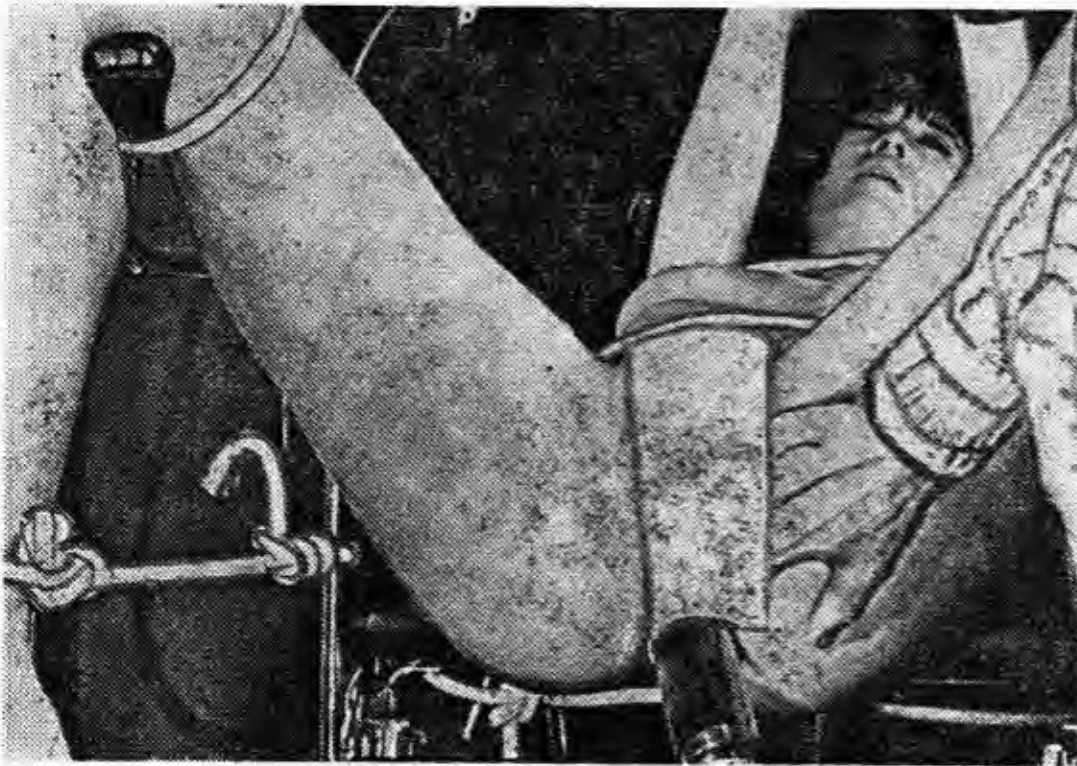
7カ月の交際ののち、結婚しましたが、そのころの真知子は職業柄、プロポーションはたしかに、いい線を行っていました。それにモデル養成所の厳しいトレーニングで鍛えられた体は、とても、しなやかで、ちょっとしたアクロバットは平気でやってのけ「こりや仕込み甲斐がある」と、わたしを大いに喜ばせてくれたものです。

じつくりと時間をかけて飼育、調教を重ね

直腸内に20センチも差し込まれた太い15号ネラトンカテーテルによる高圧洗腸。



ましたので、期待どおり、どんな娼婦にも負けないテクニックを身につけましたが、最近では年齢のせい、腹部にうっすらと脂肪がついてきました。わたしが、それを指摘しますと「これが女盛りのしるしよ」と口では強がりをつけていますが、内心は、かなり気にしていると思え、いつもボディ・スーツを肌



200℃浣腸器でのグリセリン原液の注入。

身離さず、独身のころから続けているヨガもどきの美容体操を、いっそう熱心にやったり近くのボウリング場へ通ったりこれ以上、太らないよう涙ぐましい努力をしています。

SMプレーが一種の潤滑油となって倦怠期

らしいものもなく、まず無事平穩に過ぎた毎日ですが、いろいろ助言をいただいた塚本鉄三先輩と、本誌に真知子に対するエッセイを再三、寄せてくださっている小沢準一氏へのお礼を兼ねて、調教の軌跡をたどってみることにしました。

軌跡といっても、真知子が一つの課題をこなすたびに、手帳の片隅にメモっていたものを、まとめたものです。ただ、女性にとってもっとも恥かしくていまわしいものと忌避されている、婦人科の内診台に真知子を全裸で縛りつけ、カントやアナルの最深部を、膣鏡や肛門鏡で、すみずみまで点検したり、洗滌や高圧浣腸、あるいはカテーテルによる強制排尿など、羞恥責めの限りを尽した写真を添付していますので、へたな文章を読むより、一種の「地獄絵」ともいえる写真を観て楽しんでいただければと思っています。第1回はアナル・セックスの巻です。

アナルセックスの巻

もともとアナル（肛門）はカントとちがってセックスに用いる器官ではありません。ですから、あまりひんぱんに使っていますと、輪状の括約筋がゆるんでしまい、ひどくなる

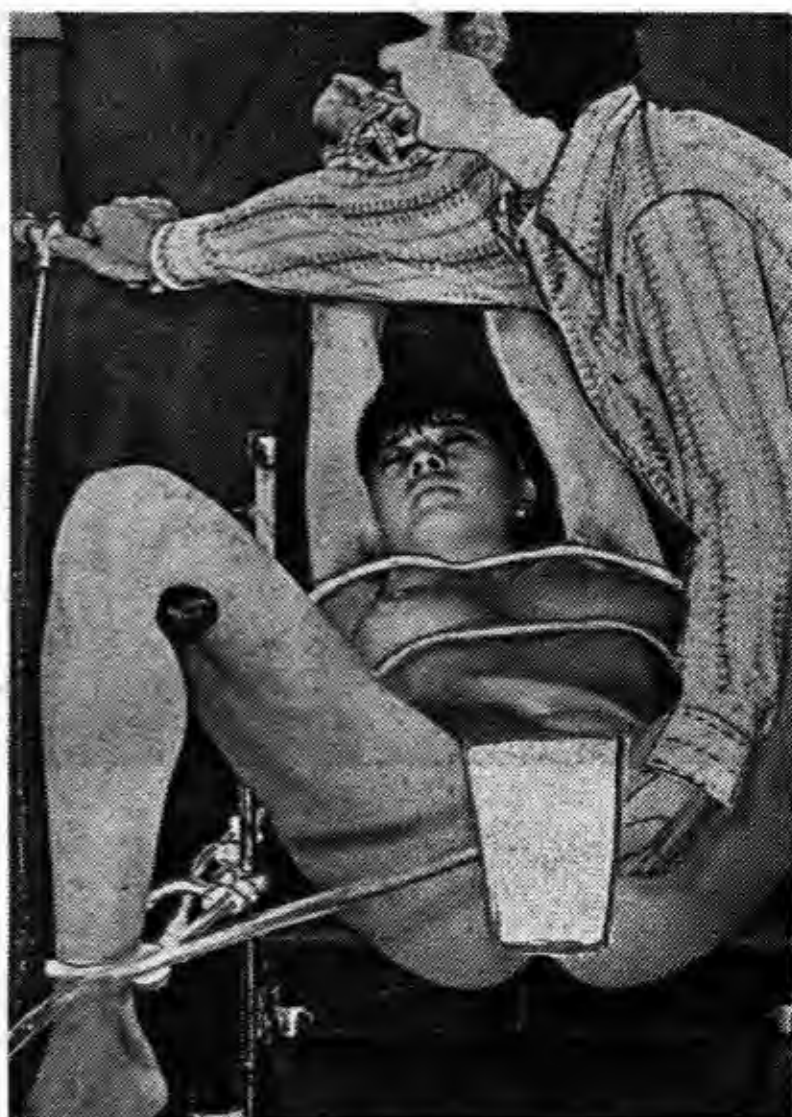
と漏斗（じょうご）のようになってしまいます。こうなると、きたならない話ですが、いつも「おしめ」の世話にならなければなりません。事実、外国のバック専門の娼婦のなかには、こういう惨憺たる状態になりながらもなおヒモや、抱え主に強制されて客をとらされているものも少なくなく、客からタチの悪い性病をうつされて腸管に潰瘍ができ、腐ってしまった—という悲惨な例まであります。

いきなり、こんなことを書きますと「アナル・セックスなんて、とんでもないワ」と怖じ気をふるわれる女性も、あるかも知れませんが。でもこれは、夜毎に数回から10回近くもアナルを酷使しなければならぬ特殊な娼婦の例を挙げたまでで、一週に2度や3度、使う程度なら、まったく心配は無用です。

真知子の場合は、すでに8年近いキャリアがあります。ひところ、開角度の小さい肛門鏡では、あきたらず、膣鏡まで用いて強烈な拡張責めを行ったりしましたので、相当ゆるんではいますが、半月くらい使わないでみると、適当に締まってきますから、人間の体なんて、まったくよく出来ているものです。

ずばりアナル・セックスだけが目的の場合、先天的に括約筋をリラックス出来る女性なら

過マンガン酸加里液の噴射による膣洗滌。



りクリームを塗ったアナルにブロージーを挿入して、前後に動かしたり、回転させたりしてフォアプレー（前戯）を楽しんでいるうちに括約筋は自然にゆるみ相当、柔らかくなりま

す。
この状態でも使用する

ことは出来ますが、女性

性は、まだまだ苦痛を訴えるでしょう。真

知子が73年1月号で、

「地獄の快楽」と表現した特有の快感を味わうためには、さらに通路を広げ、柔らかくしなければなりません。土壌を深く耕してこそ、豊かな収穫が約束されるのです。

フランスのポルノ文学「O嬢の物語」（二見書房刊）にも肛門拡張のシーンが登場します。Oは直腸内部へ入り込んでしまわないよう、根本の部分が太くなっているエボナイトの拡張棒を、はめられ、その棒が筋肉運動で押し出されないよう、腰の回りのベルトに釣

った3本の小鎖で固定されます。この鎖の1本は尻の割れ目に沿って走り、あとの2本は下腹部の逆三角形の左右、つまり腿のつけ根をくびって拡張棒に、つながっています。Oは毎日、順を追って太めの棒に取り替えられ1週間で、どんな巨大なものでも受け入れられるように拡張されますが、この小鎖は、きつくすると股に喰い入って痛みますし、かといって、ゆるくすると肝心の棒が押し出されてしまいますから、あまり実用的とはいえません。

その点、薬局などで売っている子宮バンドや、肛門バンドは伸縮自在のゴム製ですから申し分ありません。とくに子宮バンドは局部にぴったりとフィットする股ゴムと、その中央部に腔内へ挿入するネジ式の嘴管がついており、この嘴管を外して代りに拡張棒を取り付け、股ゴムの位置を少し後ろへ移動させれば、理想的な調教バンドが出来上ります。朝起きぬけにイルリによる変圧浣腸を施し、すっかり排泄させたうえで、この調教バンドをはめ込んでおけば、翌朝の浣腸のときまで取り外す必要はありません。Oがつけられた3本の小鎖が丈夫なゴムに代っただけで、まったく同じ仕組ですから、はめたままで小用や

拡張のための調教は不要です。しかしSMプレーの一環として、調教のプロセスそのものに意義を求めるS男性なら、やはり多少の小道具は必要となってきます。医療器店に売っている、金属製の12号直腸ブロージー（直径3センチ、長さ16センチ）を一本、買っておくとなにかと便利でしょう。これは、とても滑らかですからスムーズに使え、少々手荒く扱っても腸壁を傷つける心配は、まったくありません。ブロージヨブをさせながら、たっぷ

生理の手当も出来るからです。

真知子は直径3センチからスタートし、二日後には3・5センチ、四日後には4センチを用いました。括約筋が四六時中、押し広げられたままの状態は、かなり苦痛のようですが、その代り拡張は急速に進みます。日に日に壁が伸び、ツボミがほころびるように変化していく状態を、毎朝の浣腸のたびに、じっくり観察するのは実に楽しいものです。それに女性も苦痛のなから被虐の血が燃えるのか、調教バンドをはめていたときの真知子はショーツの中心を、いつも恥かしい体液で濡らしていました。

こうした調教を1週間から10日も受けなければいけないの女性は楽に使用できるようになります。欠くことのできない潤滑剤は、もっぱらワセリンが用いられるようですが、ぎらぎらと脂ぎっていて、べたつくので、事後、不愉快な思いをすることが、よくあります。それよりコールド・クリームにサン・オイルを適当にまぜ、半液体状のクリームを作っておく方がよいでしょう。これを小型のガラス製浣腸器(50CC)に入れておき、10CC程度を浅く注入します。

このクリームは、さらりとしていて香りも

いいので、とても使い易いです。それに、なによりもうれしいのは、すぐ体温で融け、インサートすると泥田を素足で、こね回すような、あの独得の微妙な調べを奏でてくれることです。指先で愛撫を加えられている部分も当然、熱く濡れてきますから、フロントとリアの「悦楽二重奏」を聴くことができます。真知子は自分が奏でる、この恥かしい二重奏に、ことのほか、弱く「いやらしいワ、いやらしいワ」と涕泣をもらしながら、ものすごくエキサイトします。リモコン式の小型のバ イブ玉を埋め込んでおけば、さらに効果は高まります。

アナル・セックスの魅力を、微に入り、細をうがって、活字にすることは困難ですが、一口でいえば、すばらしい「名器」の持ち主と交っている感じを想像していただければ、いいでしょう。

女性のあの部分に対して「ミミズ千匹」とか「愛宕山」あるいは「タコ」「巾着」などの俗称があります。アナルにはミミズこそいませんが、タコは、たしかにいます。精気を吸い尽してしまうような肛門括約筋特有の強い吸引力をノーマルなセックスで味わおうと思えば、よほどの「名器」の持ち主に



出合わない限り、困難でしょう。それにアナルは女性が、もっとも、ふれられたくない恥かしい場所です。そこを強引に犯し、羞恥のどん底に突き落とすという加虐感も見逃せません。浣腸と洗腸によって柔らかくなったアナルに加えられる暴虐。

もどと身体起こせば未だ快楽の余燼消えずに恍惚として身を横たえた俛の佳子を英子は抱き起こし「さあ、佳子お姉さま。あられもないお姿を記念に撮って貰うのよ。カメラの方を、お向き遊ばせ」佳子は乱れた黒髪の、額に汗で纏いついた俛、濡れたような瞳でカメラ構える洋子を見た。既に羞恥を超えたのか冷やかな視線は厳しく牝犬共を見詰め、女体の端々しい美しさ堪えながらも、毅然として佳子より漂う雰囲気、シャッター切る洋子も圧されて、たじろぐ。佳子は学生の頃、実らずして過ぎ去ったけれど、すべてを捧げて悔いなかった恋人との愛の日々より幾年振りかの、燃える女の性の哀しみ噛みしめながらチンピラ牝犬共に真の女の欲びが判るものかと思えば、何故か誇らしきものさえ感じる。日頃の優雅さに包まれた佳子の、どこにこのような威厳さが隠されていたのかと、洋子は射すくめられる思いで、カメラ持つ手も思わず震える。

手の縛り解かれて、すごすごとズボン引き寄せる定吉に「おじさん禪無くて御免ね」洋子、言えば「あ、男物ブリーフなら、私持ってるわよ」と郁子。「あら、そんな物、持っていると誤解されるわよ」郁子、慌てて口

抑えたものの言ってしまった事は仕方ない。啓子が持ってきたブリーフを定吉は穿き、纏い馴れた越中とは違う感じに、少しばかり途惑う。

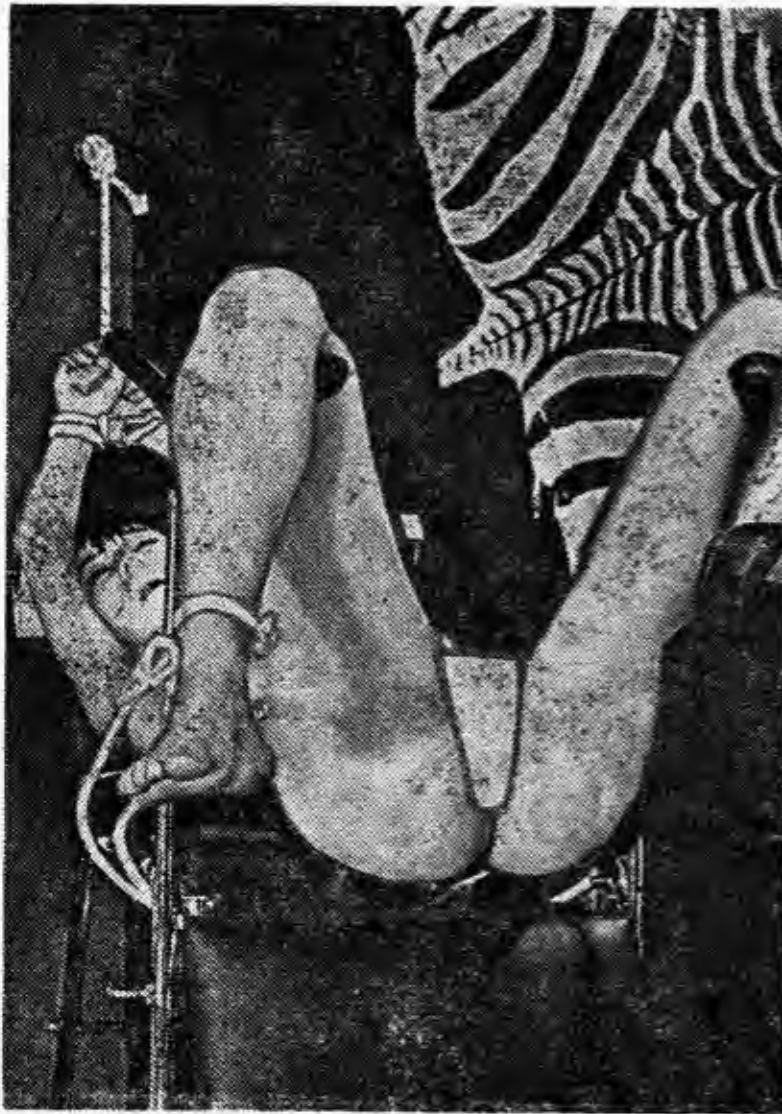
「さあ、おじさんのお帰りよ。歓送のアーチ作っただけよう」洋子、言えば、郁子、英子と三人並び、レビューガールのライン・ダンスよろしく、それぞれ腰に手を当てて片足高々と差し上げる。見事な太腿、並ぶ下を、定吉は、よろよると這って通り抜けながら、見上げれば若さ溢れる太腿の肉林。わが身の押しひしがれたい気持が起こり、その中に身を埋め尽くして、痺楽の淵に溺死しようとも悔いぬとさえ思いながら、竜宮城ならぬ、牝犬城を後にする。

「おじさん。また、遊びにおいでよ。きつと来てね」洋子は、未だ佳子の欲びの肢体、目に灼きついて消えぬ。今度こそは佳子の代りに自分がその役、演じたいと願望し、淑かな佳子以上に、自分なら大声あげて呻き、のけぞって、見守る連中を煙に巻いてやりたいと思えば「きつと来てね」と真に希い、バー、アルサロのホステスの客誘う以上の熱意が籠る。郁子は「ウーンと匂いの付いたソックスパンティも変えずに、ずーっと穿き続けて、

たっぷり匂い含ませて置いてあげるわよ。お禪も綺麗に洗って、今度、来られるまで、お預かりしてあげてあげるわ」と優しい面もチラリと見せ、英子は片手で覆って脚挙げていたのを、定吉が下を通る時、そっと、その掌離してやる。

だが所詮は女。どこかが抜けている。カメラ・レンズの蓋付けたままシャッター切っていたと気付き、今頃は大騒ぎしているとも露知らぬ定吉。つるべ落としの秋の日の、とっぷり暮れた街の中を、路地裏の長屋に向かいつつ、あれは夢ではなかったかと疑い抱き、辺りに立ちこめた闇を幸い、ズボンの腹より手を差し入れてまさぐれば、紛れもなきブリーフのメリヤスの感触。思えば言い寄る女もいたものを、自ら避けるようにして逃がれ、ひたすらに働き続けながら、妻一人に律義通してきて、五十路の坂、登り初めた今、振り返れば、性の深淵の一隅に佇んでいたばかりのように思え、根が人一倍の好き者の故に、なお惜しく思える。

花の色香も識らずして、戦に散りし若人の数多くいたぞよと、定吉慰める如く、折から降り初めし秋雨の、一筋二筋、定吉の背を濡らす、音もなく。



内診台に縛りつけ、秘所をむき出しにした羞恥責め。

横から眺めても、バストと、ヒップのふくらみ、手錠をかけられた腕は別として、体の側面の厚みだけの棒を、のんだような、直線ポーズになるのが理想です。

わたしなど、太腿のつけ根が裂けそうに引きつり、体がぐらぐらして、とても辛抱できませんが、幸い真知子は美容体操を欠かさず続けてきた、おかげで、ある程度の時間ならほぼ理想に近いポーズを、とり続けることが出来ます。それでも、ちよつと時間が長引き

ますと、耐えられなくなり、腰を引いたり、太腿を少しすばめたりして、苦痛から逃れようとしみますので、そのたびに一かどの女体調教師になったつもりで「ハッ!」とか、「イヨッ!」とか、鋭い気合いをかけ、崩れかかるポーズをムチ先で、ぴしぴし矯正しながらじっくり括約筋を調教していきます。

香港では、金次第でピンからキリまで、どんな秘密ショーでも観ることが出来ますが、最近、消息通の間で人気の高いのは、秘所を

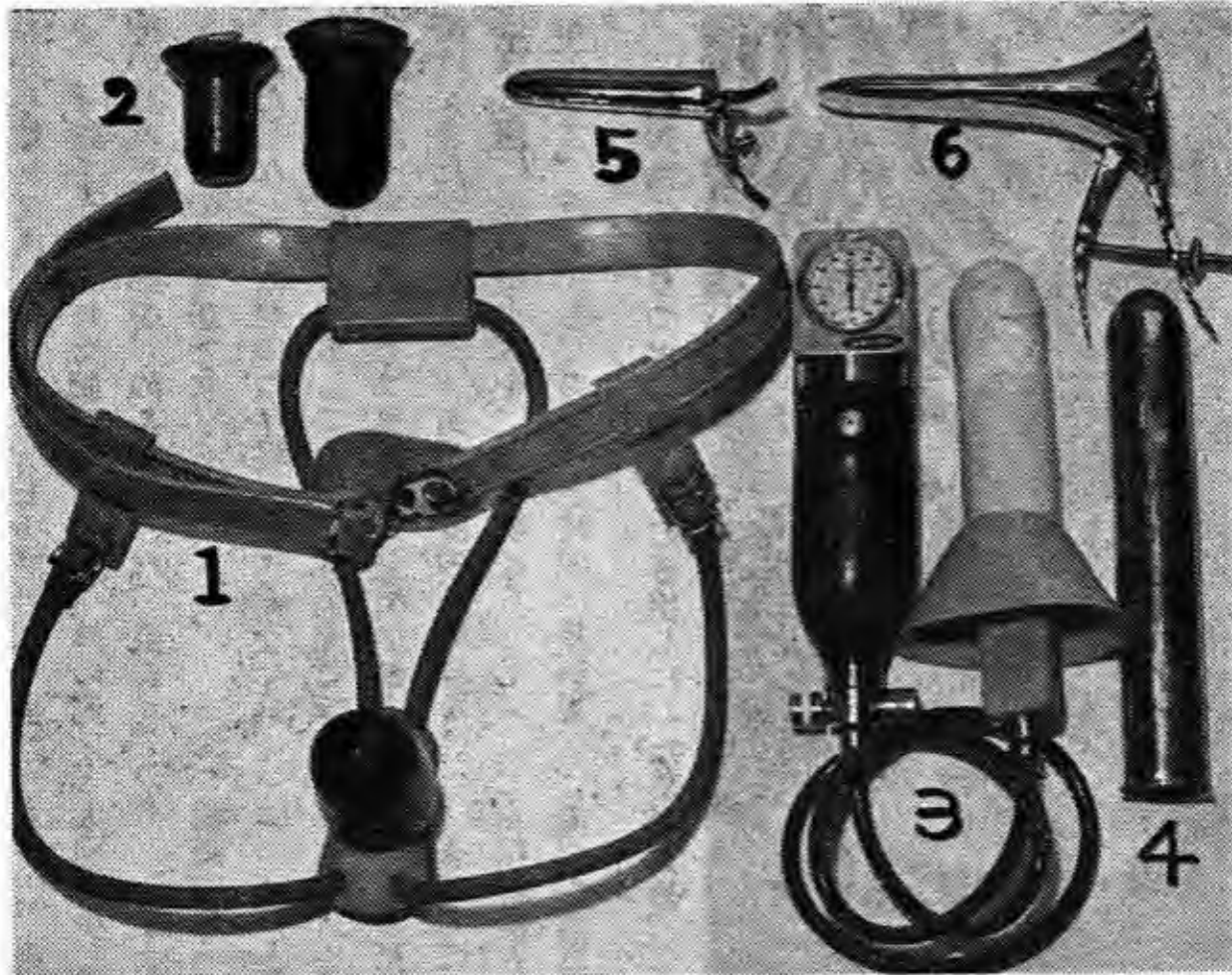
つるつるに剃毛されたうえ、その周囲を毒々しい泥絵の具で隈取られた3人の美しい中国娘が、全裸で演じる曲芸です。半ば公然と行われている一般旅行者向けの「シロシロ」や「シロクロ」とちがって、猟奇趣味の好事家を相手に、密室めいた小さな地下室で秘かに行われているものだけに、大がかりな道具こそ使われませんが、大

枚50ドルを投じて、一見の値打ちは十分あります。

その内容は金属パイプを曲げて作った変形椅子や脚立、サドルにデイルド(張形)が取り付けられた一輪車、お客の頭上すれすれに張られた綱渡り用の針金、吊り輪、跳び馬、平均台などの体操用具をフルに使うアクロバットを主体としたエロ軽業です。

このショーには氷のような冷たさと、カミソリのような鋭さを全身にただよわせた、これぞ「プロフェッショナル」という感じの、みごとな調教師兼進行係が登場し、「ハォ!」(註・わたしの耳には、そう聞えました)と腹の底まで響くような、年期の入った気合いをかけ、ムチで床を鳴らしますが、この気合いがかかるたびに、アメ細工のように曲った彼女たちのエロチックでグロテスクなポーズが、つぎつぎと変化していきます。それにつれて股間の部分が、ぱっくり大きな口をあけたり、いびつに歪んだり、引きつられて細長くなったり、「千変万化」する有様が目の前の至近距離から、たっぷりと観賞することが出来ます。

彼女たちの年齢は18才から、せいぜい20才までというところでしょうか。顔には可憐な



真知子に対する調教具の一部——①Lサイズ(径4センチ)の拡張棒を装置した調教バンド②S(径3センチ)M(径3・5センチ)の拡張棒③膣と肛門の収縮力がメーターに表示されるポリネット測定器④12号直腸ブージー⑤肛門鏡⑥膣鏡。

少女の面影が残っており、体も激しい調教で、すばらしく引き締まっていますが、その部分は使われ過ぎから、早くも年増女郎も顔負けするほど肥厚して、メラニン色素も色濃く沈着し、熟しきったザクロのように荒廃しているのが、みるからに痛々しい感じを、与えます。

演し物では客の頭上すれすれに張られた針金の上で水平開股し、自分のものを自分で舐めるアクロバット、調教師の鋭い気合を合図に、高い跳び馬の背に積み重ねた10数枚の硬貨を、開股跳躍の瞬間に残らず、はさみとって着地する早業花電車など、まさに「ウルトラH」級の至芸です。しんねりと演じられる日本の花電車の硬貨芸などとはスピード、スケールとも段違いです。またサドルに固定されたデイルドを深々と没入させて、安定のとりにくい一輪車にまたがり、細い平均台の上を何度も行

ったり来たり、されられたあげく、一方の端に椅子をかませて30度近い傾斜をつけ、その急坂を登り降りさせられるバランス芸も観ごたえがあります。

とにかくS的な要素が、いっぱい、お客の総てに「1日、いや1時間でもいいから調教師になって、あんな美しい娘を思う存分、仕込みあげてみたい」というサディスチックな欲望を起こささずにはおかない、きわめて刺激の強い見世物です。むろん特別料金を払えば、彼女たちを抱くことも出来ます。ありとあらゆる変形体位をとらせれば、さぞかし「羽化登仙」の思いがすることでしょう。

人身売買が横行している「魔都」香港ならではの秘密ショーですが、彼女たちは、すでに完璧の秘芸を身につけているにもかかわらず、毎日、最低6時間、ときには8時間近くも厳しい調教を反復して加えられ、もちろん生理期間中も例外ではないそうです。一日でも休ませると、体が堅くなって3人の微妙なリズムとバランスが狂い、ミスやケガの原因になるといいますし、また、それくらいの練習量を強制しなければ、骨なし人間のような柔らかい体や、危険な軽業の技術を維持できないのかも知れません。

アナル・セックスと関係のない話を、ながながと書きましたが、真知子を調教しているときのわたしは、いつも頭の中に、この秘密ショーの一コマ、一コマを思い浮かべ、見果てぬ夢を追い続けています。ときには夢と現実の見境いがつかなくなるほど興奮し、我知らず兇暴な行動に出ようとして、ハッと自制することもあります。完全な性奴隷として飼育されている秘密ショーの中国娘たちは、想像もつかないような残酷な調教と、体罰を加えられて、あのような体を作り替えられたのです。真知子に、それを求めても、とうてい不可能というものでしょう。

彼女たちとは比べものにはなりません、真知子の調教ポーズも、普通の女性には、ちょっと耐えられそうもないものだけに、むしろ

◎伝言板◎☆団鬼六作「大河小説」☆花と蛇☆正編続編一挙登載の堂々八百三十有余ページの大冊、奇譚クラブ臨時増刊号「定価千円」倉庫整理により、若干分譲可能になりました。用紙事情切迫高騰の折柄、この大冊を、この値段での再版は絶対に不可能です。まだお求めになつておられない方は、是非、只今お求め下さい。送料二百円は当社にて負担いたします。暁出版代理部へどうぞ——。

る賞めてやるべきかも知れません。とくに、あの部分が自然に大きく裂け、奥の方まで、まる見えになっているのですから、これで満足すべきでしょう。仰臥して足を広げ、花卉への刺環（新年号）を利用してオープンしても、結果は同じです。むしろ、その方が楽な姿勢だけに、括約筋への調教も、はかどると思うのですが、肉体的には骨が、みしみしときしむような姿勢を強いられたいえ、精神的には羞恥の極限ともいえる秘所の強烈開陳を余儀なくされ、そのうえ、アナルへの調教を受けるところに、真知子を完全なM女性へ飼育していく過程があると思うのです。このとき、もっとも卑猥なことばで秘所の形状を批判して、いっそうの恥かしさに身もだえさせるのも、S男性としての、喜びというものです。

〔註〕この調教ポーズは71年4月から72年1月まで本誌に連載された花影叢氏の未完の大作「幻想帝国」からヒントを得たものです。氏は、この大作で、わたしなど足元へも寄れない造詣の深さを示されましたがとくに男性的な骨太のタッチで描写された女体調教シーンは圧巻でした。続編を引っ下げての氏の捲土重来を望むこと切なるも

のがあります。

わたしがアナル・セックスに関する雑文を本誌に書いたのが70年の9月のことです。当時は、まだアナル・セックスの黎明期で、奇譚クラブ誌オーナーから「今後の傾向を暗示していて、おもしろい。この種のを続け書いてみては」と推められたものです。67年の夏、初めて渡欧してフランクフルトで買った娼婦に教えられたのが、きっかけとなり、妖しい魅力のとりこにされてしまいました。が、このとき、彼女に「あなたは何を望むか？」と聞かれて面喰らったのを覚えています。つまり、彼女はオーラルか、ストレート（正常なセックス）か、あるいはアナルか、わたしの好みを聞いていたのです。

もっともいまのわたしは大変に、ぜいたくで、いつも真知子のこの「三つの通路」を勝手気ままに何度も往ったり来たりし、どこでフィニッシュを迎えるかは、そのときの成行きまかせにしています。とくにアナルを使っているのにブロージョブを命じたとき、泣きそうになりながらも、懸命に奉仕している真知子の表情は、わたしの「S心」を十二分に満足させてくれます。

（次回は「花電車」の巻です）

牝^め犬^{いぬ}城^{じょう}の虜^{とりこ}

水江 伸 文と画

空には未だ残暑の色残れど、朝夕吹く風の既に秋の気配、忍ばせ、一夏を炎暑に耐えた樹々の手入するため、植木職人定吉が下見に訪れたのは私鉄沿線、某デパートの女子寮。

綺麗に掃き清められた庭の樹々を見廻り、鉄筋建物の裏に廻れば、ベランダに、ひらひらと洗濯物の青、桃色、白に黒。小さい布片の数多く舞うのを目にし、見ればフリルの付いた、小さいパンティの数々。定吉、花追う蝶の如く吸い寄せられ、人気のないコンクリート階段、昇る。

クリップに挟まれた俵の、柔らかき布、白地に赤い水玉模様、散るのを震える指で鼻に嗅げば、化学洗剤の匂いのみ満ちて、若き女の移り香もない。だが、ゴム輪に縮る布の辺り拡げれば、かの制服デパート女店員の優し

げに客に応ずるのが、その肌に纏っていた物と思えば、次々と手当り次第、手に取り、顔を添える。

デパート休日で、馬肥ゆる秋の日を、近くのテニス・コートで寮員の運動会、開いているのを識らず行めば、三々五々連れ立ち、寮に帰って来た娘達の、汗に濡れた下着、取り替えるべく、定吉の背後に来たのも気付かずまた、ベランダに来た郁子は、見れば白髪まじりの男のシャツ作業ズボン姿。腰に大鉄、差し込み、熱心にパンティにキスしてるのを見て立ち止まり、驚きと恐怖で声も出ぬ。そこへテニス部のキャプテン洋子、来たのに気付き、「パンティ泥よ」と耳打ちするが、足竦みて動かぬ。「ようし」洋子、テニスの試合開始の意気込み、健気にも男の後ろより、

その腕、捕える。「おじさん、何してんの。パンティ泥？」流石、若い娘の詰問も優しく強気に振舞えど、それ言うのが、やっこの思ひ。「あ、う——」定吉、不意を突かれ忘我の境より醒めたが、突然の事に声も出ぬ。男の反撃するかとばかり考えていた洋子は、拍子抜けしたまま、「おじさん。一寸、おいでよ」と言えば定吉、ふらふらと付いて来る。

入営して間もなく終戦。妻を娶って二児がいるが、いずれも男。若い女の下着も知らず連れ添う女房の腰巻、パンツの類、大きい尻包む特大なれば、若き娘の下着に寄せる好奇も無理はない。寮の一室に連れ込まれた定吉は、若い娘の得も知れぬ匂い満ちた室内の艶めかしさに茫然としてみると、洋子、その間に郷里より送って来た布団袋の緒、取り出し

手伝ってよと郁子、促し、逃げぬようにと、シャツ脱がせて後手に縛り上げる。

定吉、全く無抵抗で縛られ「さ、これで良いわ」安心したように洋子言い、「ねおじさん。パンティ盗ったでしょ」「いいや」未だ夢見る如くに定吉、言う。今縛られる折に前に廻った郁子の薄いブラウスの下に、はち切れんばかりの胸の膨らみ、ゆらゆら動いて目の前に揺れるのを見て、もうこの場におりたいと願望する。「盗らないのなら、何故、物干場に、いたのよ」

「匂いです」定吉は持って生れた口下手、喋るのが得意でない上、シヨックで尚更、喋れない。

「匂い？ 匂いを嗅いでたの、Hね」「匂いしたの。どんな？」郁子、横から聞き「ね、おじさん。女のパンティって、そんなに魅力あるの？」「好きです」「男って、そんな物欲しいと思うのね」定吉、黙って頷く。洋子



にしてみれば婦人肌着の売場、パンティ買いに来る男の客もあるが、客に聞く訳にもゆかず、日頃の疑問、晴らすためにも是非、聞き出したい。

「匂いだけ、好きなの？」郁子、聞けば「匂いって嫌らしいわね。そんなに女の匂いが好き？」洋子は言い、ふと気付いて郁子に「郁子、ストッキング脱いでよ」「えっ、私の。何するの」「何でもいからさ」郁子、言われる俤、ガードルの止め金、脱しかけ、ふと気付けば男の熱い目差し、黒いストッキングの上に覗く白い太腿の辺り、見詰めている。女ばかりの寮の部屋と思ひ、普段のまま何気なくスカートたくし上げ、太腿露わにした自分に気付き「あらやーだ」郁子、急に声挙げる。それを見た洋子、「いいのよ。ね、おじさん。見るのも好きよね」定吉、また頷き「私、脂足だから毎日、売場に立っていても、ストッキング臭くなっちゃうの。今日はスポーツしたから余計、むれて——」郁子の脱いだストッキングを洋子取り、「うん匂うわ」言いながら「おじさん。匂いが好きって言ったわね。これでも」洋子は、それを丸め、定吉の鼻先に嗅がし、定吉、目を細め

嗅ぐ。ふと軍隊で上官の軍靴、啞えて立った匂い思い出し、今思えば懐かしくすら思うものの、やはり女の匂いとは、何故こんなに魅力的なのかと考えるうち、「そんなに嗅ぎたければ、口の中へ入れてやるわよ」「わっ」と呻いて定吉、口を開けば、ストッキング二本、丸めて口に押し込んでやる。入り切らぬ一本の爪先の辺り、唇の端より垂らしながら「クク」と呻く。そこへバスタオル胴に巻いただけの英子、浴室から帰って来て、鼻唄交りにバスタオル取ろうとして「ヒャッ」と叫んだ。「一体、誰なの。どうしたのよオ」「しーっ、パンティ泥なの。ひとつ、悪戯してやらない」「すげえ！」英子はグラマーな身体、タオル一枚、巻いた俛、定吉を覗き込み「一体、誰のパンティ取ったのよ」「判ってるじゃないの、あなただよ」洋子、面白がって言う。「えっ、私の。ひえーっ、いかれちゃう。で、どこに有るのよ」「きつと、ズボンの、ポケットよ」「じゃあ、見てみる」「序でだからズボン、脱がしちゃおか」「面白いわ」洋子は定吉のズボンの裾に手を掛け、郁子も手伝い、三人掛かりで、ベルト弛めてズボン引っ張る。と、今まで温和しかった定

ながら洋子「英子。そのバスタオル、おじさんの頭から、おっ被せるのよ。早くッ」英子それ取れば全裸の身。厭う暇もなくパッと脱いだタオル、定吉の頭から被せる。定吉は英子の湯上がりの桜色の肌香に包まれ、汗のしみるタオルに埋もり呻きながらも、甘たるき女の匂いに思わず陶醉する。ズボン脱ぎ取れば、胫毛に埋もれた足。定吉の越中褌。パンツとばかり思い込んでいた牝犬達にとっては物珍しい眺め。「ヒューッ」英子は、抵抗に既に弛んだ定吉の褌、横から覗く剛毛に声挙げ、それを合図に三人、いとも可笑げに笑い転げる。

定吉にしてみれば越中褌、既に軍隊の頃よりの習慣だが、ズボン取られるのに必死の抵抗試みたが、手は自由にならず、男と雖ど小柄な細い身体、若い娘の三人に押さえられては、どうにもならぬ。こうした場合に直面すれば面白がって脱がさせてやる男も多い筈。頑に拒む定吉には一つの理由があった。

悪友に誘われて行った遊廓の、財布乏しき少年だから、値切れば安からう、悪かろうの譬え通り、年増の売女に散々弄ばれた揚句、

「やい」の一言は定吉に、生涯悲しき負い目を課したものの。外見の、それ程劣らず、親譲りの物。何も恥ずべきでなく、女房も満足させ子供二人も出来ているにも拘らず、包茎短小と自ら決め込み、何よりも人前に曝す恥かしさの人一倍、強いため、褌一つに剥がれた我が身の恥かしさに、声出ぬ俛、穴があったら入りたき風情。

やがて洋子は、英子の裸体、見て思い出し「私達の若いヌード見て、おじさん、どんな顔するか、見てやらない」「面白いわ」と英子。「だって誰のヌード見せるのよ」「判ってるじゃない、英子のよ」「えっ私が」「グラマーな英子のヌード、見応えがあるわよ。それに英子、何時かヌード・ダンサーになりたかったって、言ってたじゃないの」「仕方ないわね。じゃあ、おじさんに見せてやるか」英子は裸の俛だし、決心して言い、郁子は得意の長崎ブルースを口ずさみ、定吉に被せたタオル取ると、定吉の目前に片手で下腹部、覆った英子立ち、定吉の顔、見ながら妖しく笑い、映画、テレビで見たダンサーのよう、くねくねと腰揺れば（ううう）と呻きながら定吉、憑かれたように目を輝かせ、英

子の全身、眺め廻すのへ、後ろも向いて臀振るのも見せてやれば、定吉うっとりとして見る。「何、見てんのよ。馬鹿」急に英子は定吉の頬を平手でピシリと打ち、洋子と郁子笑い転げ、自分も連れて笑う。

その時、部屋の扉、叩く音。覗き窓から見た郁子「佳子主任よ。どうする」「あ、丁度いいわ。入って貰おうよ」

洋子、何を思い付いたか瞳輝かせ言う。入って来た主任の佳子、押し込むようにして、素早くドアに鍵掛け主任さん事、佳子は目前に禪一つで縛られた定吉を見て「キャッ」と驚きの悲鳴上げると、素早く洋子が口を塞ぎ「いい事、有るのよ主任さん。そう慌てずに落ち付きなさい」

佳子は宝石装身具売場の主任故、主任さんで通っている。年は既に二十六。高校出て間もない彼女等から見れば「オールド・ミス」の蔭口を叩く者もいるが、ま

だ婚機逸する年でもない。この部屋の三人を称して牝犬とすれば、佳子は鶴という形容、成り立つ。スラリとしたスタイルの色白く、瞳黒く澄み、細き頸筋、黒き髪、鼻筋通る品の良さ。優雅なる身のこなし、板に付き、初詣、友人の結婚式と、和服など着て街行けば男のみならず行き交う中年の婦人さえ、足留

めて振り返るばかりの美しさ。売場で扱うダイヤ、翡翠の指輪、客の求めに応じ、わが指に嵌めて見せても何の遜色もない、気品と美貌を備え、引くてあまたの人ならば、美し過ぎて声掛ける男も躊躇する故か、故郷に病める母残し、弟の学資助けつつ、ひたすら勤める彼女の、どこか愁いの影宿す瞳に、洋子は



以前から、レスビアンの思慕に焦がれていたものが、今、定吉を苛める楽しさに酔い痴れるうち、かの美しい佳子をも苛めてみたい衝動に駆られ、ダイヤ・サファイアの指輪、真珠のネックレスつまむ、しなやかな指先に定吉のもの掴ませてみたいと思ひ立てば、豚に真珠の如き好取合せ思い巡らすだけで、じりじりと身の内に湧き起る血流の昂まり、抑える事は出来ぬ。

「主任さん、触ってやらない?」「何をなの?」

「何って、おじさんのアレよ」佳子、あきれ
て息を呑む瞬間、「縛っちゃえ」洋子、命令
し、三人、群がり、嫌がる佳子の口押さえ、
腕捻じ曲げて、ブラウス、ブラジャ剝がし、
そこにあったナイロン紐で後手に縛る。「私
を、どうするのよ。お願いだから許して！」
佳子は声挙げ、洋子は口を押さえ、英子は生
花用の剣山、手にし、上気した佳子の桜色の
乳首に、その針先、押し付けながら、「お黙
り。声を挙げれば、この針がチクチクお乳を
撫でるわよ。よくって」「ああ」と佳子は呻
く。「猿轡してやろうよ。おじさんの禪を、
お取り」「おじさん。お禪、貸してよ」目前
に佳子を弄る娘達を夢見る如くに見守る定吉
に郁子、声掛け、腰の結び目に手を掛ける。
定吉「それだけは勘忍してくれっ」と大声で
叫べど声にならず、顔を真っ赤にして身を振
じり、足ばたつかせ拒むのを「おじさんも剣
山の針先、恋しいの」定吉の足掻み、その太
腿に針先、押し付け、灼けるような痛みに、
「うッ」と呻いた瞬間、するすると禪、取り
去られ、恥態を曝す。「一寸、汚れてるわね
え」洋子は無造作に透明なマニキュア光る指
先に、それをつまみ、三人はヒヒヒと、また
笑い転げながら、既に牝犬共の僅かな身の動

きにも、過敏に身を守ろうとする神経漲らす
佳子の背を、郁子は引き起こし、洋子は佳子
を覗き込み、「お綺麗な、佳子お姉様。この
汚れた、おじさんのお禪、お召しになって下
さいな」「あ、嫌ッ！ もう許してっ」佳子
顔をそむけ叫べば、その禪、佳子の目前に拡
げる。佳子、目を閉じ、長い睫毛の裾に涙さ
え浮かべ、洋子は丸めた禪、佳子の口中に押
し込めようとするが、固く噛みしめた水晶の
如き歯は開かぬ。指先に禪の端、きりきりと
巻き付け「さア、お口を、お開けなさいな。
剛情っ張りは損ですわよ」と言うなり、佳子
の鼻、思い切り、つまみ「うー」と息苦しさ
に思わず口を開いた佳子に、素早く禪を押し
込む。「ゲェッ」佳子の呻きも既に声になら
ず、汚れた禪の匂い、口中の粘膜より鼻腔に
匂うように感じ、佳子は苦痛に顔を歪めた。
「おじさんに佳子の足裏、舐めさせようよ」
「それより先に、スカートもパンティも取っ
てやろうよ。その方がおじさん喜ぶかもよ」
言う間もなく、スカート脱ぎ去り、フリルの
付いた真っ白いパンティが佳子の腰びったり
包むのを、皮剥ぐように、するすると脱ぎ、
佳子の羞恥に、うち震えるのへ「ヒャー、真
っ白い肌に似合わない位だわね」「私も二十

六にもなったら、こんなに、成るのか知ら」
「薔薇色の花卉って、可愛いじゃない」恥
かしき姿、見せるに悶え、身体中の火照り、
肌を染める佳子に、その恥かしきさま、口々
に言いながら、すらりとした脚線、包む黒い
ストッキングが、ガードルの下に留まり、そ
の上部に、はみ出した太腿の付け根の肉の白
さ浮き立ち、日頃、着衣の上からのスマート
さも、既に女の熟れた年令なれば、丸い乳房
ピンと起きた乳首の桜色に艶めいて輝き、腹
部も、やや脂の乗りかけ、見まがうばかりに
女体輝いて、同性ながら牝犬共三人、思わず
その美しさに息呑み、額に汗しながら加虐の
快感に身体、震わせつつ眺めるうち、その美
しさになお、ジラジラ燃える嫉妬が胸の中を
よぎり、何を思いついたか、洋子の耳打ちに
三人ヒソヒソ相談を始める。三人の瞳、悪戯
っぽく、いかにも楽しげに、その光景、夢見
る如く、輝きを増し、若い娘達の悪戯事、相
談し合う時の瞳程、生々として、このような
美しいものはない。
「さあ、おじさまに、佳子お姉さまの足裏を
ご駆走してあげようよ」牝犬共、佳子の片足
持ち上げ、定吉の前に寄せれば、定吉、脂汗
にまみれた額、自ら佳子の足裏に、寄せて来

る。口中の詰物の下で舌を出そうとして出ず、涎のみ湧き出でるのをグイと呑み込みながら、唇をストッキング越しに足裏に触れれば、佳子は必死に腿と腿合わそうとする力尽きて、観念した如く力を抜く。「おじさん、覗いて見ない。佳子お姉さまの秘密の花園」「もっと掘げさしちゃうか」英子は、恰も

害虫の出た少年が蜻蛉の羽根ちぎる時のように、唇の端を歪めながら、手にした剣山で佳子の内腿の、いかにも鋭敏に応えそうな辺りに押しつける。

佳子は、もう身体中、羞恥にピクピクと打ち震えながら、得体の知れぬ男の前に、その生身を曝す恥かしさ。やがて男の視線の灼けつくように感じれば「あ、見ないで。見ないで頂戴。お願いだから見ないでッ」哀願する心も声に出ず、やがて定吉の身体の変化を牝犬共、目ざとく見付け「きやーっ。おじさん、すごー



くエキサイトしてる。怖いくらい」洋子はククと笑い堪えながら「あ、カメラ持つといで。余す所なく撮って置くのよ」

洋子は無理矢理、佳子を仰向けの体、引き摺り押し倒し、郁子と英子は、その上に定吉を重ねる。

定吉は鼻先に絡む佳子の黒髪の匂いに我を

忘れ、身体に触れる佳子の肌温りの伝わってきて、猿轡の中で呻きながら息弾ませる。もうこうなれば尽よと佳子も、やがて渦巻く炎の波に巻かれてゆく。渦巻く波に巻き込まれては放たれ、また巻き込まれる事の幾度か。羞恥の中でなお、燃えゆく肉体の女の性の微妙なる起伏に身を沈める。

牝犬共三人は、自ら、しつらえた祭壇の儀式の溢れる熱気に、乳房押えつつ息づき、恍惚として見守る。郁子など一人、背を向け、顔だけは祭壇の二人に向けたまま何をするのか。洋子は興奮の坩堝に顔、火照らす己の恥かしさ、切り放つように「郁子。カメラ、カメラ」と、上ずる声を掛けるが、郁子、目をトロンとさせ、「あ、ウン、はい」と答えるばかりで、傍に置いたカメラ、手に取ろうともしない。

燃え尽きて定吉、もぞ

もどと身体起こせば未だ快楽の余燼消えずに恍惚として身を横たえた俣の佳子を英子は抱き起こし「さあ、佳子お姉さま。あられもないお姿を記念に撮って貰うのよ。カメラの方を、お向き遊ばせ」佳子は乱れた黒髪の、額に汗で纏いついた俣、濡れたような瞳でカメラ構える洋子を見た。既に羞恥を超えたのか冷やかな視線は厳しく牝犬共を見詰め、女体の端々しい美しさ堪えながらも、毅然として佳子より漂う雰囲気、シャッター切る洋子も圧されて、たじろぐ。佳子は学生の頃、実らずして過ぎ去ったけれど、すべてを捧げて悔いなかった恋人との愛の日々より幾年振りかの、燃える女の性の哀しみ噛みしめながらチンピラ牝犬共に真の女の欲びが判るものかと思えば、何故か誇らしきものさえ感じる。日頃の優雅さに包まれた佳子の、どこにこのような威厳さが隠されていたのかと、洋子は射すくめられる思いで、カメラ持つ手も思わず震える。

手の縛り解かれて、すごすごとズボン引き寄せる定吉に「おじさん禪無くて御免ね」洋子、言えば「あ、男物ブリーフなら、私持ってるわよ」と郁子。「あら、そんな物、持っていると誤解されるわよ」郁子、慌てて口

抑えたものの言ってしまった事は仕方ない。啓子が持ってきたブリーフを定吉は穿き、纏い馴れた越中とは違う感じに、少しばかり途惑う。

「さあ、おじさんのお帰りよ。歓送のアーチ作っただけよう」洋子、言えば、郁子、英子と三人並び、レビューガールのライン・ダンスよろしく、それぞれ腰に手を当てて片足高々と差し上げる。見事な太腿、並ぶ下を、定吉は、よろよると這って通り抜けながら、見上げれば若さ溢れる太腿の肉林。わが身の押しひしがれたい気持が起こり、その中に身を埋め尽くして、痺楽の淵に溺死しようとも悔いぬとさえ思いながら、竜宮城ならぬ、牝犬城を後にする。

「おじさん。また、遊びにおいでよ。きつと来てね」洋子は、未だ佳子の欲びの肢体、目に灼きついて消えぬ。今度こそは佳子の代りに自分がその役、演じたいと願望し、淑かな佳子以上に、自分なら大声あげて呻き、のけぞって、見守る連中を煙に巻いてやりたいと思えば「きつと来てね」と真に希い、バー、アルサロのホステスの客誘う以上の熱意が籠る。郁子は「ウーンと匂いの付いたソックスパンティも変えずに、ずーっと穿き続けて、

たっぷり匂い含ませて置いてあげるわよ。お禪も綺麗に洗って、今度、来られるまで、お預かりしてあげてあげるわ」と優しい面もチラリと見せ、英子は片手で覆って脚挙げていたのを、定吉が下を通る時、そっと、その掌離してやる。

だが所詮は女。どこかが抜けている。カメラ・レンズの蓋付けたままシャッター切っていたと気付き、今頃は大騒ぎしているとも露知らぬ定吉。つるべ落としの秋の日の、とっぷり暮れた街の中を、路地裏の長屋に向かいつつ、あれは夢ではなかったかと疑い抱き、辺りに立ちこめた闇を幸い、ズボンの腹より手を差し入れてまさぐれば、紛れもなきブリーフのメリヤスの感触。思えば言い寄る女もいたものを、自ら避けるようにして逃がれ、ひたすらに働き続けながら、妻一人に律義通してきて、五十路の坂、登り初めた今、振り返れば、性の深淵の一隅に佇んでいたばかりのように思え、根が人一倍の好き者の故に、なお惜しく思える。

花の色香も識らずして、戦に散りし若人の数多くいたぞよと、定吉慰める如く、折から降り初めし秋雨の、一筋二筋、定吉の背を濡らす、音もなく。

手記

悩ましいゴム合羽

梅川幸子

悩ましい冥想

ゴム装束に身を固め、ゴムマントをまとった姿で愛されたり、愛し合ったら……

と、ひそかに欲望を慰めるプレイに耽溺するとき、いつも冥想するのでございます。

男性も私と同じようなゴム装束で……こんなのは如何でしょうか。

(一)、素裸になって総ゴム合羽(フードつき、短い上衣とズボンに分かれたもの)を着て、ゴム長を履く。

(二)、その上から、私と同じ裾の長い総ゴム合羽を着て、フードをかぶり、ゴム手袋をはめる。

二人で肩を寄せ合って深夜の豪雨の中を歩き、草むらの中や、水中で愛し合うのです。

男性から見た場合、女性のマント姿は、どう映るでしょうか。エレガント、ロマンチック、ファンタジックの他に、存分に征服してみたい欲望と、また、あるいは足元にひざまづいてみたいような神々しさ。あるいは、すっぱりと優しくマントに包まれて抱きしめて欲しいような欲望を感じさせるものがあるのではないのでしょうか。

私は後手に縛られ、ゴムマントを着せられて、サルグッワをかまされ、無理やり、豪雨の戸外に連れ出されます。そして、池の中に入るように命じられ、首まで水に漬って正座

座のために足腰がしびれ、また、少しでも体を動かすと倒れそうになり、もし倒れると起き上がるのが大変なので、必死になって、こらえて座っています。

そんな私を満足そうに意地悪く眺めた男性は、ドボドボと自分も太股のあたりまで池の中に入って私に近づき、ゴムマントの前を払って、至近距離から、フードの頭を水面から出している私に向かって、容赦なく生暖かいシャワーを浴びせます。フードに音をたててしびきがあたり、フードの縁からボトボトと落ちて水面を波立てます。私は顔を濡らさないように、フードをいろいろと動かして、まともにシャワーを受けないよう、懸命に努力



そうかと思うと、フードのマスクを外され、猿グツワを脱がされて顔を露出させられ、後手に縛られ、首まで水に漬って正座させられたので動きがとれない、そんな私に向かって正面からシャワーが浴びせかけられたので、たちまち顔はシャワーで洗われ、甘い屈辱でメタメタになった私は口を開けてシャワーを受け、うっとりとした表情で飲み干します。つぎに、やはり後手に縛られて、首まで水に漬って正座させられている私。フードのマスクを脱がされ、猿グツワを外されたので、何をされるのかと、恐怖と期待のまなざしで

見上げますと、何とF行為をさせられるのでした。男性は私の眼前に立ちほだかり、私の肩と頭をつかんで無理やりに要求します。身動きできない私は、遂に拒みきれず………されます。私は、ようやく後手を縛った縄をほどいてもらい、水から上がることができません。

私の一番、やってみたいのは、男性、特に若い坊やを、私のゴムマントで、すっぽりと包んであげたいことです。足を投げ出して座った坊やに

さし向かいに私が上に乗って跨がり、私のゴムマントで、すっぽりと母親のような優しさで、坊やを包みたいと思います。私たち二人は、互いに「坊や」「ママ」と名を呼び合って、身も心も昇天するのです。すっぽりと二人を包んだゴムマントは、異様にふくらんで激しく揺れ動きます。

ゴムマントとブーツのアイデア
現在、ゴムマントは、どこの専門店へ行っ



でも在庫がなく、また作られていません。鶴崎好夫様の告白、「私の履歴書」でも述べられていたように、まず、どこの合羽専門店でもたずねても「ありません。現在は製造していません」と答えます。もうゴムマントは、過去のものになったのでしょうか。それとも、ゴムマニアのコレクションとして、現存するだけなのでしょうか。古着屋さんに尋ねても「いまだき、そんなものはない」と言われま

すし、都会でも田舎でも、雨の日に自転車に乗った人を見ても、本当に着ている人は全く見当たりません。ビニールやナイロンがゴム引き布にとって代り、また、交通地獄の年々激しくなる折柄、こんなものを着て自転車に乗るのは危険だということから敬遠され、次第に着る人がなくなり、需要がないから製造されなくなったのでしょうか。以前は自転車で通勤する男の人がいる家なら、大抵（とい

っては大げさかしら）ゴムマントが必需品と



えるようで結構ですから、目の下一センチ位から、鼻、口を、あごまで隠す程度に致します。
 ③これが男物ですが、女性が着ても、おかしくないでしょう。
 つまり、男女共用ということですね。
 つぎに女物ですが、やはり女らしさをただよわせるよう、いろいろ工夫しましょう。
 生地は男物と同じように、片面ゴムか、両面ゴム生地で仕立てます。女物ですので当然左前です。仕立て方は男物と共通です。
 挿画を説明しますと、
 ①ここに小さなベルトとボタンをつけ、襟を立てたとき立てた襟が固定するようにする。
 ②丈夫なカギ・ホックを付ける。
 ③このベルトは、必ず付ける。着るときに便利ですし、また、ボタンを全部、外して前をひろげて、肩からズリ落ちませんので。

④防水効果と肩にのしかかる重みを増すため同生地を重ね、補強する。
 ⑤ボタンは、すべて内ボタンとする。
 ⑥手出し穴を付ける。
 ⑦裾は痛みやすいので、ここも同生地を重ね補強する。
 ⑧裾を割り、開閉どちらも出来るよう、ボタン止め、しておく。
 マント本体は、こんなところで、非常にシンプルなデザインでございます。
 フレアアやプリーツを付けるなど、いろいろデザインする楽しみもありますが、ゴム引き布のため、どこまで実際に出来ますやら。
 フードは「女らしさ」そのもののデザインに致します。初めに述べました、昔懐かしい女児用ゴムマントのフードのデザインを、そのまま応用します。挿画のとおりでございます。
 何枚もゴム装束のフードを重ねて被った上からでも、あるいは、どんな髪形の上からでも、すっぽり被れるように、なるべく大きくゆったりブカブカする位に作り、飾りのヒダを、たくさん付け、生地を二枚重ねて、中に適当なしんを入れて作った、丈夫なヒサシを付けます。このヒサシは後ろに折り返して被

ることも出来ます。

挿画の矢印で示した部分にはゴムヒモを入れます。こうしますと、この部分が伸び縮みしますので、フードを被った場合、頭の上から押えられる感じでフードが頭に密着し、不用意に脱げにくくするためでございます。そして、男物と同じ大きなマスク（ベルト）を付けます。

女物は、どんな色が良ろしいでしょうか？
赤（真紅、エンジ）ピンク、緑、青、薄茶など、如何でしょうか？

そして、裏は片面（表面）がゴムの場合は白、または茶色で結構ですが、両面がゴムの場合は、表と同系統の淡色か、あるいはそれが無理なら、従来の両面ゴム合羽（総ゴム合

羽）の茶色が良いでしょう。

サイズは、やはり男物と同様、背丈が一メートル二十五センチを標準とし、Lサイズは一メートル三十センチといたします。

ついでに、ゴムブーツも考えてみました。市販の婦人用ゴムブーツは、最近では、ひざまで届くスマートなのが、いろいろデパートや大きな靴屋さんに出ていますが、どうも物足りません。

腰まで届くのは如何でしょうか。（挿画をぐらん下さい）穿き口にはベルトを付けて太ももを締めつけ、脱げないようにし、サイズは22・5センチ（九・三文）から26・0センチ（十一文）までの各サイズ。色は黒、赤、茶、白などで、ゴムマントの色と好み、足の

サイズに合わせて自由に選択できるように致します。ストレッチ・ブーツのように足にぴったりフィットし、また、素肌に触れるゴムの感触を楽しむゴムマニアのためのものですから、裏地は不要で、文字通り「総ゴム製、婦人用ブーツ」というわけでございます。

フェチ、サド、マゾの、さまざまなプレイのために、爪先は思いきり細く、とがらせ、かかとはハイヒールも顔負けするほど高く、（十センチ位で如何でしょうか）底を細くします。

このようなゴムマントとゴムブーツで、いろいろなプレーや物語が生まれることでしょう。

○

私こと、このたび独身生活に別れを告げ、新生活に入ることとなりました。したがって、私のゴムマニアに関する告白は本稿を以て終わりとさせて頂きたく存じます。

ここ数年間、ゴムマニアの方々の告白や、私に寄せられた呼びかけなど、本誌々上で親しく拝見させて頂き、有難うございます。

また、私の拙い告白や下手なイラスト、不出来な写真を何度も掲載して下さった編集者

☆SM画稿募集!!☆

☆SM雑誌の草分けとして、二十数年の輝やかしい歴史を誇る本誌にふさわしいSM画稿を読者の方々から募ります。

☆画材は、女体責め、女体緊縛を初めとして、女王様や女御主人の狂暴ぶりでも結構ですし、女体切腹の悲愴美は勿論、下着などのフェチシズムに関係したものでも、本誌の内容にマッチするものでし

☆必ず自作の未発表の作品を御投稿願います。白い画用紙に黒色のペン又は毛筆を御利用下さい。大きさは御自由ですが本誌の雑誌大位までが適当です。カット的なものは半分大でいいと思います。

☆掲載作品につきましては、作品の出来に相当した画料をお支払致します。アイディアだけの時は、鉛筆画にても構いません。奮て御応募下さるよう期待します。

△奇譚クラブ編集部△



第七十七回

青よ、青よ

「F—〇一八号。明日付をもって伍長に任じ主馬寮勤務を命ずる」

朗々とした声で訓練連隊長、伊藤香織が辞令を読み上げた。

直立不動の姿勢で、それを受ける望月レイ子は一瞬、顔面を蒼白にして、よろめいた。

「どうした。しっかりなさい」

すぐ後に控えていた上官の小川晶子少尉が
あわててレイ子の背中を支えて言った。

「サア、早く復唱するのよ」

軍隊では、与えられた命令をコンファームするために復唱が必要と、されている。

辛うじて体勢を、たて直したレイ子は、「復唱いたします。F—〇一八号は、明日付をもって伍長に任じられ、主馬寮勤務を命じられました」

と大声で言った。ただでさえ、甲高い彼女

の聲が、余計、うわづったように聞こえた。

「新しいマイクロフィルムが届いている。カプセルを自分で、出しなさい」

望月レイ子は顔を真っ赤に染めた。普段は

分隊長室にあずけたままになっているカプセルを、命令受領だというのでポケットに入れてさせられている。それが、さっきから気になつて仕様がなかった。兵はカプセルの出し入れを自分ですることが許されない。四つん這いになって上官にして貰うのである。下士官になったレイ子は、始めてそれを自ら出来るようになった。

「失礼いたします」

股をひろげて、そろそろと指を入れる。それを自分でやれることは喜ぶべきなのにF——
○一八号には、そんな様子もなかった。

「アッ」

とり出したカプセルを、伊藤大佐に差し出そうとしたレイ子の手がピシヤリと叩かれたので、カプセルがポロリと落ちる。

「ダメじゃないか、作法を忘れちゃ」
後ろから、山本少尉の罵声がした。

「も、もうしわけありません」

望月レイ子は、あわてて落ちたカプセルを拾い上げて口に入れた。カプセルを取り出して渡すときは、その前に口に含んで、表面を舌で清めるのがキマリだった。

前号まで、秘密裸女王国の独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集してきた数千の美女に君臨し、それに畜従隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じて五段七階級に分類され巧妙に統制管理されている。有明の日本人至上主義によって白人女性の苦難は特に甚だしい。肉体番号F—〇一八号こと元女優の望月レイ子の乗馬のF—〇二七号は、俗名をジュリー・シェリバンという英国映画のスクリーンスターだった。ともに、カンヌ映画祭のとき一緒に捕獲された。仲の良い友達同志だったが、ガラリと一変した地底の生活ではジュリーは最早、一匹の軍用畜に過ぎぬ。

受けとった伊藤大佐は、机上にあった黒塗りの小箱から、もう一つのカプセルを取り出してレイ子に与えた。

万年筆のキャップ程のケースに、望月レイ子に関する全資料が、マイクロフィルムに撮られて納めてある。異動があるたびに、その辞令などが、新たに写し直される。古いフィルムは登録所に戻されて、保存することになっている。

レイ子は新規のカプセルを口に入れた。これも作法の一つではあるけれども、もう一つは実用的な目的もあった。唾液で濡らすことによって、挿入が容易になるからである。

「休め。楽にしないで」

と伊藤大佐が言って、自分も椅子に腰を下ろした。レイ子と後ろの小川少尉は手を後ろに組み、両足を開いて休めの姿勢をとった。

「おめでとう。昨日のお出迎えの時、マスターのお目にとまったので、特別の命令が出たのです。おまえの軍用畜管理が、お心に叶ったらしい。主馬寮の家畜は大切なご料だから命にかけてもシッカリお守りなさい。おやどうしてそんなに悲しそうな顔をするの」
レイ子は本当に目に涙を、いっばいためて

小刻みにふるえていたのである。何故か——ということは今更、尋ねなくとも伊藤大佐には容易に推察し得たことであつた。果たしてレイ子は、いきなり、その場にひざまずいて「ジュリーは、ジュリーは……どうなるのでございましょう」

「ジュリーとは、何だえ」

「ア、もうしわけございません。わたくし、いえ、F—〇一八号がマスターからお預りいたしております軍用畜、F—〇二七号のことであります」

「F—〇二七号は違う用途に向けられることに決まった。そのため、当連隊兵器簿から払い出され、もう一度、調教所へ送られる」

「ああ……」

レイ子は狂おし気に両手で顔を覆った。

「立ち上がりなさい。そして、胸をはってシヤンとしなさい」

鋭く、しかし愛情をこめて伊藤大佐が言った。肉体番号B—〇四二号といえ、彼女自身が捕獲されて、もう五年。厳しい環境の下で着々、その地位を築きあげた歳月である。肉体的にいえば、まさに爛熟期の瑞々しさを保っていたが、その心理は遥かに老成したも

いう年輩は、この国では、もう年寄りの部類
 といっている。

それだけに、その言葉はレイ子の心に染み
 た。小川少尉もレイ子の腋の下を支えて立ち
 上がろうとする彼女の努力を助けてくれた。

「望月」

と、今度は地上での名前を呼んだ伊藤大佐
 は、非公式だと断って、こう言うのだった。

「ウマ（ジュリーのこと）は仮にアナタがお
 預りしたもので、それを可愛がり、大切にす
 るのはよいけれども、あくまで、マスターの
 御為にしているのだということを忘れてはい
 けませんよ」

たとえ、如何に歎願したとしても、到底、
 聞き入れられる筈がないということはレイ子
 自身も、よくわかつていた。わかつていても
 愚痴ってみたくなるということだったかも知
 れない。

「とんだ塩原太助だなあ。青よ、青よ、とい
 った光景じゃあないか」

テレビに見入りながら有明が苦笑して言っ
 た。貴和が困ったように複雑な微笑を見せな
 がら答える。

「構うものか、いずれ又、見違える
 ようになった愛馬に対面することにな
 るんだから。今の悲しみは、とり
 も直さず再会のとときの喜びを大きく
 するための貯金だと思えばいい」

「そうおっしゃって差し上げれば、
 よろしいのに」

「ダメだね。それでは別離の悲歎が
 薄まってしまふ。悲しめば、いいん
 だ。苦しめば未来の幸せが、それだ
 け大きくなる」

ウイスキー・グラスが、たちまち
 空になった。貴和が、お代りを作っ
 た。出発以来、大分になるというの
 で、有明は昨夜から貴和のスィート
 に入りびたっていた。全く、余人を
 交えず、文字通り水いらずの二人っ
 きりである。

平素は物静かな貴和が、火のよう
 に燃え上がった。火山が爆発したよ
 うに隆起し、奔らせた。それは、有明と貴和
 だけの秘密だった。正添の御寝（ぎよしん）
 では副添の上臈もいるし、枕の中臈も目を皿
 のようにしている。不寝番のアマゾン将校だ



って、背中を向けて跪座してはいても、いつ
 も聞き耳を立てているに違いない。大后貴和
 は、それだけに万事、控え目に、そして冷静
 に、自分自身を律しなければならなかったの

である。(第41図参照)

その貴和が、自分の部屋では誰はばかりともなく、感情のありったけを剥き出しにして見せた。有明にとっても、そのような貴和が、たまらない程、いとおしかった。貴和は五体が砕け去って行くかと思った。砕けてもいい。融け去ってもいい。いっそ、燃えつきてもいいとさえ思った。女学生の時、読んだ万葉の暗い調べが、こんな時、いつも貴和の脳裏に蘇ってくる。

——うぐいすのなくくらたにうちはめてやけはしぬともきみをしおもわん——

何度も、貴和は死んだようになった。そして、すぐに又、フェニックスさながらに蘇生し、有明という烈火の中に、われとわが身を焼け焦がす為に飛び込んで行くのであった。

燃え上がっている最中は、二人とも理性をかなぐり棄てて酔い痴れていた。そして、その合間々々に仕事をした。貴和は留守中の報告をした。有明は又、G号作戦のエピソードを面白おかしく話した。そして、たまたま、「馬を愛し過ぎた騎兵の話」になった。

有明の部屋は、もちろん、貴和の部屋にも

特殊なテレビ受像機が置いてあった。ダイアルを廻すだけで、この国に無数に設置してあるテレビ・カメラを自由に操作し、使用することが出来た。そして、そのカメラは巧みにカモフラージュしてあったから、誰も監視されていることを意識しない。たとえ、知っていたとしても、四六時中、見られている筈はないのだから、やがては気にならなくなってしまふものだ。

ふと、思い出したように有明はスイッチを入れて、訓練連隊B中隊の厩舎をダイアルした。しばらく廻して行くうちに、曳かれて行くF—O二七号、つまりジュリー・シェリバンが視野に入った。パンして思い切り画像を拡大する。ジュリーの背に、かき抱くようにすがりつくレイ子の顔が大写しになった。

レイ子は人目もはばからず、オイオイ泣きじゃくっていた。そして、泣きながら何か意味のない言葉を、わめいている。軍用畜にされたジュリーの方も、言葉は封じられているものの、哀れな咽声をあげながら、裸の頭をレイ子に、すり寄せて行く。

はなればなれになる最後の瞬間だった。

「塩原太助なんて、若い人たちは知らないだ

ろうなあ」

有明がポツリと言った。

「そうですねえ」

貴和が受ける。

「あの塩原さん、つまり、F—O一八号は、きつと、いい飼育係になりますよ」

「私も、そう思う。大体、女優なんかになったのがミス・キャストだったんだ。それにしてもあのウマ、ジュリーといったね。あれは美しくなったもんだ。贅肉が、すっかりとれて、まさに駿馬だ。貴和、私はねえ、あれをもう一度、輓畜に調教し直そうと思っているんだよ」

「ご料馬になさるんですか」

「ウン、私の戦車に使っているE—一四三号とペアにしようと思う。丁度、背恰好も、よく合っているし、ホラ、この報告書を見てくらん。鼻高、乳首高、臍高、恥骨高、膝高、などといった、ペア組みに必要な諸寸法がピタリなんだ。こいつあ、一つの驚きだ」

「でも、E—一四三号は、折角あのアメリカ娘と、いいコンビで、お気に召していらっしやったのではありませんこと」

「そう。だが、今度はどうしてもイギリス娘のペアにしたいんだ」

突然、貴和がニッコリして手を叩いた。

「あ、わかりましたわ。メリー王女ですね」
有明もニヤリとして、

「ご明察」

と叫ぶや否や、再び貴和の裸身にとびかかった。

つけっ放しのテレビの画面では依然としてレイ子太助とジュリー青との別れの愁歎場が続いていた。

何度、引き離されても、再び、どちらかたなく、すがりついてしまう。レイ子の方は地位もあがったのだし、今より悪くなる筈もないという安心がある。その証拠には、入国した時から永久ロックで頸と手首、足首の五カ所に装着してあった銅製の枷も、さっき、鍛冶屋で鋏を抜いて取り去って貰った。その代り、同じ銅製ではあったけれど、ずっと細かい装飾用といってもよい位の輪が、同じ場所にはめられている。下士官は七階級からいうと銅位を構成する婢・奴の婢に相当する。兵の位は奴に当たり、奴は全く自由のない奴隷のようなものだ。婢になると奴隷は奴隷であるが、かなり行動の自由が認められ、いわばローマ時代の解放奴隷のような立場をとる。そ

れに反して、ジュリーの方は、これからどんな目に会うか皆目、見当がつかないだけに、極度の不安に陥っている。それがジュリーを気違いのように旧主人の望月レイ子に、すがりつかせているのであろう。

キリがないので、今までは哀れと思って加減していた小川少尉が、思い切ってピンタを飛ばした。レイ子の裸身が、画面で大きく、もんどりうった。軍用畜も音の出ない喉で吼える。倒れた瞬間、レイ子が無意識に掴んだ尻尾が、アヌスからスッポリ抜けてしまったのである。

「思い出に、アノ毛をくれてやろうか。もう要らないから……」

貴和を責め抜きながら画面にも目をくばっていた有明が、ハズんだ声で言った。

再 調 教

調教所は久しぶりで活気を呈していた。というわけは、G号作戦で新入荷した女囚たちのうち、畜位に判定された者がドシドシ送り込まれてきたからである。

声帯枷で音が出なくなった喉からは、ただハーハーという息が出るばかりで、いくら唇

をパクパクさせても声にならないから、読唇術でも身につけない限り、何を彼女等が訴えるのかは全く理解出来ないであろう。鉄のク拉斯、つまり畜位・物位の女囚たちには言語は不要だった。ただ黙々として苛酷な運命を忍従する他はないのである。いや、忍従どころではない。最少限度の睡眠と休息が与えられる以外は、息もつかせられない調教の日課があった。肉体は常にギリギリの限界まで酷使され、駆迫される。

皮肉なことに、この調教が美畜たちを、より美しく、より健康にして行くことは、既に何度も述べてきた通りである。相撲の力士のコンディションを推測するのに、よく肌色が云々される。体調の良し悪しは、それ程テキメンに、皮膚の色艶にあらわれてしまうものだ。容赦ない調教を耐え抜いてきた者は、材質によって能力の差はあったとしても、いわゆる「新品」とは目に見えて格段の差異があった。

厩舎のケージ（第29回、参照）に繋がれた新品どもの前を、これ見よがしに二頭建てのご料馬が、ひき廻される。いわずと知れた、アン・ブラウンとヤンキー娘のペアである。

同じ畜位の立場なのに鍛えに鍛えられたこの二頭は、それこそ、光り輝くような肌で、均齊のとれた美しい裸身を光らせ、^{かもしか}羚羊のよう^{かもしか}に、しなやかな足どりで、自らを誇示するよう^{かもしか}に歩を進めた。桎械の下で、あえぎながら新品たちは啞然として見とれていた。事実、このような狂った地獄に置かれながら、それはゾッとするような美しさだった。女でも惚れ惚れとするような、麗しさだった。

哀れな後輩たちを横目に見て、二頭には、それを憐れむよりも、自分たちの優れていることを得意に思う気持の方が強かったのである。酷使される日課は、女囚たちを極端な利己主義者に変えてしまう。全くのところ、他人に同情したりする余裕は寸豪もなかったからだとも言えよう。

二頭は、有明の思いつきでペアを解かれ、



夫々、ちがう使い途に向けられるため、ここで再調教されることになったのである。

ペアの轡畜は、よくイキが合うことが大切である。(第50回、参照) そのため、二十四時間、一身同体となって起居を共にするよう^{かもしか}にさせられる。轡から外されて休息が与えられるときでも、四つの乳首を一本の細いスチール・パイプでロックされ、鼻も二頭の肩巾の半分の長さのパイプで繋ぎとめられる。こ

れによって、二頭は顔を見合わせる^{かもしか}ことすら出来なくなり、常に横に胸を一直線に並べていなければならなくなってしまう。アンたちも、二本のパイプで胸と鼻を固定されたまま走ってきたのだが、馴れきった二人は乳首を殆ど上下させずに足を動かしていた。これが新米だったら忽ちチグハグになって、鼻先や乳首が牽れてしまったにちがいない。

ところで、械具室に連れこまれた二頭は、そのパイプを外されて一頭ずつ別々に繋がることになった。美畜は、これではじめて、お互いパートナー同志が別れなければならな^{かもしか}いということ^{かもしか}を覚った。半年以上もの間、文字通り辛苦を共にしてきた相手と、何の予告もなしに引き離される。二頭とも足摺りを^{かもしか}して名残りを惜しんだことであつた。言葉を奪われていてはサヨナラさえ、言うことが出来ぬ。わけもなく口惜しく、二頭とも美しい目を涙で濡らせていた。

鞭が肉体に炸裂して、鈍い音をたてた。それより、空気を引き裂く、ヒューツという音

の方が恐怖を、さそう。その音に追われるようにして、数頭の新人りが械具室に転り込んできた。

情容赦もないアマゾン女兵たちは、一人一人、まだ穴を明けて嵌めたばかりの鼻輪を天井から一列に並んで下がっている鎖に、つなぎとめていった。例によって、辛うじて足の爪先だけで体重を支えるしかない高さに固定されるから、嫌でも応でも身体をピンと反らせて、踵を上げていなければならぬ。(第29回、参照)

数えたら、丁度、七頭であった。はじめてこんな目に遭わされた女たちは恐怖に戦慄し一様に内股を濡らせてしまっている。

「こっちへ来い」

命じられて、F-五五四号(アメリカの富豪令嬢)が、やって来ると、七頭の前に立った。調教の仕上がったウマは、鼻輪を曳かなくとも日本語の命令を解して、従順に何でもするようになる。

しかし彼女とて、目の前に、さながら屠殺場の牛肉のように吊られて、必死に爪先立ちをしている後輩たちを眺めることが愉快な筈はない。忽ちにして、調教初期の悲痛な日々が想い出されてくる。(第29回、参照)

七頭とも黒い遮光性のコンタクトレンズを目蓋の裏に嵌めてまれて、人工的の、にわかメクラにされているところを見れば、畜位女囚ではなくて、更に一段下、つまり最下級の物位女囚であることが、わかる。

「こうやって並べてみると、やっぱり何となく、ちがうんだねえ」

調教長のアマゾン将校が言った。

「皮膚色係数は殆ど同じなんです……」

もう一人が答えた。

「仕様がなないね。その日、その日の状態でもちがってくるし、兎に角、こっちは御料馬なんだから、これと変わらない肌合いを保たせるには、よっぽど厳しく鍛えなくっちゃあ、だめだよ」

F-五五四号の滑らかな腰をピシャピシャ叩きながら、その将校が言った。そして、
「フィッチ・ワン・ドウ・ユウ・ライク・ザ・ベスト。ユウ・キャン・チューズ。(どれが好きか、選んでみよ)」
と英語で命令した。

アメリカ富豪令嬢は、びっくりしたように目を睜った。鉄のクラス(畜位・物位)女囚はこの国では人間とは考えられていない。したがって声帯枷などで発声機能を奪ってしま

っている。しかし、耳があるから聞くことは出来る。犬だって猫だって、訓練をすれば或程度は主人の言葉を理解出来るだろう。その程度のことは飼主にとっても便利なことだ。殆どが白人娘である、このクラスの女囚達はどうして、今まで習ったこともない日本語の命令をタタキ込まれる。

しかし、母国語で命令されたことは今まで一度もなかった。それで、大いに迷惑ってしまったのである。

これからどうなるやらサッパリ分からなかった。英語で命令されるなんて、良い前兆か悪い前兆か分からない。だが、躊躇は許されなかった。選ばれた者が貧乏くじをひくことになるのか、選ばなかった者の運命の方が悲惨になるのか、これとても皆目、見当もつかないのである。ただ、本能的にいいと思う方を選ぶ。それも外観だけの評価でしかない。「なにを、もたもた、してるんだい。サア、ハヤク」

『ハヤク』という日本語は美畜の耳に焼けついていた。反射的に、ビクッと前に出てしまった。どれもこれも、見事なプロポーションだった。はやくも、くたびれて踵を落とそうと

した者もいる。それが直撃的に鼻をひきつらせた。

声にはならないけれども、激しい息が開け切った口から、泡とともに噴き出していた。そして、その苦悶に痙攣する裸身、特にこのポイントで選ばれたらしい豊かな乳房がブルン、ブルンと揺れ動いていた。

F—五五四号は、右から二番目の肉付きのいい娘を選ぶことに決めた。一番若々しく見えたとし、誰よりも苦しげに地団駄を踏んでいくのが、いじらしかったからである。そっと近づいて汗に濡れた乳房に唇を近づける。

「よし、きまった。G—一〇八号、こいつにしよう。あとのヤツは、もとの溜りに帰してきなさい」

アマゾン女兵が、選に洩れた六頭を曳き立てて出て行くのを、G—一〇八号はホッとした思いで見送っていた。やっと鼻吊りから解放されたからである。

G—一〇八号はスペイン生まれである。マドリッド音楽院でソプラノを学び、ジュネーブのコンセルバトワールで有名な声楽家マダム・ブクロンに師事しようとスイスを訪れたばかりに、有明の目にとまってしまったの

である。将来、百千の耳を楽しませたであろう彼女の声帯は、今は空しく呼吸吸気を素通しするだけに過ぎない。そして、その裸身だけを生命のない椅子や机になぞらえ、物位的女囚としてしか評価されない悲惨な桎梏の下に呻吟しているのがあった。

必死に蹴く両足が一緒に縛られたかと思うと、いきなり高々と逆吊りされてしまった。

背中に、何かが当てられたような気がして上体が水平に支えられた。頭を思いきり後に反らされて、戻せないように首輪が固定される。胸が自然にのけぞって、ただでさえ、突き出した豊胸を、いっそう大きくした。次の瞬間、激しく女体が、もがいた。もっとも、不自由に固定された四肢では、その疼痛を避けることは不可能であった。予め装着されていたV・ロック（正式には陰枷と呼ぶ。予めレイビアに穿孔して挿入した、パイプ状のネジ留め用治具を、その孔に固定しておく——第59回、参照）に腰板の裏からボルトを通してはじめたからである。もう一カ所、足首の縄が一旦、解かれて今度は、そこを鉄の足枷がガツチリと押えつけると、あわせて三点でG—一〇八号の、ふくよかな裸身は「型」に、つ

まり、仰向けになって足を垂直に差し上げた姿勢に固定されてしまった。

メクラにされたG—一〇八号には何もわからなかったけれども、彼女は自分の肉体を馬車のシートにさせられてしまっていたのである。奇妙な恰好の馬車が出来上がるのを、輓畜のF—五五四号は啞然として眺めていたが、すぐに自分が、それを牽くのだということがわかった。その馬車の轡を自分の股に挟まなければならなかったからである。

それより、もっと、このすぐれた輓畜を不快にしたのは、局部に何かゴム球のような物を入れられたことであろう。通常、物位女囚とちがって、輓畜にVロックはなかった。それが、今度は無理矢理に、さし込まれてしまった。ゴム球は細いゴム管でG—一〇八号の口枷から伸びたロッドに、つながっていた。G—一〇八号が口枷を強く噛むと、F—五五四号のソコで、ゴム球が、ふくれ上がるようになっていく。更に、G—一〇八号が頭を左右に廻すことによって、G—五五四号の内股の左、又は右にロッドが触れる。これが運転命令の伝達装置になるわけだが、その機能については別回に、ゆずろうと思う。（未完）

☆緊縛撮影記☆

由紀の敏感な部分

榊 真 男

私のSM仲間にT君という青年がいる。彼は年令の若いのに似合わず、SMに関してはかなりのベテランで、私なども彼から教えられることが多い。一度、彼と一緒にSMプレイをやったが、縛りや責めの主導権は完全に彼に奪われ、私はもっぱら写真を撮る方専門だった。といっても、彼は他人の私を全く度外視し、自分勝手に事を運ぶわけではなく、常に私にも気を使ってくれ、私の好みに合わせたプレイを展開してくれる。彼の、かゆい所に手の届くようなサービス振りと達者な縄捌きに結局、私が出しゃばるより彼に全てを任せておいた方が、うまくいくと無言のうちに納得させられてしまうのである。

彼とのつき合いが一番、長いのも、彼のもつ繊細さと誠実さが、私の波長と合うからかもしれない。

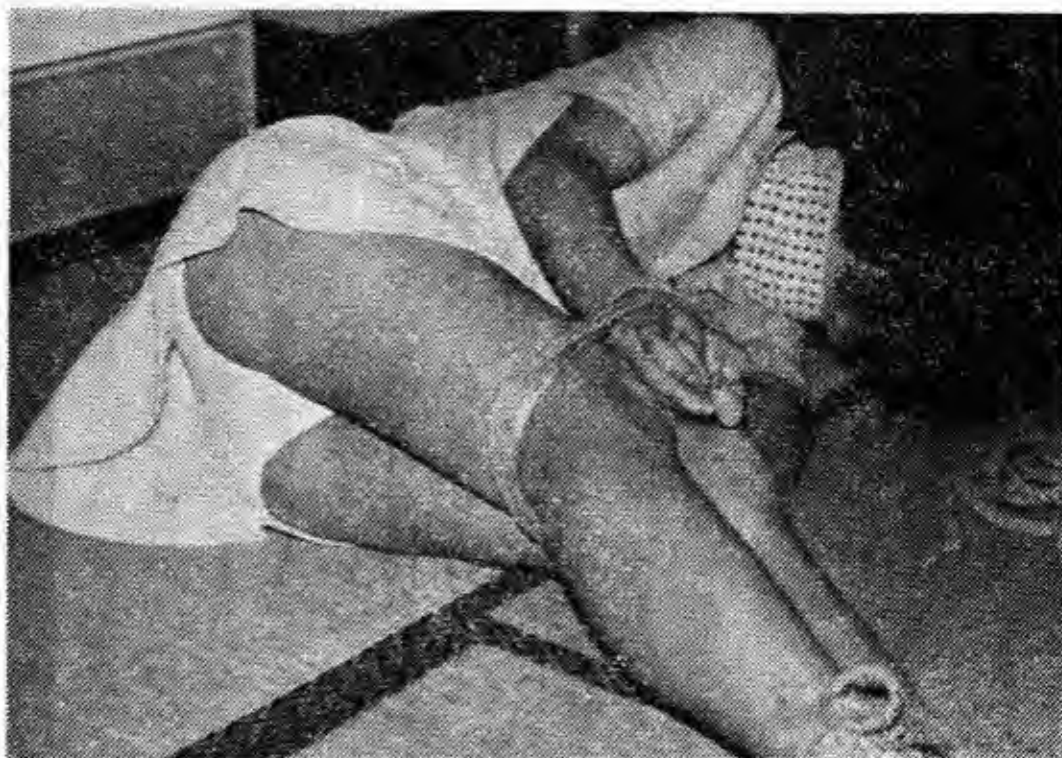
私にDPEを自分でやるようにと勧めてくれたのも彼であった。それまではプレイをしなくても写真など殆ど撮らずにいた私がきちん？と写真を撮り、



写真を撮らずに、今となっては縁が切れてしまった何人かの女性の妖しい緊縛姿が、口惜しさとともに脳裏に浮かんでくるが、写真

をとり、自分でDPEすることによって得た喜びの方が、はるかに大きく、T君には感謝のしようもない位である。

何故、T君のことなど書き出したかという、今回の緊縛撮影記の女性は、彼から紹介してもらったからである。その時の事情を少し書いてみたい。



一年位前のことである。例によってT君からの電話を受け、東京駅に近い喫茶店で私は彼と会う約束をした。彼とは家が遠いので月に一、二度の電話位で会うことは、そうめったになかった。

その時にT君が喫茶店に連れてきて、私に紹介してくれたのが、この女性、梶原由紀であった。

「今日は、とても面白い人に会わせると言って由紀ちゃんを連れてきたんですよ。梶さん、この娘に色々な体験談を話してあげて下さいよ。あっちの方に、かなり興味を示すのでね」

T君が、そういう傍で、由紀は下を向いて恥かしそうに座っている。

「じゃあ、梶原さんは、由紀ちゃんと呼ばせてもらって、いいかな。由紀ちゃんはSMの事、少しは知っているんだね」

由紀は身を固くして、相変わらず何も言わない。T君と彼女との態度から察して二人は、ある程度のところまで行っているんだな、と直感した。私は小声でT君だけに言う。

「君、あの娘とは、もうプレイやった

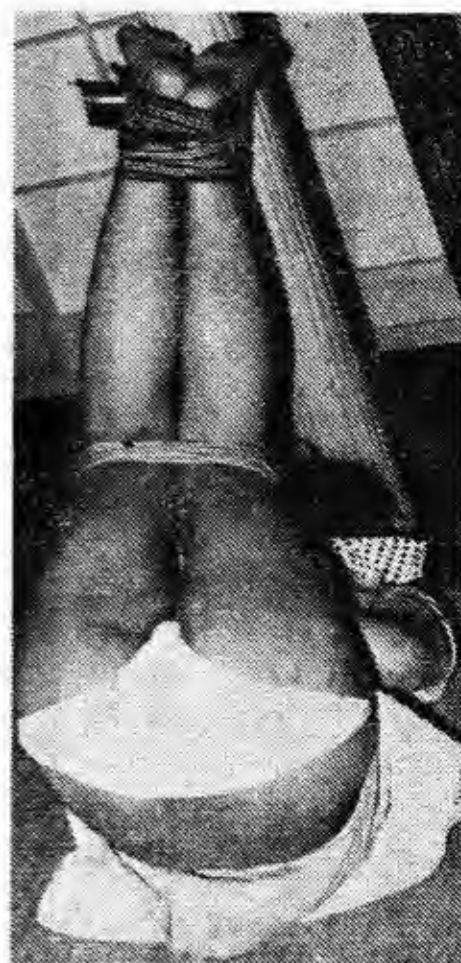
んじゃないのか」

「やあー、実は二、三回程」

「何が二、三回程だ。それじゃ、彼女の前でいつもの通り、あけすけに話をしていて、いいんだね」

「ええ、それはもう」





私とT君との久し振りの話は、次から次へと弾んでいく。お互いのプライバシーについては固く秘密を守り、詮索しないことになっているが、SMの話では互いに相手の好みを十分に知りつくしている仲であるから、話の種は尽きない。私たちの人目をはばからない会話に由紀が、じっと耳を傾けているのを、私はそっと、うかがっていた。

私が、ある女性と鎌倉へ行って撮った緊縛写真の数葉を取り出して、T君に渡すと、T君は一枚一枚に丹念に目を通し、見終わった写真を隣の由紀に手渡す。

ちらっとT君と私の顔を見やってから、由紀は写真に見入る。

「綺麗な、ひとね」

「へえー、そう言ってくれると有難いなあ。女の人にこんな写真見せると、けがらわしい

といった表情をして顔をそむけてしまうのが普通なのに。T君、だいたい教育したんだね」
「いや、彼女は、こういうもの見ても、いやらしいとか、なんとか思うことは、始めっからなかったですよ」
始めのうちは口が重かった由紀も、こうして次第々々に話に引きずり込まれてきた。

「今度は私の最近の写真を櫛さんにお目にかけましょう」

T君は、そういつてテーブルの上に、かなりの枚数の写真を置いた。あたりに客は全くいないのに、私は隠れるようにして、その写真の束を繰った。T君が映した生々しい緊縛図の被写体は、私の目の前にいる由紀であった。私は



あらためて由紀を見やると、彼女は事態に感づいていたらしく、顔を伏せ、耳まで赤くして、もじもじしている。

「うーん、なかなか、凄いなあ」

私がそう言うのと、T君は得意気に笑顔を見せている。

「こういうことは、この時が初めてだったのかい」

私が尋ねても彼女は、だまっている。それをT君が、ひきとって答える。

「そうなんです。OKをとるのには、だいぶ、苦労しました。なかなか、うんと言ってくれなかったんですからね。でも、プレイを

始めていくと、彼女の方が、のりだしましてね。こちらの方が先に疲れて、グロッキー気味でしたよ」

「それはそれは」

この時、恥かしさで、いたたまれなくなつたのか由紀は、そっと席を外し、化粧室へ消えてしまった。

「本人の前で、写真をひろげたり、その時の話をしたり、君も随分と、人が悪いね」

私が、からかい気味に、そう言うのと、

「ええ、でも彼女の方でも、かなりの刺激を求めているのも確かなんですよ。どうです、紳さん。一つあの娘を口説いてみませんか」

「口説くたって、いいのかい。君が見つけて、ここまでにした娘だろう。横取りするよ

うで気が、ひけるなあ」

「いや、どうぞ御遠慮なく。先程から拝見していて、心の中で、だいぶ、食指が動いているようだから……」

「いやあ、そこまで、見透かされると弱るなあ。実は、あの娘、だいぶ、気に入っているんだよ」



「由紀の写真ですか。どうぞ、好きなの持って下さい」
「ちょっと聞くけど、君は由紀ちゃん、どうやって知り合ったんだい」
しばらく考えた後、T君は笑いながら、こう答えた。

「まあ、文通で知りあったということにして下さい。といってもSM雑誌の読者通信欄などじゃなくて、もっと堅い所の紹介を通して知り合ったんです」

「文通でねえ。まあ、信じておくことにするか。世の中には、ありそうもないことが実際に起こってしまうことが、よくあるからな」

由紀は、いつのまにか戻ってきており、T君が席を離れ出口へ向かうと、寄りそうように並んで店を出ていった。

あとに一人残された私は、T君からもらった由紀の写真を眺め、しばし考えに耽った。



M女性を探しだす苦労は私もよく知っている。それを無条件で紹介してくれるとは全く運がよい。運がよすぎてT君に悪い様な気もする。



T君の気が変わって後で、もめたりするのもしやである。しかし、私が由紀と連絡をとることは自分に、わかっていた。やはり私も、この果てしなきSMの世界に魅せられた一人なのであろう。この欲望を抑えることはできなかった。



手紙が殺到したのだが、筆不精な彼女は、始めから根気よく文通をする気もなく、電話番号の書いてある手紙の相手に電話をし、そして何人か

な娘であった。姉を頼って東京へ出てきて、しばらく商事会社のOLをやっていたそうだが、面白くないので、そこを辞め、今は家であらわらしているのだそう。

○ その日から一週間位たった日に、私は由紀を電話で呼び出した。二人きりで会ってみると、由紀は第一印象とは異なりむしろ、おしゃべり



のボーイ・フレンドを持つことになった。「私、字も、きたないし、文章も、うまく書けないでしょう。だから手っ取り早く電話して、直接、会って話しちゃうの。それで気に入れば、続けて会おうし、気に入らなければハイスायウナラね」

彼女の話全体が、こんな調子である。彼女は若さを持て余し、退屈している。まじめに会社に入って勤める気もないようだ。他人の私などの方が、彼女の将来を、心配してしまう。だが由紀は、自分の生活設計など、考えていないようである。案外、こういう女性は人より早く結婚し、平凡な主婦として落ち着くのもかもしれない。

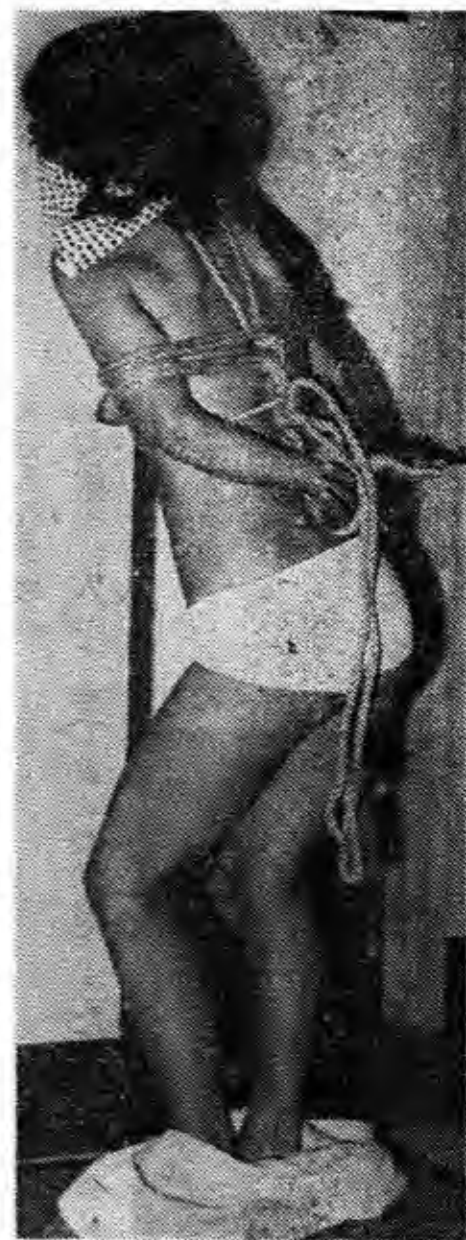
私の緊縛撮影のモデルの件を頼むと、由紀は、あっさりとOKしてくれた。余りの事の

簡単さに、こちらの方が拍子抜けしてしまったほどである。

私は二週間後に再び落ち合う約束をして、由紀と別れた。その日の帰り道、私はT君が彼女を紹介し、緊縛プレイの相手に、と言ったわけが、わかったような気がした。本当はマジメ人間であるT君の気質と由紀のチャランポランな行き方とは合うはずもなかった。何回かプレイをし、一度、飽和点に達したT君にとって、由紀は重荷になってきたに違いないのだ。又、由紀にとっても、新しい刺激という意味で、私と知り合ったのは好都合だったことだろう。だが私とて、一から十まで由紀の相手をしていられるわけでもなく、やがて私に飽きた由紀は、又どこか別の捌き口を探しに私から離れていくに違いない。

○

その日は、うすら寒い日であった。渋谷の道玄坂の途中にある小さな喫茶店が待ち合わせの場所であった。約束の六時少し前から、私は由紀を待っている。



膨らんだカバンには、縄、猿ぐつわ、カメラ、ストロボなどが入っている。店内は意外と混んでおり、人の話し声が色々な角度から混じり合って、私の耳に聞こえてくる。そのざわつきで私の心は一層、落ち着かない。ドアが開くたびに私は、そちらを振り向き、由紀ではないかと薄暗い店内で目を凝らす。彼女が現れるまで、あの縛りをやろう、こういうポーズで撮ろう、と色々なことが頭に浮かんできては消えていく。期待と不安と入り混

じった落ち着かない心持で私は、ちらちらと腕時計を見ながら狭い喫茶店の隅で座っている。

六時を少し、まわった頃、由紀が現れる。地味な色のロング・スカートで、顔には殆ど化粧気なしである。この前、会った時に比べて疲れている様子である。「遅れて、ごめんなさい。どの位、待った」

「いや、さっき、きたばかりだよ」

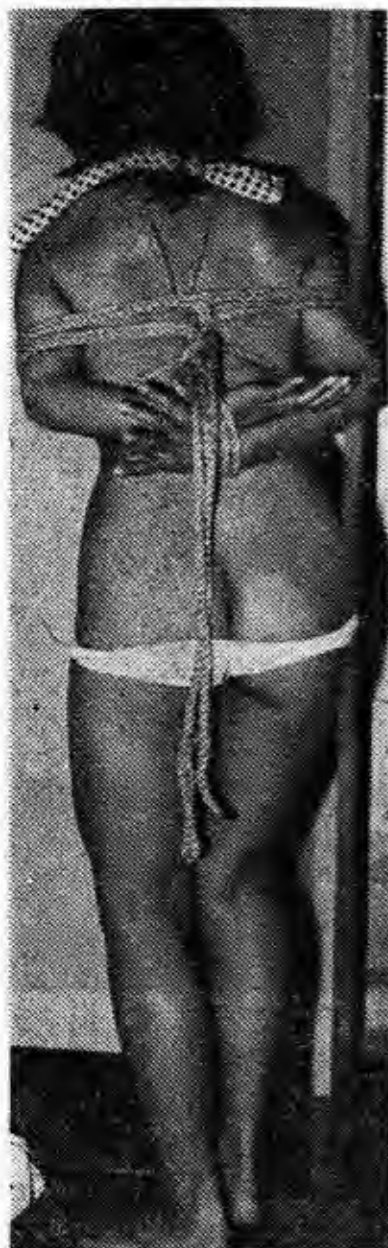
「この間、言われた白のミニ・スカート、持ってきたわ。余り上等なものじゃないけど」

前回、由紀と会ったとき、白のミニ・スカートがあったら、それで撮影するから、持ってきてくれと頼んだのだった。

「きようは少し、寒いわね」

「由紀ちゃん、風邪でもひいたんじゃないの。少し顔色が悪いよ」

「体の方は大丈夫だけれど、今、姉と冷戦状態で下宿に帰っても落ち着かないの。何やかやと色々あって、少し疲れているのよ。でも、大したことはないから、気にしない」



でね」

「もし途中で気分が悪くなったりしたら、遠慮なく言ってくれば、中止するから」

「ええ。一休みしたから大分、元気になったみたい」

「それじゃ、そろそろ、行こうか」

私は、おもむろに立ち上がると、重いカバンをつかんで、喫茶店を出る。由紀は私の横に並んで歩いている。しばらく行くと、旅館街がある。旅館といっても、勿論、皆ラブ・ホテルである。そのうちの一軒を選んで、私たちは中に入る。

フロントで、顔を見ないというサービスなのか、厚くたれたカーテンの向こうから、こう尋ねられた。

「洋間ですか、日本間ですか」

柱や鴨居があるかもしれないので、

「日本間にして下さい」

と答える。カーテンの向うから鍵を渡され四階だと教えられる。四階へ行くエレベータに、たまたま他のカップルと乗り合わせる。おそらく、同じ会社の社員と事務員なのだろう。



う。私たちを、ちらっと見やると視線を、あらぬ方へ浮かばせている。互いに何も話さない。彼らは三階で先に降りる。恋愛中のカップルというよりも互いに遊びで、快楽を求めにここに来たように見うけられた。そういう私たちも彼らには、どう映ったのだろうか。

○

部屋に入る。思ったより、ずっと広い。しかしながら、期待していた柱や鴨居はなかった。荷物を置くと、風呂場へ行き、湯槽にお湯を入れ始める。

「お風呂に入ってきておいで。出てきたら、

君がもってきた白のミニ・スカートを着てみてくれないか」

由紀が風呂をつかっている間に、私は縄をとり出し、カメ



ラにフィルムをセットする。すると、風呂で由紀が何やら言っているのが聞こえてくる。風呂場の戸を開けると由紀が湯槽の中から、私のいた部屋の方を指さしている。見れば、マジック・ミラーで風呂場の中から、向こう側の部屋が、まる見えである。この仕掛けは一体、どんな意図のもとに作られたのだろうか、よくわからない。由紀の方を振り返ると、彼女は鼻歌まじりに、たっぷりと、お湯の中に身を沈めている。

「もうすぐ出るわ。あまり見ないで」と私に向かって言う。

私は再び部屋に戻る。十畳程もあろうかと思われる部屋に、更に六畳の寝室があり、布団が敷かれてある。その横手に更に又、小さな板の間がある。滞在したりするならば良いかもしれないが、いつときを楽しむのが目的でここへ来る客は、この広さを持て余してし

まうだろう。少し寒いので、コンディショナーのスイッチを入れ、暖房する。部屋の中程の窓側に、一本、コンクリートの柱があるのに気づく。

木の材質感をだすために、縦に筋が入っている。これは、なんとか使えそうである。

それはそうと、由紀はまだ風呂から上がって来ない。もう三十分以上たつのではなからうか。畳の上に散らばった数条の縄が、物わびしげに、意味のない図形を描いている。

「ごめんなさい。気持がいいで、ゆっくり入っていたら、だいぶ長くなっちゃった。着るものは、こんなんだけど、いいかしら」

軽い普段着で女子大生のムードを狙ったのだが、由紀の着ているのでは少し野暮ったいような気もした。とにかく、それから撮影を始めることにした。

白のミニ・スカートの半袖ブラウスという姿の由紀を縛り、着ているものを徐々に剥いでいき、そのそれぞれの段階をカメラに収めるという構想である。

まずは部屋の隅に腰を下してもらい、両手



首を前で縛り、更に余った縄で両膝と一緒にくくる。別の縄で由紀の両足首を縛る。由紀は一言も洩らさず、私のなすがままにされている。

色が白く、ほっそりとした体つきに加え、化粧も殆ど、しない由紀の緊縛姿に私は何やら悲哀感めいたものを感じた。しゃべらずとシー調なことを口にする由紀だが、やはり女一人、この大都会で生きていくのは大変なことなのだろう。カメラを構えると、顔が、はっきり写ると、まづいと言っていた通り、横を向いて顔を隠す。細面で鼻筋が通った大人のムードを漂わせた顔をしているのだが、惜しいかな顔を發表することはできない。

カメラをいったん置き、由紀の両



肩に手をかけ、畳の上へ転がす。ミニ・スカートの裾が開き、白いパンティが見える。程よくしまった双丘に、ぴたりと吸いついたパンティも、しばらくして彼女の肉体から離れ、畳の上に小さくちぢこまって置かれることであろう。ファインダーを覗き込みながらそんなことを想像していた。

先程、述べた円柱の方へ移動し、両足首を高く、その円柱に結びつける。豆絞りの手拭いで猿ぐつわをかませ、カメラをとり、ストロボを発光させる。

由紀に近づき、パンティを、ずらす。ギリギリのところまで止め、何枚か写す。

この縛りは、これ以上変化が望めないの、縄

をほどこき、今度は柱を背に立ってもらい、両手を上に高く、くくり、更に両足首も柱に固定する。私は由紀の前に立ち、ブラウスのボタンを一つずつ、外していく。はだけたブラウスの奥から可愛い乳首が覗いてくる。

バストのポリュームは、それほどとは思われないが、身体全体のプロポーションが、すこぶる良い。このように上下に伸び切ったポーズでは、由紀のしなやかな身体が流れるような曲線群を、いくつも形造っている。

カメラを真正面に据え、スカートを脱がしていくと、注文もつけないのにポーズめいたものをとる。これもT君の飼育の結果なのだろうか。

一たん、縄をほどこき、今度は浴室に接した部屋の隅に場所を変える。先程、言った浴室内から覗ける鏡のあるところである。スカートを着けてもらい、今度は太目の縄で後手に



縛り上げる。

「T君は君に、どんな縛り方をするんだ」

私は縄を捌きながら、由紀に尋ねる。

「やっぱり、こういう風に後手に縛ったり、足を縛ったり……私、縛り方の名前なんて、よくわからないわ」

「T君の縛りは、きついだろう」

「ええ、榊さんの方が痛くないわ」

「縛ったあと、T君は君に、どんなことするんだい」

T君と一緒にしたプレイの経験から、彼がバンプを使っているのは間違いない。そしてそ

れ以上のことを由紀の女体に教え込んでいくのに違いないのだ。

「それ……それは想像に任せるわ」

由紀はそう言って、答をはぐらかす。

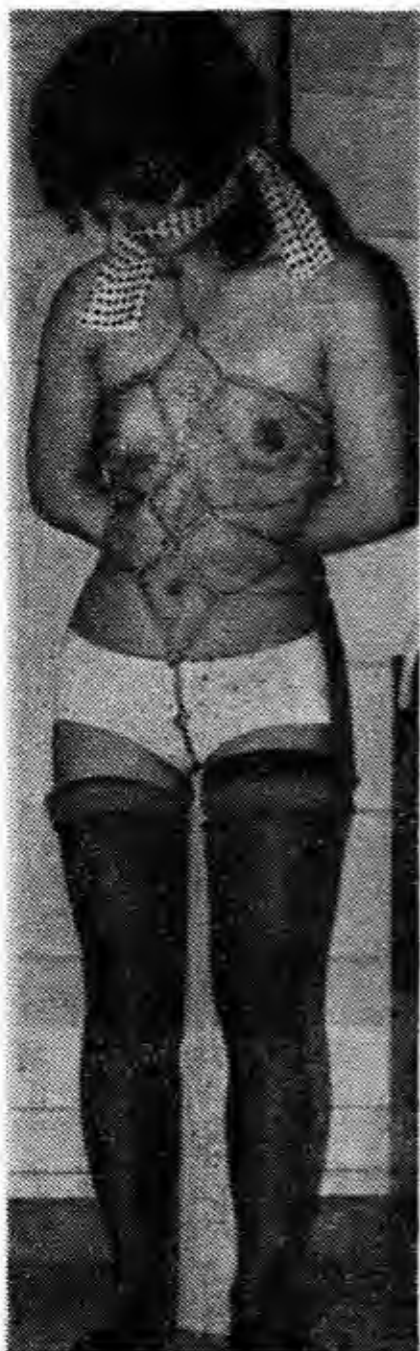
私の心にムラムラとT君に対する競争心と嫉妬の念が起って来た。しかし、それを由紀の前で見せるのも大人気ないと思い、冷静を装ってシャッターを押す。

鏡を使ったりして何枚かの写真を撮ると、余って長く垂らしてあった縄を首の両側から前に回し、胸の真ん中で交叉させ、左右にわけける。その時、腕に力が入ったのだろう。由紀が小さな声で痛がった。しかし、そのまま力をゆるめずにキリキリと絞り上げた。

襦の側に立たせたまま、スカートを、パンティと剥いでいくのを、分解写真のようにして撮る。

パンティを足首のところまでずり下げる。

始めて私の前に全てを晒してしまった由紀は何とか前の部分を隠そうと、横を向き、膝を上げたりして、恥かしがっている。そこで丁度、フィルムが切れた



ので休憩にする。

猿ぐつわを外し、いましめを解くと由紀はあわてて旅館据え付けの浴衣を羽織り、鏡台の前に陣取り、私に背を向けて、髪のはつれを直したりしている。

とりとめもない雑談も由紀と私との共通知人であるT君のところへ、いつのまにか収束していく。彼は私にとっても、まだ謎の多い人間である。由紀にとっても彼は、彼女の裸体に縄をかけ、このおぞましいSMの世界に引き込んだ決定的な人物である。いやその前に、一人の男として彼は、由紀の好ましい対象なのだ。そんな感じが由紀の言葉の端々に現れている。私は今日の撮影の場では、T君の影を拭い去りたいと思った。私の男としてのプライドからでもあり、そうでなければ良い写真が撮れないとの判断からでもあった。

この撮影が、由紀と心が通い合う楽しいものになるか、事務的な白々しい気持ちで撮り終え、四、五本のフィルムだけを手元に残して冷々と別れることになるか

それはわからなかった。どちらにしたところでそれがT君のためにそうだった、というようには、なりたくなかった。

○

「じゃあ、始めようか」

「この部屋、少し寒いわ」

「エアコンディショナーは、さっき、いれたんだけど、何しろ部屋が広すぎるからね。それじゃあ、これを着けて、その柱のそばで撮ることにしよう」

私は奥の布団の敷いてある部屋を使おうと思っていたのだが、由紀が寒いと言うので、元の部屋で撮影することにする。そして私が持参してきた黒のシーム入りのストッキング

を着けてもらうようにする。

私が鞆から取り出したストッキングと赤いガーターを見て、由紀はなつかしそうに嘆息をあげる。

「わあ、今どき珍しいわね。一体、どこで手に入れたの？」

「人に頼んで苦労して買ったのさ。今は、なかなか、売っていないからね」

「私が学生だったころは、皆、これをつけていたのね」

「パンストは色気がないから嫌いなんだ」

「これ、私、もらっていたかしら？」

由紀は、シームの線を気にしながら、はいっているストッキングを欲しがらる。その表情にだいぶ、真剣味がある。やっとな彼女も今日の撮影に乗ってきたのだと感ずる。その代償がストッキング一足分なら、お安いものだ。

「撮影が済んだらあげるよ。ガーターも必要だろうから、一緒に持っていけばいい」
それから私は、細い色のついた縄を手にとると、由紀を縛りにかかる。後手にくくり





胸のところで八の字形に縄を走らす。

スカート脱がせ、縄を加える。私が由紀の後で縄を結んでいると、今まで痛いとも何とも言わなかった彼女が、もぞもぞして何か言いたげである。

「ちょっと、胸のところが……」

「えっ、きつすぎるかい」

「きついんじゃないくて、胸のところが、触ってるから……」

由紀は顔をしかめ、何かに耐えている顔つきである。見れば、肌にぴたりと喰い入った縄が、由紀の乳首を上下から噛んでいる。彼女が身をよじり、息を詰めては漏らしているのを見て、彼女の身体に起こったことが何であつたか察した。

「君は敏感なんだね」

「……」

私は彼女の要求を呑んで乳首を挟んでいる縄を移動させる。由紀は、ほっとしたように息を抜く。彼女が、どこまで許すか、私には見当がつかなかったが、彼女とここで深い関係になることは望まなかった。由紀は深入りするタイプの女性だろうから、こちらが遊び半分のつもりでも、一たん限界を越えてしまえば、のびきならないところへ追い込まれるような気がした。

情が深く、スマートな男女関係でつき合うということができない女性なのではないだろうか。おそらくT君が持て余し気味に私に紹介したのも、そこら辺りと、つながりがあるのだろう。とにかく今日は紳士的にふるまっていた方が得だと思った。

私は彼女から離れ、カメラを構えてシャッターを押す。声を出してポーズの注文を

して、自分自身を撮影に没入させようと試みる。夢中になって色々な角度、ポーズをとっているうちに、フィルムが再び切れる。カメラから目を離すと、由紀は全裸にも馴れてしまったのか、前を隠そうともせず、私の真っ正面に立っていた。

次は菱縄である。不思議なもので同じ菱縄でも、その日によって縄のかけ方が少しずつ違っている。それは写真を現像したあとで気がつくことなのだ。菱縄のコツは、こぶをつくところ、もたつかないということであろう。バカていねいにやっていると、女性が待ちきれなくなってしまう。又、縄の締め方を均等にしないと、せっかく描いた菱形が汚ならしくなってしまう。

菱縄ができ上がると、私は変化を求め、場所を変えることにする。部屋を出て、玄関のドアに通ずる廊下を使う。洗面台の所や靴脱場でフラッシュをたく。ここら辺りは、ライトでなく、軽便なストロボの便利なところである。再び由紀を部屋に入れ、畳の上に、軽がす。パンティを脱がそうと思ったが、縄が縦に入っており、それを邪魔している。しかたないのでパンティを、ずり下げられるだけ、下げた。更に浴衣の帯で足首と首を結び、海

この後、テーブルを使っての縛り、逆海老縛り、あぐら縛りからの海老など、一時間半以上も続いたのであるが、この辺で打ち切ることにする。この後半の写真は又別の機会に発表することもあるかもしれない。

O

彼女にとって初めてのS Mプレイの相手は

私なんかより、年も若いのに、SMにかけては、至ってベテランで、しかも繊細な神経の持ち主である彼は、かゆい所に手に届くサービスぶりと、鮮やかな縄捌きとによって、きつと、そうした女性に好かれる何物かを持っているのに違いない。

奮て御投稿して下さい！

左記テーマにて募ります

一、女性読者の告白、体験談

最近、読者通信に投稿されたり、編集部や
編集長、或は執筆者の方が多くて、大変意を強
たりする女性読者の方が多くて、大変意を強
くしておられます。しかし、読者通信なんかで
お友達を得たりして満足されると、そのまま
沈黙してしまわれる方が案外に多いのです。
それは、いろいろと御事情もお有りと思
います。が、やはり本誌の読者の方々の気持と
しては、その後の経過も、どうなったのだろ
うかと、知りたいものなのです。
そんなわけですから、お便りだけでも、是
非、お寄せ願いたいです。編集部としまし
ても、直接、お願いしています。編集部としまし
ず、女性読者の方々も、文章の長短巧拙に拘ら
ない、勇気を出して、お寄せ下さるよう、お待

二、夫婦SMプレイの体験

今迄に、夫婦SMプレイの珠玉の告白が数多く本誌上に発表されて、文獻誌としての本誌の評価を高めて参りましたが、同時に、読者間に告白された夫婦の方々の人気をも一層高めて参りました。

こうしたSM夫婦プレイ体験者の方々の告白が、今や、真に待望される時代になつてきました。そうした体験者の誌上を通じての交流こそ、焦眉の急と云つても過言ではないでしょう。

読者の方々の中で、夫婦又は恋人、愛人間に於ける広い意味でのSM関係の体験談を、お寄せ下さるよう、お待ち致します。

裏付けにならないような写真があれば尚結構です。住所氏名、其の他、発表に支障のある事

三、特別異色体験談と告白

普通の雑誌では、取扱わない異色ある性癖の告白。例えば、マゾ体験、窃視、下着愛好、同性愛、節片崇拜（フェチズム）、獸姦体験、嗜好、短近親相姦など、どのようなことでも、長に拘らず、詳しく記載の上、御投稿下さい。尚、体験に至らずとも、それが異色あるものでしたら、一応歓迎します。

本誌既刊号の読後感につきましても、それが執筆者の特異な性癖に由来するものでしたら是非、お寄せ願います。投稿者のプライバシーに關しては、固く秘密を守りますから、その点、御安心下さい。掲載篇につきましては、分の原稿料、或は資料参考謝礼を差し上げます。何卒、奮て御遠慮なく、ドシドシ投稿下さるのを、お待ちしております。

「セックス・ドレイ心得帖」

——その守るべき八カ条——

北川 まりこ
水江 伸・画

数年来、主人の手で奴隷として飼育され、『花と蛇』の静子役の実演に始まり、花電車特訓、メス犬特訓など、数々の、女の身にとって死ぬほど惨めな訓練を受けて、今では、すっかりマゾ女に成長し、悦虐の淵に溺れ、責めや、お仕置のない生活では、何となく、物足りない女、いいえメスになってしまいました。

特に、一昨年頃から、プレイに『売春ごっこ』や『女郎ごっこ』をとり入れて頂き、最低のパン助としての訓練を受け、その訓練の成果を実地にためすことと、主人のお仕事に便宜を計って頂くことを目的に、取引き先の

何人かの殿方を接待することを命ぜられ、始めて、主人以外の殿方に馴られ、時には複数の殿方にも、娼婦になり切って、緊縛の裸身を、おもちゃにして頂き、お客様のお望みによつては、貞操まで捧げて御奉仕しております。

大勢のお客様の宴席にも、生れたままの丸裸で侍らして頂き、お一人、お一人に、お酌をして廻り、酒の肴の余興には、淫らな裸踊りや、羞かしい芸を御披露することもございます。このような浅ましいセックス・ドレイの境遇を、以前の世間知らずの女教師の頃と比較べて、ふと悲しくなり、何とか、今の境遇

から脱け出さなければと思うこともございましたが、一度、溺れた妖しい地獄の悦びからは、とても脱け出せません。今では、すっかり諦め、何もかも忘れて、ただ、ひたすら、身も心も捧げて、殿方のお氣に召すように努め、それによって自分の被虐の悦びを、一層深めようと心掛けております。

最初の頃は、人間以下のドレイの気持に、仲々、なり切れず、そのことが、プレイの途中でも、身のこなし方、口のきき方にも、自分で氣の付かない所で現われて、主人から口喧しく、お小言を頂戴し、一挙手、一投足についても、細々した御注意を賜り、再三、教

えられた通りに出来ないときは、鞭打ち、吊り、木馬、水責め、クリップ責めなど、肉体的苦痛を伴う、お仕置を頂戴することもございました。

主人の留守中、暇を見ては、教え込まれたことを自分の心覚えとして、書き留めておきましたものが主人の目にとまり、是非、整理して、まとめるように命ぜられ、表題として『セックス・ドレイ心得帖』名付けて下さ



いました。奇ク誌、御愛読のマゾの女性の方に、多少なりとも御参考になればと存じまして、お報せします。

(1) セックス・ドレイは、自分が人間ではなく、人間以下の犬、猫、牛、馬などと同じ、畜生並みの身分であることを信じこむこと。

そのための手段として、以前『まりこの結婚式』で、お報せしましたように、

(1) 主人の籍に入れてもらえないこと。

(2) 子供を生ましてもらえないこと。

(3) いっ捨てられても不服を言わないこと。

という、普通の女では、とても耐えられない惨めなことをお誓いして、主人に飼育して頂いております。また、時々プレイのお相手をする、主人以外の殿方にしましても、たとえ、その方が教養の低い無学な方であっても粗暴で野卑な性格な方であっても、醜悪な容貌で好色な方であっても、ドレイとしてお仕える自分から見れば、皆様は、お手を触れて頂いたり、言葉をかけて下さるのも、恐ろしい人間様であり、「パン助」と嘲られ「メス犬」と罵られ、丸裸に引き剥かれ、鞭打たれ、足蹴され、唾をかけられても、そのことは当然のことであり、身分の違いだから仕方がないと諦め、むしろ、虐められたり、罵倒されることに感謝し、その気持が、身振り、言葉使いに、自然に表われるようにしなければなりません。

極端な場合、オス犬をお相手にする時、自分はメス犬ですから、当然身分が下であり、オス犬を呼ぶには、クロとかシロと、呼び捨てにすることは、絶対に認められず、必ず、クロ様とか、シロ様と、お呼びし、オス犬のお気に召すよう、絶えず気を配るように教え

込まれております。始めての殿方の中には、御遠慮なさって、「奥さん」とか「まりこさん」とか「あなた」などと、丁寧な言葉をお使い下さる方もございますが、すぐに「まりこ」と呼び捨てにして頂くか「パン助」「メス犬」など、もっと、ひどい言葉で呼んで頂くように、お願いしております。

名は体を表わすといわれておりますように自分を人間以下の畜生並みの身分であると、信じておむためには、先ず呼び名をセックス・ドレイにふさわしいものに改めて頂くことが一番、手っとり早い方法だと思います。以前佐野みさ子さんの手記の中で拝見したことです。が、みさ子さんが、女体の一番、羞かしい部分の呼び名、女にとって死んでも口に出れない呼び名を自分の名前にして、プレイの相手の殿方に、呼んで頂く場面がございましたが、これなどはセックス・ドレイにとって、最高の名前ではないでしょうか。まりこも数回、主人とのプレイで、その名前前で呼んで頂きましたが、呼ばれるたびに痺れるような屈辱感と、それに伴う喜びを感じました。

人間以下の畜生並みであることを信じておむために、プレイの冒頭にドレイの宣誓書を読むことも有効な方法でして、まりこも今まで

何度、宣誓書を読まされたか分かりません。

主人以外の殿方とプレイする場合も、極上質の用紙に、ドレイの誓いの言葉を認め、蒔絵の文箱に納めて持参することにしております。宣誓のあと、御主人様の足指に口づけしたり、足裏を舐めさせて頂くことも、自分がドレイであることを、自覚する上に効果があり、さらに、いわゆる「おしゃぶり」と称する、唇と舌との御奉仕をすることによって、セックス・ドレイの惨めさを、最高に味わうことができます。ドレイの宣誓、御足への口づけ、「おしゃぶり」などは、プレイ開始の一種の儀式のようなものでして、一糸纏わぬ素っ裸にされてから行う場合と、着衣のままというより、むしろ教養ある女性としての盛装のまま行う場合がございますが、まりこ自身の体験では、盛装のまま行う方が惨めな気持ちになります。勿論、どちらにするかは、お相手をする殿方のお好み次第でございます。

九月号で拝見しました渡部好美様のように両太腿と剃毛された羞恥の丘に、「畜生」の烙印を押して頂くことは、犬猫並みに堕ちてしまったことを、心から信じておむために最も効果のある方法でして、これを貞淑な渡部夫人に敢て実行された塚本様のアイディアに、

主人ともども、敬服しております。まりこも是非「畜生」の烙印を押して頂いて、畜生並みに堕ちた自分を確かめようございます。

(二)、セックス・ドレイは、人間の女としてレディとして、最高の教養や芸能、また、身だしなみを身につけるように努力すること。

これは前項に述べましたことと、全く矛盾しておりますが、このことが、セックス・ドレイに、絶対不可欠な、必要条件だと、主人は、いつも、口ぐせのように、申しております。心の糧になるような書物や雑誌は買って頂けますし、着物、装身具、化粧品なども、豪華で洗練された高級品を、揃えて下さいます。昔の高尾、揚巻、小紫、薄雲など太夫と呼ばれた名妓、(主人は彼女等を高級セックス・ドレイと呼んでいきます)のように、遊芸は勿論、詩歌、書道、絵画、など、百芸に秀で、最高の教養を身につけるように、常に心掛けるように、いわれております。

教養のある女を、人間以下のセックス・ドレイとして扱うところに、サドの醍醐味があり、一方、マゾの方も、一見、豪華な生活から、一転して丸裸にされて罵りものにされる畜生の生活への落差が大きければ大きい程、被虐の悦びを味わえるのだというのが、主人

の持論でございます。小説『花と蛇』の面白さは、ヒロイン静子が、深窓の令夫人から、暴力団のセックス・ドレイに堕ち、千代様、川田様から、昔の華やかな生活を思い出させられながら、丸裸の生活や、捨太郎様とコンビを組んで、性の実演などを行っているうちに、心の奥に悦虐の心が芽生え、次第に正銘のマゾ女に生長するところにあるのだそうでございます。まりこも、『花と蛇』の静子役を演じておりました頃は、よく「静子に見習え」といわれて、フランス語の勉強などを始めたこともございました。

三、セックス・ドレイは、常に、商品の手入れを怠ってはいけないこと。

美容院には、一週間に一度は、必ず参りますし、顔のお化粧も毎日、丹念に行います。勿論、髪かたち、お化粧の方法は、お相手の殿方の好みに合わせます。でも、セックス・ドレイの商品といえば、矢張り、女体のすべての箇所の手入れをしなければなりません。全身美容に心掛けねばなりません。手足につきましては、マニキュアは勿論のこと、ペディキュアを丹念に行います。乳房の形を整え乳首に、うすく紅をさして香油を注ぎます。床の上に鏡を置いて、VとAの手入れをし

す。ムダ毛は、毛抜きで、きれいに抜き取り殿方の好みに従って、薄くまたは濃く紅をさし、油で丹念に磨き上げます。とかく汚れ易い箇所で、おまけに殿方の一番、興味をお持ちになる箇所ですから、いつも、香水を振ることを忘れないようにします。この部分の色素の沈着が一番、恐ろしく、絶えず、手入れをしなければなりません。外観の手入れの外に、その部分の機能も、鍛えなければなりません。『花と蛇』の静子は、千代様から「奥様が、フランスの大学を出たか、スイスの大学を御卒業になったか知らないけれど、ここでは、そういう教養は何の役にも立たないんだよ。ここさえ鍛えれば、それでいいのさ」と、ぴったりに閉ざしている太股の、付根あたりを、指さされながら、笑われ、

「今、奥様に残された唯一にして、最大の財産よ」と言われ、一緒にいる男達からも、笑いのものにされる場面、(フランスからの便りの章)がでございます。確かに、千代様の言われる通り、セックス・ドレイにとって、その部分が唯一で最大の財産でございます。豪華な衣裳、派手な下着、粋な装身具、高級な化粧品など、身につけるものはすべて、御主人様からお借りしているものでして、セックス

・ドレイの資本といえば、丸裸の女体だけです。しかも、衣裳の損料、化粧品などの消耗品代、食費、部屋代、暖房費(生れたままの丸裸の生活では暖房費も馬鹿になりません)などを、セックス・ドレイとしての稼ぎで、まかなわなければなりません。それには、千代様の指差された部分は勿論、後の部分も、丹念に手入れをし、お化粧もして、さらに殿方に「名器だ」と、折紙をつけて頂くように機能なり技術を高めなければなりません。

四、セックス・ドレイは、奉仕一途に、専念しなければならぬこと。

世間ではよく、ギブ・アンド・テイクと、いわれておりますが、ドレイの勤めは、ギブ・オンリーです。セックス・ドレイの勤めは、サービス・オンリーを、モットーにしなければなりません。前項の商品の手入れを、常に怠らないことも、サービス・オンリーの一つですが、そのほか、服装、髪かたち、お化粧なども、相手の殿方の好みを、よく研究して、それに合わせるように努めます。

特に、洋装と和装のどちらを選ぶか、下着の色や柄をどうするかは、いずれプレイが始まれば、何もかも、脱がされて、生れたままの丸裸にされるのですから、どうでもよいよ

うですが、仲々、大切なことです。裸にされる、裸になることは、プレイの一番、最初が一番重要な儀式ですから、身につけるものは、相手の好みに合わせて充分に厳選し、その脱ぎ方、脱がされ方を、よく研究し、プレイのムードを盛り上げねばなりません。

言葉使いや身のこなし方も相手の好みに合わせますし、セックス・ドレイの、一番、重要な任務である、セックスについての相手の好みは、よく承知しておく必要があります。M・V・Aの、どの御奉仕を好まれるか、どれも全部お使いになる場合は、どの順序で、お捧げすればよいか、どのような体位をお望みになるかなど、研究しておくことが山ほど、ございます。

長年、お仕えしている主人の好みを充分、承知して、それに合わせているつもりでも、時々お気に召さないこともあり、そのため、ひどいお仕置を頂戴します。まして、主人以外の殿方の場合、仲々お好みが変わらず、苦



勞します。初めての殿方の場合、下着だけでも、色と柄を変えて何組も用意し、責め道具も、大きなトランクに、色んなものを詰めこんで持参します。まりこのお客様は、昨年末の石油ショックで建築資材不足の時には、一回限りの御接待をした方（一げんさんとお呼びします）もございますが、大抵の方は、二度、三度、多い方は十数回、お相手をしております（お馴染みさんとお呼びしております）

してはいけません。旦那様とお呼びするのが一番、無難のようです。どんなに、むごい御命令にも、ただ「はい、はい」と、お答えして、素直に殿方のいいなりになるのが基本ですが、時には「嫌、嫌」とか、「それだけは堪忍して」とか、「そんなに、せっかちなのは嫌」などと、軽く拒否することによって、相手の嗜虐の心を昂らせ、プレイのムードを一段と盛り上げることが出来ます。相手の

す）ので、すこしは、お好みの分かっている方もございまして、その方専用の下着類、責め道具など、自分で揃えたり、その方に買って頂いたものを、別のトランクに詰め「〇〇様専用」と荷札をつけて、主人から御接待の命令が出ますと、それを提げて、御指定のホテルに向います。

サーピス・オンリーということについて、もう少し述べさせて頂きますと、まず言葉使いでは、相手の殿方のお名前を絶対にお呼び

嗜虐心を刺激することが、最大のサービスです。丸裸に引き剥がれると、すぐに後に手を組んで踊り、縛りをお誘いするポーズをとったり、女の口からは言い難い淫らな言葉を口籠ったり、蚊の鳴くような小さな声で呟いて、殿方から「聞こえない。もっと大きな声で言うのだ」と、何度も叱られながら、顔を紅らめて、淫らな言葉を吐き出すようにして口にしたたり、一寸した失敗をして、それを口実に、鞭打ちなどのお仕置へ、お導きすることもあります。相手の予期していることより、さらに一步、進めてサービスすることも大切です。例えば、お酒を頂戴する場合には必ず口移しで頂くように、おねだりをし、頂いた後は舌をさし入れて、濃厚なキスを楽しんで頂き、唇と舌の御奉仕で、ジュースを御馳走になった後は、丁寧に舌を使って払拭してさし上げます。

プレイ中は、縛られて手足の自由が利かず相手の殿方の御手を煩わすことが多く、浣腸プレイの後始末など、汚いことまで面倒を見て頂きますので、相手の殿方に心から感謝することも忘れてはなりません。縛り、鞭打ち、剃毛、浣腸など、御手を煩わすたびに「申し訳ございません。お手数をおかけして済みま

せん」と、厚く御礼を申し上げます。特に、殿方のお情けを頂戴することは、セックス・ドレイの冥利に尽きることですから、涙を流さんばかりに、お礼の言葉を申し上げねばなりません。一夜のプレイの後、きぬぎぬのお別れのときも、「お蔭様で、楽しい一晚を過ごさせて頂き、本当に有難うございました。私のような者で、およろしければ、また御利用下さいませ」と、心をこめて、お礼申し上げます。

相手の殿方の好みや希望に適っているかどうかについて、プレイ中、絶えず気を配り、「あたしの裸、お気に召したかしら」とか、「およろしければ、まりこの羞かしい芸を御覧頂けますでしょうか」とか、

「あたしの躰で、御満足して頂けたでしょうか」などと、お尋ねすることも、サービスの一つです。昔、読みました、フランスのバルビュスの小説、「地獄」の中で、彼と彼女が行為の後、彼女（名前は確かユエメといいました）が彼に対して、「あなた、ご満足？」

と尋ねる場面がごいますが、この言葉がセックス・ドレイにとっても、大切な言葉ではないでしょうか。

サービス・オンリーということについて、長々と書きましたが、いろいろのテクニックよりも、要は、奉仕一途の真心の問題でして奉仕の心でお仕えすれば、自然に、身振りや口のきき方に、それが表われ、相手の殿方に楽しんで頂けるのではないのでしょうか。まりこは、たとえ一げんのお客様でも、奉仕一途の気持で、お仕えすることにしております。お茶の言葉に「一期一会」というのがございますが、セックス・ドレイの奉仕の気持も、これに通ずるものがあると思います。

因、セックス・ドレイは、羞恥心を絶対に失ってはいけないこと。

「羞恥心のないところに羞恥責めは、あり得ない」と主人は、いつも口癖のように申しております。生れつき羞かしがり屋で、学生時代、人前で話すら満足にできず、女教師になることを、断念しようかと考えたり、水着姿が羞かしいから、とうとう一度も、海水浴をしたことのない、まりこも、日夜、糸纏わぬ丸裸にされてドレイの訓練を受けておりますと、いつの間にか羞恥心が麻痺して、それが動作の端々に表われ、主人の御不興を買って、こっぴどく叱られお仕置を頂戴します。

羞恥心の麻痺は、馴れとプレイのマンネリ

化に因るものですから、これを避けるために主人は、つぎつぎに新しいアイデアをお考え下さるのですが、やはり種切れになってしまいます。御不興のあまり、十日も二週間もときには一カ月以上も、他の妾宅にお泊りになり、まりこの所にお越し頂けないこともございいます。一日、二日の外泊ですと、まりこれ以外に何人もの女性を囲っておられる主人のことですから、大して気にもしないのですが余り長い間、お見えにならず、電話すら頂けないときには、何か事故があったのではないかとという心配と、捨てられたのではないかという不安、それに空闊の佻しさも加えて、いたたまれなくなります。不安、嫉妬、焦燥、それに反省の長い期間の後、久し振りに、お越し頂いたときの、プレイの新鮮味は格別でして、おまけに他の女性とのSMプレイで、覚えてこられた新しい責めなども採用して頂き、夜通しプレイの醍醐味を満喫します。

プレイのマンネリを破るためにお考えになられた一つの方法だと、善意に解釈して自分を慰めてはいるものの、二度と他の女性の所に、長期にお泊りになることのないよう、御機嫌を損じないように努めております。マンネリ打破の、もう一つの方法としてお考えに

なられたのが、あたしを主人以外の殿方とのプレイに提供することでございます。マンネリ打破のほかに、主人のお仕事の取引先の殿方を御接待して、いろいろ便宜を計ってもらえるという、いわば、趣味と実益を兼ねた、素晴らしい考えだと、主人は熱心に、半ば強制的に、あたしを説得します。あたしは、それでは、その場でお金を頂かないにしても、まるで、娼婦のお勤めと交らないのではないかと、涙を流して、お許しを願ったのですが、主人の御意志は固く、「娼婦でいいじゃないか。そのために、売春ごっこや女郎ごっこをプレイにとり入れて、お前を訓練したのだ。お前は、今夜から、パン助になって、他の男におもちゃにされるんだ。これから、お前に何人もの男をあてがってやるから」と、無理矢理、その晩から、主人以外の殿方の慰みものにされました。

以来、一げんさんお馴染みさんを含めて十数人、回数にして五十回ばかり、女郎のお勤めを強いられております。主人の言われるように、マンネリの打破とか見知らぬ殿方の前に裸身を晒すことにより、羞恥心を養う効果はありますが、売春婦と同じことをやっているという後めたさとか罪悪感が、絶えず頭の

中に残っていて、惨めな思いでございます。

以前「まりこの裸になり方」という拙い文章でお報せしましたように、主人から、いつも、裸になったり、裸にされたりするときに羞恥心がにじみ出ていなければいけないと、口喧しく言われております。もう少し、具体的に述べますと、「帯を解け」とか、「裸になれ」といわれても、素直に、すぐに裸になっただけはいけません。軽く二、三度は拒否して、殿方の口から「何を、ぶつぶつ言っているんだ。脱げといわれたら、すぐ、丸裸になるんだ」といった、一段と、きびしい御命令が出るようにして、なるべく、ゆっくり、時には溜息をついて、帯を解き始めます。

「何を、ぐずぐずしているんだ。早く、素っ裸になるんだ」という、お叱りの言葉を待って最後の一枚を残して全部、脱ぎます。ここで一度、脱ぎ捨てたものを、きちんと、畳んで、できれば相手の殿方にお預けします。最後の一枚を脱ぐことについて、所詮、承知して頂けないことと分かっている、一応「これだけは、堪忍して下さい」と哀願します。最後の一枚は、縛って頂いてから殿方の手で脱がされるのも、相手の嗜虐心を刺激して、プレイのムードを高めるのに、効果があります。

す。丸裸にされますと、両手の自由な場合は必ず片手で乳房を、片手で前を隠し、その場に踞るか、躰をくの字に、前屈みの姿勢をとります。丸裸にされた後は、なるべく早く縛って頂くことが大切で、いつまでも、手足が自由ですと、自分の意志で、いろいろの羞しいポーズをとるようになります、仲々難しうございます。お縄をかけて頂きますと、すべて、相手の方の意志で、強制されることになりま

すから、大胆なポーズでも、割合、抵抗なく、何もかも諦めた恰好で、とることが出来ます。開股縛りとか、片足吊りのとき、縄が少しでも、ゆるければ、股を閉じるように極力、努力しなければなりません。縄がゆるんでいて、しかも、大きく股を開いている姿では、羞恥心の欠除を疑われても仕方ありません。股を閉じよう閉じようとして、足首に縄跡の痣ができるまで抵抗しなければなりません。羞恥のポーズをとらされたとき、顔を伏せて、眼を閉じる



ことも肝心です。大きく眼を開いて、相手をじろじろ見るなどは、もっての外です。もつとも、カメラを向けられて、「こっちを向いて。大きく目を開かなければ、駄目じゃないか」と、叱られる場合は別ですが。主人は、いつも玉木章子さんの被虐のポーズを賞めておられます。特に八月号の「一盗の味噛みしめる初夏の宵」では、どの写真も固く目を閉じて、顔を伏せ、羞恥のポーズで

も、できるだけ股を閉じようと努力されている様子が見られ、主人から、「さすがに、飼育済みの女は違っている。お前も、少し章子さんを見習ったらどうだ。彼女もお前も、同じお妾だし、体つきも、よく似ているから、このルポを、よく読み、写真のポーズを研究してみたらどうだ」と、言われ、「同じ、マゾのお妾どうしだから、彼女の飼主、藤坂弘さんに頼んで、お妾交換する

のも、面白いな」などとも、申しております。六、セックス・ドレイは、時には、我を忘れて、淫らになること。これは前頂の羞恥心を失ってはいけないことと、全く矛盾しておりますが、相手の殿方の手練手管によって、崩壊寸前になれば、自発的に、淫らな言葉を吐き、淫らな姿勢をとり、淫らな行為をするところによって、自分も相手も、プレイに没入し、一緒に、陶醉境をさまようことができます。これが、セックス・ドレ

イの最大のサービスになりますから、平素から、淫らな言動を、充分、頭の中に叩きこんでおいて、絶頂に昇ってゆく過程において、自然に無意識の中に、狂態を演じなければなりません。主人から、

「始めは処女の如く終りは脱兎の如くやれ。

プレイでは、初めしとやか、後みだら。が肝心だ」と、言われ、「プレイにも、序破急、が必要だ」とも、言われております。

(ロ) セックス・ドレイは、セックス一すじに生き、セックスに、生甲斐をもつこと。

勿論、ドレイとしてのセックスですから、あらゆる屈辱的な形で、強制されるセックスに生甲斐を、もたなければなりません。即ち

(ハ) 強制されたセックスであり、受身のセックスであること。ドレイの方から、絶対に求めるものではない。

(ニ) 相手を選ぶ自由はなく、拒否する自由もない。しかも、相手が醜く下品で粗暴で無学で白痴に近い男（静子がコンビを組む捨太郎様のように）であり、外国人（特にニグロなど）であり、変質者であり、変態性であった方が一層、被虐の悦びを感じる

こと。

ポーズなど、惨めな恰好でのセックスにも快く応じること。

(三) 強姦、輪姦、の形で行うこともある。

(四) 野外で強制されることもある。

(五) 女体の、すべての部分を、相手の希望に応じて提供すること。

(ロ) 相手が畜生であっても、自分も畜生に堕ちて、気を合わせる。

(ハ) セックス行為を見世物にされることもある。コンビを組む相手は金で買われたドレイである。勿論、オスだけとは限らない、メスの場合もある。

(リ) 相手の知らない、オナニーを見世物にされることもある。

(ヌ) 写真、スライド、フィルムなどに収められることもある。行為中の声を録音されることもある。

このように、セックス・ドレイは、殿方の嗜虐的、変態的性欲を処理する道具であり、見世物であることに、生甲斐を持たなければなりません。終戦後、アメリカの進駐軍の兵士たちは、日本のパン助を、「黄色い便器」と軽蔑しながら、自分達の性欲を処理したそうです。セックス・ドレイとは、それを用する人間より、何倍も高い教養をもってい

ながら、自分自身は、その人達の排泄物を、喜んで、肉体のどの部分でも受け入れなければならぬ、便器であることを自覚しなければなりません。まりこも、主人をはじめ、主人の取引先の大勢の殿方の「共同便器」になり、そのことに、生甲斐をもつように努力します。大勢の殿方に汚された挙句、「共同便器」は恐らく、汚物の中へ捨てられるでしょうが、少しでも殿方の欲望を満たしてさし上げられたことで、満足したいと思えます。昔の吉原の女郎が、死ねば三輪の投げ込み寺で共同の穴に、丸裸のまま投げ込まれたことと同じだと思います。芭蕉ですら、「野ざらし紀行」で、俳諧の道一すじの旅の果てに、野ざらしになることを覚悟したそうです。つまりセックス・ドレイとして、マゾの道一すじに生きたいと思っております。「共同便器」になりきって、殿方のお役に立ちたいと思っております。

(四) セックス・ドレイは、汚辱にまみれた牝であつても、心は常に美しく保つこと。

これも、前項と矛盾しますが、奉仕のためのセックス一途に生きることは、求道者、殉教者に似た境地ではないかと思えます。心の美しいセックス・ドレイのお手本として「花

と蛇」の静子夫人がありますし、水上勉先生の小説の中でも、心の美しい娼婦が描かれております。まりこも、北川楼の裸女郎の特訓を受けるとき、廓生活のことを知るために、

何冊かの水上小説を熟読しましたが、特に心を惹かれたヒロインとして、

『五番町夕霧楼』の夕子

『越前竹人形』の玉枝

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十日確実発売!

一月分	1冊	六〇〇円 (送共)
三月分	3冊	一八〇〇円 (送共)
半年分	6冊	三六〇〇円 (送共)
一年分	12冊	七二〇〇円 (送共)

郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉区大領町四丁目六八号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力年分と御指定下さい。

○購読お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替(大阪四二七八三番)』のいずれかをご利用

願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代六〇〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十三日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

『波影』の雛千代

『飢餓海峡』の八重

が、ございます。みな、賤しい、人様に後指をさされる、娼婦とか娼妓(小説の中では「おやま」という言葉を使っています)です

が、心は本当に美しい人達です。まりこも、この人達のように、心の美しいセックス・ドレイになりたいと思っております。それにしても、売春禁止法が制定され、昔の遊廓が廃止されていることが残念で、たまりません。まりこも、もう二十年も早く生れておれば、遊廓に身を沈めて、おやまと呼ばれ、世間の人達から軽蔑され、強制的に、お客をとらされて、セックス・ドレイの暮しが、できたかも知れないのにと悔んでおります。せめて今の主人と、この世でめぐり合って、ドレイとして飼育され、妾宅の一部を廓風に改造して、『女郎ごっこ』をプレイにとり入れて頂いたり、主人以外の殿方にも強制されてセックス・ドレイとして、御奉仕できるだけでも、満足しなければいけないのかも知れません。

こんなセックス・ドレイまりこを、皆さま方は、どのように、お考えでしょうか。

(セックス・ドレイ、まりこより)

M 派 交 友 録

カ ジ ノ の 女 王

続 植座たき子の巻

鬼 山 絢 策



ロンドンのポルノ・ショウ

交友録を書き出してから約五年になる。かつて紹介した人々の中には、五年の歳月

が流れる間に、また、いろいろの変化を見せている。

中には人生をガラリと変えてしまふような大きな変化を見せ、人ごとながらショックを受けた馬場氏のような人もいるが、いま、私の頭の中で一番、印象的な事柄から先に書いて見たい。

去年の暮れから今年の正月の休暇を利用して、欧州へ出かけた。私には、二度目の旅行である。

Y新聞文化部の佐々木氏と二人だけの旅である。佐々木氏はロンドンで、ちょっと取材したあとは自由だと言うし、私の方は、まる

っきりの遊びの旅行である。

ロンドンの『京子』という日本料理屋で食事した時、佐々木氏の友人でチャールス・綾田氏に紹介された。綾田氏はケルンに日本料理店を経営している人で、ロンドンかパリかニースに支店を出そうと思って、その調査に來ているのだと言った。

綾田氏に案内されて、ソーホーの会員制のナイト・クラブに行った。

冬のロンドンは昼でもドンヨリと暗く、黒と白の煉瓦が、しらじらとした、活気のない町で、夜ともなるとヒッソリとしてしまう。

このクラブも、小さな入口がヒッソリと、あかりをつけているだけで、日本やアメリカ

のような華やかさはない。だが一度、中へ入ると、大きなシャンデリヤが、きらめき、バンドは強烈なロックを流している。表と裏の甚だしい英国人気質が、ムードの中にも、それを現している。

黒人をヒーローとした、ファックショーを見た。

シドニー・ポワチエに似たこの黒人は唄もうたい、踊りも踊れた。単なるファック・マンではなく、一応は何でもこなす器用なタレントであった。

「あの男は、なかなか人気があるのですよ」と綾田氏は説明した。

「そうでしょう。実力がありますからね」私はストリップにしても、何の芸もなく、いきなり出て来て裸になるようなのは軽べつする。もちろん、客の目的は、その一点にあるとしても「ただ、それだけ」と言うのならお祭りの見世物小屋で、やるがよい。音楽も要らなければライトのヴァリエティも無用ということになってしまうだろう。

この黒人、金ピカの衣裳をつけた貴婦人とデュエットで踊り、途中から貴婦人の衣裳をはぎ取って、強引に挑む。

見物の婦人達から感嘆の声がもれる。

なるほど美事な逸品である。人前に見せて恥かしくない雄大さを備えていた。

黒人は、この貴婦人をかたづけると、次にジプシーのような女と奔放な踊りをやり、そして荒々しく抱擁する。最初の相手に果てていないのが、さすがにプロだと思わせた。かくして目色、毛色の違う五人の女と次々にファックして見せ、最後に褐色の肌をした黒人の女を相手にして、女の腹の上で果ててしまう。

二時間近いショーの間、この黒人は二回、果てただけである。

私は大して興味は、おぼえなかった。

ファック・ショーはアメリカ西海岸の都市で何度か見たし、その方がM的要素が強く、私を非常に興奮させたが、今夜のショーは、単なるショーとして見れば、出てくる女優？も、みな綺麗だし、踊りも唄も、しっかりしているから、価値あるものと見なせるが、ファックショーとして見た場合は、私の好みに合わないのだ、あまり感激は、なかった。むしろS的な要素が多く、S派の人が見たら、感激する型のショーであろう。

初対面の綾田氏ではあったが、私は卒直に私のSM的な感想を、ぶちまけた。

「うーん、しかしM的な要素がないわけではないのですよ。英国人が見た場合ね」

綾田氏もSMについては興味をもっている。と見えて私の感想について説明を加えた。

「最初キンキラの衣裳をつけた女が出てきたでしょう。あれは、まあ伯爵夫人とでもいうか、英国の貴族を代表しているのですよ。それを、いやしい黒奴が犯す。英国人として見た場合、Mを感じるでしょう」

「なるほど——」

「ドイツの女が犯されれば、ドイツ系の人には屈辱を感じるでしょう。それと、此処へ来ている人達は、まあ一応、富裕な人達と見て、いいわけでしょう。出てくる女達が、最後の黒んぼの女を除いて、すべて身なりがいい。身なりがいいと言うことは、富裕階級の女性達であるわけです。それを貧しい黒人の男が次々に犯す。しかもヒーローが一番、愛し満足できる女は、最後の貧しい黒人の女性であった——というところに、ここで見ている人々、富裕な人々にはMを感じるのですよ」

「なるほど、観念的なMですな。いや、私も観念的なM、或はS、というものには前から興味をもっていて、そういうものを書いてみたいという意欲はあったのです」

日本語で、しゃべっていけば、あたりには分らないから、かなり大っぴらに語り合ふことができる。日本では公衆の中では口にだせない言葉でもここでは平気で使える。むしろファックなんて言葉を口に出すと、周囲の人から多少、注意の視線を浴びる。

ジョーを見ながら綾田氏が「あの女の……は」などと平気でしゃべるのにはドキッとしたが、なるほどここでは最も安全な隠語なのだと思つて愉快になった。

クラブを出た綾田氏は、カジノへ行こうという。

願つたり叶つたりで、ロンドンのカジノはメンバー制だから、フリーの客は入れない。メンバーの紹介がないと入れてくれないのである。

ナイト・クラブを出て深夜の街をピッカデリーの方へ歩いて行く。昼間は賑うピッカデリーも、いまは、ほとんど人通りがない。

パークプレインというカジノはピッカデリーから歩いて十分とかわからない。ロンドンの夜は寒いかと思つたが、この日は意外と暖かく、東京と、あまり変らなかつた。

パークプレインは相当、高級なカジノで、日本人は我々二人きりである。日本人の旅行

者が行くカジノはプレイ・ボーイクラブだがあそこは大衆的なカジノでアメリカ・ナイズされていて、若い人が多いが、ここは皆、中年以上の紳士淑女が来ている。チップも最低一ポンドで約七百円。プレイ・ボーイクラブとはケタが違う。十ポンドのチップや百ポンドのチップを無難作に何枚も賭けてくる紳士がいて、圧倒される。

綾田氏は顔馴染みと見えて方々から挨拶がかかる。

だが、綾田氏は二百ポンドほど負け、私も三十ポンド負けた。

ティ・ルームで休憩した時、私はモナコのカジノへ行きたいと言うと、綾田氏は

「それは丁度いい。僕もニースに用があまりますから一緒に行きましょう」

と言つてくれた。何しろ土地不案内なので佐々木氏の世話になるつもりだったが、綾田氏と奇妙に気が合つてしまったので、綾田氏の方が何度も行つていて一層、委しいので、彼について行くことにした。

翌日、佐々木氏にそのことを話すと、快く承知してくれて、仕事が済み次第、追つかけで行くということで、私と綾田氏とでニースに先発することになった。

飛行機の切符も綾田氏がとつてくれた。私は、この時、ふとパリにいる植座たき子のことを想ひ出した。

東京を出る時、彼女に手紙を出そうと思つていながら不精して出さずじまいになり「なに、いきなり行つて驚かせてやるのも、面白い」などと思つたりした。ロンドンからパリに入る予定が、綾田氏と会つたため、予定を変えてニースに直行することになったので、私は植座たき子に手紙を出す氣になった。

「ニースに、しばらくいるが、それからパリに行くから、パリの案内を頼む」と言つた文面だった。

南フランスの夜

ロンドンから二時間足らずで、ニースに着く。名にしおうコートダジュール、紺碧の海は綺麗だが、夏と違つて曇天の空を反映して緑色に澄んでいた。

ニースで最高のホテル、ネグレスコに部屋をとつた。

赤いマントのドア・ボーイが綾田氏を愛想よく迎える。ここが綾田氏の定宿らしい。

「カジノは三時からですからね。まだ、ちょ

つと時間があります。階下で飯でも食べましょう」

綾田氏は、あちこちへ電話をかけていた。階下のグリルで食事していると素晴らしい美人が入ってきて、綾田氏に大仰な喜びのゼスチュアを見せ、私の目の前でキスした。「マドモアゼル・ミレーヌさん。こちらムッ

シュ・キヤマ」

と紹介してくれたあとで綾田氏は、

「ほんとは、夫人なんですがね。まあ、お嬢さんとして紹介しといた方が無難でしょう」と言ってウインクした。

三人で食事をゆっくりとっているうちに三時になった。綾田氏はミレーヌとフランス語



イメージギャラリ―『王座にはべる、光栄の敷物』岡 かし

でしゃべっているが、さっぱり分からない。「僕は、ちょっと人と会うので、後から行きますよ。ミレーヌさんが案内してくれますから。ああ、それからチケットは一週間、通用のが得ですよ」

綾田氏はミレーヌの額にキスして出て行った。ミレーヌは愛想よく笑いながらも話しかけてくる。フランス語が分からないとみると英語に切り替えてきた。

ネグレス・ホテルを出て海岸沿いに五分ほど歩くと、すばらしい大宮殿が現れた。

カジノ・メデテラノである。

直径二米もある大理石の柱が雲つくようにそびえ立っている。一階の高さが四階ぐらいある。毛足の長いじゅうたんの上を、悠々と階段を上って行く時の気持は、フランスの貴族にでもなったような華やかなムードだ。

しかも美しいミレーヌというパートナーが一緒だ。

パスポートを見せてチケットを買う。

一回だと15フランだが、一週間通用のチケットは45フランだから、なるほど、この方が得だし、便利でもある。

ドアマンにチケットを見せて扉を押すと、これはまた、映画で見るより豪華である。

欧州独得の大きなルーレット台が七、八台も並び一台に三、四十人の客がついている。

アメリカのカジノと違って、さすがにノータイやポロシャツなどという人種は一人もなく、皆、背広かタキシード、女性も派手なイヴニングが目につく。

ミレーヌは千フラン、私は三千フラン、チップを買ったけれども、座るところがなく、一ぱいなので、しばらく見物した。

背中を叩かれ「どうです」と声をかけられて振り向いてみると綾田氏が来ていた。

綾田氏は、あちこちのルーレット台を歩いて空いている席を見つけてくれたので、や々と三人が座れた。

そのルーレット台はミニマムが十フランである。五フランのテーブルは一ぱいで座れなかった。

綾田氏とミレーヌは、さかんに派手に賭けていたが、ミレーヌだけが、ついていて、二千フランほど勝ったが、綾田氏は、かなり負けていた。

私は何となく場に馴染めず、まだ勝負らしい勝負をしていなかった。

マカオやラスベガスのカジノだと、やたらに日本人のギャンブラーが目につくが、此処

は少ない。僅かに若い新婚さんらしい夫婦がヒソソリとやっているのを見ただけだ。

カジノにいと時間のためのが早い。

腹が空いたなと思ったら八時半だった。

勝っていたミレーヌが負けてきた。

「そのへんでやめときなさい。飯にしよう。」

おなが、すいたろう」

綾田氏は負けていても冷静だった。

ベトナム料理店『沙河』へ行く。この店は

九時で閉店するのだが、きわどく、すべり込むことができた。

六十ぐらいの中国人の店主は、顔馴染みの綾田氏にニコニコ笑いながら握手して「あなたのために私がつくりますよ」と言った。

ベトナム料理といっても、大体、四川料理に近かった。材料が新鮮なので日本の四川料理より、うまかった。店主がやってきて

「イカガデスカ。お味、ウマイデスカ」

この程度の日本語は、しゃべれるのだ。

「とても、うまい。ベリー・グッド」

五十才ぐらいの中国婦人が甲斐々々しく料理を運んだり、お絞りをとり替えたりサービ

スこれつとめてくれる。私はテッキリ店主の夫人だと思い、

「トウチエ（多謝）マダム」

とやったが、これが、とんだ勘違いで、「あれは、奥さんじゃありませんよ。使用人です」

と綾田氏に訂正された。

そこへ料理場から妖艶な美人が現れた。

イタリア系の黒い髪で、目のパッチリした

二十七、八のグラマーな女性だった。

綾田氏と握手して挨拶したが、何とこれが六十才の店主の夫人だったのだ。ミレーヌと

フランス語で話し合い「失礼します」と皆に会釈して料理場に戻ったが、そこで店主と抱

き合ってキスしているのが見えた。

「大した精力爺さんですね」

「ここにはね、とても、よく効く薬があるんですよ。ヤッコさん、それのお蔭で若いかみ

さんを喜ばせているんです」

綾田氏はその酒を注文し、ウインクした。

店主は大きくうなずいてニコリ笑った。

ドロリとした蝮酒のようなものだった。

「やりますか」

「いえ、今夜は結構です」

そんなものを飲んでハッスルしたら始末に困る。今夜は、とてもパートナーが見つかり

そうもない。

「明日は大晦日ですね。モナコへ行きましょ

う。大晦日の夜は素晴らしいですよ」

ミレーヌは、はしゃいで喜ぶ。

「僕、今夜はホテルへ帰りませんから……」

どうやら、これは今夜だけの、私に対する絶縁状であると私は受け取った。もはや私が傍にいたのでは、邪魔者でしかない。早く消えろ」との謎だった。

「では私は、もう一戦、カジノに出かけて来ます。御ゆっくり」

私は気をきかして、先に出た。

ニースの夜は暖かく、街にはライトのアーチが赤や緑の色電球でまばたいて美しい。

カジノは相変わらず、一ぱいだった。

私は本腰を据えて勝負したが、一進一退、大したことはなく、ちょっと疲れを覚えた時は三時に近かった。

カジノは三時で、お終いである。気がつく

と客は半分ぐらいに減っていた。

ラストまで粘って、他の客達と一緒にカジノを出た。

コーヒーが飲みたかったが、店はもう閉っていた。ホテルに帰ってコーヒーを注文し、ルーレットの出目を研究しているうちに眠くなって、そのまま、寝た。

モンテカルロの再会

翌日十一時頃、綾田氏からの電話で目をさました。用事で夜まで会えないがメデテラノカジノで会いましょうということだった。もう少し眠りたかったが、一度、起きてしまふと、もう寝られなかった。

バスを使って、悠々食事をし、三時になるのを待ち兼ねてカジノへ出かけた。

七時頃綾田氏はミレーヌと一緒に現れた。

「サア、これからモナコへ行きましょう」

ホテルへ帰って着替えなくてはと言うので一緒にホテルに戻った。

綾田氏も私もタキシードに着替えた。

昼間、色替りの蝶タイを見つけたので、早速それをつけた。

ミレーヌの車でモナコに向かった。

ニースの町を抜けて海岸沿いに切り立った断崖に副って車は、ゆるやかに上って行く。

「ひと夜さモンテカルロ……」

思わず昔なつかしいメロディが出る。

「星ふる空あおぎ、君がかいなとりて、さざめき歩まん……」

最近、この唄を、こんなにも「乗って」唄

ったことはない。青春時代の夢が叶えられたのだ。

「ワンナイト・モンテカルロ」

ミレーヌも一緒に唄い出した。綾田氏はミレーヌという美しいひとがいるからよいが、私はパートナーのないのが、ちょっと淋しかった。

一時間ばかりでモナコに入る。

モンテカルロのカジノの前は、イルミネーションが華やかに輝いて美しい。

ヨーロッパ・カジノの総本山、モンテカルロ・カジノは、さすがに豪華だが、あとから出来たニースのメデテラノ・カジノの方が背は高い。

しかし、中に入ると、さすがに広い。

大晦日とあって、人々は浮き浮きとして、紳士は半分ぐらいタキシードである。

「昔は殆どタキシードだったんですがね」

映画で見るような肌を露したイヴニングの婦人も相当いる。

何かロマンチックなムードに酔って、博奕

をやる意欲が減殺されてしまった。

ルーレット台は一ぱいの人ばかりで、とても席などなく、人の後からチップを投げて、

ディーラーに目指す数字へ張らせている客が多

い。

ひと勝負の間隔が非常に長く、短くて五分長い時は十分ぐらい廻さない。

「スペシャル・ルームへ行ってみますか」

私等は、スペシャル・ルームへ入場できるチケットを買っている。

チケットを見せて、ひと間おいたスペシャル・ルームへ入ると、さすがに此処は、またデラックスである。

チップのミニマムが五十フランである。

だが、張っている人を見ると百フラン、五百フランの四角いチップが何枚も無難作に張られている。

赤の七番に千フランのプレイン（単）とシユバル（半分賭け）を賭けたのが、みごと当たって拍手を浴びていた。三百二十四万円の儲けである。

このテーブルは一ぱいなので、もう一台のテーブルに行った時、

——アッ！——

私は声をのんだ。

中央のメーンスタンドに座っているのが、何と植座たき子だったのである。彼女の方はまだ、私に気がつかない。

「どうかしましたか」

綾田氏もミレーヌも私の顔を覗きこむ。

「イヤ、私の知っている女性がいるものですから」

彼女に気づかれぬようにたき子を示した。

「パリで絵の勉強をしているのですが、ロンドンでちょっと手紙を出しておいたのです」

たき子をはさんで両側にいる男性は、どうやら、たき子のパートナーらしい。一人は三十ぐらいのアラン・ドロンのような好男子、

一人は四十五、六の、銀髪の実業家タイプの紳士だった。

「前が空いていますね。座りましょう」

綾田氏が先頭に立って、たき子達の正面の席に座った。

期せずして、たき子は私を見た。

「あらっ！」

はっきりした日本語だった。

ニコリ笑った、たき子は、日本にいた頃よりは、ちょっと、ふけて見えた。髪を束ねて額を全部、出しているせいであろう。日本にいた時は、あんな髪型は、やったことがなかった。

化粧も濃い目で、ちょっと見るとスペイン系の女性に見える。妖艶さは一段と増して、あたりを圧倒するように美しかった。

「いつ、ここへ？」

「今夜よ。お手紙、見たから会いにやって来たのよ」

日本語は綾田氏と囁くような低声でしか話さなかった私だが、いまはルーレットの大きなテーブル越しに話すので、低声では通じない。彼女と二人、二言三言、話し合うと、周囲の視線が一斉に、たき子と私に注がれた。

「お食事は？」

彼女の方から聞いてきた。このへんも日本流だ。

「まだだよ」

たき子は左右の紳士にフランス語で話しかけると、三人が席を立った。

「では、ちょっと失礼します」

「どうぞ、どうぞ。僕達は、ここで、しばらくやっていますから」

綾田氏も、たき子の方をチラチラ見ながら

「あとで紹介して下さいよ」

「ええ、もちろんです」

「うまく、おやんなさい」

と小声で言ってウィンクした。

たき子は、もう席を離れ、先頭に立って二人の男性を引き連れてレストランの方へ歩いて行く。あとから私が追いかけて、二人の男性

のあとから、ついて行くと、クルリと振り返ったたき子が、戻ってきて私の傍へくると、腕を出した。

「しばらくね。お会いできて、うれしいわ」
握手した腕を曲げて、ひじを出されたのは、腕を組まぬわけに行かない。

たき子は二人のパートナーを無視したように、二人の間を割って、私と腕を組んで歩いた。

こう書くと、いかにも私がカッコよく見えるが、いま考えてみると、あまりサマには、なっていないかと思う。と言うのは、なにしろ、たき子は一メートル八十センチもあり日本の女性にしては、かなりな大女である。私は一メートル六十センチ、ピッタリくつくと、どうしても私は彼女を見上げながら話を、しなければならぬ。巨大な雌かまきりに引きずられる、尺取り虫みたいな構図だったと思うのである。

何しろ珍しい日本の女性。それも白人の女性に伍しても遜色のない七十キロのグラマーしかも美人ときているから、モンテカルロ・カジノの中でも注目的になっている。ついでに私にも視線を向けてくるのでテレくさいこと、この上ない。

イメージギャラリー『課長サンはお馬がお好き』春日田春夫



タキシードを着てきてよかったと思った。日本では数えるほどしか着たことがないから、型も崩れていないし、小じんまりと、まとまっているつもりだった。

カジノの横にある細長いレストランは満員だった。白のタキシードをつけた老人のボーイが二人、出て来て、奥のテーブルへ案内された。ボーイが椅子を引いて先ず、たき子が座り、ついで私が座る。私の隣りに四十年輩の紳士、たき子の隣りに青年が座った。

たき子の紹介によって、私の隣りの男は、モリス、自動車の部品をつくる会社の社長青年はジョルジュ、画家だった。

「もうじき、十二時ね」

間もなく、千九百七十四年がすぎ去ろうとしている。若いジョルジュがボーイに何か頼むと、三角形の花火を、いくつも、持ってきた。金ピカの紙の帽子をくれたので、皆で、かぶった。

十二時に一分前である。

日本では除夜の鐘が鳴っているはずだ。

ルーレットのディーラーは客にチップを張るのをストップし、十二時のくるのを待っていて十二時になると同時に球を廻すのである。

我々も花火の紐を持って待った。

五秒前になるとカーン、カーンと鐘が鳴らされる。

三つ、二つ、一つ。

パン、パン、パンと一斉に花火が鳴り、

ウワオという歓声があがる。

ブラボー！

「おめでとう」

たき子は私に向かって言い、いきなり両手で私の頬をはさんでキスした。

「今晚はね、女性の方から男性にキスしてよいことになってるのよ」

コテイの香水が強く匂う。

「そして女性にキスされた男性は、必ずお返しにキスをするのよ」

では仕方がない。私は、たき子を抱き、唇にキスを返した。

ついで、たき子はジョルジュにキスし、ジョルジュがキスを返す。たき子は私の前を通してモーリスに腕を差しのべる。モーリスはたき子の手をとって、手の甲にキスした。

この行事が済まないと、おちついて話がでない。花火の煙が薄れ、料理が運ばれてきたところで、

「どう？ パリでの生活は？」

「うん、うまく行ってるわ」

絹のイヴニングの胸元から、盛り上がった乳房が、はみ出しそうになっている。たしかに、こうしてみると、カジノの中でも一番、魅力的な女性である。

「あなたがモナコへ行くというので、あたしも追っかけて来たのよ。ここへ来れば必ず会えると思ったから」

たき子は三人の男性に、日本語とフランス語をチャンポンに使いながら、巧みに、とりなした。

「そっちのモーリス、その男がパトロンみたいな存在なのよ。マゾなの、その男」

たき子は堂々と日本語で言う。

日本語が、こういう時には便利である。ロンドンでも経験したが、絶対、分からない隠語だから、言いにくいこともズバリと言っているのだ。

「すると、そっちの若い男は恋人？」

「ウフン、まあ、友達ね」

「その男を連れてくることを、モーリスは反

対しないの」

「うん、必要なのよ、この男もね、モーリスにとって」

自分の名前が出たので、モーリスは私達の方を気にし出した。

たき子は笑いながら、モーリスに話しかける。モーリスは人の好きそうな笑顔を浮かべて私の方に「メルシー」と挨拶した。

「あなたがモーリスのことを、センスのいい紳士だと言っていると言ってやったのよ。フフ、底抜けに人がいいんだから」

たき子は、つと席を立った。私はブロークンな英語でモーリス氏と二言三言、話をしていると、たき子が帰ってきて、今度は私とモーリスとの間に割って入った。私とたき子の席が入れ替ったのである。モーリスの笑顔が見え、ジョルジュの不服そうな顔が対象的だった。こういうところは外人は単純である。

日本人だと、私なんかだと不愉快な時に強いて笑顔を見せたりして、やせ我慢を張るものなのだが、外人は表情に、はっきり感情を現わすのである。

たき子は無神経なように振舞っていても、クラブのホステスのような心づかいを忘れていなかった。

モーリスは、たき子に身体を、すりつけるようにして、右手が、たき子の太腿をスカートの上から撫でさすった。

パチン！

たき子の右手がモーリスの手を叩いた。

かなり大きな音がした。

「図にのるんじゃないよ。ちょっと、あまい顔を見せると、すぐつけあがるんだからね」

モーリスは母親に叱られた、いたずらっ子みたいに、シュンとなって手を引っ込めた。

「これがね、若い時は相当のサジストだったらしいのよ」

たき子はシャンパンを抜かせて、グラスに口を当てながら、

「ジョルジュの恋人を奪って犯したこともあるのよ。それが突然、Mに変移しちゃったのね」

「フーム、まあ日本でも、そういう例はあるけどね」

「だからジョルジュに対しては罪ほろぼしというか、いろんな遊びに連れてくるんだけどね。実のところは、あたしと二人だけよりもそこに第三者が介在するのを好む、といった傾向があるのね。いわばジョルジュはさしみのつまってところよ。ハハハ」

当人のいる前で平気で、しゃべれるんだから日本語というものは重宝なものである。御当人達はケロリとして微笑を浮かべながら、よく動く、たき子の口元を見つめている。

「どう？ 興味ある？」

興味あるどこの話ではない。もともと私は欧州へ取材に来たわけではなく、ばくちをやりに来たのだが、こういう話を、もちかけられては、動かざるを得ない。

「そんなこと聞いただけ野暮だが、誘っておいで、どうする気なの」

「ヤボ？ アハハ、ヤボか。なつかしいわ、日本語って。ヤボなんて単語があったわね」

つまらないことに感激するもんだ。たき子はモーリスとジョルジュにヤボの説明をして皆で笑った。

「先生は、パートナーいないんでしょ。淋しそうだから、あたしがサービスするわよ。はるばる会いに来て下さったんだもん」

「でも、そこのお二人に悪いだろう」

「氣いまわさなくてもいいわよ。うまくやるから、四人で遊びましょうよ」

そこへ綾田氏とミレーヌが、やって来た。

ひとしきりワインを飲み交わしたあと、私は綾田氏に、

「今晚、こちらのグループと、つきあいたいのですが」

「どうぞ、どうぞ。よかったですね、お友達に会えて」

「じゃ今晚、ホテルに帰りませんか」

私は綾田氏に昨夜の「お返し」をした。

女王と三奴

四人で遊ぶにしても、まだ時間が早い。カジノの十二時、一時は宵のうちである。

だがモンテカルロカジノでは人が多すぎて落ちついてやれない。

「ポリリュウへ行こう」

と衆議一決、四人でタクシーでポリリュウに行った。ポリリュウはモナコとニースの中間にある小さな町だが、そこに小さいけれど、しよっような装いのカジノがある。

床には花火のぬけがらが散乱して、かなり盛大に祝ったあとが見受けられる。ワツと騒いで引き上げたのであろう。意外にカジノは空いていた。

夢にまで見て、あこがれていたモンテカルロのカジノで、私は遂に一回も勝負できなかった。

いずれまた来るので、今日は偵察だけしておこうと思い、ヨーロッパスタイルのルーレットに馴れるべく、私流の観察をしていたので手が出なかった。だがボリュウのカジノでは、ゆっくり楽しむことができた。

ジョルジュと、たき子が負け、モーリスがついて勝ちまくっていた。私は一進一退だった。

「モーリス氏に乗りなさい」

私は、たき子にアドヴァイスした。

モーリスが赤の30、32、34、36に張る。すると、たき子が、すぐその上にチップを重ねた。

「あんたの上に乗っかるのよ」

そう言うともーリスは喜んで笑った。

32が出て、みごと当たった。

モーリスは次に黒の28、29、31、35に張った。すぐ、たき子が追い打ちをかける。前は

モーリスが十フラン、たき子が五フランだったが今度は、たき子も十フラン、乗せた。

「あんたの上に乗っかって、おさえつけるのよ。フフフ」

こうなると言い出した手前、私も十フラン宛、更に、たき子のチップの上に乗せた。

「あらあら、私の上に、乗っかってきた人が

いるわ」

ジョルジュだけは唇を歪め、小さい数字の方へ集中して張っている。

35が出て又、当たった。

ワアと声をあげ、三人は笑った。

モーリスは今度は5、7、9、12と赤の小さい数字に十フラン宛、賭けた。たき子は度胸よく、同じ数字に二十フラン宛、賭けた。

私も十フラン宛、のせる。ジョルジュは、ひねて大きい数字に賭けた。

5が出て又、当たった。

たき子は手を叩いて喜んだ。3回連続して当たって、たき子は千百フランほど勝った。

だが、次にモーリスは、はずした。たき子も私も乗っていたので共倒れとなった。

そこから私はモーリスに乗るのをやめたがたき子は、またモーリスに乗った。今度も取られた。

「もう乗るのは、やめた方がいい」

「そうね、お前なんかダメ。何さ、人のチップ損かけて。このヘタクソッ！」

と、たき子は罵り、モーリスの、うすくな

った頭をポンと叩いた。
カジノで、こんなに、はしゃいだり騒いだりするの、マナーが悪い。ほんとならディ

ラーから「お静かに……」と注意されるところだが、たき子が美人だし、他の客も少なくまた、その客達も、たき子のユーモアを喜んでる風だったので、年とったディラー達も微笑を浮かべているだけだった。

二時間ばかり遊ぶと、カジノは終わりになった。結局、モーリスが千フランほど浮き、たき子は百フランプラス、私も五百フランプラスとなったが、ジョルジュは、かなり負け

たようで、シュンとなっていた。
カジノでハイヤーを呼んでもらってニースに帰った。

モーリスはホーネット・ホテルに二部屋、リザーブしてあった。このホテルもなかなかぜいたくなホテルで、二部屋といっても境の扉を開ければ二間続きとなった。

昼間、仕込んでおいたチーズや、かん詰めを開け、ブランドーの栓を抜いて腹ごしらえをした。

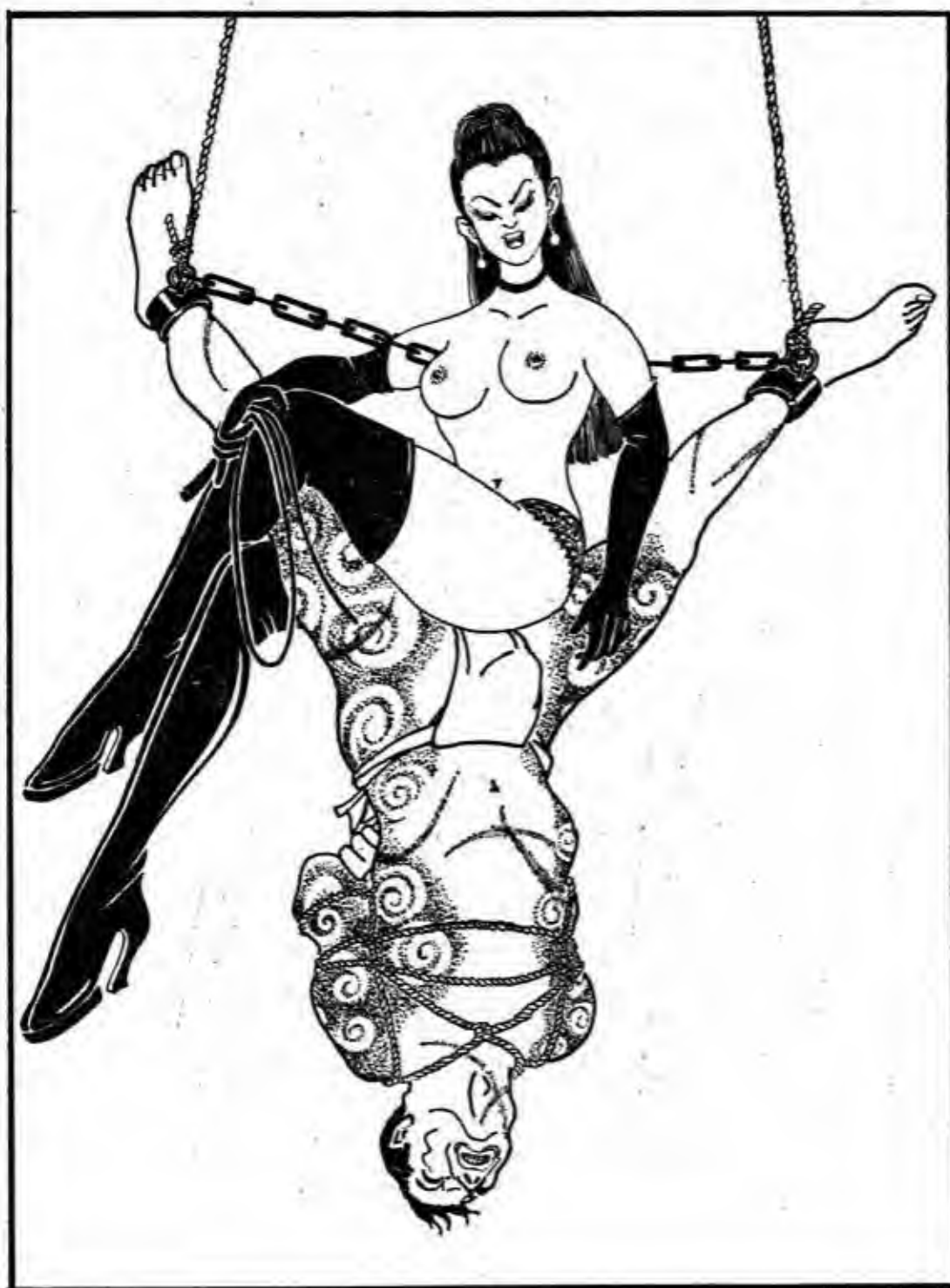
「ああ、おなが、くちくなくなったら眠くな

たわ。寝るわよ。あんた達は、向うの室よ」
たき子が隣の部屋を指差してモーリスとジョルジュに言った。

モーリスはプーと頬をふくらまし、ジョルジュは両手をひろげて諦めのゼスチュアをし

て見せた。二人ともユーモアをまじえて、
「せめて、おやすみのキスを……」
モーリスは、そんな風なことを言った。
「フム！」

たき子はモーリスの前にサッと片足を上げて
突き出した。モーリスは「しかたがない」
という身振りで、たき子の前に跪いた。その
肩へあげた足をかける。モーリスは捲くれた



イメージギャラリー

『女王様のお遊び』

春日田春夫

スカートの奥のガーターをはずし、ストッキングをクルクルと丸めて脱がしにかかった。ジョルジュも、ものほしそうな顔をしている。

「サ、お前にも、あげるよ」

股をひろげて、たき子は、もう一方の足をジョルジュに突き出す。椅子に浅く腰かけて両足をあげた恰好になった。

ジョルジュもモーリスと並んで跪き、同じ動作をした。

靴下が、とれて素足が出ると、モーリスはたき子の足を抱えて、足の甲にキスした。

ジョルジュは靴下を半分、脱がしたところで、いきなり、たき子に抱きついて、唇に素早くキスした。

「コラッ、そんなこと、誰が許したっ！ あっちへ行けッ！」

たき子はピシーリとジョルジュに平手打ちをくれた。ジョルジュは逃げるように部屋を出て行った。

モーリスは膝から太腿の方へと唇を這わせて行った。

「甘ったれ犬め！ あたしのきれいな足を、お前の汚い舌で舐めたら汚れるじゃないか。サアもう犬小屋へお帰りッ！」

薄くなった額に手をかけて、ひっぺがすように太腿から離すと、足を曲げてモーリスの額へ足のうらをあてがって、思いきり蹴とばした。

85キロはあるモーリスだが、たき子の太い逞しい足のバネは、まりのようにモーリスの身体を、もんどり打って蹴転がす力をもっていた。

私は、たき子の力の偉大さを、いまさらながら想い出した。あの安井安芸雄の上にドッシリと踏み跨がって、もがき暴れる安井をグウの音も言わずに股間で圧殺した、たき子の勇姿を想い浮かべたのである。

たき子は追い討ちをかけるように、モーリスを蹴り転がしながら隣室へ追いやると境の扉を締めて、鍵をかけた。

「お風呂へ入るわ。センスも入らない？」
と言うと、きらびやかなドレスをサッサと脱ぎはじめた。

ニースのホテルのバス・ルームは、まことに豪華である。六畳ぐらゐもある広さで、特大のバスが置かれてある。

「こういう大きなバスを見ると、君の部屋のバスを想い出すね」

さすがに、たき子のマンションにしつらえ

たバスには、かなわない。あれは橋本専務が特に注文して作らせた超特大のバスだったのだから。

だが、白裸のたき子の肉体は、そのバスでさえ、小さく見えた。

「おじいちゃん、どうしてるかしらね」

たき子には、橋本宇吉の寛やかな愛情が忘れられなかったであろう。

「ほんとよ。あたし本気でパパを愛してたのよ。いまはモーリスを愛してるけど」

背中を流してあげると言って私を捕まえ、母親が子供を洗うような荒っぽさでギューギュー背中を、こすられた。

今度は私が洗うと言うと「いいの」と断った。私は逞しい、たき子の足が、好ましかった。丸太のような太腿を抱え、その内側に唇を這わせ、花びらにまで、もって行った。

かぐわしい蜜の味に酔い、私は久し振りに昂奮した。

私のそれを見た、たき子は濡れた身体を拭きもせず、バスタオルに包んだままでベッドへ上って寝転んだ。

小さな身体の私を軽々と上に乗せた。
「アッ、アッ」

たき子は凄声を出した。それほどのこと

を私は、まだしていない。隣の室に聞かせるための演技であることは分かっていた。

ことここに至って私は不覚にも、二、三分で力を失ってしまった。浴室で張りきっていたのが嘘のような、だらしなさだった。

「どしたの、センス弱くなったわね。フフ」

「どうもね、何だか、悪い気がしてさ。折角三人で楽しみに来たのを、私が横取りしたみたいで……」

「いいのよ。センスはSMの、それもMの作家だってこと、話してあるのよ。遠来のお客さまに今夜はサービスするんだからって、OKとってあるんだから」

たき子はギューと胸の潰れるほど抱き締めた。

「あたしはスケジュール通りにやってるだけよ。今夜はジョルジュの役をセンスに代ってもらってるのよ」

それも私には分かっていることだった。

所詮、私も、さしみのつまであって、主役は、たき子とモーリスなのだ。私は二人の刺戟剤に、すぎない。

しかし、そういう風に、ものごとを考えるのは、ひねすぎている。遠来の客として、もてなしてくれる、たき子の気持に素直に感謝

していれば、いいのだ。

扉がノックされた。

「開けてくれ、タキコ」

ノックは執拗に続けられた。

「何よう。いま、開けられないわよ、フフ」

「ちょっと用があるんだ」

「チョッ、うるさいねえ」

たき子は私の上に乗ってかっていたが、そのままの裸でベッドから下りた。私も裸だったからシャツを着ようとしたが「いいの」と、たき子に、とめられた。

しょうがない。私は裸のままベッドに寝そべり、煙草を一本、抜いた。

扉が開けられると、パジャマ姿のモーリスが、全裸のたき子の上から下まで、舐めるように眺めてから、私の方に目を移し、

「パルドン・ムッシュ」

と、ちよつとテレくさそうに言っけて入ってきた。

「何の用なの、いま入って来ちゃダメよ」

モーリスは早口で何か言った。

「出てお行き！」

たき子はモーリスを突きとばした。

よろめいて尻餅をついたモーリスは、たき子の前にひざまずいて、裸の腰にすがり、何

か哀願するように訴えた。

「フフフ、また、あたしの奴隷になりたいと言うの。フフフ、バカ。馬鹿野郎ッ！」

フランス語と日本語をチャンポンに使って私とモーリスの両方に、凡その意味の通じるように気を使って、しゃべっていた。

「てめえみてえな野郎は、こうしてやらあ」

これは日本語である。

たき子は片足を上げるとモーリスの禿げ上がった額へ足のうらをペタリとおしつけ、力まかせに蹴倒した。

70キロもある、たき子は、日本の男なら大抵の男より、力がある。その足で蹴倒したのだから、さすが大兵のモーリスも二米ほど、ふっとんだ。それでもモーリスは起き上がると四つん這いに這って行って、たき子の足の甲にキスした。

「フフン、おせじ使ったってダメだよ」

モーリスの唇は、足の甲から膝、膝から太腿へと唇を這い上がらせて行く。

「そんなに舐めたいの、このドラ犬め」

たき子は、また片足をあげた。蹴られるのかと思って片手をあげて防ぐ恰好をするモーリスの肩を跨いで背中のおとすと、後のもあげて、太腿のつけ根でモーリスの首をピ

ツタリと、はさみつけた。

「アハハハ、バカヤロ、犬。舐めろ、ようく舐めやがれッ」

たき子はモーリスの頭をおさえて、跨がり具合を直して、日本語で罵り、私の方を見て笑った。

モーリスの大きな顔が半分以上も、たき子の股間に埋没してしまった。

モーリスの顔も大きい、それをはさみつけている、たき子の両腿も巨大であった。

モーリスの顔を圧倒するように太く逞しい肉の盛り上がりで、鼻の上までかぶさっていた。たき子は両手を腰にあてがい、ユラリユラリと、ゆるやかに腰をゆすって、時々その太々しい両腿で思いきり顔を締めつける。

そこで、たき子は、非常に露骨な言葉を吐き散らし、モーリスを罵った。フランス語でも何か言うと、モーリスは「ウウ……」と股の中で唸った。

「アハハ、綺麗に掃除させてやった。どう、あなたも、この犬に掃除させてやったら？」

たき子は思いきったプレイを誘ってきた。私に、そんな度胸はなかった。ウツカリして一撃くらうと、私のような貧弱な体格では頭が凹んでしまふかもしれない。

「ジョルジュ。そっちにチェーンがあるだろう持っただい」

たき子は、隣の室に向って大きな声で言った。

「あんまり大きな声で言わないでくれ」

とモーリスは頼んだが、

「大丈夫だよ。こんなに広い部屋で壁も厚いんだから聞こえやしないよ」

ジョルジュが鎖と皮鞭と皮紐をジャラジャラさせながら持ってきた。

「この馬鹿野郎を縛っておしまい」

ジョルジュは手馴れた手つきで、モーリスのシャツをはぎとり、まず鎖でモーリスの両手を後手に縛り、ベッドの足にくくりつけ、更に皮紐でベッドに縛りつけた。

「よし、御褒美をやる」

たき子は両腿をペタペタと叩いた。

ジョルジュは、気乗り薄な表情で、たき子の足のあたりを見ていた。

「ホラ、どうしたの。言うこと、きかないのかい。言うこときかないと、お前も縛ってしまうよ」

ジョルジュは、あわてて、たき子の前に跪いた。

たき子は、さっき、モーリスにしたように

イメージギャラリー 『毒婦百景シリーズ』 春日田春夫



その顔へ跨がり、ジョルジュの口をピタリふさぐと、ジョルジュの差し出した皮鞭を、とり上げた。

「ハハハ、ビデッ、次は便器ってわけよ」

右手に持った鞭がヒューッと唸った。

天井に届きそうな長い鞭だった。

ヒュッ、ヒュッ、ヒュッと、

凄惨な音を立てて風をきる。縛られたモーリスが、何かわめいている。

「何て言ってるの」

「どうかお許しをって言ってるのよ。フフ」

だが二、三回、回った鞭は、ピシッとモーリスの背中に叩きつけられた、上半身、裸

の背中に凄惨な鞭の血の痕がついた。

それを見た、たき子は興奮して、ジョルジュ

の首を両股で思いきり締め上げた。

続いて、もう一発、鞭がとんだ。

「ヒューッ、ウィーッ」

とモーリスは奇妙な悲鳴をあげた。

「ああッ、たまらないわ。鬼山さん、あんた鞭で殴って見ない？」

とても私には、できない。

「じゃ、いいわ。ジョルジュ、お前が殴れ」
たき子はジョルジュの上から退いてベッドの上に上がると私の顔に跨がってきた。

「舐めて」

ジョルジュは鞭をとると、モーリスの背中をピシーリと殴った。

「ウィーッ、グッ」

蛙の踏みつぶされるような悲鳴をあげる。

途端に私は息が詰まるほど首を締めつけられた。ジョルジュの振り下ろす鞭のたびに締められて、私は気絶しそうだった。

だが、その前にモーリスがダランとなって気を失ってしまったようだった。

「ジョルジュ、おいで！」

たき子はジョルジュをベッドの上に上げらせると、

「そら、男同士でキスしなさい」

ジョルジュの汗ばんだ頬が私の頬にペッタリおしつけられた。口と口が触れ合った。

「アハハ、いい恰好だわ」

たき子は二人の男の上から顔に跨がった。

「サ、どっちに、あげようかな。あたしのおいしい蜜を。こっちな」

二人の口に、かぶさった、たき子は、お尻をゆるやかに、ゆすった。

「こっちな。今度は、こっち」

たき子の巨大な太腿がグッと締められるとジョルジュの固いおでこに、こっちの頭が、ぶつかって痛い。

私は、もっぱら上の方のチョビツと、とび出たところを舐めたが、ジョルジュは下の方の深いところへ、舌を差し入れていた。

ジョルジュという青年はMっ気がないのかと思ったが、いまは熱心に奉仕している。

やがてジョルジュの顔の傍で、たき子は再び私に重なってきた。

「どう、ご感想は？」

「凄い女になったね」

「そんな言い方、ないでしょ。遠来のお客さまを、もてなしてるんだから」

「いや、失礼。凄いというのは、悪い意味ではないんだ。すばらしいと言う意味にも通ずるんだよ」

「ウフフ、どっちでもいいわ」

キューツと締められて私は、あえなく、のびてしまった。

翌日、十時頃まで眠ってから三人で食事をすませると、ニースの町をたき子と歩いた。

途中ネクタイ屋に寄って色交りの蝶タイを物色した。日本では売ってないからである。

たき子も一つ、選んで、

「これパパに届けて頂けないかしら。あたしの、ほんのお礼のしるしだと言って」

たき子は、やはり橋本宇吉氏が忘れられない存在なのであろうか。

七十過ぎて、これだけの女を魅する力をもっている橋本氏は、やはり優れた男性だと思った。また何年か過ぎて、たき子が日本へ帰ってくれば、焼けぼっくりに火がつくこともあるだろう。

たき子はネグレスコホテルまで送ってきてくれた。ロンドンから佐々木氏が来ていてカジノへ行こうと誘われたが、私は急に疲れが出て、とても勝てそうに思えなかったので、

「あとから行く」と断った。

たき子の一行はカンヌに行くと言う。

「パリに来たら、また寄ってね」

と電話番号を書いてくれたが、旅程が変更されてパリに行けなくなってしまった。

今度の旅行の中では、予期してなかったハプニングの一頁だった。

(終)

孤独な紀代よりの便り

縛りと浣腸に憧れた私

西 条 紀 代

塚本鉄三さま。

そう、お呼びしてもよいものやら、今まで三回も、お逢いしてプレイをして頂いておきながら、一回だって、親しく、そう、お呼びしたことはない私でしたのに、口のなかで一人、口ずさむように、お呼びしていました。

田舎町の書店の片隅で、奇ク一月号を見つけたとして、自分の便りが載っていたときの驚きと嬉しさ。ほんとうにびっくりしました。

奇クは今まで、目についたら時たま買っていました。でも、今度は、久しぶりに、お便りを出したことでもあるし、秘かな望みを托して、何かのお返事でもあるかも知れないと心頼みして手にした一月号でした。



それが、私の写真を四枚も入れて載せて下さったのですもの、ほんとうに、びっくりしました。そして、なつかしさと嬉しさで、胸がいっぱいになってしまいました。

あれから、もう一年半以上もたっているのに、この紀代を忘れでないでいて下さったということは、ほんとうに嬉しいでした。

紀代のことなんか、もう奇クには載ることはないんだと諦めていましたのに、塚本さまが、紀代のことを覚えていて下さって、写真まで載せて下さったということは、まるで、紀代の心と体が、二年前の初めて、お逢いした頃に返ったような気持です。

飛行場を見たいと、お願いした紀代を、わ



ざわざ、大阪空港のなかまで連れて行って案内して下さいましたわね。お天気は良かったけれど、風があつて寒かったのを覚えております。あの頃のことを思い出しますと、ほんとうに、なつかしさと、いっぱいです。そんなことを思い出していると、大変、

厚かましいお願いですけれど、この西条紀代を、もう一度、縛って、いじめて頂けないかと思うようになってしまいました。

塚本鉄三さま。

もし、お許し頂けますものならば、今すぐにでも、あなたさまのお胸のなかに、飛び込んでゆきたい気持です。

紀代は今、ここでは、一人ぼっちなんです。

十一月十日に薄化粧の初雪があつて以来、毎日、きびしい冷えこみようですが、静かで淋しいのが一層、身にこたえます。

高山も、いよいよ、冬ごもりです。

紀代は、やはり都会の暖かい街の灯が一入なつかしく思われてなりません。一度は、もう、こりごりした筈の都会ですが、この紀代の体が、くたくたになるまで、弄び、いじめられたく、心の底から考えてしまうのです。

塚本さま、どうか、こんな我ままで、哀れな紀代を、お救い下さい。紀代は、全裸にされて縛られ、どのようにさ

れてもかまいません。絶対に後悔はいたしません。

紀代の後手の手首が、よく上るといって、きつく、きつく縛られましたね。あんな風にきびしく縛られてみたいのです。そして、紀代の縛られた姿を、何月号でも結構ですから一番早い雑誌に、お載せ下さいませ。

紀代は、自分の写真が奇譚クラブの誌上に載るのを楽しみにしております。一月号の自分の写真を見て、ほんとうに嬉しく思いました。もし、この望み、かないます節は、ここに、連絡場所を書いておきますので、ご一報頂けましたら幸せでございます。

紀代は今、至って暇で、体をもて余しておりますので、何物もとらずあえず、ご指定の場所へ参ります。でも、至って田舎者で土地不案内の紀代でございますので、お差支えなければ、大阪駅に指定して頂けましたら、紀代は、まごつかないで参れます。勝手を申してまことに、申しわけございません。

たしか、二回目の時でございましたか、紀代が生まれて初めて、浣腸されましたね。

あの冷たい浣腸液が、チューと、紀代の体内に入ってきた時の感触は、今でも、決して忘れることは出来ません。今まで見たこともない、いろんな浣腸の器具を見ただけで紀代の体は、妙にゾクゾクしました。

縛られた体を、いろんな形にされる恥かし



さや、人には見せてはいけない個所を、あらわに晒して浣腸される恥かしさ。その恥かしさのなかに、言うに言われない嬉しい期待があったのです。ですから、初めての経験である浣腸に対する恐ろしさから、なんだかんだと尻込みしていた紀代も、とうとう、その誘惑に負けて、浣腸されてしまったのでした。

そして、あの日の浣腸によって、生まれて初めて、とても恥かしい目に会いました。冷たい浣腸液が、おなかの中へ入ってくる時のなんとも言えない感じが、忘れられないと申しましたが、その後におそってきた、便意とおなかの痛さには、予期せぬことだけに、紀代は、まごまごしてしまいました。

そんなところを見られるなんて、もう、なんとこの恥かしさなんでしょう。顔を真っ赤にして恥かしさをこらえながら、恥かしいということすら、その時の紀代にとっては、とても恥かしいことでした。

でも、その浣腸をされ、排泄をさせられるという、その居たたまれないような恥かしさのなかに、言うに言われない楽しさ、嬉しさがあるのです。紀代は、特別に浣腸が好きだなんて、決して思っておりません。けれども、そんな若い娘としては、たえられない恥かしい目に合わされるということに、何とも言えない楽しさがあるのです。

今度、もし、お逢いできたとしたら、どん

な責めをされるのか、と思いましたら、一年半の空白が、なんだか、夢のように思えてなりません。あの頃の西条紀代は、大きく変わってしまいました。

心は、自分では、少しも変わっているとは思っていません。でも、体の方は変わりました。

第一、体重が、あの頃とくらべて7キロも減ってしまいました。それだけでも、一年半の間、お別れしていた間、紀代が、どれだけ苦労したか、わかって頂けると思います。あの頃、45キロぐらいでしたから、今では、もう40キロを割って38キロぐらいです。

あの頃の紀代の写真とくらべて頂いたら、よく、おわかりと思います。そうそう、写真といえば、洋服を着て撮って頂いた写真、普通より、うんと大きくして頂いて、それを、今また出して、眺めております。

是非、是非、こんな紀代を、もう一度、裸にして縛っていじめて下さい。一年半の間に紀代の、この体が、どのように変わったか、すみずみまで、よく見て頂こうと思います。それは、とても恥かしいことですけれど、塚本さまにでしたら、辛抱致します。

もし、お呼び頂きまして、大阪へ参りましたら、それを機会に、大阪で働いてもよいと考えております。浮草のような紀代でございますが、どうか、よろしく、お願い申し上げます。「もう一度、縛って、責めて下さい、

と、お願いしましたら、どんなお答えを頂けるでしょうか」と、書きました、紀代のお便りを、そのまま、お載せ下さいましたことで、勝手に、ご承諾頂けましたものと考えこのようなお便りを書いてしまいました。

もし、ご迷惑のようでしたら、どうぞ、その旨、お返事頂けましたら、紀代は深く諦めるつもりでございます。

これから12月、1月と、年末と年始とで、塚本さまも、さぞ、お忙しいことと思います、出来ましたら、今年中に、一度でも、お逢いして下さいますよう、お願いします。

思い浮かべますと、丁度二年前の12月に、二回も紀代と会って下さって、楽しいプレイの機会を持つことが出来ました。今度も、出来ましたら、12月中に是非、お願いします。

それから、芙美代姉さんのところ、二度ばかり、お電話しましたが、かかりませんでした。所を変られたのかも知れませんが、もしお会いになるようなことがありましたら、よろしく、お伝え下さいませ。

塚本鉄三さま。

今度、お会い出来ました節は、どのような責めを、この紀代の体に加えられるでしょうか。紀代は、出来るだけ、きつく縛って頂きたいです。少々の痛いことや苦しいこと、それに恥かしいことも辛抱いたします。いいえ、その方が紀代は嬉しいのです。



塚本さまに弄ばれ、辱かしめられることに限らない憧れを抱いております。

どうか、こんな西条紀代を思うままに、はじめ、おもちゃにして下さいませ。そして、そんな様子の紀代の姿を、出来るだけ、たくさん写真にとって下さって奇譚クラブの誌上に、お載せ頂くよう、お願い致します。

紀代は、自分の責められている姿の写真が奇ク誌上に載りますことを、非常に嬉しく思います。それで、一月号は非常に嬉しかった

のです。もう二度と、自分の写真なんか、載ることはないと思っていただけに、その驚きと嬉しさは、たとえようありません。

いよいよ、これから、一日と寒さに向いますので、どうぞ、おからだに、気をおつけ下さいませ。紀代は、おかげで風邪ひとつひかず、元気にやっております。

よきお返事頂けますことを、心待ちにしてペンをおきます。では、さようなら。

かしこ 西条紀代

甘

美

な

畏

森

本

愛

造

これは、全く愚かな一人の男の行状記の一部である。そう思って読んで頂きたい。

それは、当世流行のワイフ・スワッピングに興味を持ったのが、そもその始まりだった。

僕は、二つ年下の二十八になったばかりの妻の高子を強引に口説きおとして、ある夫婦交換会の機関誌に広告を出したのである。自分では、他人の妻と公然と愛情交換のできることで有頂天になっていたのだから、無責任な話なのだが、同時に自分の妻が他人とつき合うのを許してやるのだという事が、夫婦交換を正当づけるものだと思っていた。愚かな話なのだが、よくある話らしい。男は、自分の遊び心を制御できなくなる事があるた

めか、そういう全く馬鹿気た事を平気でするもののである。

八月の終わりに出した広告が十一月になって掲載された。そうして雑誌が着くと、それを追いかけるようにして一通の封書が配達された。

「広告拝見しました。是非一度、お目に掛かってお話しした上で、御同意を得たいと存じます。小生三十三才、妻は年上にて三十五才。決して不美人ではありません。旅行の多い職業なので、貴地にも参ります。十一月二十七日は如何でしょうか。妻を同伴して、参ります。猶、妻の妹も同行の予定ですが、むろんスワッピングに参加させるとい意味ではありません。妹の方は当年二十九才。気っぶの

よい、さっぱりした女です。二十七日に、もし御都合がよろしければ、末記の電話番号が私方の事務取り扱いになっていますので、御電話下さいませ。私共の止宿先を通知してきますので。猶、御都合の悪い時も、何卒、一応、御電話下さい。御電話がない時は、私共落第したと思って諦めます。押しつけがましくて、申し訳ないのですが、どうか御了解下さい。

十一月二十一日

山元 輝男

玲子

北見郁夫御夫妻様

そうして、余白には電話番号が記されていた。

僕は、何より相手が女二人、男一人だという事に関心を持った。参加させないと言って、もし、全く無関係なら、何故、殊更、妹を同行する、などと書くのだろうか？ おそらく、僕達を一度、見た上で決めようと言うのに違いない。

僕は高子に手紙を見せて相談してみた。元来は、そんなに色の道の嫌いな方ではない高子が、女二人と聞いて急に、嫌だと言出した。おそらく、僕の内心の好色心に嫉妬したのに違いなかった。高子を誘えば誘う程、頑固に嫌だ、と言いつつ、ついには、

「あなたが、そんなに、その二人の女とつき合いたいのなら、お独りで、どうぞ！ 精々楽しんで来るといいわ！」

などと言いだしたので、僕も、つい、かっとなってしまった。

「他人様が丁寧に手紙を寄越しているというのに、独りで行けるか！ いいよ、それなら断るよ！」

僕は、その勢いで指定の電話番号に電話をかけた。

「山元さんの宿は、どちらですか？」

相手は若い女だったが、丁寧に答えた。

「山元さん御夫婦と妹さんとは、二十七日、

二十八日の二日間、桔梗屋ホテルの七〇二号室にお泊りです」

「実は、妻の都合がつかないので、山元さんに直接、その事情を御説明しておきたかったのです」

「そうですか——」

相手は何故か一瞬、戸惑ったような調子で言った。

「では二十七日午後七時にはチェック・インですから、その時に直接、お話し下さい」

その応待が、何故か僕に安心感を与えた。

相手は、かなりの人物らしく思えた。こんな私事について丁寧に応待する事務員を、旅先に常駐させているからには、少なくとも安定した地位を獲得している人物に違いない。その上、桔梗屋というのは、この町では一流のホテルである。高子には又、怒られるかもしれないが、勿体ない位の相手なのだ。まだ精々損害保険会社の係長補佐でしかない僕にはその山元夫妻が何かしら、付合っておいた方がいいような「上客」のようにも思えて来たのである。そんな場面で商売根性が出るという、さもない自分が嫌になるのだが、これも毎日の契約合戦に、たずさわっている者の宿命であろう。

○

二十七日、午後七時になるのを待ちかねて僕はダイヤルを、まわした。

「ああ、僕、山元です。北見さん？ おお、よく掛けて下さいました！ 何ですって？ 奥さんの御具合が悪い？ それはいけませんな！」

相手の勘違いを訂正する必要があった。

「いえ、具合が悪いと言っても、病気ではないのです。つまり、時間の都合がつかないという事でして。私自身は一向に構わないのですが——」

「ほう！ それでは、お独りでいらっしゃいませんか。妻と義妹も来ておりますので、一つ、四人で楽しく話合っただけでもいいじゃないですか。奥様のことは気になさらないで。では、お待ちしますよ」

断る理由はなかった。僕は、高子に電話の次第を話して出掛けることにした。もっとも出かける時に彼女は、こう言うのを忘れなかった。

「姉妹でそんなことをするなんて邪道よ！ 今晩は、それなしでしょうね。帰って来て変な匂いがしたら、承知しないわよ！」

自分が好きな道だとなると、かえって嫉妬

も烈しい。絶対に関係を持たない、という条件で、高子は僕を送り出したのである。

○

七〇二号室は、特別室だった。いわば、貴賓室である。その豪華な部屋に足を踏み入れた時から、僕は劣等感を感じさせられつづけた。山元氏は絹の豪華な部屋着を、ゆつたりと着ており、彼の夫人は紫色のミディに、焦茶色のブーツを、はいている。もちろん、旅行着であろう。妹のリカという若い女性は、姉がやせぎすで、男っぽい顔をしているのに反して、肉感的な、色の白い女性である。前髪をひらした、その顔を、僕は、どこかで見たような気がした。二人の女は、それぞれに背が高く、姉の方が一六七、八センチ、妹の方でも一六四、五センチはある。山元氏自身は背の低い、小肥りの温和な紳士である。気になるのは、リカがスケスケの薄い部屋着姿だということだが、金色のサンダルをはいたその美しい容姿は、それが、いわゆる薄汚ないスワッピング族のイメージとは、かけ離れている。

「ブランドー、それともスコッチ？」
山元氏は、すでにブランドー・グラスを持って僕を出迎えて言った。

「ぼく、ウイスキーの方が——」

「そう！」

彼は、夫人に向かって言った。

「スコッチを、さし上げて」

ヘイグのピンチの壺をとって、夫人がグラスに注いでくれるのを僕が受けとると、それを待っていた様に山元氏が言った。

「初めまして、山元です。よろしく。こちらが妻の玲子、それから義妹のリカ。よろしくお願ひします」

「こちらこそ、北見です」

よせばいいのに、僕はつい会社の名刺を出した。山元氏は、会社の名を目ざとく見つけて、言った。

「おや、損保ですか？ 実は今度、車を買ったんですがね。バラクーダ・クーダという奴任意保険が、まだなんです。よろしければ二〇〇〇万円程、北見さんをお願いして——いや御迷惑かな」

「いえ、とんでもない。では早速、明日にでも」

「結構ですとも！ では、失礼ですが、掛金の一部に、小切手で十万円、書きますので、お預かり下さいませんか？」
「ええ、それはもう」

その時、夫人の目が妖しく鋭く光るのに僕は気づかなかった。僕は十万円を受け取り、仮預収証を山元氏に渡した。

「では、これで未知の間柄ではなくなった訳ですな。取り引き先同士と、いう訳ですからな。さ、乾杯！」

にこやかに微笑む夫人と、いたずらっぽい笑みを浮かべている妹のリカとも杯を合わせ、僕は、その上等のスコッチに、唇をつけた。二、三〇分、僕達はスワッピングについて話し合った。その中、夫人が、すつくと立ち上がって言った。

「あたし、北見さんのお味を見たいわ、あなた」

「おいおい！ 奥さんが、見えていないんだよ。お前」

「いいじゃないの。折角、見えている旦那様のお味を見たって！ ねえ、リカ？」

おどろくと思ったリカは、平然と言った。

「そうよ、お兄さま！」

「北見さんって、お味が、よさそうなんですもの」

二人の女性の視線が僕の股間に集中した。それを感じたのか、僕のそれは早くも僕自身の意志を無視して活動を開始してしまった。

「でも、奥さん。御主人がそれでは——」
 「いいのよ、この人は……」
 鋭い声で夫人が叫ぶように言って、僕の腕をつかんだ。

「いらっしやいな。中年増も捨てたものでは

ありませんわよ」
 「そうよ。お姉さんは、とても凄いついていう話よ、北見さん」

夫人は意外に力が強かった。ひきずるようにして次の間になっている豪華な調度のベッ



イメージギャラリー

『味はいかが、重ね餅』

春日田春夫

ド・ルームに僕を連れて行くと、リカを呼んで言った。

「こちらの生一本を見せて頂戴、リカ！」

リカも又、腕力が強かったし、男を裸にする要領も心得ていた。僕は、たちまち裸にされてしまった。夫人は、ゆっくりとミディを脱いだ。ストッキングとブーツだけは脱がずに、柔らかな温床の毛並を、そよがせながら近づいて来た。

「やっぱり、結構なものをお持ち合わせじゃないの、北見さん。では、頂こうかしら」

言っている言葉は、しとやかだったが、する事は、むしろ暴力的のいってよかった。背後からリカが羽交い締めになっているし、夫人は、まるで舌なめずりをしているような調子で、その柔らかな手を僕に伸ばして来た。

一分もたたない中に、欲情を露呈させられて仰向けに寝かされた僕の上に夫人が跨がってきた。しかし夫人は、自分では忽ちの中に何度か頂点を味わいながら、決して僕には、その快楽を与えてくれないのである。その中に、夫人は、僕から下りて、リカを呼んだ。

「さあ、おやり、リカ！」

まるで、牛か馬にでも言うような調子だった。だが、薄着のリカは直ちに全裸になって

僕に挑んできた。リカが僕の肉体を上から、横から、前からと方向と方法を変えて味わっている中に、夫人がストッキングとブーツという先程の姿のまま再び現われて叫んだ。

「リカ！ 撮って上げるよ！」

ジューッ、と八ミリのカメラが回りはじめた。僕は、慌てて抗議した。

「そんな、約束も何もなかった筈です！」
すると、耳元でリカが、ささやくのだ。

「許してね。あたし、カメラの前でないと昂奮しないのよ！ 見られているって素敵じゃない？」

そう言いながら、早くもリカは頂点に達して獣のような声を上げた。カメラは、ある時は間近に、ある時は離れて全景をと、執拗に僕達の痴態をフィルムに収めつづけている。

「止めて下さい！ 止めて下さい！」

僕は叫びつづけた。しかし夫人は一向に止めない。止めないどころか、僕の顔をカメラにおさめながら近づいて来て言うのである。

「どう、写されながら、なさるのもいいでしょ？ リカは、これが大好きよ。特に、殿方が頂点に達した時の表情は、たまらないわ。わたくし、大好きよ。そうら、早く、その表情をなさって。リカと結ばれてよ。ああじれ

ったい！ リカ、ちゃんと、やってるの！」
「お姉さま、勘忍して！ いま、ちゃんと、やるわ！ だから、打たないで！」

「打つ？」

思わず僕は、リカに聞いた。

「そう。殿方を、ちゃんとさせないと、お姉さまに皮鞭で打たれるのよ。でも、いい。あなた、早く、いい顔を見せて上げて！ でないと、リカは鞭で打たれるのよ！」

リカの肉体は、そんな事を言いながら、きりきりと固くなってゆき、僕は、たまらず頂点に達してしまった。

すると、待ち兼ねたように、山元氏が入って来て、ニコニコ笑いながら言うのだった。
「どうでした、二人の味は？ リカも、捨てたものではないでしょう？ 8ミリは心配しなくていいですよ。焼いてさし上げますよ。リカの好みですから。いい記念になるでしょう」

「しかし——」

僕は疲れを覚えながら言った。

「前以て言ってお下されば、よかったのに」
「いや、前以て言うのと、リカが嫌がるんですよ。いや、全く、すまんことでした。さあ、こっちへ来て、一杯やりましょうよ。女達は

着るものを着せてやらないと、いけませんからね、北見さん」

少々不安を残しながらも、僕は、洋服を着て以前の部屋に戻った。

四、五杯、グラスを重ねた頃、まずリカが現われた。パンタロン・スーツに着更えている。スウェード色の仲々シックな色である。そうして、首には、橙色の絹のスカーフを小粋に結んでいる。左の胸には、すばらしい瑠璃のブローチ。

「サン・ロランだけど、どうかしら？」

彼女は、僕に言った。しかし、洋装やモードに詳しくない僕に、何と返事ができよう。その時、夫人が出て来た。黒のエナメル革のパンタロン・スーツである。化粧も、先刻よりは濃い。

「さあ、いきましよう、貴方」

夫人は、山元氏に対してではなく、僕に言った。

「どこへ？」

「すばらしい所ですわ、北見さん」

だが、その時、僕の頭の中に先程、リカが言った言葉が、よみがえって来た。

「あなたは、リカさんを鞭で打つんですか」
「えっ？」

一瞬、夫人の顔から微笑が消えたが、つづいて微笑が現われた。併し、初めのそれが、華やかな微笑だったのに比べて、二度目のそれは、冷たく、こわばった笑いであった。

「リカは打たれると昂奮するのですわ」

ぽつんと、夫人の代わりにリカが言った。

「北見さん。大した事ではありませんよ。気にしなさんな。一寸した趣味ですから」

山元氏は、相変らず部屋着のまま、そう言った。

「参りましょう！」

夫人は、僕の腕を取った。

「でも、さっきのフィルムは？」

やつのことで僕は、そう言った。

「8ミリ？ ああ、さっきのね。現像できたら、貴方に差し上げますわ」

「でも、それは——」

「気にしない、気にしない。わたしだって写ってるんだから！」

リカが反対側から腕をとって言った。その言葉は、たしかに説得力があった。これだけの若く美しい女性が、自分の痴態を写した8ミリを他所へ持っていくことなど、ある筈がなかった。

僕は、といつても、それは山元氏抜き

三人連れである。——ホテルの前からタクシーを拾った。

「浅間神社のところでいいわ！」

夫人が言った。

「浅間神社？ いまの時間では、何もありませんよ。昼間なら、見世物や射的があります。さびしい所ですよ」

「いいのよ。私達が、いいところに連れて行って上げるんだから」

リカが、そう叫んだ。僕は黙らざるを得なかった。

タクシーは、夜の街並みを走って浅間神社に着いた。桔梗屋ホテルの貴賓室の客には、そこは相応しい場所とは言えない程、わびしい場所である。いまは、秋祭りの終わりである。夜空にテント張りの黒い影が、そびえている。夫人は、僕を引っばるようにして、見世物小屋の後ろ側を足早に歩いてゆく。やがて、曲馬のテントの裏に來ると、その中に連れてゆくのである。

「ここは？」

「いいところへ、お連れすると言ったでしょう？ 黙ってついていらっしゃい。秘密クラブかも知れないでしょう？」

夫人が、さわやかにそう言ったので、僕は

納得しない訳には、いかなかった。天幕の裏側から入ると、通路は複雑になっている。その細い通路を右に左に曲りながら進む中に、一カ所、明りが洩れている所があった。その中へ、連れ込まれた僕は、余りの明るさに、まず驚かされた。正面には、種々の動物の首が並んでおり、床には部厚い毛皮が敷いてある。そこに入ると、リカが、まずパンタロンを脱ぎはじめる。

「さあ、お脱ぎになって」

「もう、疲れましたよ」

「そんな事を言っているときじゃございませんのよ」

夫人も、そう言いながら脱ぎはじめる。仕方なく、僕も一度、着た背広を脱ぎはじめると、早くも上半身、裸になった夫人が手伝ってくれるのである。結局、僕が最初に裸になってしまったのだが、夫人は、自分が脱ぐのを途中で止めて、壁に並んでいる動物の首の中から、猿ともいえず、熊ともいえず、何か一見、雪男風の首を持って来て、言った。

「おかぶりになって下さい。面白ろうございませぬのよ」

そう言っただけで黙っていると、彼女、その頭をかぶせると、首のところで留

め金を、かけてしまった。気付いたときには留め金が、かけられて、口の中に何やら硬い舌のようなものを押し入れられ、物も言えなくなっていた。

僕が突然のことに驚いている中に両手が背後に廻され、手錠がかけられた。一生懸命、反抗している中に、両足が一方ずつ、押さえられて、何やらズボンのようなものを、はかせられた。いや、ズボンというより、全部、身体に密着しているのだから、ズボン下という方が正確だろう。それがすむと、今度は前から上着があてがわれ、両手を袖に押し込まれ、背中でジッパーを引き下げる音がした。耳だけは、よくきこえるのだが、僕は何も言えない。そういう感じである。丁度、両目に当たるところは透明になっていて、外界が手にとるように、よく見える。

「お姉さま。どうする？」

「いいから、稽古をつけなさい」

夫人の冷やかかな声が、きこえた。

リカは、うなずいて、するするとパンタロンを脱いだ。すると、その下から奇妙な衣裳が現われた。

まず、編上げ式でもなく、ジッパー式でもない、乗馬用長靴のような赤茶色の艶やかな

イメージギャラリ―『昼はOL、夜は女王様、アツ、君は秘書のS子さん』春日田春夫



ブーツ。それは、表面にニスを塗ったマホガニーのように見える。むろん、ヒールは高いが、極端ではない。三時ほどであろうか。ひざ下までのブーツの上は、濃い褐色のプロケードで作った、細っそりとリカの腰から下を包み込んでいる、タイトのようなズボン。腰上を高くとって、中央に大きな金色の金具のついた極端に巾の広い革ベルトを、ぎゅっとしめている。

夫人が、僕の腰を乱暴に押して言った。「とっとと、歩くんだよ、この馬鹿者！」

つい、いまし方までの夫人からは考えられない程の変わり様だった。

「おいでよ！」

リカも、態度が変わっていた。いつのまにか、リカの手には細い鞭が握られている。それを、軽妙に空中で鳴らしてから、彼女は言った。

「この鞭、伊達じゃないんだよ。ほら、いい音がするだろ？ 痛いんだよ。そりゃ、お前が一打ちで泣き出す位、痛いんだよ。それとね、もう一つ、言っておくけれど、お前が着

ている変ちくりんな人造毛皮は、とても薄くてね、この鞭だと、まるで裸を打たれるのと同じだよ」

まるで、その言葉を証明しようとしてもいうようにリカは、その細い黒まむしのような鞭を空中に泳がせて、勢いよく僕の首にまきつけた。その途端、僕は首の周囲に、ひどい痛さを覚えた。思わず、けだものめいた叫びがこみ上げて来たが、口の中に、ふくまされている器具は、非情に声を僕の口の中に押しつけてしまった。

「おいで、もっともって面白い目にあわせてあげるからさ」

手元の鞭の柄を握って自分の方に引きよせながら、リカが、そう言った。

口をふさがれ、首筋に、まだ痛みを残し、女とは思えない豪力で引きずられながら、僕は、いつしか彼女達の口のきき方が徐々に横柄で、ぞんざいになって来たことが、今更のように気になりはじめていた。いや、その変わり方は、むしろ下品で卑しくなってきた、という方が、よいだろう。いままでの、とりすました様子は、いまでは少なくとも動作や態度には断片さえ残っていないのだった。だが、そんなことを深く考える^{いとま}違は僕には許さ

れていなかった。口の中に押し込まれた道具のせいで、いつも口を開いたままになっていくために、早くも大量の唾液が唇の両側からしたたり落ちつつづけている。それは着せられた人造革と本物の皮膚との間を微妙に伝わって、まず前半身を少しずつ、しめらせはじめていた。その不快さは何物にも、たとえようがない種類のものであった。それに、僕は、人間の唾液というものが、そんなに、ひっきりなしに大量に出るものだとは、知らなかった。まるで暑い日に犬が、よだれを流すのと同様に、その唾液は、おそらくその中に身体中の全ての部分に流れてゆくのではないかとさえ、思えるのだった。

リカが、ひきずって行ったのは、おそらく天幕小屋の中央ではないかと思われる場所だった。しかし、そこには見物席は見えず、ただ高い鉄柵に円形に囲まれた砂場がある。その中は、うす暗い電灯で照らされているのだが、近寄りながらよく見ると、一人の裸女が隅の方に、うずくまっている。彼女は、リカと僕の気配をききつけて、はっとしたように顔を上げて、こちらを見た。おそらく、暗い方向にいる僕達が、よく見えないのだろう。一生懸命に闇を、すかして見ていたが、やが

てリカの姿を見つけたらしく、立ち上がって近寄って来ながら叫んだ。

「リカさん。もう決して逃げたりしません！どうか座長さんに言って下さい。寒くて、どうにもならないんです。早く着物を着せて下さい。リカさん、お願いです！」

だが、リカは、一言も答えず、檻の入口の鍵をガチャガチャと鳴らして開けた。その時裸の女は初めてリカの後ろにいる僕の姿を発見して悲鳴を上げた。

「どうするの、リカさん！ わたしを、どうするつもり？」

その声は恐怖に上ずっている。そうして、わなわなとふるえながら、元いた方へ後ずさりしてゆく。リカは、軽く「フン」と笑ったが、素早く鍵をかけてしまってから僕に言った。

「お前は、そこに、しゃがんでおいで！」

そうして、僕の首に巻いていた、その黒い革鞭を、ほどこしてくれた。ようやく首が楽になって、僕はその場に、しゃがみこんでしまった。

リカは、そのまま裸の女の方に五、六歩、進んだ。

「何だい、そのざまは！」

口汚なく、リカが怒鳴った。

「リカさん！ 何よ、それは？ 鞭じゃないの。そんな鞭でどうしようというの？ まさか、あたしを打つ気じゃないでしょうね。昨日まで一緒に働いていたんじゃないの」

「そんなお経をきいたって何にもなりやしないんだよ、この淫乱！」

リカは、そう叫ぶと、鞭を宙で二、三度、振りまわしてから、勢いよく裸の女の身体に叩きつけた。

「ピュウッ！ ピシーッ！」

けたたましい炸裂音をひびかせて、鞭が女の肩から尻にかけて喰いついた。

「ヒューッ！ た、た、たすけてエー！」

「何だい、その恰好は。寒いって言ったろ。

だから少し暖めてやってるんじゃないかよ。見つともない声を出すんじゃないよ。昨日まで一緒だったって。それが、どうかしたのかよ。おい！ ここには他の男もいるっていうのに、姉さんの男に手を出すなんて大それた事をやっておいて、何が昨日までだ！ そういう女をね、犬畜生にも劣る奴って言うんだよ。だから、それなりの待遇になったっていう訳さ」

「あの人のことは、すみませんでした」

皆まで言わせず、リカは鞭を揮って打ち据えた。

「ヒューッ！ た、たすけて！ リカさん、許して！」

「ひとときの悪い声を出すんじゃないよ。何も殺そうってのじゃなし」

「許して！ リカさん！」

打たれたというのに、女はリカに匍い寄って、ブーツにとりすがって泣きじゃくった。

「いい恰好だよ、エマ！ でも、鞭の二、三回で勘弁して貰える訳がないだろ？」

リカはブーツを上げて女を振りほどいた。仰向けに倒れた女に、リカのブーツが力一杯、飛んだ。

「ギューッ！」

女は、ひどい声で喚いた。その身体に、リカの鞭がヒステリックに、からみついた。

「おとなしくしていれば痛い目に合う数も少なからうにね。バカだよ、エマ、お前は！」

「許して！ 勘忍して——」

女に全部は言わせず、又もや鞭が飛んだ。手を上げて拜むようにする女に鞭を浴びせつづけるリカは、まるで悪鬼のようだった。

「リカ！ いまから余り叩くと気絶してしまふよ！」

突然、夫人の声がきこえた。

「さあ、男の方も連れて来たよ。こいつを檻に縛りつけておしまい」

リカが入口を押し開けると、丸裸にされた男が引きずり込まれた。みると、すでに赤黒い鞭の痕が身体じゅうに所狭しとばかり、ついている。おそらく、すでに夫人に散々仕置きされて来たのだろう。氣息熄々で、よたよたと引きずりこまれた男を、夫人とリカと二人がかりで少し離れた処に立たせて、まず首を檻に縛りつけた。それから、両足を少し開かせて、片方ずつ檻の鉄棒に縛りつけると、両手の縛りをほどこいて檻の外に出させておいてから、それを檻を後ろ抱きにするように縛り合わせた。

「玲子さん、悪かった」

男は、蚊の鳴く様な声で、そう言った。

「玲子さん？ お前、よくそんな口がきけるね。少し可愛がってやれば、つけ上がりやがって！」

夫人は、リカの手から鞭を奪い取るようにして握ると、目にも止まらぬ早さで、横払いに二度、三度と男を激しく打ちつける。

「ビシッ！ ビシッ！ ビシッ！」

鞭が、つんざくような音を立てると、その

たびに男の口からは、

「ギャッ！ギャッ！ギャッ！」

と、うめき声や、わめきが、ほとばしる。

僕にも、ようやくこの二人の裸にされた男
女が、なぜこんな凄まじい私刑をうけるのか
が判って来た。しかし、一体、肝心の山元氏
とは、どういう事になるのだろう。良人のあ
る身で、この若い男を可愛がっていたという
のは、どうした事か。しかし、僕がその疑問
の解答を探す暇はなかった。

夫人が言った。

「エマ！打たれたくなかったら、こっちに
おいで！」

裸の女はリカの前を、おそろおそろ通って
夫人に膝をついたままで近づいた。

「座長！」

エマは、夫人を「座長」と呼んだ。

「申し訳ありませんでした」

「それは、さっきから耳にタコができる位、
きいたよ。エマ、お前、本当に悪いことをし
たと思っているのかい？」

「はい、座長。本当にすみません」

「全く、すまないことをしてくれたよ。で、
お前は、すまないと思ったら、何をしてくれ
るのだい？」

夫人は颯然のように、そう言って、持ってい
る鞭を軽く女の背に、さわらせた。女は「ヒ
イッ」と声を上げて身体を縮めた。すでに、
その白い肌にもリカに打たれた痕が、みみず
ばれになって赤黒く盛り上がって来ているの
が痛々しい。

「そうかい！そんなに鞭がこわいのかい？
それは、いい傾向だねえ。で、何をしてくれ
るんだい？」

「何を、って——」

「わからないのかいっ！」

夫人が突然、怒号した。そうして鞭が女の
肩から背中にかけて、思い切り喰い込んだ。

「ヒエ——ッ！」

「一々ソプラノを、きかせるんじゃないよ。
全くやかましいってならないよ」

夫人は、そう言って、女の頸を鞭で、しゃ
くり上げた。

「何でも、何でも、いたします、座長」

「そうかい。きいたね、リカ！ではエマ。

まず、お前の可愛い男を慰めてやりな。少し
ばかりの仕置きで、痛い痛いと、わめいてい
たよ。わめきつかれて、あんなに、ぐったり
してるからね。可愛いがって元気を出してお
やりよ」

「？」

女は、けげんそうに夫人を見上げた。

「つまりね、お前の口で、あいつを元気にし
てやれと、座長は言ってるんだよ、バカ！」
リカが、ブーツで女の腰を軽く蹴りながら
言った。

「さっさと、やらないかッ！」

ピウ——ッ！パシ——ッ！

鞭が空中で唸って、鋭く鳴った。その音が
効いた。女は、よろよろと、男の前に近づい
て、その前で膝をついた。

「そうだよ。そんなことをやって、いつもい
ちゃついてたんだろ？あたしの目を盗んで
ね」

憎々し気に夫人が言った。その声に応ずる
ようにリカが、つかつかと女の背後に近づい
て腰に一蹴りくれて叫んだ。

「やりなれてる事だろ？やってみせなよ。

あたしも見たいよ」

「リカ！」

と夫人が言った。

「怠ける様なら、鞭の先が、けし飛ぶまで、
引っぱたいておやり！」

まだ打たれもしないのに、女がその言葉を
きいただけで肩を固くするのが見えた。そう

して、ためらいながらも、縛られている男を口で慰めはじめたのだった。

信じられない事だったが、男は、たちまち元気を、もり返しはじめた。

「ほら、ごらん！ やっぱりエマに慰めて貰うと、そんなに嬉しいのかい？ 憎らしい奴だよ、全くね」

「座長！」

と男が、かすれた声で言った。

「おや、玲子さんが、座長に変わったね」

「座長、勘弁してくれ。エマとのことは忘れる。許してくれ！」

「何だい、横柄な口をききやがって！ リカ刺し棒を持っておいで！」

リカは、走って檻の反対側に行くと、一メートル程の木の棒の先に鉄の刺のついたのを持って来て夫人に渡した。曲馬で熊や象を使うときの、あの刺し棒である。

「こいつめ！ 少しは、へりくだって物を言いな！」

夫人は、情容赦なく熊を突くように、その刺し棒で男の脇腹を突いた。

「ぎえーッ！」

男の口から獣めいた叫喚が、ほとばしる。「これでもか！」

夫人は、更にその棒を左右に、こじった。「ぎゃーあッ！」

男は、此の世のものとは思えない、おそろしい声を上げて、もがいた。

その時、女が、うっとうめいて、せき込んだ。男が烈しい痛さのショックで果ててしまったようだった。

「こいつ、ずい分、早いじゃないの！」

夫人が不満そうに言って、鋭い目を初めて僕の方に流した。僕は、背筋に冷たい水を浴びせられたように思った。全身が、ちぢみ上がったのである。

「エマ。すんだら、こっちにおいで」

気味悪い程の優しさで夫人が言った。女はもう意識のない人形のように夫人に、近づいた。

「そこに、曲芸用の台があるだろ。その上につぶせにおなり！」

さすがに女は、夫人の持っている刺し棒とリカ握っている鞭を見て固くなった。

「大丈夫だよ、エマ！ 言う通りにしてれば打たないでいて上げるよ。何でもすると言っただろう？」

女は、悲しそうに、うなずくと、言われた通りに円形の木製の台の上に、うつぶせにな

った。するとリカが身軽に、その背中に跨がった。乳房が台の上でつぶされて、苦しそうである。女は苦しうに息遣いを荒くする。「いまま少しの辛抱だよ、エマ」

リカは、そう言って、わざと体重を前後左右に動かした。女は、うめいた。だが僕は、その女を眺めてばかりは、いらなかった。夫人が僕に近づいて命令したのだ。

「お立ち！」

毛皮を着せられているから、そんなに身軽には動作ができない。やっと立ち上がると、僕の胸を軽く刺し棒で押えつけておいて、僕の股間に手を伸ばして、そこについている縫い合わせ目を左右に開いて、僕のものをつまみ出した。

「さあ、元気を出してごらん。あの可愛い女の子を抱かせて上げようというんだからね」「やめて！ やめて！」

女が突然、叫び出した。しかし、何故か、それまでの私刑の様子を見ている中に、僕の身体には元気が盛り上がって来ていた。

「そら、立派になって来たよ。エマ！」

「そんな、けだものなんて、勘忍してーッ！」

座長、許してエーッ！」

「うるさいね」

冷ややかに夫人は言いながら僕に刺激を与えつづけている。そうして、女の悲鳴も哀願も全く無視して僕を女の方に押し出した。例の刺し棒が後ろから烈しく僕の腰や背中を突くのだから堪まらない。いつしか、僕は女の真後ろに来ていた。

「さあ、おかかり！」
夫人が、意地悪く片手をそえる。

「ヒューッ！ 止めさせて、止めさせて！
リカさん、勘忍して！」

「ヒイヒイと、うるさいね」

リカは、ヒラリと女の背中から、とび下りると、鞭を振るって女の背中を、つづけざまに打ちすえた。僕の目の前で、黒いまむしのような鞭が、何回となく女の背中にからみつき、その度に女は、もの凄いい悲鳴を上げた。



イメージギャラリー 『お前にはやらないよッ！』 春日田春夫

ところが、女の哀願や悲鳴や鞭の唸りが、僕を反って、鼓舞するのだった。全く思いがけない事だったけれど、それらのものは、僕の欲情を鎮めたり、正義感を燃やす代わりに次々と淫らがましい欲情を刺激するばかりだったのだ。ましてや、女は僕を本物の獣だと信じている。そのために、女の悲鳴は単に犯されるというような、次元のものでは、なかった。

「そら、お前。けだものの分際で、こんな可愛い女の子を抱かせて貰えるなんて幸福だ」と、お思い！ 一生懸命、お嬢さんを喜ばせないで、この鞭が飛ぶからね」

リカは、そう言いながら、僕のすぐ前で夫人と並んで見守っている。僕は、自分の快楽の波の中で、女が少々反応して来たように思った。それは、確かだった。まもなく女は、恥かしさを忘れて本気になり出した。

「ほら、みてごらん、リカ。エマは喜んでるよ。何て汚ならしい女なんだろう！」

「座長！」

男が、さすがに叫んだ。

「むごいよ、座長。それなら、俺を責めてくれ！ エマに罪はないんだ」

「うるさいね。言われなくても、この後で、

たっぷりお前を責めてやるよ。でも、いまはエマが楽しんでるんだ。それとも、自分の女が他のものと楽しんでは、いけないとでもいうのかい？ フン！ 気のきいたセリフでエマに気に入られようたって駄目だよ！ それ、リカ。少し鞭で思い知らせておやりよ」

「わかったわ」

リカは早速、男に近づいてゆき、ビュウ、ビュウと鞭を喰らせ、男が声も出せなくなるまで打ち据えた。鞭が肉を打ち、引き裂く音と男の号泣と喚き声が、僕を励ましたただけでなく、何故かエマの昂奮をも誘ったようである。やがて、彼女は身も世もない声を上げて何度となく身体を硬直させて悶えた。

やがて、夫人が言った。

「今日は、もういいだろ。エマに着物をきせて、わたしの部屋へ連れておいで。よく話をしてやるから。それから、そのけだものは、借りたところへ返しておいで」

「男は、どうします？」

「ほっておいていいよ」

夫人は、出て行き、エマはリカに連れられていった。その中、リカが戻って来て僕を元の身体にしてくれた上で、一万円札を握らせて天幕の入口で言った。元通りの若く美しい

リカである。

「これはタクシー代よ。本当はお宅までお送りするんだけど、あんな風ですから失礼しますわ。北見さん今晚は如何でした？ わたし、あなたに少し参ってしまったらしいわ」

彼女は、あでやかに笑ってウインクしてみた。そうして付け加えるように言った。

「こんな世界で働いてみるのも面白いわよ。その気になったら、例の事務所に電話して下さいな」

「でも……」

と、僕は口ごもりながら言った。

「又、鞭で打つのだろ？」

「いいじゃないの！ それも意外と、いいものよ。じゃあね！」

僕は、早足で天幕小屋に戻ってゆくリカの後姿を見て、今更のように美しいと思った。だが僕は、フィルムのこと小切手のことも忘れていた。小切手は、どうも忘れて来たようだった。いくら探してもなかった。その事を電話で翌日、言うと、相手の女事務員は事もなげに言って笑った。

「昨日、お忘れになっていたらしいけれど今度お目に掛かる時までお預りしておく、とのことですわ。急がなくてもいいでしょう」

帰ってからの妻との口論の話は省こう。翌日、僕は浅間神社の境内の、曲馬小屋を訪ねた。人々がぞろぞろと歩き、他の店の賑わいの中で、そこも亦、大入りであった。物珍しそうに看板を見上げ、木戸口の呼び込みにつられて入ってゆく人波に押されて木戸口にさしかかった。だが木戸銭を払う時、そこに坐っているジャンパー姿の男を見てアッと声を上げるところだった。そこには、山元氏がみすばらしい姿で、坐っていたからである。

中では、丁度、南米のジャングルで捕えたという、珍獣リオネロの、曲芸の真最中である。長い獣を鳴らして、そのぎこちない動きのリオネロを使っている女曲馬師を見て僕は再び、おどろいた。それは予想したリカではなく、何と、エマではないか。それにリオネロという動物、どうみても昨夜のあの毛皮の動物なのである。

「あら、北見さんじゃないの！」

後ろから声をかけられて、僕は驚いた。見れば、けばけばしい曲馬師の衣裳をつけたリカが、笑って立っているではないか。

「来る気になったの？」

「いいや。今日は一寸、来てみたただけだ」

「ああ、例の保険ね。少し考えさせてくれって。それからフィルムね。何も写っていないかったそうよ。心配ないわ」

「――」

「いいのよ、かくさなくても」

「いや、本当なんだ。又、来るよ。実はね」

僕が言い出す前にリカが言った。

「近い中に気が変わったなら電話してね」

リカは、悪びれもせず、そう言うのと、さつさと、行ってしまった。だが、いつも、誘っておきながら、断ると、さつさと行ってしまう。というのは、リカの巧妙な技術だったようである。それ以来、妻と口論が絶えず、遂には妻は里に帰ってしまった。一カ月程後のことである。やがて、妻の代理人という弁護士が訪ねて来て、離婚が成立した。僕は、敢えて反論をしなかった。だが、そのいきさつは後日に譲ろう。

それからまもなく、決心した僕は例の事務所に通話をしたのである。早速、リカがやって来て、契約を交わすことになった。やはり座長は例の夫人だったが、彼女と山元氏とは何の関係もない事が判った。彼は木戸口に坐っていて、時折り、寸劇の役者をやっている男だった。あの夜、彼は座長の良人の役を演

じていたにすぎなかった。所有者であり座長であるのは、山元玲子こと、本名篠崎玲子であった。

それから二カ月、リカと組んでのリオネロの芸を続けている中に、リカが「香港へ出稼ぎに行こう」と言い出した。何故か、座長の玲子も、それをすすめた。そういえば、エマの組も二、三日前にマニラに行ってしまった。結局、僕とリカとは香港に行くことになった。何でも一週五〇〇〇米ドル（一五〇万円）になるというのである。

「いつまでもサーカス暮らしは、いやよ。早く店でも持って落着きたいわ」

リカは、美しい顔を少し曇らせて、そう言った。香港の上りを、その資金の一部にしよう、というのである。

出発の日、玲子と山元が送りに来た。八千トンの貨物船、浙江号の小さな船室で、リカと二人だけの旅が始まるうとしていた。

突然、リカが立ち上がって云った。

「わたし、座長に言い忘れた事があるわ。すぐ戻って来るから」

早くも船はエンジンを響かせている。出航直前である。彼女は僕を待たせておいて、タラップをかけ下りて、下にいる玲子に何やら

話している。その中、ガラガラと音を上げてタラップが外された。

「おい、まってくれー」

僕が叫んだとき、背後から、囁れた声が、きこえた。

「サワグノコトナイヨ。リカサン、サヨナラネ。オマエトワタシ、ホンコンユク。ホンコン、イイトコロヨ。ワタシ、オマエノボス、リオネルツカイノリンダヨ。オイデー」

四十五、六と思われる中年の西洋婦人が、そこに立っていた。そうして、矢庭に僕の耳朶をつかむも、ぐいぐいと、船室に引き戻した。怪力だった。玲子とリカは、僕を五千ドルで、このリンダという怪し気な中年女に売りつけたのだった。リンダは、そう話してからトランクを開け、曲馬用のブーツと鞭を船室の床に投げ出して言った。

「サア、アタラシイゴシユジンノブーツトムチニキススルノヨ」

こうして、僕はリンダの所有となり、リオネロというインチキ見世物をつづけなければならぬ運命になったのである。リンダとのそれ以後の出来事は、別の機会に書いてみようと思う。それは、初め思ったほど不愉快な生活の連続ではなかったのである。（終了）